四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第五十三冊

中森遺跡
林・坊城遺跡Ⅱ
東山崎・水田遺跡Ⅱ

2004. 10

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第五十三冊

中森遺跡
林・坊城遺跡Ⅱ
東山崎・水田遺跡Ⅱ

2004. 10

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
日本道路公団

序　　文

中森遺跡、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡は、四国横断自動車道高松市内区間の建設に伴い、発掘調査が実施された高松市檀紙町、林町、東山崎町に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成10年度から平成12年度に発掘調査を実施し、中森遺跡では、接合資料含む旧石器群や室町時代の屋敷地、林・坊城遺跡では縄文時代晩期の旧河道や弥生時代後期の円形周溝墓、東山崎・水田遺跡では室町時代の屋敷地を確認するなど、大変貴重な歴史資料を明らかにすることができました。

このたび、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成15年５月から平成16年３月まで実施しておりました整理作業が終了し、財団の解散に伴い、事業を引き継いだ香川県埋蔵文化財センターによって「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第五十三冊」として刊行することとなりました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局や日本道路公団並びに関係各機関・地元関係各位には、多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年10月29日

香川県埋蔵文化財センター
所長　中村　仁

例　　言

1．本報告書は，四国横断自動車道高松～高松間（高松市内区間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、高松市内に所在する中森遺跡（檀紙町）、林・坊城遺跡（林町）、東山崎・水田遺跡（東山崎町）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

平成８年度　大久保徹也・住野正和・高橋佳織（林・坊城遺跡）

平成９年度　宮崎哲治・岡本利・東条貴美（上天神遺跡）、乗松真也・住野正和（林・坊城遺跡）

平成10年度　森下英治・蓮本和博・門脇範子（中森遺跡）、木下晴一・香西亮・中山尚子（香川郡条里Ｃ地区）、山元素子・岡本利・滝井理加（東山崎・水田遺跡，香川郡条里Ｃ地区）

平成11年度　信里芳紀・野崎隆亨・豊岡多恵（中森遺跡）

平成12年度　乗松真也・川原和生・糸山晋（中森遺跡・香川郡条里Ｄ地区）

4．調査にあたって，下記の関係諸機関や多くの方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

国土交通省四国地方整備局・日本道路公団・香川県土木部横断道対策総室（当時）・地元自治会

大久保徹也（徳島文理大学）下條信之・田崎博之・村上恭通・吉田広・（愛媛大学）林大智（財団法人石川県埋蔵文化財センター）藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

5．本報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆は同センター信里芳紀・山元素子が行い、編集を信里が行った。

なお、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが、平成15年度末で廃止となったことから、報告書刊行業務は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

6．本報告書で使用する遺構名は、現地調査段階のものをそのまま使用する。作業の進捗に伴い欠番となったものも存在する。

7．本報告書で用いる測地系は，日本測地系平面直角座標系第Ⅳ系の北であり，注意されたい。標高は東京湾平均海水位（Ｔ．Ｐ.）を基準としている。

8．石器実測図中，薄く黒く表現している部分は摩滅痕を，輪郭線の回りの実線は潰れを，同じく破線は顕著な研磨あるいは摩滅を，同じく点線はあまり顕著でない研磨あるいは摩滅をそれぞれ表す。なお，現代の折損は濃く黒で潰している。石器石材は特に表記が無い限り，サヌカイトである。

9．挿図の一部に高松市都市計画図を使用した。

10．本報告にあたっては，下記の機関等に業務を委託した。

遺物写真撮影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・有限会社　双葉写真館

花粉分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社

火山灰抽出分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・京都フィッショントラック

サヌカイト蛍光Ｘ線分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・遺物分析研究所

11．遺構断面図の水平線上の数値は，水平線の標高値（単位ｍ）である。

12．土器観察表の中の色調は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』に準拠する。また，残存率は遺物の図化部分に占める割合であり，完形品に対する割合ではない。

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過（信里）
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第Ⅱ章　調査の成果
第１節　中森遺跡（信里）
第１項　地理的環境・歴史的環境 …… 4
第２項　予備調査 …… 7
第３項　層序 …… 13
第４項　Ａ・Ｊトレンチ …… 21
第５項　Ｂ・Ｈトレンチ …… 24
第６項　Ｃトレンチ …… 26
第７項　Ｄトレンチ …… 29
第８項　Ｅトレンチ …… 30
第９項　Ｇトレンチ …… 51
第10項　Ｉトレンチ …… 63
第11項　Ｆトレンチ …… 64
第12項　旧石器の調査 …… 71
第13項　遺構の変遷 …… 82
第14項　香川郡条里Ｃ地区の調査 …… 85
第15項　上天神遺跡・香川郡条里Ｄ地区の調査 …… 92
第２節　林・坊城遺跡（信里）
第１項　歴史的環境 …… 99
第２項　調査の方法と予備調査 …… 101
第３項　層序 …… 108
第４項　縄文晩期から弥生前期の遺構・遺物 …… 112
第５項　弥生中期から後期の遺構・遺物 …… 144
第６項　古代から中世の遺構・遺物 …… 162
第７項　近世以降の遺構・遺物 …… 165
第８項　まとめ …… 171
第３節　東山崎・水田遺跡（山元）
第１項　立地と環境および昭和63年度調査の成果について …… 173
第２項　調査の成果 …… 182
１．Ａ区～Ｃ区の調査（昭和63年度調査Ｃ地区） …… 182
２．Ｄ～Ｆ区・Ｉ～Ｋ区の調査（昭和63年度調査Ｄ地区） …… 190
３．Ｇ・Ｈ区の調査（昭和63年度調査Ｅ区） …… 214
第３項　まとめ …… 225

第Ⅲ章　自然科学分析
第１節　中森遺跡土壌中火山灰抽出分析 …… 229
第２節　林・坊城遺跡の花粉分析 …… 245
第３節　林・坊城遺跡のサヌカイト蛍光Ｘ線分析 …… 254

挿図目次

第Ⅰ章
図１　遺跡の位置
図２　四国横断自動車道高松市内区間の埋蔵文化財包蔵地
第Ⅱ章　中森遺跡
図１　遺跡位置
図２　周辺の遺跡
図３　予備調査トレンチ配置
図４　本調査トレンチ配置と条里型地割
図５　予備調査17・19トレンチ平・断面及び出土遺物
図６　予備調査20・21トレンチ平・断面
図７　遺構全体図
図８　土層断面その１
図９　土層断面その２
図10　調査地土層模式図
図11　Ａ・Ｊトレンチ平面
図12　Ａトレンチ１～４号溝断面
図13　１～３号溝，１号不明遺構出土遺物
図14　Ｂ・Ｈトレンチ平面
図15　Ｂトレンチ15・16・17号溝，中森２号墳断面及び出土遺物
図16　Ｃトレンチ平面
図17　Ｃトレンチ５・６号溝，１～３号土坑及び出土遺物
図18　Ｄトレンチ平面
図19　Ｄトレンチ１号掘立柱建物平・断面及び出土遺物
図20　Ｄトレンチ18～20号溝断面及び出土遺物
図21　Ｅ・Ｇトレンチ中世期集落配置
図22　Ｅトレンチ平面
図23　Ｅトレンチ１号掘立柱建物平・断面
図24　Ｅトレンチ１号掘立柱建物出土遺物
図25　Ｅトレンチ２号掘立柱建物平・断面及び出土遺物
図26　Ｅトレンチ３～５号建物平・断面及び出土遺物
図27　Ｅトレンチ９～13号溝平・断面
図28　Ｅトレンチ９～12号溝出土遺物
図29　Ｅトレンチ13号溝出土遺物
図30　Ｅトレンチ９～13号溝遺構間接合出土遺物
図31　Ｅトレンチ１号井戸平・断面
図32　Ｅトレンチ１号井戸下層出土遺物
図33　Ｅトレンチ１号井戸下層・上層出土遺物
図34　Ｅトレンチ６～８号不明遺構平・断面及び出土遺物
図35　Ｅトレンチ10・11号不明遺構平・断面及び出土遺物
図36　Ｅトレンチ柱穴出土遺物その１
図37　Ｅトレンチ柱穴出土遺物その２，遺構外出土遺物
図38　Ｇ１トレンチ平面
図39　Ｇ１トレンチ１～５号建物平・断面及び出土遺物
図40　Ｇ１トレンチ１・２・４・５・９号溝断面及び出土遺物
図41　Ｇ１トレンチ１～３号土坑平・断面及び出土遺物
図42　Ｇ１トレンチ１・２号井戸平・断面及び出土遺物
図43　Ｇ１トレンチ柱穴・遺構外出土遺物
図44　Ｇ１・２トレンチ平面，Ｇ２トレンチ断面及び出土遺物
図45　Ｅ・Ｉトレンチ平面
図46　Ｉトレンチ１～３号土坑平・断面及び出土遺物
図47　Ｆトレンチ平面
図48　Ｆトレンチ１号谷地形断面及び出土遺物
図49　Ｆトレンチ１～６号溝断面及び出土遺物
図50　Ａ・Ｊトレンチ旧石器出土位置及び断面
図51　Ａ・Ｊトレンチ出土旧石器その１
図52　Ａ・Ｊトレンチ出土旧石器その２
図53　Ｂ・Ｈトレンチ旧石器出土位置
図54　Ｂ・Ｈトレンチ下層断面
図55　Ｂトレンチブロック１～３旧石器垂直分布
図56　Ｂトレンチブロック１出土旧石器その１
図57　Ｂトレンチブロック１出土石器その２

図58　Ｂトレンチブロック１出土石器（接合資料その１）
図59　Ｂトレンチブロック１出土旧石器(接合資料その２）
図60　Ｂ・Ｈトレンチブロック２・３出土旧石器（接合資料を含む）
図61　Ｂトレンチブロック３出土旧石器
第Ⅲ章　香川郡条里Ｃ地区
図１　周辺の遺跡
図２　表採遺物
図３　トレンチ配置
図４　１・３・５・10トレンチ断面及び出土遺物
図５　検出された溝と条里型地割の関係
図６　調査地点と周辺の地形
香川郡条里Ｄ地区（上天神遺跡）
図１　上天神遺跡トレンチ配置
図２　土層模式
図３　３トレンチ平・断面及び出土遺物
図４　香川郡条里Ｄ地区トレンチ配置及び土層柱状図
林・坊城遺跡
図１　周辺の遺跡
図２　予備調査トレンチ配置
図３　保護措置必要範囲
図４　予備調査１～５トレンチ平・断面図及び出土遺物
図５　予備調査６～10ａトレンチ平・断面図及び出土遺物
図６　予備調査10ｂ～17トレンチ平・断面図及び出土遺物
図７　調査区割と土層全体図
図８　Ｄ６トレンチ東壁・西壁，Ｄ７トレンチ東壁断面
図９　Ｄ７トレンチ南壁断面
図10　遺構全体図
図11　遺構配置（縄文晩期～弥生前期）
図12　流路Ａ全体図
図13　Ｄ４トレンチ流路Ａ平・断面
図14　Ｄ４トレンチ流路Ａ出土遺物その１
図15　Ｄ４トレンチ流路Ａ出土遺物その２
図16　Ｄ５トレンチ流路Ａ平・断面
図17　Ｄ５トレンチ流路Ａ出土遺物
図18　Ｄ３トレンチ流路Ａ断面（第１次調査）
図19　流路Ａ層序対比
図20　Ｄ７トレンチ突帯文期遺構配置
図21　北柱穴群平・断面及び出土遺物
図22　南柱穴群平・断面
図23　10・11号溝礫・遺物出土状況
図24　10号溝礫集積部平・断面
図25　10～15号溝断面
図26　10号溝出土遺物その１
図27　10号溝出土遺物その２
図28　17・21～26号溝断面及び出土遺物
図29　25号土坑平・断面
図30　Ｄ７トレンチ突帯文期水路網概念図その１
図31　Ｄ７トレンチ突帯文期水路網概念図その２
図32　Ｄ６・７トレンチ下層遺構平面
図33　Ｄ７トレンチ流路２平・断面
図34　Ｄ７トレンチ流路２出土遺物
図35　Ｄ６トレンチ弥生中・後期遺構平面及び７号柱穴平・断面出土遺物
図36　遺構配置（弥生中期～後期）
図37　１号住居平・断面及び出土遺物
図38　２号住居平・断面
図39　１～３号周溝墓の規模の比較
図40　１～３号周溝墓の分布
図41　２号周溝墓平・断面
図42　２号周溝墓断面・及び出土遺物
図43　３号周溝墓平・断面
図44　３号周溝墓出土遺物の垂直分布
図45　３号周溝墓出土遺物
図46　１号周溝墓南側陸橋部断面
図47　１号周溝墓土器分布
図48　１号周溝墓出土遺物その１
図49　１号周溝墓出土遺物その２
図50　１号周溝墓出土遺物その３
図51　Ｄ５トレンチ１号土坑平・断面及び出土遺物
図52　Ｄ６・７トレンチ古代～中世遺構配置
図53　Ｄ７トレンチ１～３号溝断面及び出土遺物
図54　Ｄ７トレンチ８・18・19号溝断面及び出土遺物
図55　Ｄ６・７トレンチ近世以降の遺構配置
図56　Ｄ６トレンチ近世遺構出土遺物
図57　Ｄ７トレンチ近世遺構断面及び出土遺物その１
図58　Ｄ７近世遺構出土遺物その２
図59　Ｄ７トレンチ近世遺構出土遺物その３
図60　遺構外出土遺物
東山崎・水田遺跡
図１　遺跡位置図（1/25,000）
図２　Ｃ地区、Ａ～Ｃ区遺構配置図（1/200）

図３　Ｄ地区、Ｄ～Ｆ、Ｉ～Ｋ区遺構配置図（1/200）
図４　Ｅ地区、Ｇ、Ｈ区遺構配置図（1/200）
図５　東山崎・水田遺跡調査区割図（1/2,000）
図６　Ａ区遺構平面図（1/100）
図７　Ａ区北壁土層断面図（1/80）
図８　Ａ区ＳＤＡ04～Ａ07断面図（1/40）、出土遺物（1/4）（1/2）
図９　Ｂ区遺構平面図（1/100）
図10　Ｂ区北壁土層断面図（1/80）
図11　Ｂ区ピット出土遺物（1/4）(1/2)
図12　Ｂ区ＳＤＢ01・Ｂ02、ＳＸＢ01断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図13　Ｂ区ＳＫＢ01、ＳＸＢ04・05断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図14　Ｃ区遺構平面図（1/100）
図15　Ｃ区北壁土層断面図（1/80）
図16　Ｃ区西ＳＤＣ01平・断面図（1/20）、ＳＤＣ02・Ｃ03断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図17　Ｄ区遺構配置図（1/100）
図18　Ｄ区北壁土層断面図（1/80）
図19　Ｄ区ＳＤＤ01断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図20　Ｅ区遺構平面図（1/100）
図21　Ｅ区（西部）南壁土層断面図（1/80）
図22　Ｅ区ＳＤＥ01断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図23　Ｅ区ＳＤＥ02断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図24　Ｅ区、ＳＤＥ03・Ｅ04・Ｅ05断面図（1/40）、ＳＤＥ04出土遺物（1/4）
図25　Ｅ区包含層出土遺物（1/4）
図26　Ｅ区（東部）北壁土層断面図（1/80）
図27　Ｅ区ＳＫＥ01平･断面図(1/20)、出土遺物（1/4）
図28　Ｅ区ＳＫＥ02平･断面図(1/20)、出土遺物（1/4）1
図29　Ｅ区ＳＫＥ02出土遺物（1/4）2
図30　Ｅ区ＳＤＥ06上層出土遺物（1/4）1
図31　Ｅ区ＳＤＥ06断面図（1/40）
図32　Ｅ区ＳＤＥ06上層出土遺物（1/4）2
図33　Ｅ区ＳＤＥ05下層出土遺物（1/4）
図34　Ｅ区ＳＤＥ06層位不明出土遺物（1/4）
図35　Ｅ区包含層出土遺物（1/4）
図36　Ｆ区遺構平面図（1/100）
図37　Ｆ区北壁土層断面図（1/80）
図38　Ｆ区ＳＤＦ01・Ｆ02・Ｆ03・Ｆ04・Ｆ05、ＳＸＦ01・Ｆ02断面図（1/40）、出土遺物（1/4）(1/2)
図39　Ｉ区北壁土層断面図（1/80）
図40　Ｉ区ＳＫＩ01・Ｉ02平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）
図41　Ｉ区ＳＰＩ16平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）、その他遺物（1/4）
図42　Ｉ区遺構平面図（1/100）
図43　Ｊ区遺構平面図（1/100）
図44　Ｊ区南壁土層断面図（1/80）
図45　Ｊ区ＳＫＪ01・Ｊ03・Ｊ04・Ｊ05・Ｊ06平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図46　Ｊ区ＳＤＪ01・Ｊ02・Ｊ03・Ｊ04・Ｊ05断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図47　Ｋ区遺構平面図（1/100）
図48　Ｋ区南壁土層断面図（1/80）、ＳＤＫ01断面図（1/40）、その他出土遺物（1/4）
図49　Ｇ区遺構平面図（1/100）
図50　Ｇ区北壁土層断面図（1/80）
図51　Ｇ区ＳＰＧ11平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）（1/2）
図52　Ｇ区その他のＳＰ出土遺物（1/4）
図53　Ｇ区ＳＫＧ01平・断面図（1/20）、出土遺物（1/5）（1/4）
図54　Ｇ区ＳＫＧ02平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）
図55　Ｇ区ＳＤＧ01・Ｇ02・Ｇ03・Ｇ04・Ｇ05断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図56　Ｇ区包含層出土遺物（1/4）
図57　Ｈ区遺構平面図（1/100）
図58　Ｈ区北壁土層断面図（1/80）
図59　Ｈ区ＳＰＨ45断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図60　Ｈ区ＳＫＨ02平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）
図61　Ｈ区ＳＫＨ05平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）
図62　Ｈ区ＳＤＨ01・Ｈ03断面図（1/40）、出土遺物（1/4）
図63　Ｈ区包含層出土遺物（1/4）（1/2）
図64　遺構変遷図（1/800）

写真図版目次

図版１　中森遺跡

１．調査地遠景東から

２．調査地遠景南から

図版２　中森遺跡

３．Ａトレンチ１・２・３号溝全景南から

４．Ａトレンチ１・２・３号溝全景南から

図版３　中森遺跡Ａトレンチ

５．Ａトレンチ１号溝遺物出土状況北から

６．Ａトレンチ１・４号溝全景北東から

７．Ａトレンチ１・３号溝断面北から

８．Ａトレンチ１・３号溝断面南から

９．Ａトレンチ２号溝断面東から

10．Ａトレンチ旧石器429出土状況南から

11．Ａトレンチ旧石器出土層断面南西から

図版４　中森遺跡Ｂトレンチ

12．Ｂトレンチ旧石器ブロック１～３遠景東から

13．Ｂトレンチ旧石器ブロック１出土状況北東から

図版５中森遺跡Ｂトレンチ

14．Ｂトレンチ旧石器ブロック３と基底礫層北から

15．Ｂトレンチ東壁断面北西から

16．Ｂトレンチ東壁火山灰分析位置南西から

図版６　中森遺跡Ｂ・Ｈトレンチ

17．Ｂトレンチ中森２号墳の現況南西から

18．Ｂトレンチ中森２号墳断面南東から

19．Ｈトレンチ上層遺構完掘状況東から

20．Ｈトレンチ下層凹地と基底礫層南東から

21．Ｈトレンチ下層凹地断面北から

図版７　中森遺跡Ｃトレンチ

22．Ｃトレンチ全景東から

23．Ｃトレンチ５号溝全景東から

24．Ｃトレンチ５号溝断面１東から

25．Ｃトレンチ５号溝断面２南東から

図版８　中森遺跡Ｄトレンチ

26．Ｄトレンチ１号掘立柱建物全景北から

27．Ｄトレンチ１号掘立柱建物遺物出土状況北東から

28．Ｄトレンチ18号溝全景南から

29．Ｄトレンチ19・20号溝全景南から

図版９　中森遺跡Ｅトレンチ

30．Ｅトレンチ西半部全景西から

31．Ｅトレンチ東半部全景北から

図版10　中森遺跡Ｅトレンチ

32．Ｅトレンチ１～4号掘立柱建物全景北から

33．Ｅトレンチ１号掘立柱建物全景南東から

34．Ｅトレンチ３号掘立柱建物全景北から

図版11　中森遺跡Ｅトレンチ

35．Ｅトレンチ４号掘立柱建物全景西から

36．Ｅトレンチ９～13号溝全景北から

37．Ｅトレンチ９・11号溝断面南から

38．Ｅトレンチ13号溝断面北から

39．Ｅトレンチ11号溝断面北から

図版12　中森遺跡Ｅトレンチ

40．Ｅトレンチ１号井戸全景北西から

41．Ｅトレンチ１号井戸断面南東から

42．Ｅトレンチ６号不明遺構全景南から

43．Ｅトレンチ８号不明遺構全景南から

図版13　中森遺跡Ｇトレンチ

44．Ｇトレンチ全景西から

45．Ｇトレンチ４・５・９号溝全景東から

46．Ｇトレンチ４・５号溝断面南から

47．Ｇトレンチ１号溝全景南から

図版14　中森遺跡Ｇトレンチ

48．Ｇトレンチ２号井戸全景西から

49．Ｇトレンチ２号井戸全景真上から

50．Ｇトレンチ２号井戸断面西から

図版15　中森遺跡Ｆトレンチ

51．Ｆトレンチ東半部全景西から

52．Ｆトレンチ西半部全景東から

53．Ｆトレンチ２号溝全景北から

図版16　中森遺跡Ｆトレンチ

54．Ｆトレンチ２号溝断面北から

55．Ｆトレンチ４号溝断面北から

56．Ｆトレンチ２・３号溝断面北から

57．Ｆトレンチ１号谷地形全景東から

58．Ｆトレンチ１号谷地形全景北東から

59．Ｆトレンチ１号谷地形断面北東から

60．Ｆトレンチ１号谷地形断面東から

図版17　中森遺跡出土遺物

図版18　中森遺跡出土遺物

図版19　中森遺跡出土遺物
図版20　中森遺跡出土遺物
図版21　中森遺跡出土遺物
図版22　中森遺跡出土遺物
図版23　中森遺跡出土遺物
図版１　林・坊城遺跡
１．高松平野から瀬戸内海を望む南から
２．調査地遠景北から
図版２　林・坊城遺跡
３．調査地遠景西から
４．Ｄ６トレンチ周溝墓2全景南西から
図版３　林・坊城遺跡
５．Ｄ４トレンチ３号周溝墓全景西から
６．Ｄ２トレンチ１号周溝墓と流路Ａ全景西から（昭和63年度調査）
図版４　林・坊城遺跡
７．Ｄ２・３トレンチ１号周溝墓と流路Ａ全景南から（昭和63年度調査）
８．Ｄ７トレンチ刻目突帯文期水路群全景西から
図版５　林・坊城遺跡
９．Ｄ７トレンチ10・11号溝全景南から
10．Ｄ７トレンチ10号溝の礫集積（堰）南西から
11．Ｄ７トレンチ10号溝の礫集積（堰）北から
12．Ｄ７トレンチ10号溝断面北から
図版６　林・坊城遺跡
13．Ｄ４トレンチ流路Ａ断面北西から
14．Ｄ４トレンチ流路Ａ断面北から
15．Ｄ４トレンチ流路Ａと３号周溝墓南西から
16．Ｄ６トレンチ流路Ａ断面北から
図版７　林・坊城遺跡
17．Ｄ２トレンチ流路Ａ南壁断面②北西から（昭和63年度調査）
18．Ｄ２トレンチ流路Ａ南壁断面①北から（昭和63年度調査）
19．Ｄ２トレンチ流路Ａ南壁断面①流路東肩断面北から（昭和63年度調査）
図版８　林・坊城遺跡
20．Ｄ２トレンチ流路Ａ南壁断面②湿地性堆積物上位の不整合面北から（昭和63年度調査）
21．Ｄ２トレンチ流路Ａ南壁断面①下層水田を覆う氾濫堆積物北から（昭和63年度調査）
22．Ｄ２トレンチ流路Ａ北壁断面南から
図版９　林・坊城遺跡
23．Ｄ６トレンチ２号周溝墓南周溝断面東から
24．Ｄ６トレンチ２号周溝墓北周溝断面南西から
25．Ｄ４トレンチ３号周溝墓東周溝断面北から
26．Ｄ４トレンチ３号周溝墓陸橋部周溝断面西から
27．Ｄ７トレンチ１号周溝墓南陸橋部東側断面と流路Ａ北西から（昭和63年度調査）
図版10　林・坊城遺跡Ｄ７トレンチ
28．Ｄ７トレンチ10・11号溝全景北東から
29．Ｄ７トレンチ10号溝南側遺物出土状況西から
30．Ｄ７トレンチ10号溝断面北から（写真左）
31．Ｄ７トレンチ10号溝と19号溝との分岐点の礫集積南から
図版11　林・坊城遺跡Ｄ７トレンチ
32．Ｄ７トレンチ10号溝から分岐する19号溝北から
33．Ｄ７トレンチ10・11号溝全景北から
図版12　林・坊城遺跡Ｄ７トレンチ
34．Ｄ７トレンチ25号土坑と19号溝全景南から
35．Ｄ７トレンチ10～14号溝全景北東から
図版13　林・坊城遺跡Ｄ７トレンチ
36．Ｄ７トレンチ11号溝断面北から
37．Ｄ７トレンチ22号溝全景
38．Ｄ７トレンチ24号溝全景南西から
39．Ｄ７トレンチ21号溝全景南東から
40．Ｄ７トレンチ22～24号溝全景北東から
図版14　林・坊城遺跡Ｄ７トレンチ
41．Ｄ７トレンチ27号溝全景東から
42．Ｄ７トレンチ25号溝全景北から
43．Ｄ７トレンチ25号溝断面北から
44．Ｄ７トレンチ北半部25～27号溝全景北から
図版15　林・坊城遺跡Ｄ７トレンチ
45．Ｄ７トレンチ北柱穴群と25・27号溝全景
46．Ｄ７トレンチ南柱穴群全景南から
図版16　林・坊城遺跡Ｄ６・７トレンチ
47．Ｄ７トレンチ下層流路２全景西から
48．Ｄ７トレンチ下層流路２全景北西から
49．Ｄ７トレンチ下層流路２石器集中部南西から
50．Ｄ７トレンチ下層流路１断面東から
51．Ｄ６トレンチ全景北から
図版17　林・坊城遺跡Ｄ６トレンチ

52. Ｄ６トレンチ南半部全景東から
53. Ｄ６トレンチ７号柱穴断面南から
54. Ｄ６トレンチ１号住居検出状況北から
55. Ｄ６トレンチ１号住居全景西から
図版18　林・坊城遺跡Ｄ６トレンチ
56. Ｄ６トレンチ２号周溝墓検出状況北から
57. Ｄ６トレンチ２号周溝墓北周溝遺物出土状況東から
58. Ｄ６トレンチ２号周溝墓陸橋部全景西から
59. Ｄ６トレンチ２号周溝墓全景南から
図版19　林・坊城遺跡Ｄ４トレンチ
60. Ｄ４トレンチ３号周溝墓検出状況西から
61. Ｄ４トレンチ３号周溝墓東側周溝と流路Ａ全景東から
62. Ｄ４トレンチ３号周溝墓東側周溝と陸橋部北西から
図版20　林・坊城遺跡Ｄ４トレンチ
63. Ｄ４トレンチ３号周溝墓土器152出土状況北から
64. Ｄ４トレンチ３号周溝墓土器151出土状況東から
65. Ｄ４トレンチ３号周溝墓西側周溝断面①
66. Ｄ４トレンチ３号周溝墓西側周溝断面②西から
67. Ｄ４トレンチ３号周溝墓西側周溝全景南から
68. Ｄ４トレンチ３号周溝墓西側周溝全景南から
図版21　林・坊城遺跡Ｄ４・５トレンチ
69. Ｄ４トレンチ３号周溝墓全景西から
70. Ｄ５トレンチ北半部全景南から
71. Ｄ５トレンチ流路Ａ全景南東から
72. Ｄ５トレンチ１号土坑全景南から
図版22　林・坊城遺跡Ｄ５トレンチ
73. Ｄ５トレンチ南半部全景南西から
74. Ｄ５トレンチ流路Ａ断面北から
75. Ｄ５トレンチ４南壁断面北から
図版23　林・坊城遺跡Ｄ６・７トレンチ
76. Ｄ６トレンチ１・２号溝全景南から
77. Ｄ６トレンチ３号溝全景東から
78. Ｄ７トレンチ８・19号溝全景北東から
79. Ｄ７トレンチ18号溝全景南から
80. Ｄ７トレンチ北半部近世遺構全景
図版24　林・坊城遺跡出土遺物
図版25　林・坊城遺跡出土遺物
図版26　林・坊城遺跡出土遺物
図版27　林・坊城遺跡出土遺物
図版28　林・坊城遺跡出土遺物
図版29　林・坊城遺跡出土遺物
図版30　林・坊城遺跡出土遺物
東山崎・水田遺跡
図版１　東山崎・水田遺跡
１．Ａ区全景（東から）
２．Ｂ区全景（東から）
図版２　東山崎・水田遺跡
３．Ｃ区（東部）全景（東から）
４．Ｄ区全景（東から）
図版３　東山崎・水田遺跡
５．Ｅ区（西部）第１面全景（西から）
６．Ｅ区（西部）第２面全景（南から）
図版４　東山崎・水田遺跡
７．Ｅ区（東部）全景（西から）
８．Ｅ区（東部）・Ｆ区全景（東から）
図版５　東山崎・水田遺跡
９．Ｉ区全景（東から）
10. Ｊ区全景（南から）
図版６　東山崎・水田遺跡
11. Ｋ区全景（西から）
12. Ｈ区全景（西から）
図版７　東山崎・水田遺跡
13. Ｇ区全景（西から）
14. Ｈ区全景（東から）
図版８　東山崎・水田遺跡
15. Ａ区ＳＤＡ04断面（南から）
16. Ｂ区ＳＰＢ150土器出土状況（西から）
17. Ｂ区ＳＰＢ251土器出土状況（北東から）
18. Ｃ区ＳＤＣ01断面（南から）
19. Ｃ区ＳＤＣ03断面（北東から）
20. Ｃ区ＳＤＣ01木出土状況（南から）
図版９　東山崎・水田遺跡
21. Ｅ区（西部）ＳＤＥ01完掘状況（北から）
22. Ｄ区ＳＤＤ01断面（東から）
23. Ｅ区（西部）ＳＤＥ02断面（東から）
図版10　東山崎・水田遺跡
24. Ｅ区（東部）ＳＫＥ02検出状況（北から）
25. Ｅ区（東部）ＳＫＥ02半裁（南から）
26. Ｅ区（東部）ＳＫＥ02井戸枠検出状況（南から）
27. Ｅ区（東部）ＳＫＥ02断ち割り（南から）
図版11　東山崎・水田遺跡
28. Ｅ区（東部）ＳＤＥ06中央アゼ断面（東から）

29. Ｅ区（東部）ＳＤＥ06西アゼ断面（東から）
30. Ｅ区（東部）ＳＤＥ06土器出土状況
31. Ｅ区（東部）ＳＫＥ01断面（西から）
32. Ｉ区ＳＫＩ02遺物出土状況（南から）
33. Ｇ区ＳＫＧ01断面（南から）
34. Ｈ区ＳＤＨ01土器出土状況（南東から）
図版12　東山崎・水田遺跡
35. Ｈ区ＳＤＨ01遺物出土状況（東から）
36. 作業風景（Ｃ区西部)(南から）
図版13　東山崎・水田遺跡
Ａ区ＳＤＡ05・ＳＤＡ07出土遺物
Ｂ区ピット出土遺物
Ｃ区ＳＤＣ01出土遺物
Ｅ区ＳＤＥ01出土遺物（１）
図版14　東山崎・水田遺跡
Ｅ区ＳＤＥ01出土遺物（２）
Ｅ区ＳＤＥ02出土遺物
Ｅ区ＳＤＥ04出土遺物
図版15　東山崎・水田遺跡
Ｅ区包含層出土遺物
Ｅ区ＳＫＥ02出土遺物（１）
図版16　東山崎・水田遺跡
Ｅ区ＳＫＥ02出土遺物（２）
図版17　東山崎・水田遺跡
Ｅ区ＳＤＥ05出土遺物（１）
図版18　東山崎・水田遺跡
Ｅ区ＳＤＥ05出土遺物（２)、包含層出土遺物
Ｆ区ＳＤＦ04出土遺物
図版19　東山崎・水田遺跡
Ｉ区ＳＫＩ02出土遺物
Ｇ区ＳＰＧ11出土遺物
図版20　東山崎・水田遺跡
Ｇ区ピット出土遺物
Ｇ区ＳＫＧ01・ＳＫＧ02出土遺物
Ｇ区包含層出土遺物
図版21　東山崎・水田遺跡
Ｈ区ＳＤＨ01出土遺物
Ｈ区ＳＤＨ03出土遺物
Ｈ区包含層出土遺物
図版22　東山崎・水田遺跡
Ａ区～Ｅ区出土陶磁器
図版23　東山崎・水田遺跡
Ｅ区出土陶磁器

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

四国横断自動車道高松市内区間は、高松市中間町～檀紙町までの高松～善通寺間と、高松市檀紙町～前田東町までの高松～高松間の二つの工事区間を指す。高松市内区間の建設は、平成５年度に建設大臣から日本道路公団総裁に対して建設の施工命令が出され、平成６年度には中心杭の打設が行われた。

これに伴う路線内の埋蔵文化財保護について、香川県教育委員会（以下､｢県｣という）では、平成４年度から日本道路公団高松建設局（以下､｢公団｣という）との間で事前協議を開始し、平成６年度末には、公団から高松市内区間の事業照会があり、これをうけて県は、平成７年６・７月に路線内の分布調査を実施し、高松市内区間７地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを公団に通知した。

公団は、県の意見を踏まえ、平成７年10月に文化庁と協議を行い、平成８年１月に文化庁より「工事に先立って発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより、平成４年度からの事前協議が終了し、平成８年４月、県と公団との間で埋蔵文化財発掘調査について委託契約が締結され、さらに県と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとで発掘調査委託契約が締結されたのである。

第２節　調査の経過

高松～高松間（檀紙町～前田東町）は、国道11号の上部に建設されるため、埋蔵文化財調査はインターチェンジ設置部分を除いて、現道の拡幅部分が主な調査対象となった。国土交通省施工区間を含めると、香川郡条里Ｂ地区（檀紙町）・香川郡条里Ｃ地区（勅使町）・香川郡条里Ｄ地区（上天神遺跡を含む、田村町）・林・坊城遺跡（林町）・山田郡条里地区（林町）・東山崎・水田遺跡（東山崎町）・前田東中村遺跡（前田東町）の７地区である。また、香川郡条里Ｂ地区に関しては、Ｒ区間の公団施工区間を除く、東側のインターチェンジ建設部分が高松～高松間となる。

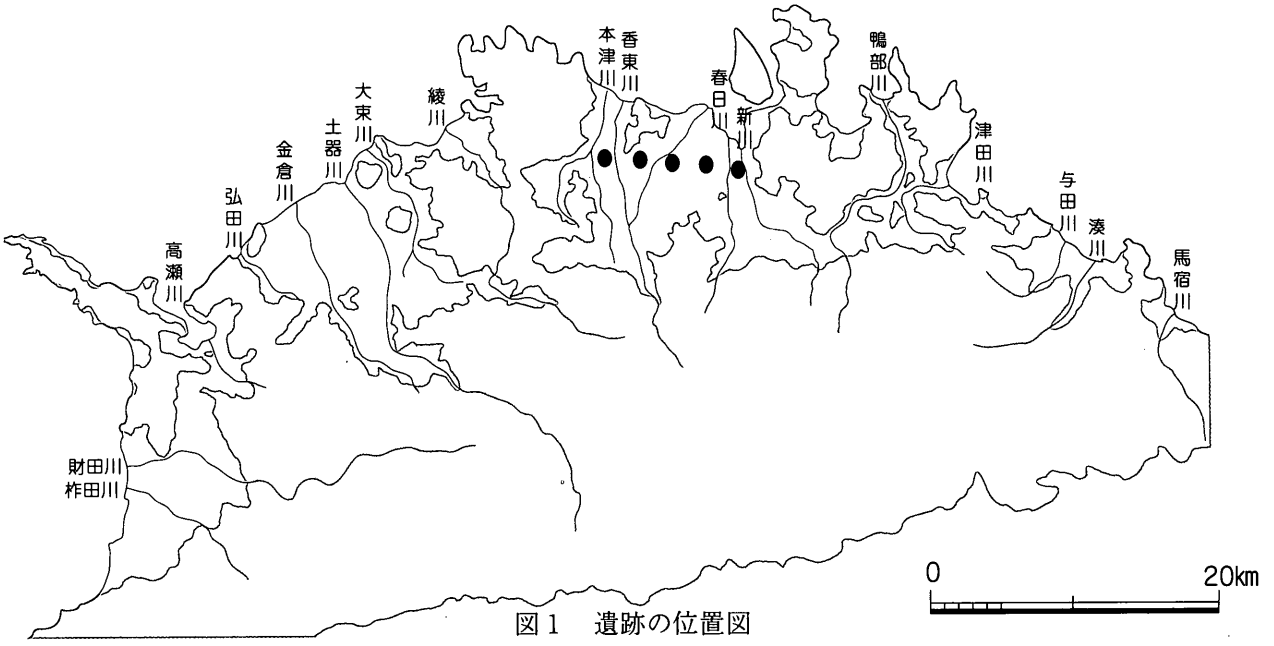


図１　遺跡の位置図

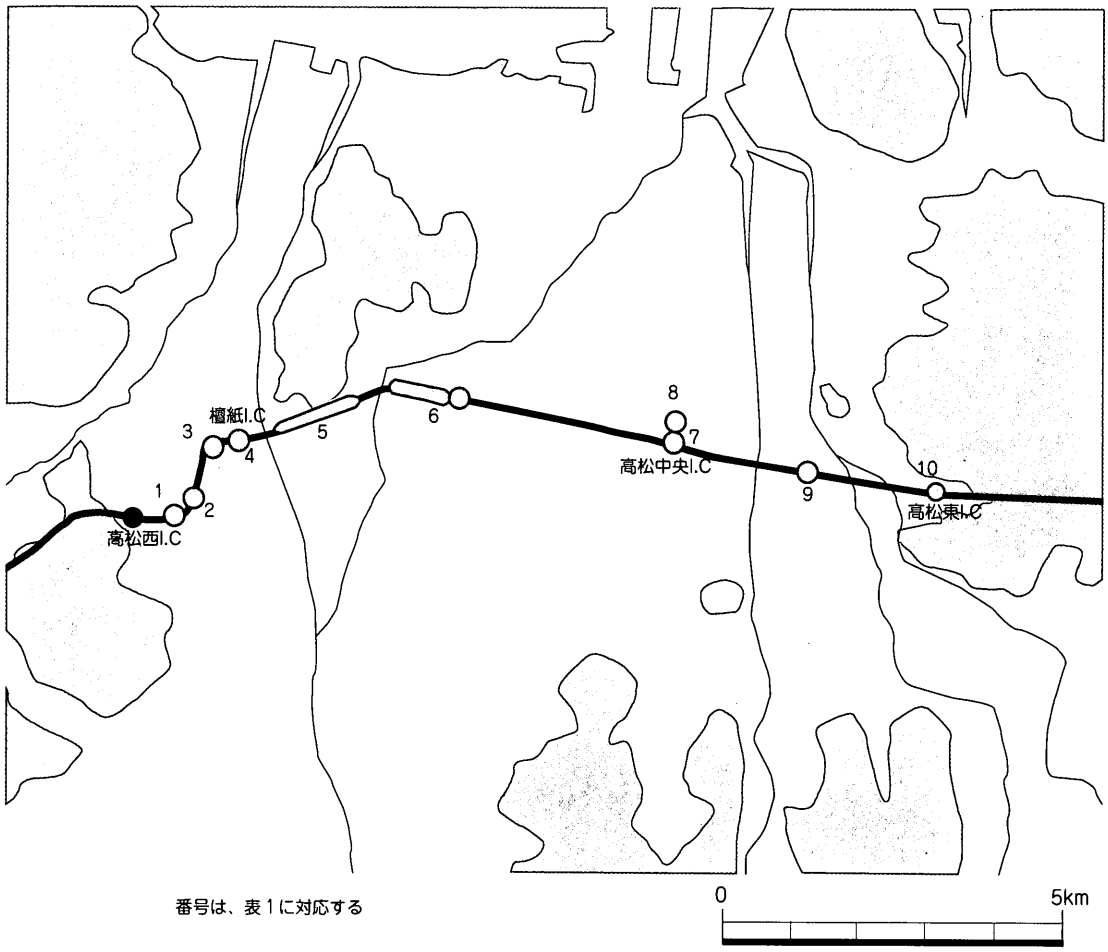


図２　四国横断自動車道高松市内区間の埋蔵文化財包蔵地

調査方法に関しては、保護措置が必要と判断された各地区に関してトレンチ調査（予備調査）を行い、全面発掘調査範囲を絞り込むトレンチ調査方式を基本的には採用した。

香川郡条里Ｂ地区は、平成10年当初に東側の国道11号に面したインターチェンジの国土交通省施工部分から予備調査を実施した。その結果、中世集落の存在が確認され、中森遺跡として平成12年度までに5,330㎡の発掘調査を実施した。

香川郡条里Ｃ地区については、国道11号の両側４ｍの拡幅部分が調査対象であるが、隣接して店舗等が多数存在していることと、国道の建設の際に、路面を嵩上げしていることにより安全面の確保などが課題であった。盛土の存在しない部分に先行してトレンチを設定し、対象地全体の保護措置を検討する方式を採り、平成11・12年度で合計896㎡の調査を実施した。

香川郡条里Ｄ地区（上天神遺跡を含む）に関しても、Ｃ地区同様の制約が存在したことから、工事立会の方式を採用し、平成９・12年度に2,500㎡の調査を実施した。

林・坊城遺跡は、平成７年度の県文化行政課と公団との事前協議において、用地の中の橋脚設置部分を除いた緑地帯部分6,745㎡について、現状保存することが決定した。平成８年度には、国道11号南側の部分に予備調査を実施し、本調査面積を2,971㎡に絞り込み、平成９・10年度に全面発掘調査を実施した。

東山崎・水田遺跡は一般国道11号高松東道路建設に伴う調査区の南北部分を対象地とし、小規模なトレンチによる調査となったが、平成10年度に1,978㎡の全面発掘調査を実施した。

No.	地区名	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	調査報告書
1	香川郡条里A	中間東井坪	高松市中間町	709	8. 4. 1～ 8. 5.31 8. 9. 1～ 8. 9.30 9. 1. 1～ 9. 3.31	旧石器包含層・柱穴	ナイフ形石器	第49冊
2	正箱	正箱	高松市檀紙町	800	11. 1. 1～11. 2.28	掘立柱建物跡・溝跡・土器溜まり	弥生土器・旧石器・須恵器・土師器	第49冊
3	香川郡条里B	八幡	高松市檀紙町	200 4,315 1,542	11. 2. 1～11. 3.31 11. 7. 1～11. 9.30 12. 4. 1～12. 5.31	溝跡・柱穴・粘土採掘坑	須恵器・土師器・陶器・染付	第49冊
4	香川郡条里B	中森	高松市檀紙町	3,015 1,563 752	10. 6. 1～10. 8.31 11.10. 1～11.12.31 12. 8. 1～12.10.31	掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・古墳周溝	弥生土器・旧石器・サヌカイト・紡錘車・須恵器・土師器・中世陶磁器・鋳型・鉄滓	本書 第53冊
5	香川郡条里C		高松市勅使町	770 126	10. 4. 1～10. 5.31 11. 3. 1～11. 3.31 11.10. 1～11.10.31	溝跡	弥生土器・黒色土器	本書 第53冊
6	香川郡条里D	(田村)	高松市田村町	2,500	12.10. 1～12.10.31	中世包含層	土師器	本書 第53冊
		上天神	高松市上天神町	190	9. 8. 1～ 9. 9.30	溝跡	弥生土器	本書 第53冊
7	林・坊城	林・坊城	高松市林町	481 490 2,000	8.10. 1～ 8.10.31 9.10. 1～ 9.11.30 10. 9. 1～10.12.31	竪穴住居跡・土坑・円形周溝墓・自然河川跡・溝跡	縄文土器・弥生土器・須恵器	本書 第53冊
8	山田郡条里A	林・谷	高松市林町	2,626	8.10. 1～ 9. 1.31	溝跡	勾玉・ガラス玉	
9	東山崎・水田	東山崎・水田	高松市東山崎町	1,978	10. 7. 1～10. 9.30 11. 2. 1～11. 2.28	溝跡・柱穴・土坑	須恵器・土師器・陶磁器・瓦	本書 第53冊
10	前田東・中村	前田東・中村	高松市前田東町	4,040 7,206 1,900	9.10. 1～10. 3.21 10. 4. 1～11. 3.31 11. 4. 1～11. 6.30	掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・柱穴・土坑・土器焼成窯	弥生土器・黒色土器・須恵器・土師器・陶磁器・瓦	

表１　高松市内区間の埋蔵文化財包蔵地

整理作業は、東山崎・水田遺跡を平成15年４月～５月までの２ヶ月間、中森・上天神・林・坊城遺跡の３遺跡を平成15年12月～平成14年３月までの４ヶ月間で実施した。

現地調査及び整理作業の体制は以下の通りである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

平成８年度		平成９年度		平成10年度		平成11年度		平成12年度		平成15年度	
課長	藤原 章夫	課長	菅原 良弘	課長	小原 克己	課長	小原 克己	課長	小原 克己	課長	北原 和利
課長補佐	髙木 一義(～5.31)	課長補佐	北原 和利	課長補佐	北原 和利	課長補佐	小国 史郎	課長補佐	小国 史郎	課長補佐	森岡 修
課長補佐	北原 和利(6.1～)			副主幹	渡部 明夫						
副主幹	渡部 明夫	総務係長	山崎 隆	副主幹	西村 隆史	総務係長	中村 禎伸	総務係長	中村 禎伸	主任	香川 浩章
総務係長	山崎 隆	主査	星加 宏明(～5.31)			主査	三宅 陽子	主査	三宅 陽子	主査	須崎 陽子
主査	星加 宏明	主査	松村 崇史(6.1～)	総務係長	中村 禎伸	主査	松村 崇史	主事	亀田 幸一	主任主事	八木 秀憲
主査	國方 秀子(～5.31)	主事	打越 和美	主査	三宅 陽子						
主査	打越 和美(6.1～)			主査	松村 崇史	埋蔵文化財		埋蔵文化財		埋蔵文化財	
		埋蔵文化財				副主幹	廣瀬 常雄	副主幹	廣瀬 常雄	副主幹	大山 眞充
埋蔵文化財		副主幹	渡部 明夫	埋蔵文化財		係長	西村 尋文	係長	西岡 達哉	主任	片桐 孝浩
文化財専門員	木下 晴一	文化財専門員	木下 晴一	係長	西村 尋文	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	佐藤 竜馬
技師	塩崎 誠司	技師	塩崎 誠司	主任技師	塩崎 誠司	主任技師	塩崎 誠司	文化財専門員	宮崎 哲治	文化財専門員	松本 和彦

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

平成８年度		平成９年度		平成10年度		平成11年度		平成12年度		平成15年度	
所長	大森 忠彦	所長	大森 忠彦	所長	菅原 良弘	所長	菅原 良弘	所長	小原 克己(11.1～)	所長	中村 仁
次長	小野 善範	次長	小野 善範	次長	小野 善範	次長	川原 裕章		菅原 良弘(～10.30)	次長	渡部 明夫
総務		総務		総務		総務		次長	川原 裕章	総務	
参事	別枝 義昭	参事	別枝 義昭	参事	別枝 義昭	副主幹兼係長	六車 正憲	総務		副主幹	野保 昌宏
係長	前田 和也	副主幹	田中 秀文(6.1～)	副主幹兼係長	田中 秀文	副主幹兼係長	田中 秀文	副主幹	六車 正憲	係長	多田 敏弘
主査	林 照代	係長	前田 和也(～5.31)	主査	新 一郎	係長	新 一郎	副主幹	大西 誠治	主査	塩崎かおり
主任主事	西川 大	主査	西川 大	調査		調査		係長	新 一郎	主任主事	田中 千秋
主事	佐々木隆司(6.1～)	調査		参事	長尾 重盛	参事	長尾 重盛	調査		調査	
調査		参事	近藤 和史	主任文化財専門員	大山 眞充	主任文化財専門員	大山 眞充	参事	長尾 重盛	主任文化財専門員	真鍋 昌宏
参事	近藤 和史	主任文化財専門員	大山 眞充	主任文化財専門員	藤好 史郎	主任文化財専門員	藤好 史郎	主任文化財専門員	藤好 史郎	文化財専門員	山元 棠子
主任文化財専門員	大山 眞充	主任文化財専門員	藤好 史郎	主任文化財専門員	蓮本 和博	主任技師	野崎 隆亨	文化財専門員	西村 尋文	主任技師	信里 芳紀
文化財専門員	大久保徹也	技師	乗松 真也	文化財専門員	木下 晴一	技師	信里 芳紀	文化財専門員	蔵本 晋司		
技師	住野 正和	技師	住野 正和	文化財専門員	岡本 利	調査技術員	豊岡 多恵	文化財専門員	川原 和生		
調査技術員	髙橋佳緒里			文化財専門員	山元 棠子			文化財専門員	増井 泰弘		
				文化財専門員	森下 英治			技師	乗松 真也		
				主任技師	香西 亮			調査技術員	糸山 晋		
				調査技術員	門脇 範子			調査技術員	豊岡 多恵		
				調査技術員	中山 尚子						
				調査技術員	滝井 理加						

整理作業に携わった方々	山下登志子，市川孝子，森川理恵，辻悦子，香川洋子，猪木原美恵子，矢野ゆかり，森光恵，松本恭子，白川智子，米田静恵，柴垣明美

第Ⅱ章　調査の成果

第１節　中森遺跡

第１項　遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境（図１）

中森遺跡が所在する高松平野は、香東川を主体に本津川・春日川・新川によって形成された扇状地性の沖積平野である。南を讃岐山地と呼ばれる白亜系の砂岩、頁岩から構成される標高800～1,000m程の東西方向の山地に、北及び東西は花崗岩からなる低山によって画されている。これらの山頂には、瀬戸内火山活動によって形成された讃岐層群が乗っており、侵食されにくい安山岩や凝灰岩が産出される。高松平野の主要河川である香東川は、17世紀に現在の紫雲山東の流下位置に人工的に固定される以前は、同山西側の現御坊川の部分と現在の流下位置に分かれて瀬戸内海へ注いでいた。平野は、更新世の段丘面と沖積面に分かれ、沖積面は扇状地帯と三角州帯に分類されている（高橋1993）。

中森遺跡は扇状地帯に分類される地形面に立地している。また、扇状地帯の骨格と成すのは、更新世末期に堆積した広義の沖積層基底礫層である。

扇状地面では、基底礫層が現地表面下の比較的浅い位置に露出する箇所が見られ、旧中州（微高地）に相当すると考えられる。旧中州の部分は、現地表面においても微高地として確認できることが多い。中森遺跡では、基底礫層上面において、ナイフ形石器を主体とした石器ブロックを確認している。このような事例は、中間・東井坪遺跡などでも見られる。また、下流域の標高３～４ｍに位置する西打遺跡においても現地表面起伏に縄文前期の旧河道の痕跡と考えられる凹地が確認されている（木下2000）など、香東川の西側では、比較的古い段階の地形面の起伏が残存していると考えられる。

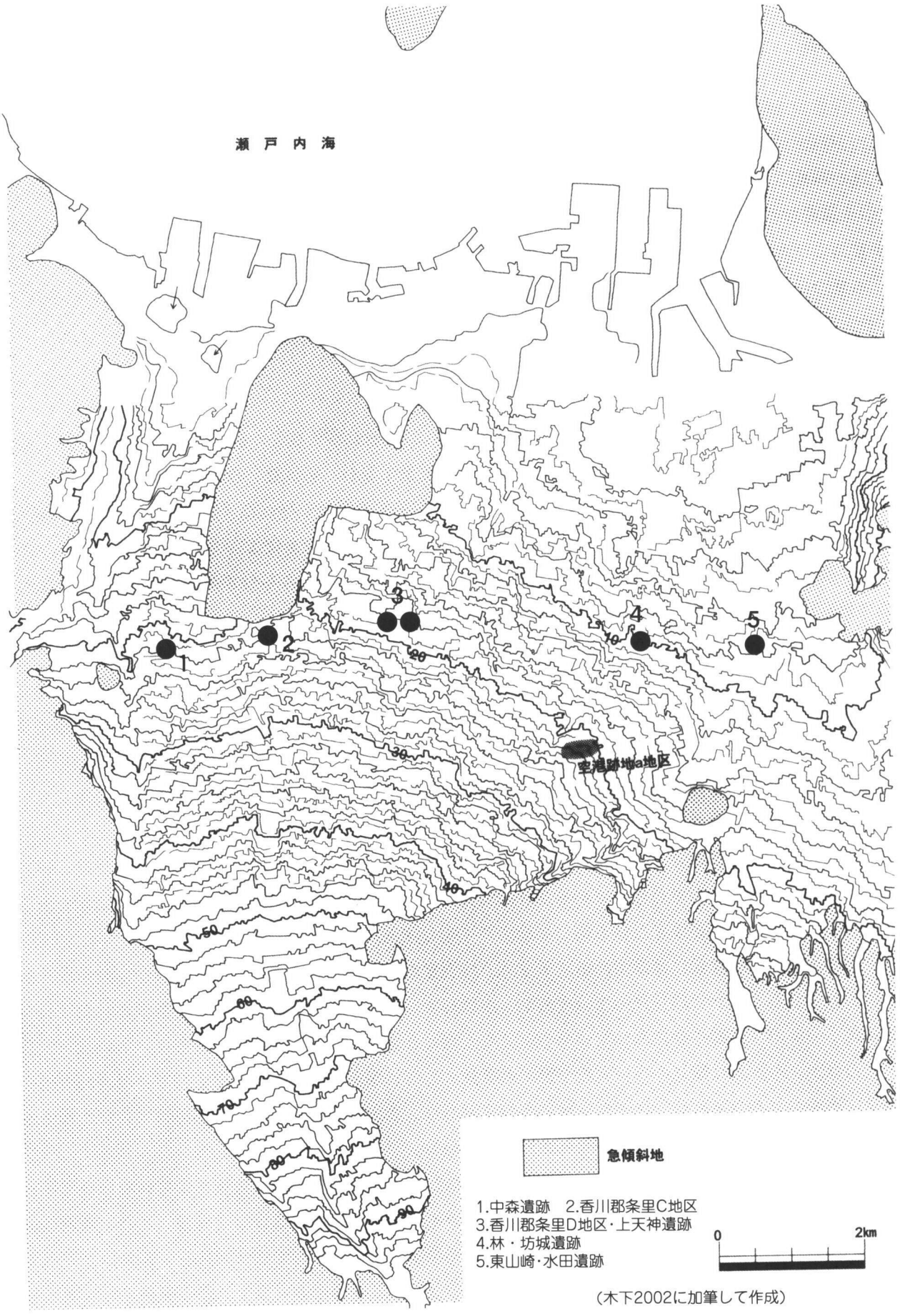
歴史的環境（図２）

香東川西側の本津川・古川流域の六ツ目山東麓を中心とする地域では、近年、６遺跡の後期旧石器の遺跡が確認されている。高位の丘陵斜面地を中心とした近隣の中間・西井坪遺跡では、接合資料を含みナイフ形石器や角錐状石器を主体とした数基のブロックを確認しており、比較的遺跡の様相が判明している（森下2001）。

縄文時代の遺跡の調査例は著しく少ない。中間・東井坪・正箱遺跡では、縄文後・晩期と推定される土坑・流路等が確認されているが、遺跡全体の様相を復元できるようなものではない。

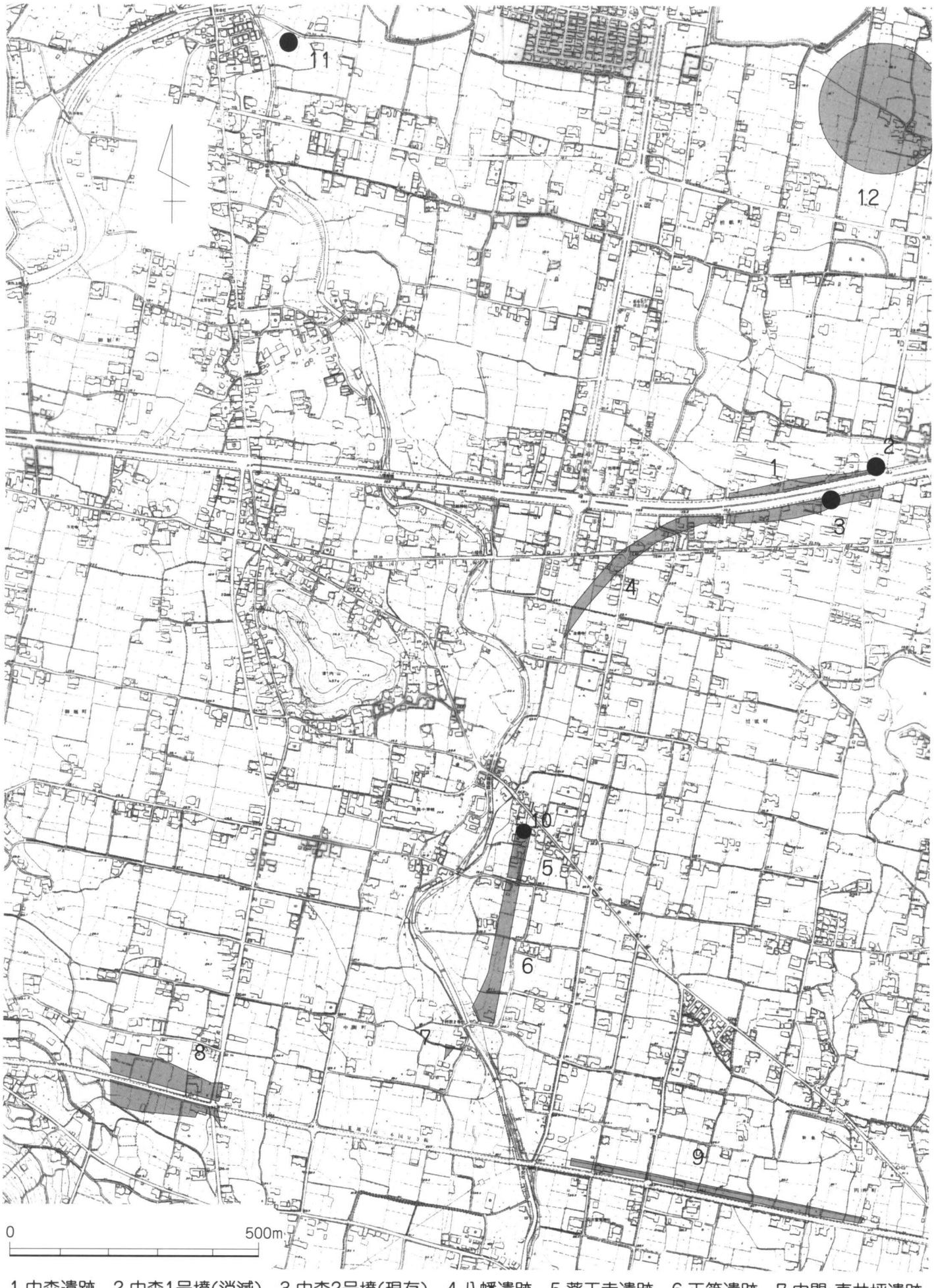
弥生時代前期～後期前半の遺跡の調査例は少なく唯一、正箱遺跡で竪穴住居１棟の調査例確認できる（廣瀬・西村1994）。後期後半～古墳初頭に関しては調査例が多い。中間・西井坪遺跡は、唯一集落構成の一端が判明する後期後半末葉～古墳初頭の遺跡であるが、竪穴住居を欠落し掘立柱建物のみで構成される点が注目される（蔵本1999）。

古墳時代初頭～前期前半の古墳・集落は確認できない。前期後半には、中間・西井坪遺跡で古墳築造・埴輪生産関係の調査例が見られる（大久保1996）。埴輪生産では、焼成土坑に加えて作業場としての性格が強い大型竪穴建物など一連の遺構・遺物が確認されている。生産された埴輪には、円筒に加えて盾形などの形象埴輪を初めとして、箱形・割竹形・円筒形の土製棺が確認できる。また、円筒埴輪・箱



（木下2002に加筆して作成）

図１　遺跡位置



1.中森遺跡　2.中森1号墳(消滅)　3.中森2号墳(現存)　4.八幡遺跡　5.薬王寺遺跡　6.正箱遺跡　7.中間・東井坪遺跡
8.中間・西井坪遺跡　9.兀塚遺跡　10.檀紙城跡　11.御厩大塚古墳　12.紙漉塚群

図2　周辺の遺跡

形土製棺は下流域の今岡古墳への供給が想定されており、古墳築造に際しての関与した地域圏の様相を示す好例と言える。また、遺跡内には、少なくとも３基の古墳が含まれ、中間・西井坪１号墳は前期後半の前方後円墳である。２・３号墳は円墳と考えられ、遺跡内の埴輪生産とは時期を違えて、中期後葉に下る。

古墳時代末～古代の集落の検出例は多く、兀塚遺跡（６ｃ末～７ｃ中葉）・中間・西井坪遺跡（６ｃ末～７ｃ中葉，８ｃ後半）・正箱遺跡（８ｃ後半～10ｃ）が知られ、一見継続性の無いように見えるが、狭い範囲を集落が移動している状況も想定できる。この中で注目されるのは、条里型地割の施工と関係すると見られる建物の主軸方位である。６ｃ末～７ｃ中葉には、統一性の無い主軸方向から正方位への変遷が兀塚・中間・西井坪遺跡で確認され、８ｃ後半以降には、正箱遺跡・中間・西井坪遺跡において、Ｎ－９°－Ｅ前後を測る条里型地割に合致した主軸方位に統一されていく現象が見られる。

当該期の地割溝自体は、正箱遺跡の一例に留まるものの、集落の建物主軸とその周辺のみに限定される形で条里型地割の施工が、遅くとも８ｃ中葉には行われた現象を反映する可能性が考えられよう。また、この３遺跡南方には、現状の条里型地割の中に取り込まれた形で、幅11～12m程度の余剰帯と呼ばれる地割が東西方向に遺存している。この余剰帯は、ほぼ高松平野を東西に貫くように見られ、官道である南海道に比定されている（金田1988）。この部分を調査対象地とする川原遺跡の予備調査ではこの余剰帯を反映した形で東西方向の溝を確認している（藤好2003）。現状で溝の開削時期は不明ながら、南海道の敷設が正箱遺跡を初めとした集落の建物を含めた条里型地割の施工と深く関係している可能性があり、今後とも注視する必要があろう。

中世には、古代に局所的に整備されたと考えられる条里型地割は、その範囲を拡大し、坪界溝の掘開や集落の建物主軸や立地に影響を与えている。古代末と考えられる完新世段丘崖の形成（高橋1993）と同時に、多くの旧河道の埋没が完了しており、平坦化が進んだ段丘上に、条里型地割溝の施工を伴った開発が進行したものと考えられる。発掘調査で確認された条里型地割坪界溝の多くは、14ｃ以降に掘開されたものが多い。

大久保徹也1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十五冊中間西井坪遺跡Ⅰ』香川県教育委員会　㈶香川県埋蔵文化財調査センター　日本道路公団
金田章裕1988『条里と村落生活』「香川県史第１巻通史編原始・古代」香川県四国新聞社
蔵本晋司1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十二冊中間西井坪遺跡Ⅱ』香川県教育委員会　㈶香川県埋蔵文化財調査センター他日本道路公団
信里芳紀2001『中森遺跡』「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告平成11年度」香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
藤好史郎他2003『川原遺跡・本郷遺跡』「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成14年度」香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
樋本清輝・森下友子1997「兀塚遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成８年度』香川県教育委員会　㈶香川県埋蔵文化財調査センター
廣瀬常雄・西村尋文1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会　㈶香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十七冊中間西井坪遺跡Ⅲ』香川県教育委員会　㈶香川県埋蔵文化財調査センター　日本道路公団
山本英之・大嶋和則1997「御厩池遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報平成８年度』香川県教育委員会

第２項　予備調査の成果（図３～６）

中森遺跡は、当初、条里型地割が良好に遺存することから、香川郡条里Ｂ地区として保存協議が開始された。中森遺跡とした部分は、同地区の約東半部に該当し、国道11号の南北両側に建設されるインターチェンジ部分が対象となる。対象地内には、店舗・家屋が多く見られることから、用地取得が完了し

水田として利用されていた部分から、予備調査トレンチを設定して本調査範囲を確定する方法が取られた。

予備調査は、平成10年度から平成11年度まで行われた。条里型地割の坪界線に相当する部分では、坪界溝と考えられる溝状遺構が検出されたのを初めとして、これに付随する集落の存在が明らかにされた。予備調査トレンチ配置については、図3に示すとおりである。

条里坪界溝の可能性がある溝は4・7・14・15・29トレンチで検出されており、これらとほぼ同時期に営まれたと考えられる集落は、調査対象地西半部の1・2・4・12・22トレンチで確認された。26～27トレンチを中心とした部分では古墳時代後期を中心とした溝状遺構を確認した。11・17トレンチの部分は、現状地割の乱れが示すとおり、谷状の地形の存在が明らかになった。

調査対象地東部では、19トレンチで小規模な溝状遺構を検出しているものの、集落に関係した遺構の存在は希薄と考えられた。香東川に隣接した現氾濫原面に相当する部分に設定した20トレンチでは、埋没旧河道上に営まれた中世から近世にかけての水田面を、21トレンチでは砂礫層で埋まる旧河道を検出している。

集落に関係した地下遺構が良好に遺存しているのは、1・2・22トレンチが所在する対象地西部と、周知の中森2号墳が含まれる12から15トレンチを中心とした調査地中央国道南側の部分と判断された。古墳時代に溝が存在する26～28トレンチの部分は、所在不明となっている周知の中森1号墳が存在している可能性が高く、全面調査を実施する必要があると考えられた。対象地東部の氾濫原面に相当する部分については、遺構の存在が希薄な点を踏まえて、予備調査をもって保護措置を終了することとなった。

これらの予備調査結果を総合的に判断して、図4示す5,330㎡について平成10年度から平成11年度まで本調査を実施した。

良好に地下遺構が存在している予備調査トレンチの調査成果は、本調査成果に含めて紹介をすることとし、ここでは本調査に至らなかったトレンチの調査成果を提示しておきたい。

17トレンチ（図5）

本トレンチは、全体が谷地形に相当する。①層とした現耕作土と②層の床土の下位には、旧耕作土と考えられる③～⑥層が0.35m程連続して見られる。これより下位は、谷地形の埋没土となっており、掘削範囲で底面の確認できていない。

出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴より上位の旧耕作土は中世から近世の年代が、下位の谷地形の埋没土はこれより遡る所産と考えられる。国道南側のトレンチで、その延長部分が確認できないことから、対象地を二分する国道11号の部分で途切れるものと考えられる。

19トレンチ（図5）

現代の耕作土と床土の直下に基盤層である黄灰色粘土層が現れる。トレンチ中央部分では、並行する小規模な2条の溝状遺構を検出した。出土遺物は見られなかったが、溝方位が遺跡周辺の条里型地割の方向に合致することと、灰黄色シルトを中心とした埋没土の特徴から、中世以降の所産と考えられる。

20トレンチ（図6）

トレンチの位置は、香東川に近接した現氾濫原面にある。トレンチの大半は旧河道であり、その上面

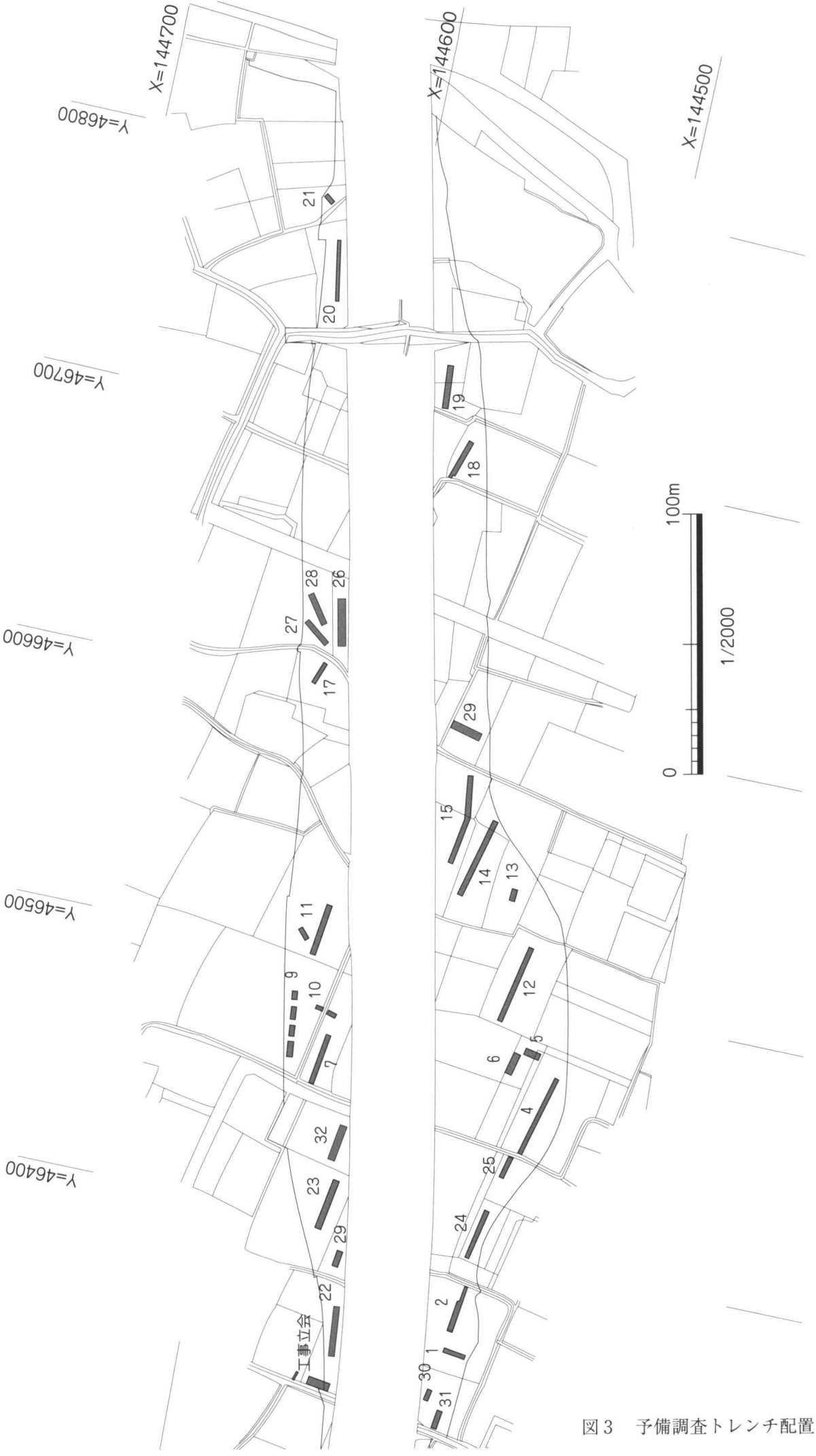


図３　予備調査トレンチ配置

図４　本調査トレンチ配置と条里型地割

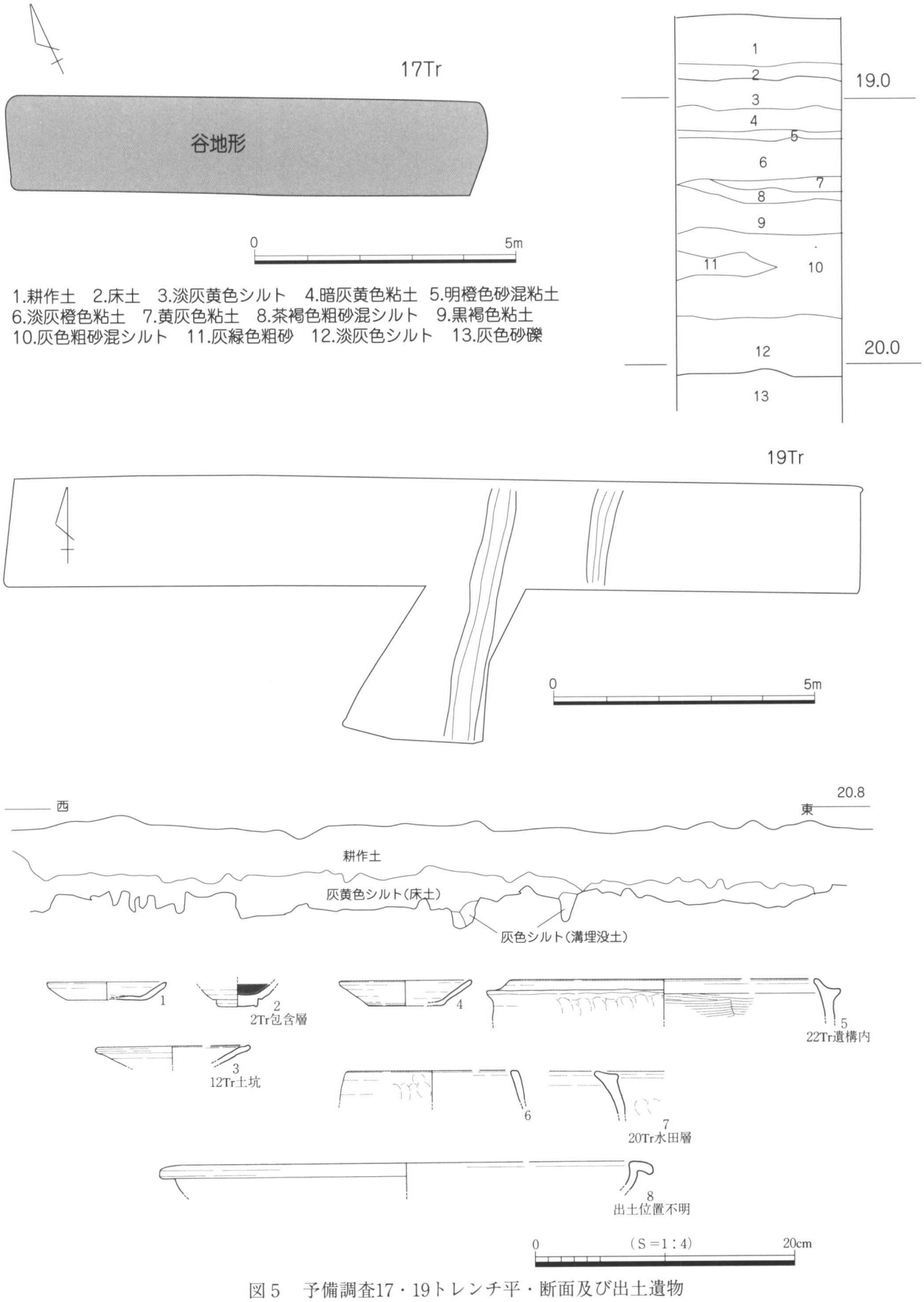
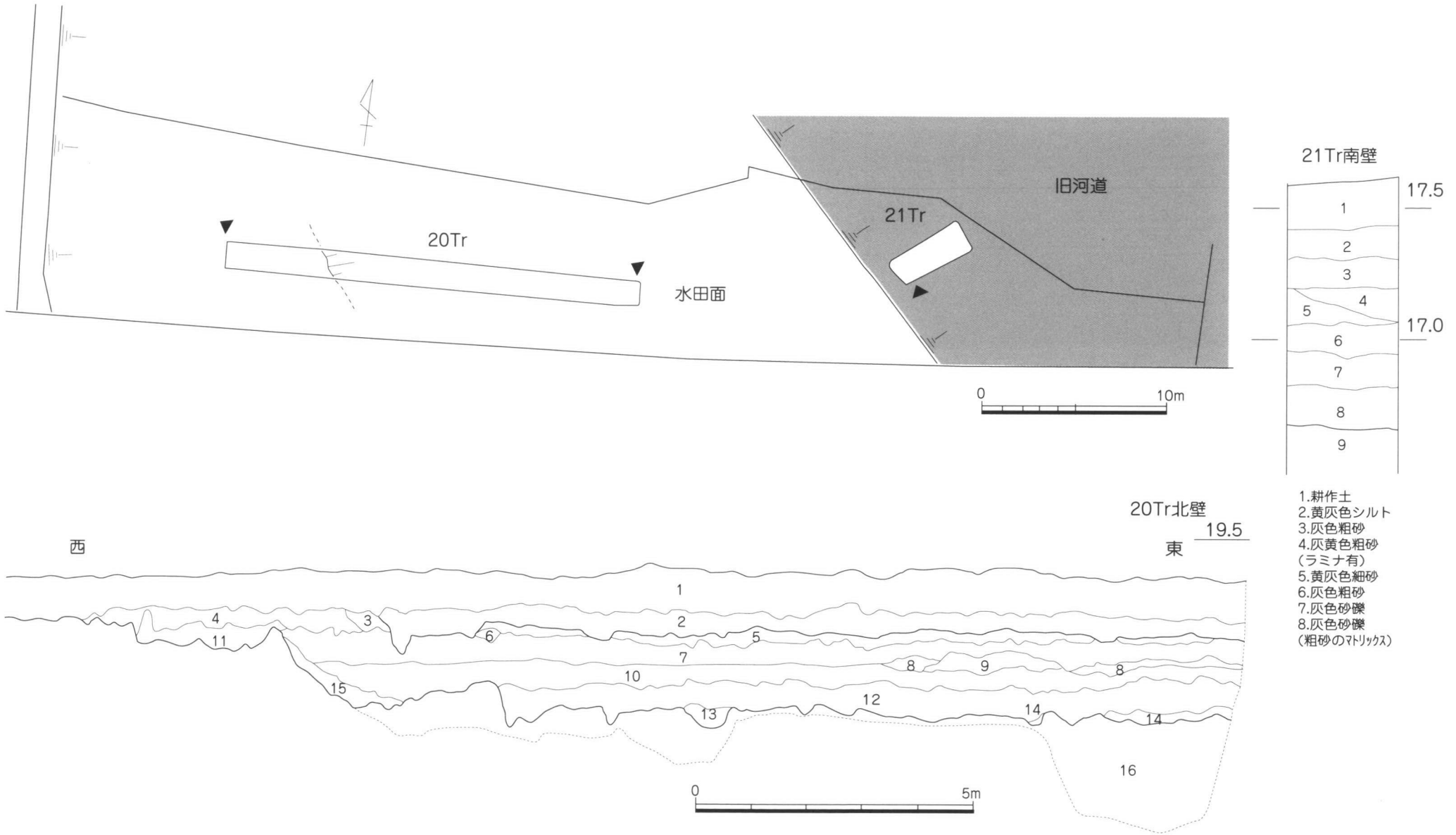


図５　予備調査17・19トレンチ平・断面及び出土遺物



1.耕作土　2.床土　3.灰色シルト　4.灰橙色シルト(水田層)　5.明橙色シルト(水田層)　6.灰色シルト(ラミナ有)　7.灰色細砂(水田層)
8.明黄色シルト　9.明橙シルト　10.灰黄色砂混シルト(水田層)　11.灰色砂混シルト　12.暗灰色シルト(水田層)　13.灰黄粘土
14.明橙色粗砂　15灰橙色粘土　16.黄色.粘土

図6　予備調査20・21トレンチ平・断面

で水田層を確認した。水田耕土は、現耕作土①層と床土②層より下位に水平堆積する⑤⑦⑩⑫層と考えられる。間層に自然堆積層を介在させないことから、面的な検出は断念した。土師質土器茶釜6や土師質土器把手付鍋7が出土していることから見て、中世後半期の年代が想定される。古代末以降に形成された氾濫原面における土地利用の一例を示していると考えられる。

21トレンチ（図6）

本トレンチ全体が旧河道に相当する。現耕作土下は、すべて砂礫層によって構成されており、トレンチ周辺の現状地割の観察からは、20トレンチの旧河道を切って見られる比較的新しい段階の旧河道と考えられる。遺物は一切出土しなかった。

1～5は、予備調査2・12・22トレンチから出土した遺物である。8の瓦質土器焙烙は、予備調査時に出土したものであるが、帰属するトレンチが不明なものである。

第3項　層序（図7～9）

基本層序については、各トレンチの壁面図を使用して説明することとし、対象地全体の層序を見ることとする。

本遺跡が立地している扇状地の骨格をなすのは、広義の基底礫層と考えられる灰色砂礫層である。図7は、基底礫層が確認されたトレンチを中心に、対象地の東西方向の断面模式図を作成したものである。基底礫層は、東西にかなりの凹凸を見せながら堆積している状況が分かる。11トレンチ付近では、現地表面の標高にもその影響が現れている。高松平野で行われている地形環境分析では、基底礫層が盛り上がったB・Hトレンチ部分は埋没微高地（旧中州）に、11トレンチを中心とした凹地は埋没旧河道に相当するものと考えられる（高橋1994）。

基底礫層上面は、黄色系のシルト～粘土の細粒堆積物で覆われており、A・Jトレンチ、B・Hトレンチではその埋没過程に残されたと考えられる旧石器ブロックが確認された。特に明瞭な微高地と考えられるB・Hトレンチで確認された旧石器類は、二次的な移動を受けていない形で出土していると考えられる。

G1トレンチからAトレンチ間では、基底礫層が黄色シルト～粘土の細粒堆積物に厚く覆われ、自然堤防状の地形を呈している。Aトレンチで確認された旧石器ブロックは、少数であるが分布する範囲が限られることや出土レベルが一定しており、二次的な移動を受けている可能性は低い。旧石器が残された段階には、基底礫層の埋積が一定程度進んでいたものと考えられる。

G1トレンチ、23トレンチでは、自然堤防間の泥炭層で埋まる旧河道を検出している。G1トレンチの旧河道で実施した火山灰分析では、姶良・丹沢火山灰と鬼界アカホヤ火山灰が混在して見られることから、縄文期まで自然堤防の埋積が続いていた可能性が高い。

弥生時代から古代の遺構は確認されていないが、中世14c以降の条里型地割溝やそれに伴う集落は、これらの旧河道が完全に埋没・平坦化した段階で営まれている。条里型地割の施工を可能にした平坦な地形面は、少なくともこの頃までに形成されたものと考えられる。

11トレンチの部分は、この段階でも埋積が進んでおらず、条里型地割も確認することができない。縄文期までに埋積された旧河道上面には、概ね中世以降と考えられる水田耕作土が連続して見られ、集落の立地は現在まで希薄であったと考えられる。

次に各トレンチの基本層序について壁面図を用いて概観する。壁面図はトレンチ毎に作成しているが、ここでは代表的なトレンチを抽出して説明することとする。

Ａトレンチ南壁（図８）

現地表面から0.3m程の現代耕作土と床土が見られた後、中世～近世期の遺構が検出される黄灰色粘土が露出する。遺物包含層を介在させないことから見て、検出面は削平を受けていると考えられる。検出面は、③～⑤層の黄色系の粘土層から構成されているが、離水に伴う色調の変化や乾痕の状況の差異によって分層されている可能性が高く、巨視的には同一層とすることができる。検出面下位の④層からは、石核を中心とした旧石器類が少量検出されている。

Ｂトレンチ東壁（図８）

0.3m程にわたって見られる現在の水田耕作土と床土下位に、中世～近世段階の遺構検出面が現れる。ここでも遺物包含層が見られない。検出面から0.2m下位には基底礫層と考えられる灰色砂礫層が見られる。旧石器は、基底礫層を覆う細粒堆積物である④～⑥層の黄色粘土～シルトより出土している。図７を用いて検討したように、本トレンチは微高地(旧中州)上に位置することもあり、基底礫層上面の堆積層はきわめて薄い。更に、中世～近世段階の遺構検出面がかなりの削平を受けていることが予想されることから、散逸した旧石器も多いと考えられる。

主に④～⑥層を対象とした火山灰抽出分析では、すべての層位からＡＴと鬼界アカホヤが混在して確認されている。④～⑥層には明瞭な乾痕が見られることから、アカホヤ火山灰自体は旧石器ブロックが形成された後、上層から混入したと考えられる。

Ｅトレンチ北壁（図８）

他のトレンチと同様に、現代の水田耕作土と床土が0.3m程見られた後、灰色粘土を主体とした中世段階の遺構検出面に至る。床土である②層からは、中世後半の土器類がやや多く含まれることから、比較的近年の水田開発に伴ってかなりの削平が行われたことが想定される。下層確認が実施できていないが、検出面を構成する灰色粘土は、Ｇ１トレンチの泥炭層で埋まる旧河道の上面に見られた堆積層に類似している。

Ｇトレンチ北壁（図９）

地表面より①層とした宅地造成伴う客土と、その下位に床土と考えられる②層が0.3～0.4m程見られる。更に、旧耕作土と考えられ層厚0.1m程を測る③～⑤層を除去すると遺構検出面が現れる。本トレンチで確認した中世後半期の集落に関わる柱穴群は、⑯～⑰層とした黄色系の色調を示すシルト層上面で検出しているが、一部旧耕作土である③～⑤層上面から穿たれたものも見られる。トレンチ西端では、検出面より0.4m下位の位置で基底礫層と考えられ㉒層とした砂礫層を確認している。基底礫層は東に向かって傾斜しており、⑲層とした泥炭層で埋まる旧河道が存在している。火山灰分析では、１点試料ながら姶良丹沢火山灰と鬼海アカホヤ火山灰の混在が確認されており、縄文期のある段階までに機能していたものと考えられる。

高橋学　1993「高松平野の地形環境－弘福寺山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に－」『讃岐国弘福寺領の調査　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会

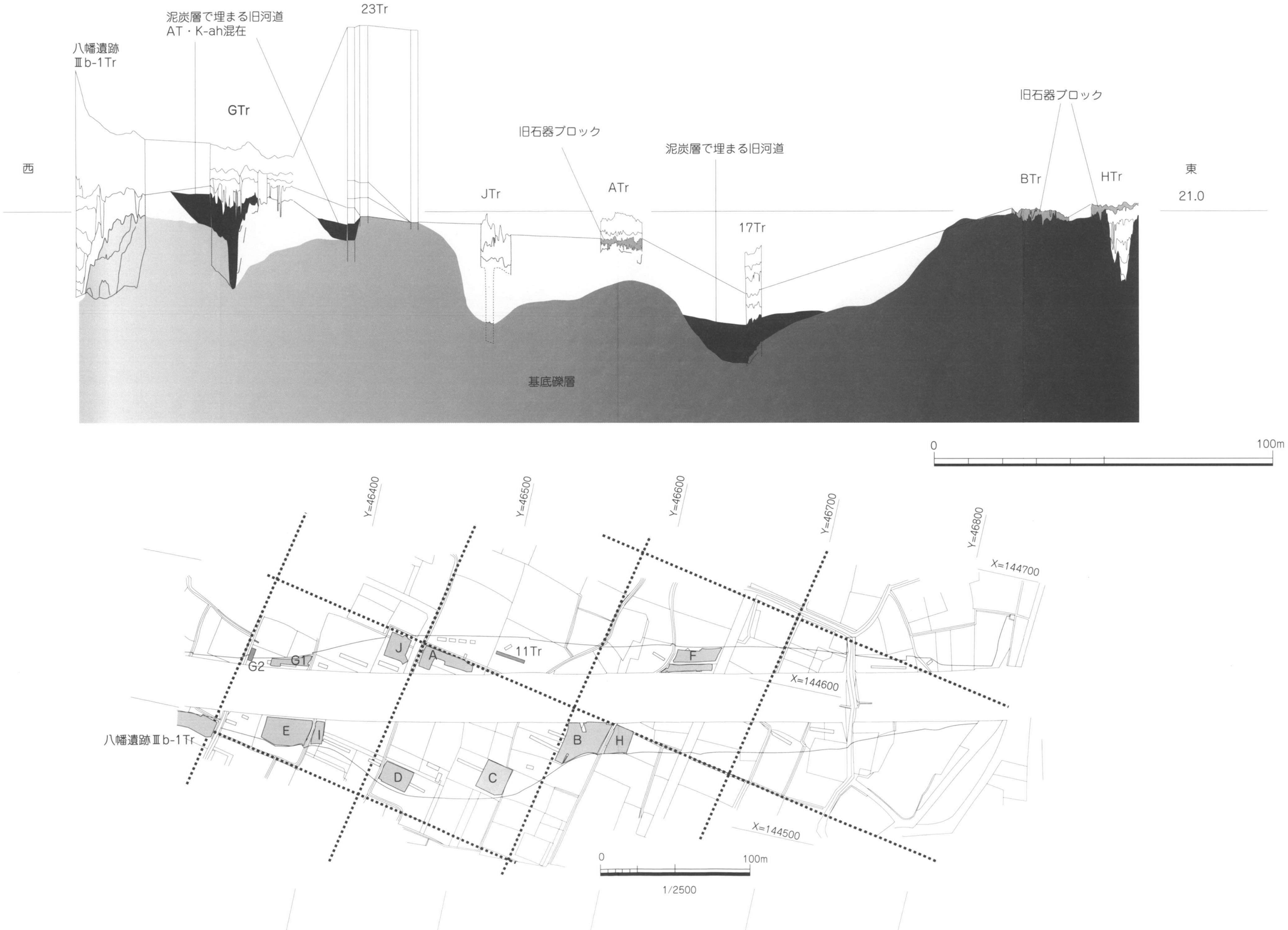

八幡遺跡
Ⅲb-1Tr
泥炭層で埋まる旧河道
AT・K-ah混在
23Tr
GTr
旧石器ブロック
泥炭層で埋まる旧河道
旧石器ブロック
西
東
JTr
ATr
17Tr
BTr
HTr
21.0
基底礫層
0
100m
Y=46400
Y=46500
Y=46600
Y=46700
Y=46800
X=144700
X=144600
X=144500
11Tr
G1
G2
J
A
F
E
I
B
H
D
C
八幡遺跡Ⅲb-1Tr
0
100m
1/2500

図７　遺構全体図

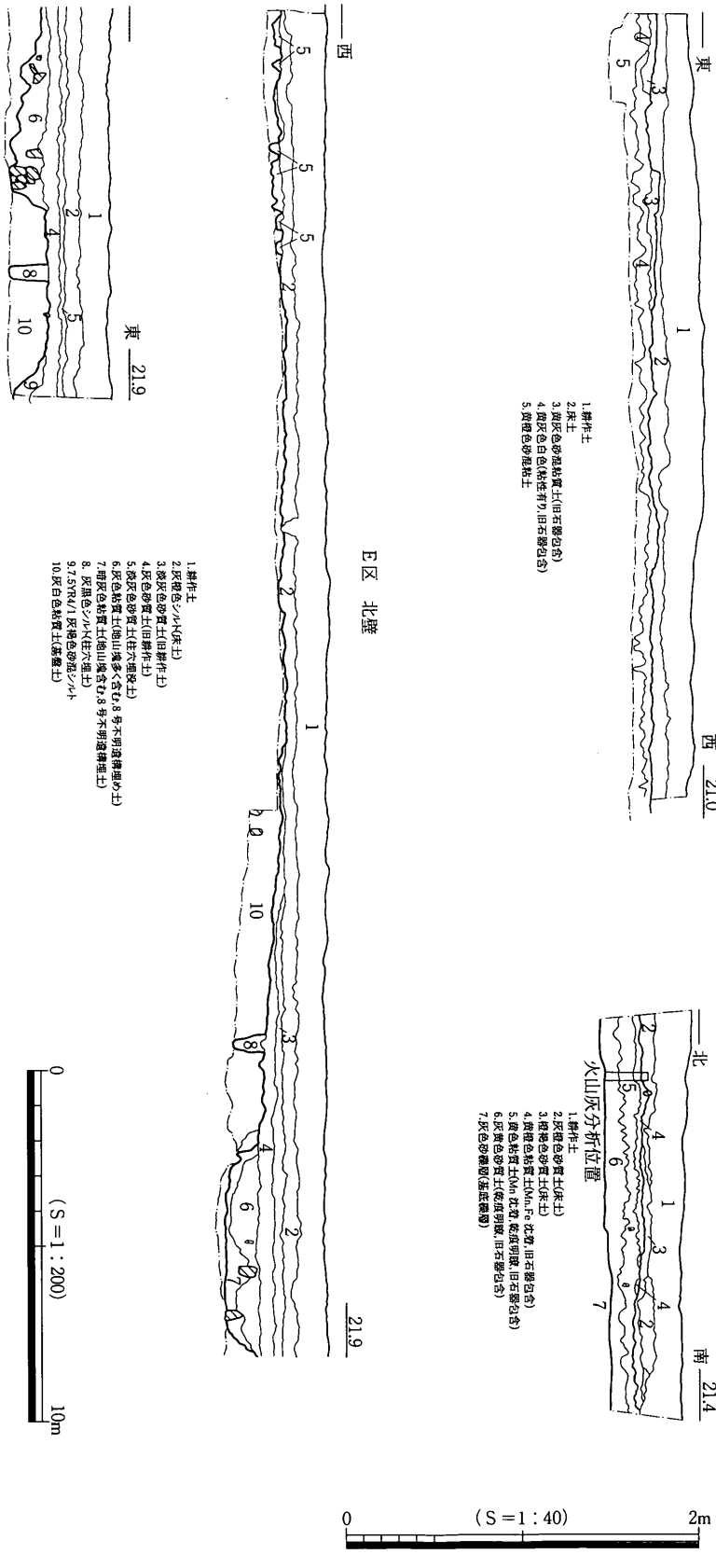

A区 南壁
東
西
21.0
1.耕作土
2.床土
3.淡灰色砂混粘質土(旧石器包含)
4.淡灰色白色(粘性有り,旧石器包含)
5.淡橙色砂混粘土
B区 東壁
北
南
21.4
火山灰分析位置
1.耕作土
2.灰橙色砂質土(床土)
3.橙褐色砂質土(床土)
4.淡橙色粘質土(Mn,Fe 沈着,旧石器包含)
5.淡色粘質土(Mn 沈着,乾燥明瞭,旧石器包含)
6.灰黄色砂質土(乾燥明瞭,旧石器包含)
7.灰色砂礫層(基盤礫層)
E区 北壁
西
21.9
1.耕作土
2.灰橙色シルト(床土)
3.淡灰色砂質土(旧耕作土)
4.灰色砂質土(旧耕作土)
5.淡灰色砂質土(住穴埋没土)
6.灰色粘質土(地山塊多く含む,8号不明遺構埋め土)
7.暗灰色粘質土(地山塊含む,8号不明遺構埋土)
8. 灰黄色シルト(住穴埋土)
9.7.5YR4/1 灰褐色砂混シルト
10.灰白色粘質土(基盤土)
東
21.9
0
(S=1:200)
10m
0
(S=1:40)
2m

図８　土層断面その１

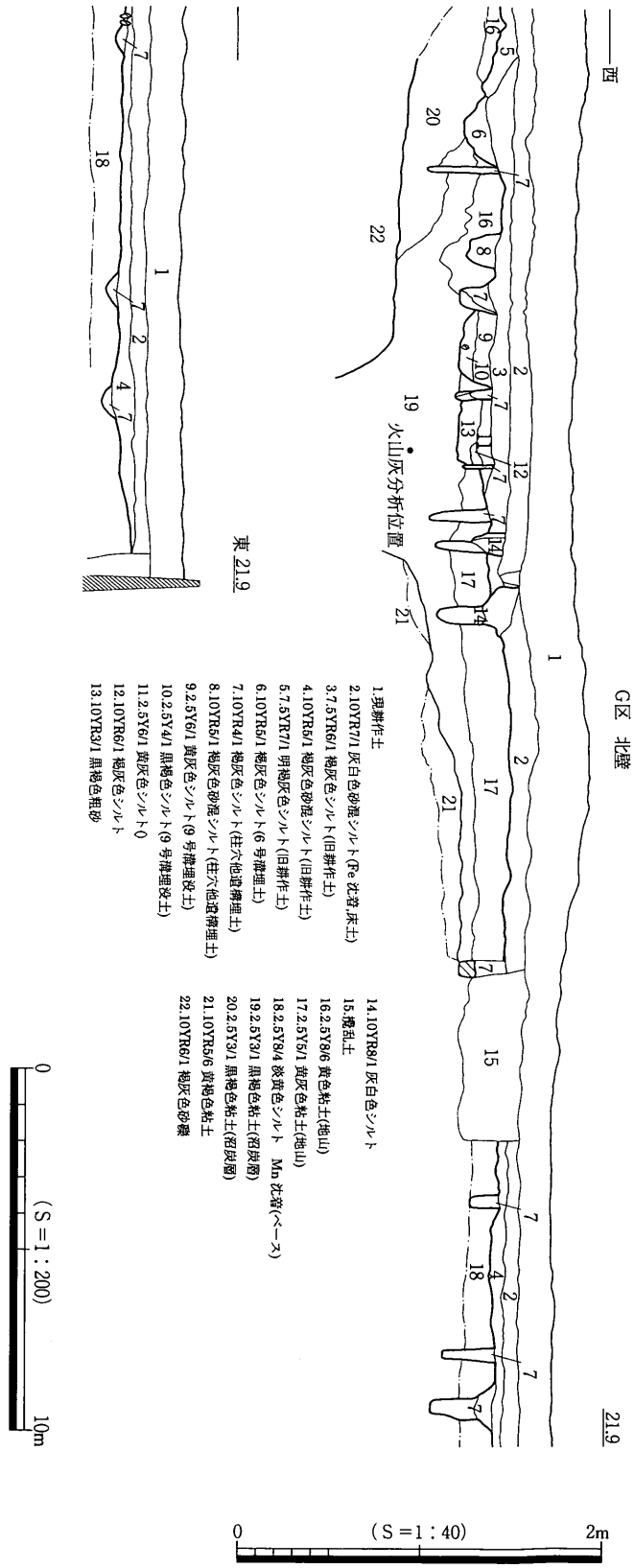

西
G区 北壁
21.9
火山灰分析位置
東 21.9
1.現耕作土
2.10YR7/1 灰白色砂質シルト(Fe 沈着 床土)
3.7.5YR6/1 褐灰色シルト(旧耕作土)
4.10YR6/1 褐灰色砂質シルト(旧耕作土)
5.7.5YR7/1 明褐灰色シルト(旧耕作土)
6.10YR5/1 褐灰色シルト(6 号溝埋土)
7.10YR4/1 褐灰色シルト(柱穴他遺構埋土)
8.10YR5/1 褐灰色砂質シルト(柱穴他遺構埋土)
9.2.5Y6/1 黄灰色シルト(9 号溝埋没土)
10.2.5Y4/1 黒褐色シルト(9 号溝埋没土)
11.2.5Y6/1 黄灰色シルト0
12.10YR6/1 褐灰色シルト
13.10YR3/1 黒褐色粗砂
14.10YR8/1 灰白色シルト
15.攪乱土
16.2.5Y8/6 黄色粘土(地山)
17.2.5Y5/1 黄灰色粘土(地山)
18.2.5Y8/4 淡黄色シルト Mn 沈着(ベース)
19.2.5Y3/1 黒褐色粘土(沼炭層)
20.2.5Y3/1 黒褐色粘土(沼炭層)
21.10YR5/6 黄褐色粘土
22.10YR6/1 褐灰色砂礫
0
(S=1:200)
10m
0
(S=1:40)
2m

図９　土層断面その２

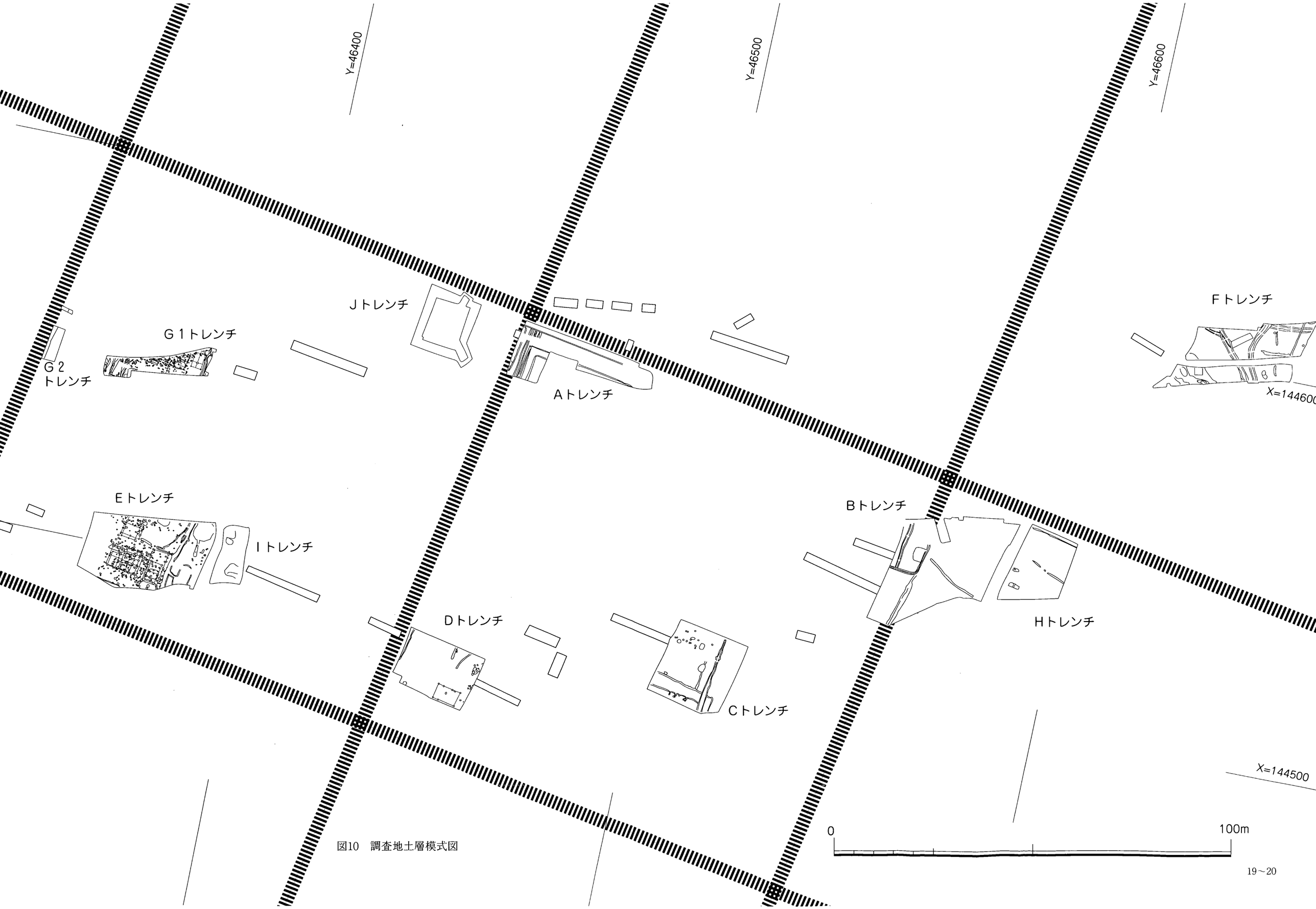


図10　調査地土層模式図

第４項　Ａ・Ｊトレンチの遺構・遺物
(図11～13)

Ａトレンチでは、現状の条里型地割坪界線に合致する溝状遺構(１～３号溝)を中心とした遺構を確認している。トレンチ東部では、遺構検出面下層の粘土層から小規模なまとまりをもった旧石器の出土を確認した。Ｊトレンチは、条里型地割の坪界溝の検出を想定して、Ａトレンチに西側に設定したものである。トレンチ毎に、調査成果を報告するが、位置関係からＡトレンチと同時に報告することとしたい。

旧石器関係の遺物は、Ｂトレンチの調査成果とともに第12項に後述する。

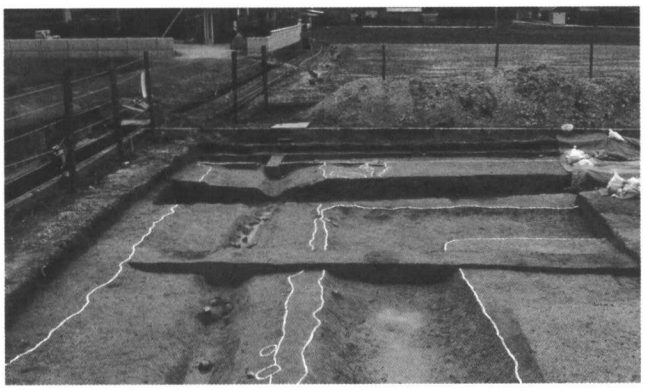


写真１　Ａトレンチ全景　南から

Ａトレンチ１号溝（図12・13，図版２・３）

調査区西部で検出した溝であり、現状の条里型地割の坪界線にほぼ合致する。上面幅2.5m深さ0.4mを測り、断面形は緩い逆台形に近いが、下位部分が更にＵ字状に落ちる。下位部分は、ラミナが認められる砂層・砂混じりシルトで埋没しており、恒常的な流水状態が想定できる。上位の埋没土も下位とあまり差異が認められないが、ラミナの発達が顕著ではない。

出土遺物には、内面に二次焼成の痕跡が見られる土師質土器杯９、黒色土器椀高台部片10、土師質土器鍋口縁部11、土師質土器足釜脚12がある。土師質土器鍋口縁11のみ上層から出土しており、他のものは下層から検出されたものである。

下層遺物の黒色土器椀10は、11ｃ頃の所産と考えられるが、小片であるとともに、他に同時期の遺物が見られないことから混入品の可能性が高い。半完形状態

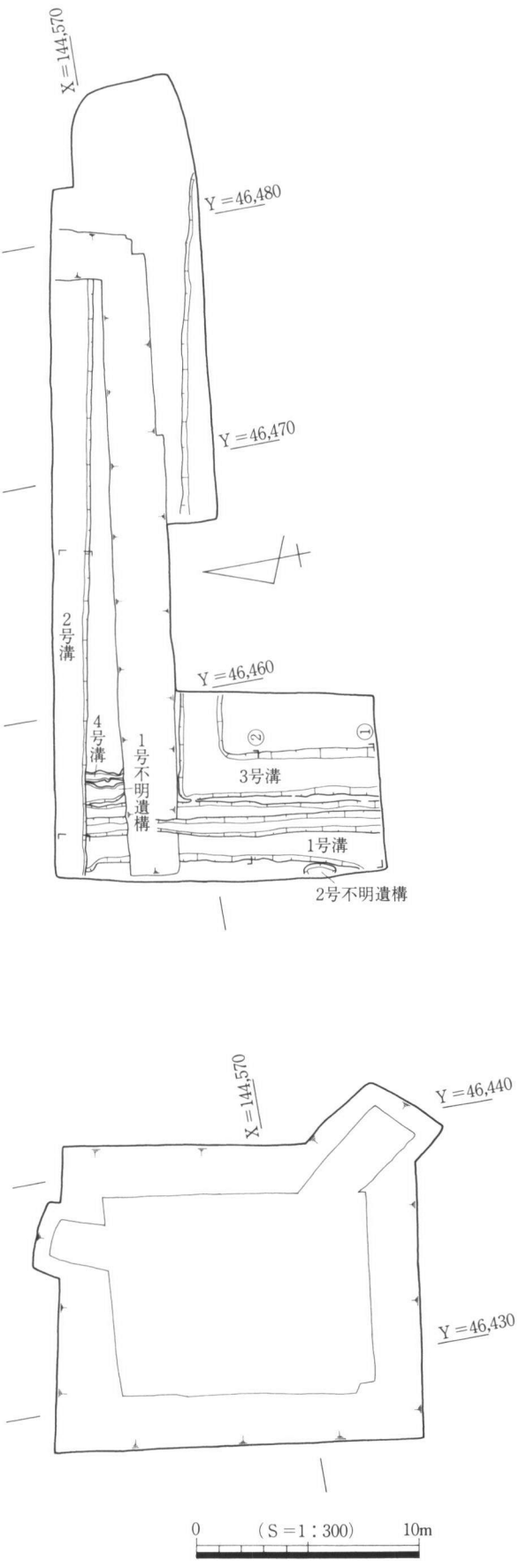


図11　Ａ・Ｊトレンチ平面

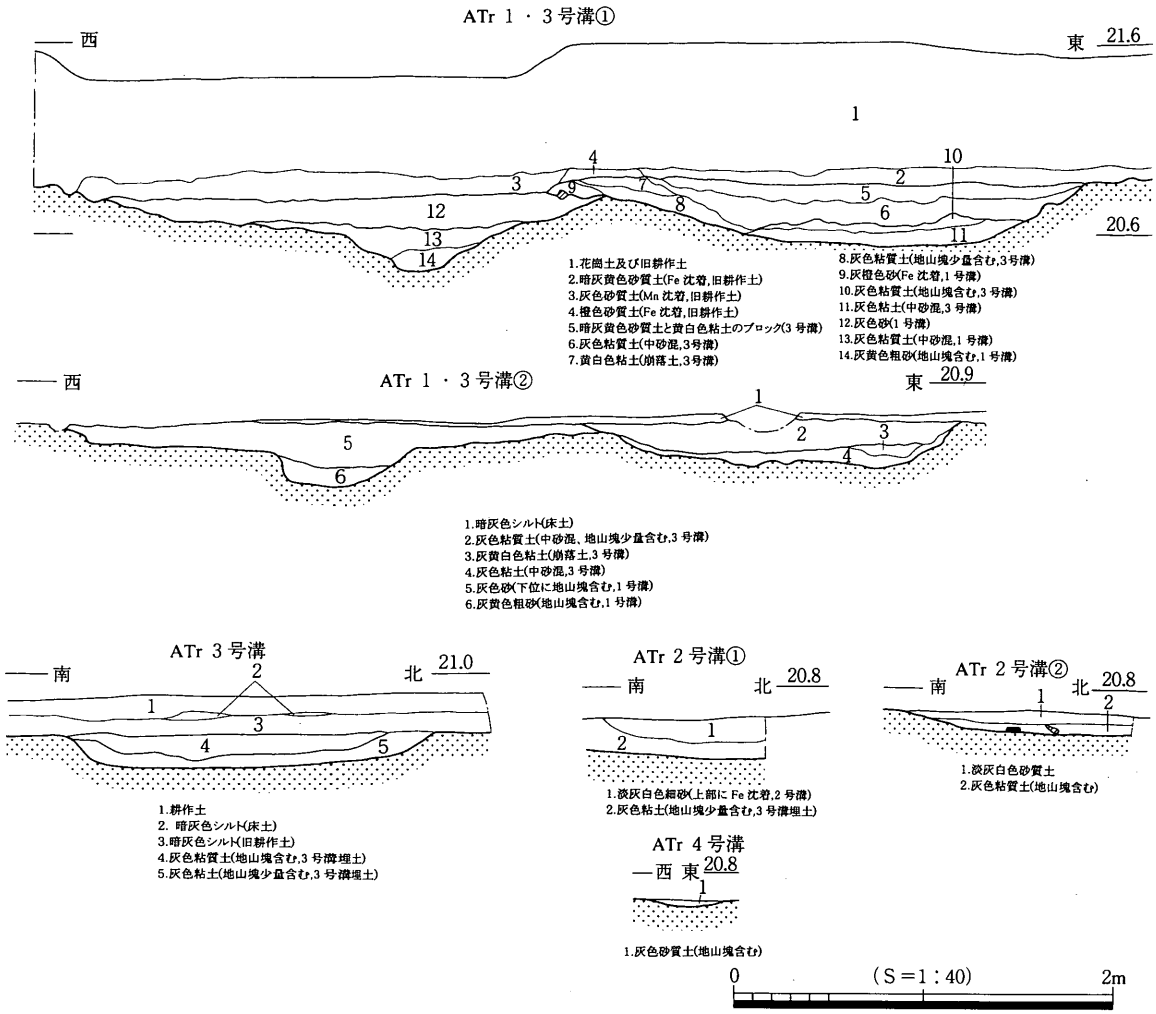


図12　Aトレンチ1～4号溝断面

に復元された土師質土器杯の年代観から、本溝が14c以降に埋没が開始されたと考えたい。

Aトレンチ2号溝（図12・13，図版2・3）

トレンチ北側で検出された溝である。トレンチ北側に存在し条里型地割に合致する現水路と重複した状態で検出しており、本溝はこれに先行する坪界溝と考えられる。

上面幅1.1m以上、残存深度0.15mを測り、トレンチ西端では、南北方向の坪界溝である1号溝を切り込む。Jトレンチで、本溝の延長が確認されていないことから、A・Jトレンチ間の坪界線である現水路部分でクランクまたは途切れる可能性が高い。

13～22は出土遺物である。主なものには、肥前系陶器皿13、土師質土器火鉢14、土師質土器足釜15・16・18・19、備前焼甕20・21、瓦質土器焙烙口縁17、須恵器壺胴部片22がある。

中世段階の遺物を多く含むが、1号溝など先行する坪界溝からの混入品の可能性があり、肥前系陶器皿13や瓦質土器焙烙17の年代観から、17c以降の掘開と埋没開始を想定しておきたい。

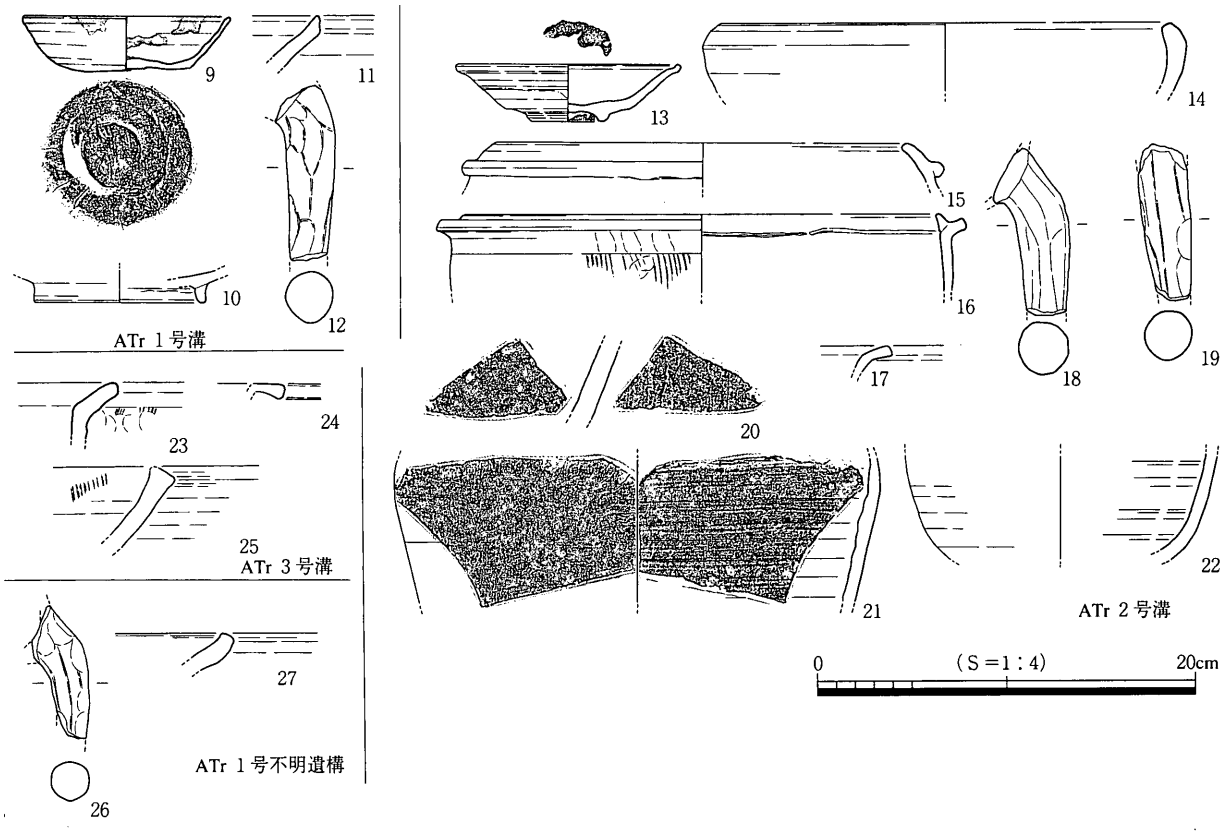


図13　1～3号溝，1号不明遺構出土遺物

Aトレンチ3号溝（図12・13，図版2・3）

トレンチ西端の1号溝と並行して見られた後、東へほぼ直角に屈曲する溝である。屈曲部分が現状の条里坪界線の交点と合致することから、南北方向の坪界溝から東西方向の坪界へ分岐する溝と考えられる。上面幅2.0～2.5m残存深度0.3mを測る。埋没土の上層では並行する1号溝を切り込む状態が断面で観察できるが、顕著な差異が見られないことから、埋没過程における前後関係が表現したと考えられることから、1号溝と同時並存した可能性が高い。

出土遺物には、土師質土器鍋口縁23・24、須恵質焼成の擂鉢25がある。いずれも小片であり時期決定に難があるが、1号溝との関係から、本溝に関しては14c以降の掘開と埋没開始時期を想定しておきたい。

Aトレンチ1号不明遺構（図13，図版2・3）

トレンチ西部において、2号溝に切られる形で検出した遺構である。南部を予備調査トレンチに破壊されているが、小規模な溝状遺構の可能性が高い。

出土遺物には、土師質土器足釜脚部片26、退化の進んだ土師質土器鍋口縁部27がある。

Jトレンチの遺構・遺物（図11）

Jトレンチは、東西方向の条里坪界線の検出を想定して調査を実施したが、平面遺構は一切確認されなかった。Aトレンチで確認された2号溝に対応する条里坪界溝は未確認である。Aトレンチ東部において、小規模なまとまりをもった旧石器が確認されていることから、検出面下位の調査を実施したがサヌカイト製の横長剥片を1点採取したにとどまった。これについては、他のトレンチのものと合わせて、第12項に後述することとしたい。

第５項　Ｂ・Ｈトレンチの遺構・遺物（図14・15）

本トレンチ部分は、調査前に水田として利用されており、北・西端に現状の条里型地割坪界線が通過する形になる。地下遺構では、これらに関係する溝を中心とした遺構を検出した。また、トレンチ内に周知の中森２号墳が含まれる。調査の結果、内部遺構は存在せず、近世段階の溝が埋没した後の比較的新しい段階に構築されたものと判明した。

検出面上には、基底礫層が露出する箇所が多く、トレンチ全体が旧中州(微高地)に相当すると考えられる。基底礫層を覆う細粒堆積物からは、３基の旧石器ブロックが検出されており、その成果については、第12項において後述する。

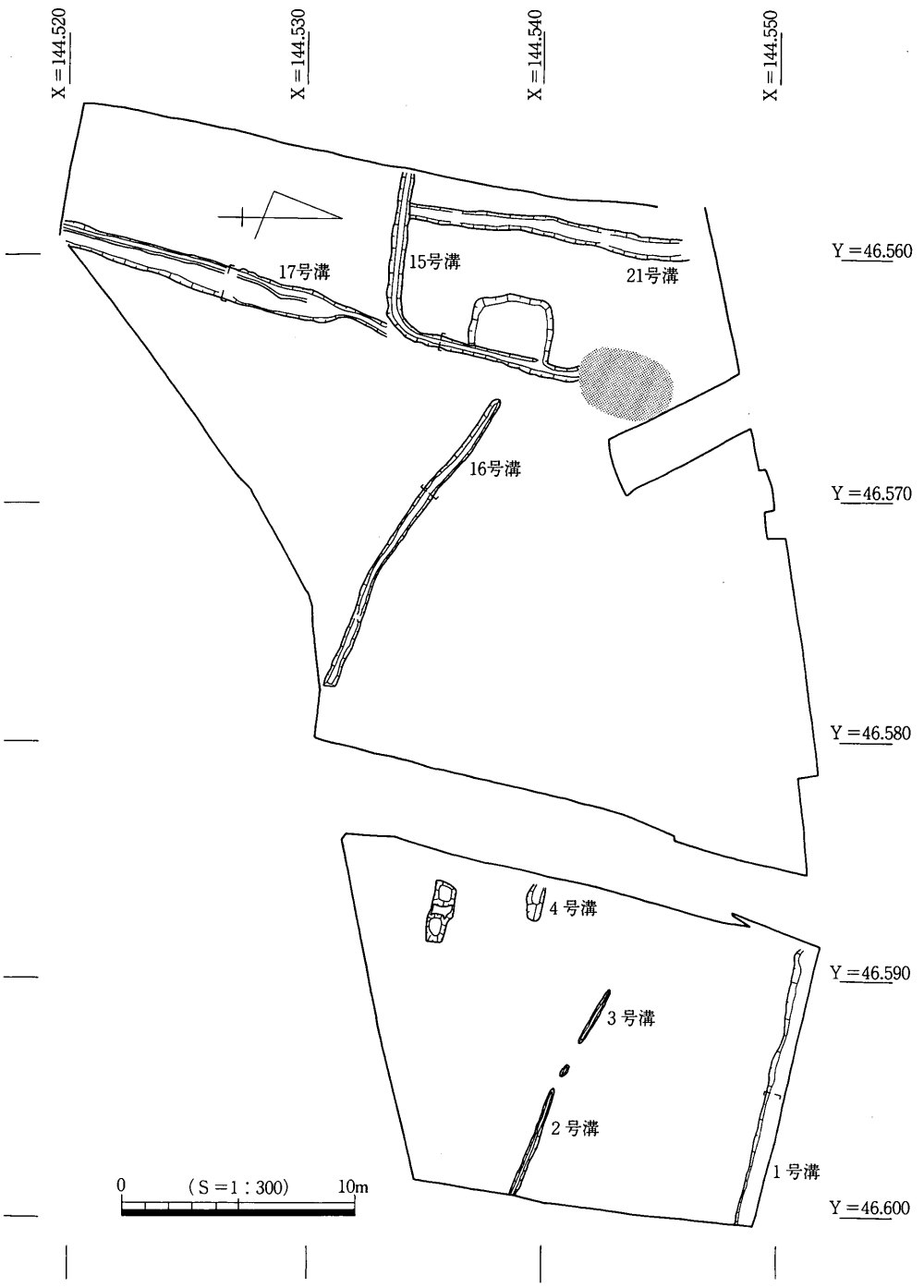


図14　Ｂ・Ｈトレンチ平面

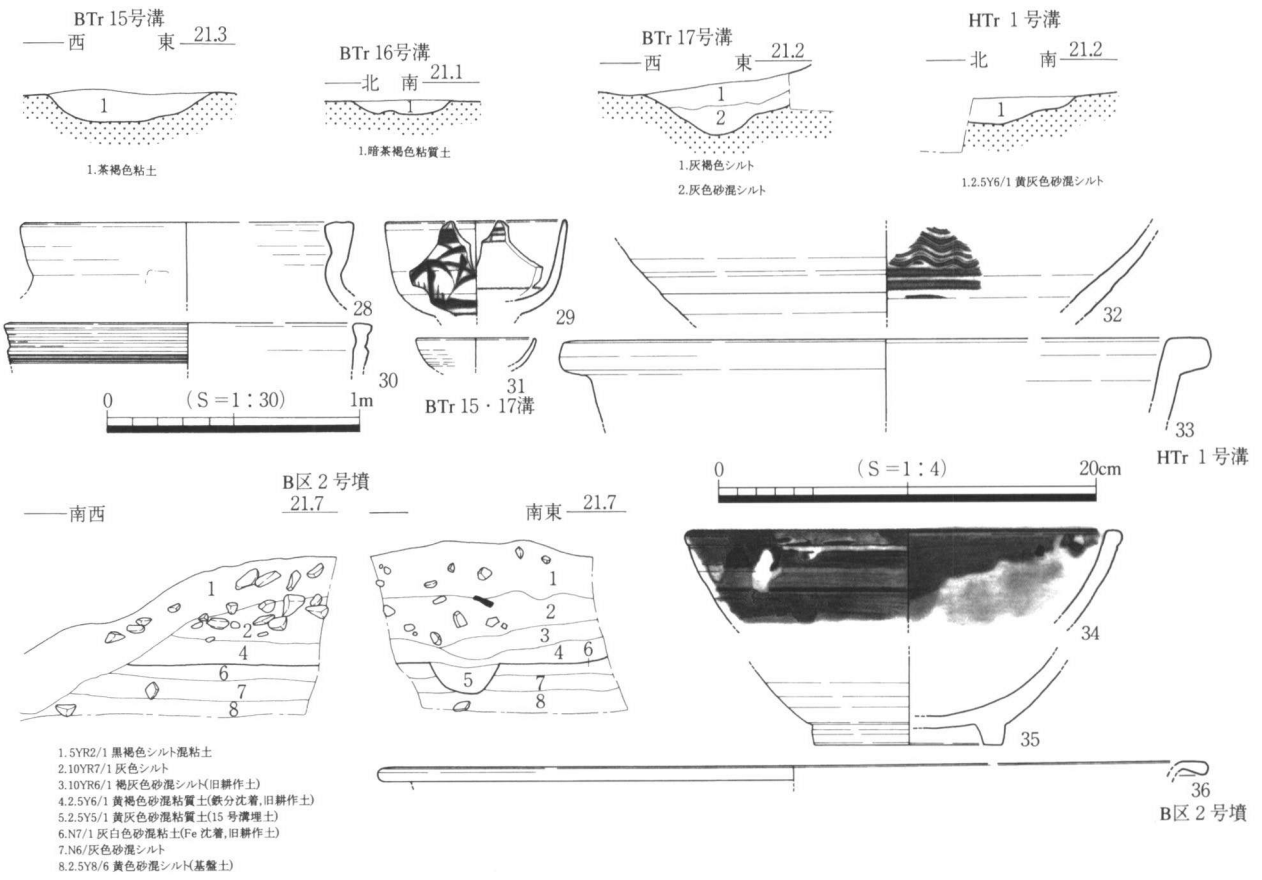


図15　Ｂトレンチ15・16・17号溝，Ｈトレンチ１号溝，中森２号墳断面及び出土遺物

Ｂトレンチ15号溝（図15）

トレンチ西部で検出したＬ字状に延びる小溝である。17号溝を切り込んで北へ屈曲したのち、中森２号墳の下位へ延びる。出土遺物は見られなかったが、17号溝より更に後出することから、近世以降の比較的新しい段階の所産と考えられる。

Ｂトレンチ16号溝（図15）

トレンチ中央部を南北方向に延びる溝である。上面幅0.4ｍ残存深度0.1ｍを測り、出土遺物は見られなかったが、17号溝と同様の埋没土をもつことから、近世以降の所産と考えられる。

Ｂトレンチ17号溝（図15）

トレンチ西部で検出した上面幅0.6ｍ残存深度0.2ｍを測る溝である。方向・検出位置が遺跡周辺の条里型地割に合致し、北端部は、15号溝に切られている。

出土遺物に、施釉陶器甕28・30、肥前系磁器碗29、中国産白磁皿31が見られる。

Ｈトレンチ１号溝（図15，図版６）

Ｈトレンチ北部を条里型地割に合致する形で東西に伸びる溝である。北側の立ち上がりは、現在のコンクリート畦で破壊されているが、現状で上面幅0.4ｍ、残存深度0.15ｍを測る。

出土遺物には、肥前系陶器刷毛目鉢32、土師質土器鉢33が見られる。概ね18ｃ以降の掘開・埋没開始時期を想定しておきたい。

中森２号墳（図15，図版６）

トレンチ北西部に現存していた、塚状の遺構である。断ち割りを実施した結果、礫を多く混じえる表土層の内部に明確な盛土層や施設の存在は確認できなかった。５層は、前述した近世以降の年代が想定される17号溝の埋没土であるが、更にその上位に近世以降の耕作土と考えられる３・４層が見られることから、塚状の高まりは近年に造成されたものと考えられる。

写真２　中森２号墳の現況

出土遺物には、肥前系陶器鉢34・35などに混じってガラス瓶などが含まれていた。

第６項　Ｃトレンチの遺構・遺物（図16・17）

トレンチ南部の５号溝を中心とした近世段階の遺構を検出している。調査前は水田として利用されており、地表面下0.3m程の位置にある黄色粘土層の遺構検出面まで、遺物包含層を介在させることはない。検出面は近年の水田造成に伴ってかなりの削平を受けているものと考えられる。

写真３　Ｃトレンチ全景　東から

Ｃトレンチ５号溝（図17，図版７）

上面幅2.6～3.6m、残存深度0.4～0.5mを測る大形の溝であり、トレンチ内で西へ90°屈曲する。断面形は緩い逆台形を呈し、中位から下位にかけて滞水状況を想定される粘土層で埋没している。南側の立ち上がりには不定形の張り出す箇所が見られるが、溝上位の耕作土と考えられる埋没土で充填されていることから、埋没後に攪拌を受けたと部分と考えられる。

クランクする平面形や、流水が想定できない埋没土の特徴から、何らかの施設の区画に伴う溝である可能性があるが、調査範囲内でこれを推定する材料はない。

出土遺物には、須恵器杯口縁37、肥前系？陶器皿38、陶器瓶39、須恵器短頸壺40、土師質土器足釜33が見られる。須恵器杯37、短頸壺40は明らかな混入品である。土師質土器足釜脚部片33が見られることから、掘開時期が中世に遡る可能性があるが、肥前系陶器皿38の存在から18ｃ以降の近世段階の遺構と考えておく。

Ｃトレンチ７号溝（図17）

トレンチ東部で検出した上面幅上面幅0.6m、残存深度0.1m程の溝であり、５号溝を切り込んで南北に

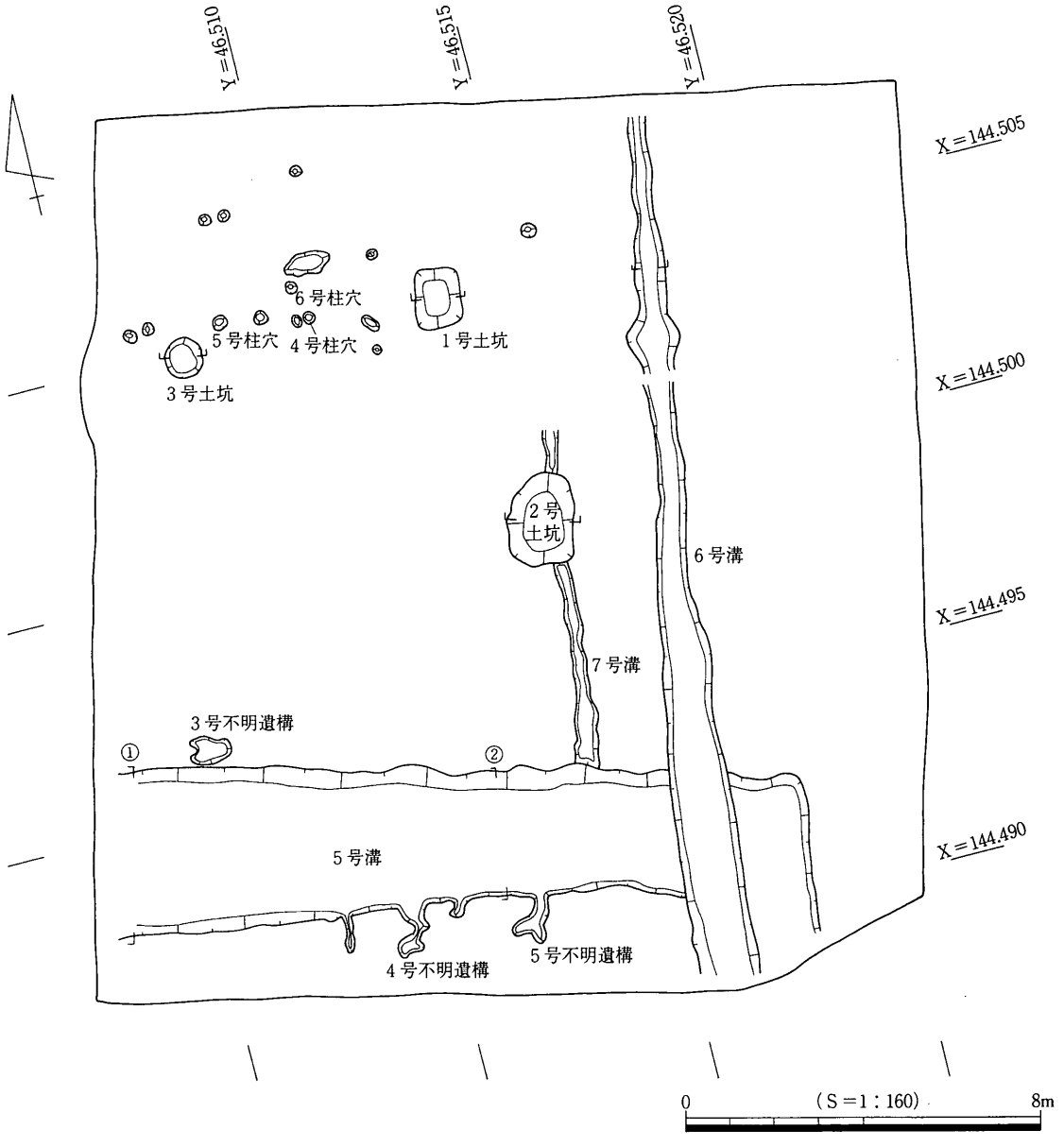


図16　Cトレンチ平面

延びる。出土遺物には、肥前系陶器皿42が見られることから、概ね17c代に埋没した溝と考えられる。

Cトレンチ1号土坑（図17）

トレンチ中央やや北寄りの部分で検出した土坑である。長軸1.2m短軸0.8mの楕円形を呈し、残存深度0.4m程を測る。埋没土全体に地山塊が含まれ掘開後短期間に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から近世段階の所産と考えられる。

Cトレンチ2号土坑（図17）

長軸2.0m短軸1.3m程を測る楕円形を呈する土坑である。埋没土中に地山塊を多く含み、1号土坑と同じく埋め土と考えられる。出土遺物には、須恵器皿口縁部44、肥前系陶器皿45が見られる。古代期の須恵器皿44は混入品であり、肥前系陶器皿45の年代観から17c頃に埋没したものと考えられる。

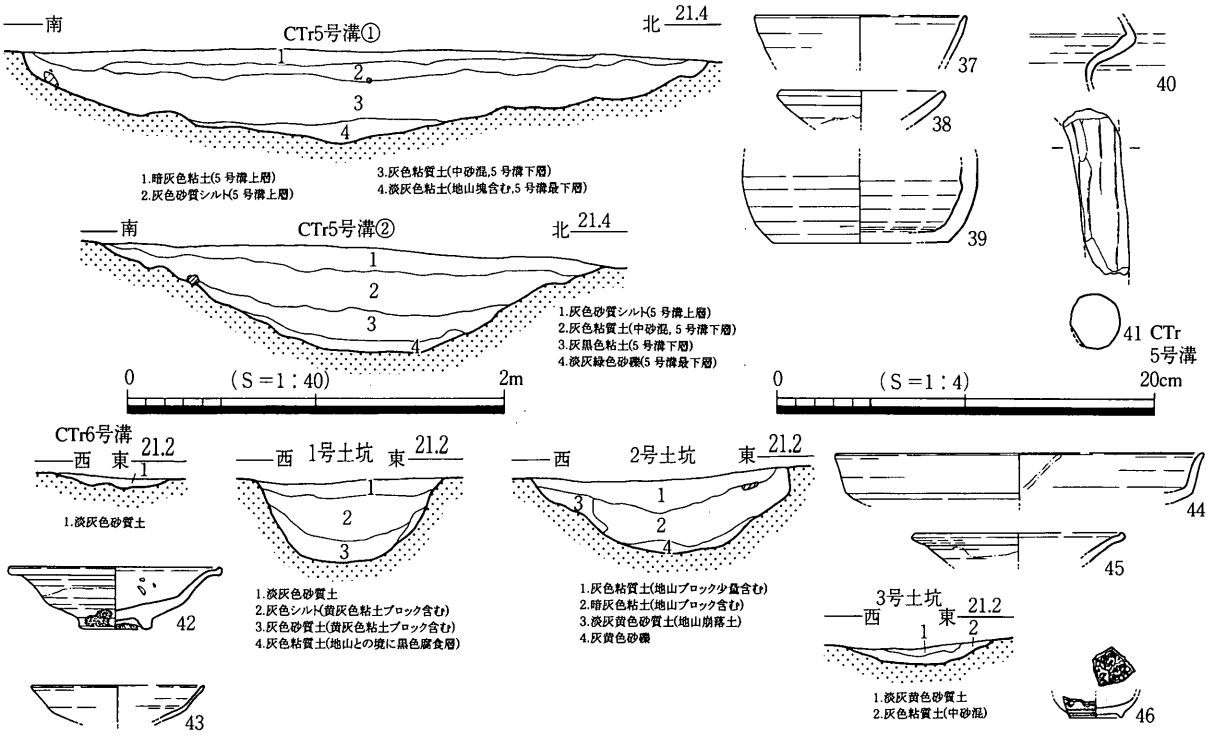


図17　Ｃトレンチ５・６号溝，１～３号土坑及び出土遺物

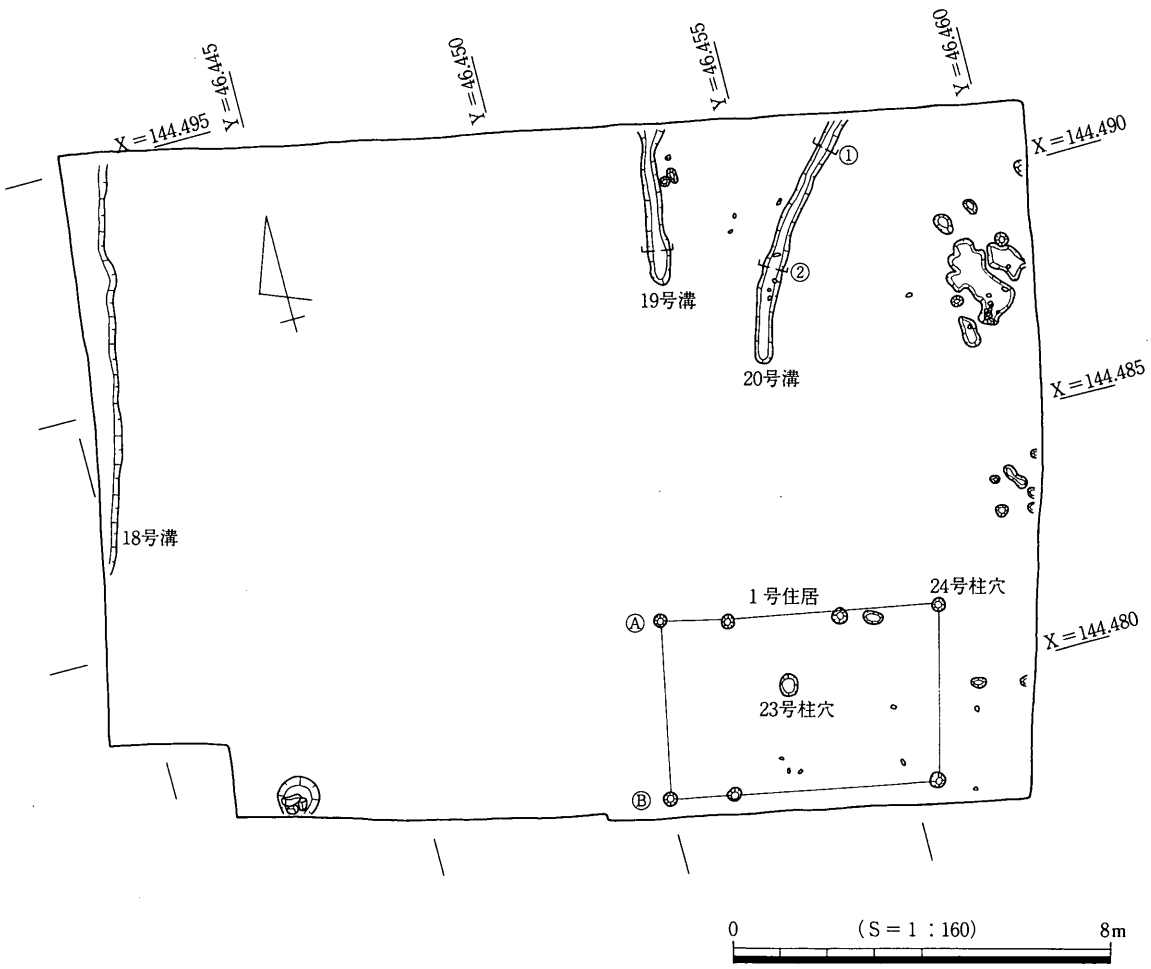


図18　Ｄトレンチ平面

Ｃトレンチ３号土坑（図17）

トレンチ西部で検出した土坑である。直径0.8m程を測る円形土坑であり、残存深度は0.1mを測るに過ぎない。出土遺物に肥前系陶器刷毛目小碗46が見られることから、18ｃ代に埋没したものと考えられる。

Ｃトレンチ柱穴群（図16・17）

トレンチ北西部を中心として14基の柱穴を検出しているが、建物復元に至っていない。この内、４号柱穴から中世15ｃ頃と見られる土師質土器皿43が出土しているが、埋没土の特徴がトレンチ内の近世段階の土坑と類似することから、該期の所産と考えられる。

第７項　Ｄトレンチの遺構・遺物（図18～20）

調査前は、水田として利用されていた。地表面下には、耕作土が0.3m程見られた後、0.1m程の床土と考えられる薄層を除去すると、検出面である黄色粘土層に至る。遺物包含層を交えないことから見て、検出面は、かなりの削平を受けているものと考えられる。遺構密度は高くなく、柱穴・溝が散漫な状態で検出されている。

１号掘立柱建物（図19，図版８）

トレンチ南西部で検出した１間×３間（3.6m×5.8m）の柱構造をもち、20.8m²の床面積を測る掘立柱建物である。建物主軸は座標北から101°東偏するもので遺跡周辺の条里型地割に合致する。柱間に統一性が見られないが、各柱穴に柱痕が見られることと北東隅柱の24号柱穴から完形の土師質土器杯47が出土していることから、現地調査の段階で建物として復元している。

24号柱穴から出土した土師質土器杯47の法量・形態から14ｃ頃に廃絶した建物と考えておきたい。

Ｄトレンチ18号溝（図20，図版８）

トレンチ西部で検出した溝である。トレンチ西壁のラインに重複して検出している。西壁のラインは、現状の条里型地割坪界線に相当することから、本溝は先行する坪界溝と考えられる。西側の立ち上がりは、水路設置に伴う攪乱によって破壊されているが、現状で上面幅0.5m以上、残存深度0.5mを測る。

出土遺物には、土師質土器杯口縁48が見ら

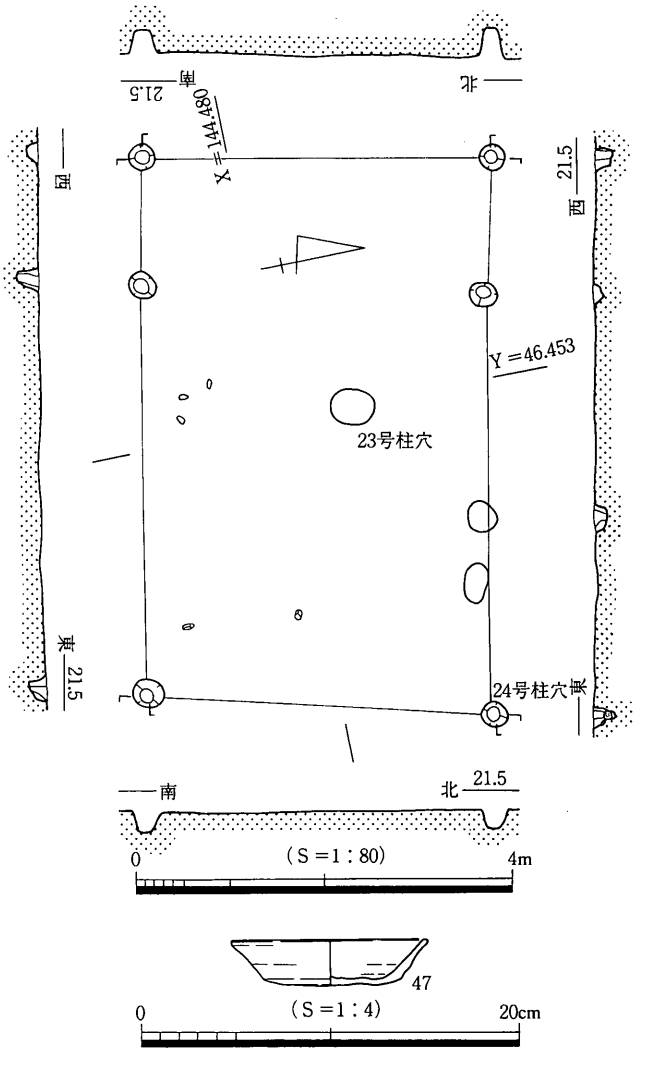


図19　Ｄトレンチ１号掘立柱建物平・断面及び出土遺物

れることから、14ｃ頃までには掘開されたものと考えられる。

Ｄトレンチ19号溝（図20，図版９）

トレンチ北部で検出した小溝である。上面幅0.4ｍ残存深度0.2ｍを測り、溝底へ向かって２段に落ちる断面形をもつ。出土遺物は見られなかったが、中世段階の18号溝と同様の埋没土をもつことから、14ｃ代の所産と見られる。

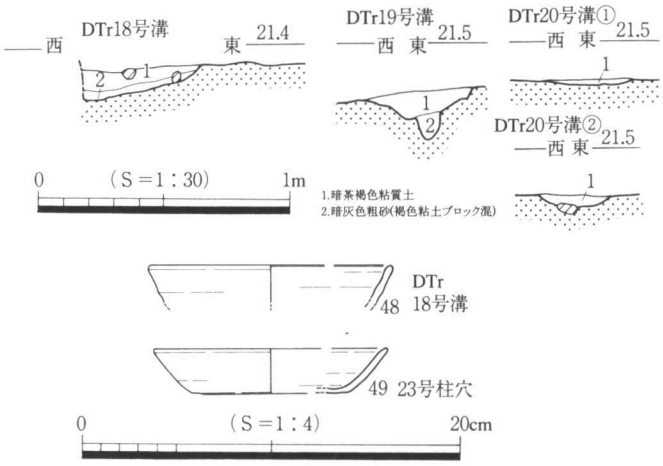


図20　Ｄトレンチ18～20号溝断面及び出土遺物

Ｄトレンチ20号溝（図20，図版９）

トレンチ北西部を南西から北東方向へ延びる小溝である。現在の耕作土直下で検出していることからかなりの削平を受けているものと考えられ、辛うじて残存している状況である。出土遺物は見られなかったが、中世段階の18号溝と同様の埋没土をもつことから、14ｃ頃の所産と推定しておきたい。

Ｄトレンチ23号柱穴（図18）

本柱穴は、１号建物内部ほぼ中央に位置することから、床束等の可能性を考えたが、床張りの建物としては極めて小規模である点と、柱間にバラツキがあることから、建物に含めて考えていない。出土遺物には、土師質土器皿49が見られる。

また、削平によって消滅した柱穴も多いと考えられることから、１号掘立柱建物と別の建物に関係した柱穴と考えられる。

第８項　Ｅトレンチの遺構・遺物（図21～37）

本トレンチでは、ほぼ全面にわたって中世後半期の建物を構成する柱穴群・溝などの集落に関わる遺構を検出している。調査前は１筆の水田であり、地表面下には0.3ｍ程の耕作土が見られる。これらの下位には、中世から近世段階の遺物を包含し旧耕作土と考えられる黒灰色粘土が0.1ｍ程見られた後、遺構面出面に至る。調査面積が小規模であるに関わらず、多くの遺構を検出した。

写真４　Ｅトレンチ全景　北から

主なものとして、トレンチ中央部の想定床面積65㎡を測る１号建物を中心にして、５棟程度の掘立柱建物と、１号井戸や建物区画に関係する９～13号溝などの付帯施設が検出された。トレンチ西部と東側のＩトレンチにおいて、遺構が存在する気配を見せないことから、集落の東西の範囲についてはほぼ把握することができた。

国道を挟みＧ１トレンチにも、同時並存する集落関係の遺構を確認しているが、井戸等などの付帯施設を備えていることから見て、Ｅトレンチとは別の集落単位と把握できる。

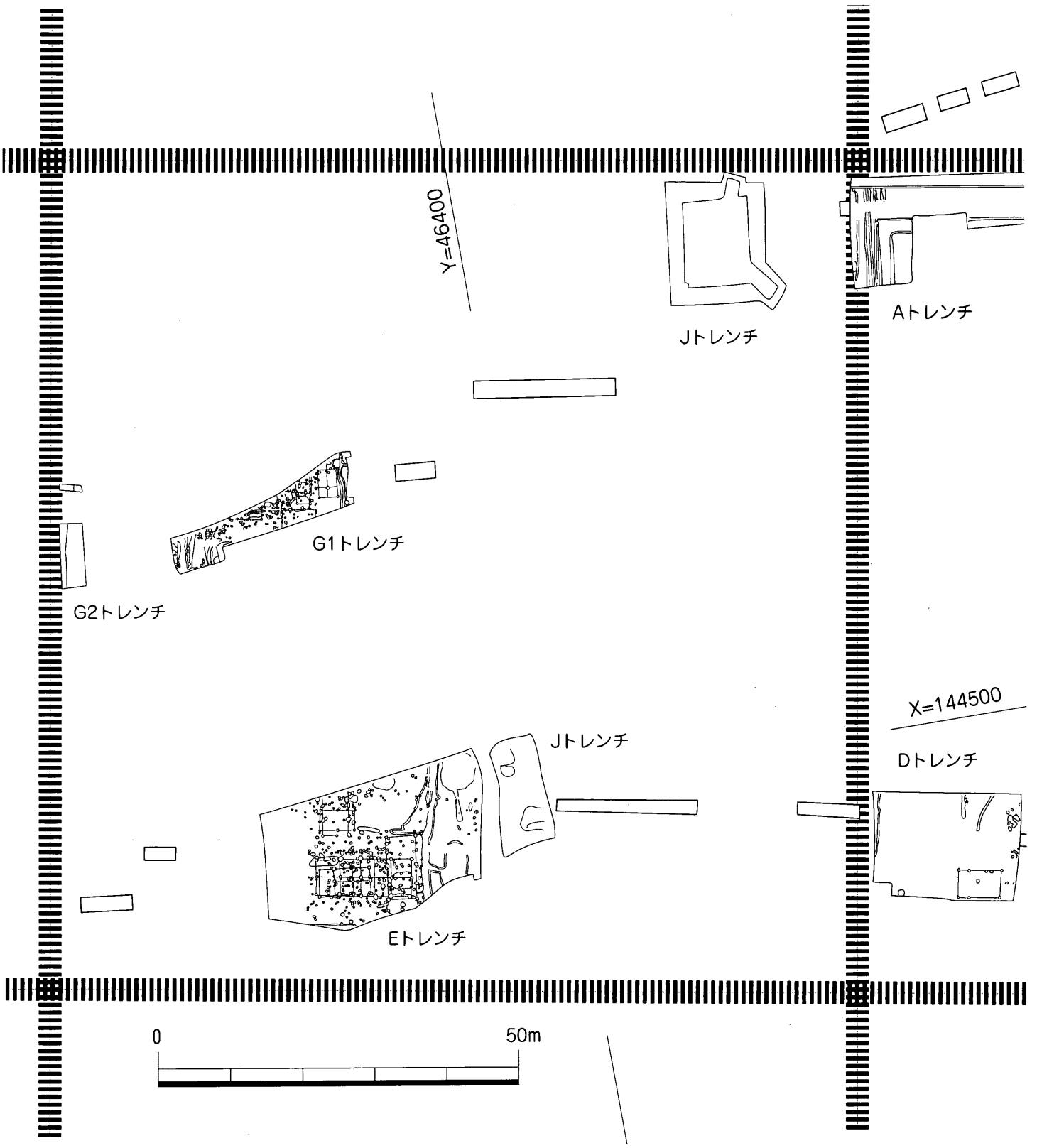


図21　E・Gトレンチ中世期集落配置

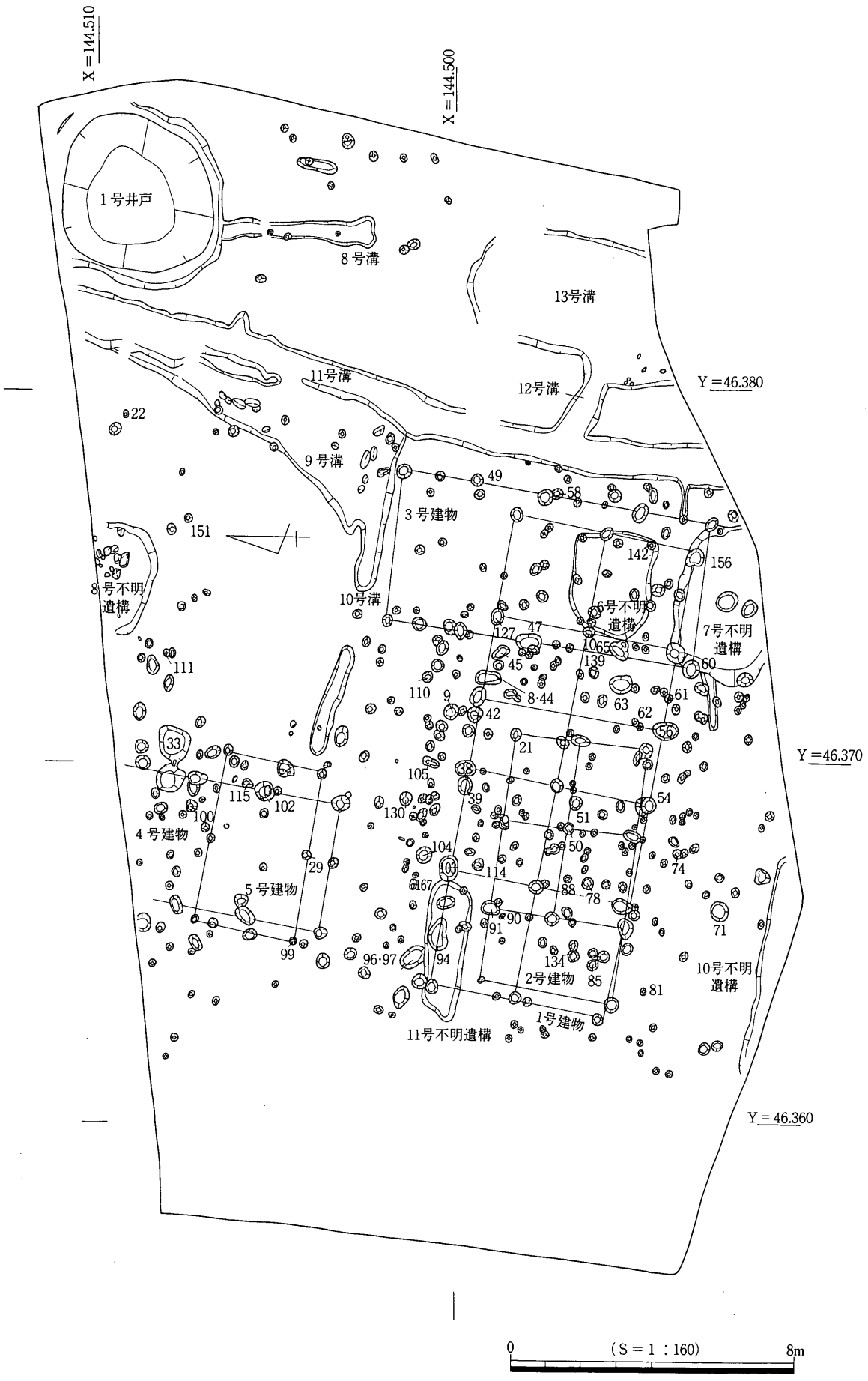

X＝144.510
X＝144.500
Y＝46.380
Y＝46.370
Y＝46.360
1号井戸
8号溝
13号溝
11号溝
12号溝
9号溝
3号建物
10号溝
8号不明遺構
6号不明遺構
7号不明遺構
4号建物
5号建物
2号建物
1号建物
11号不明遺構
10号不明遺構
0
(S＝1：160)
8m

図22　Eトレンチ平面

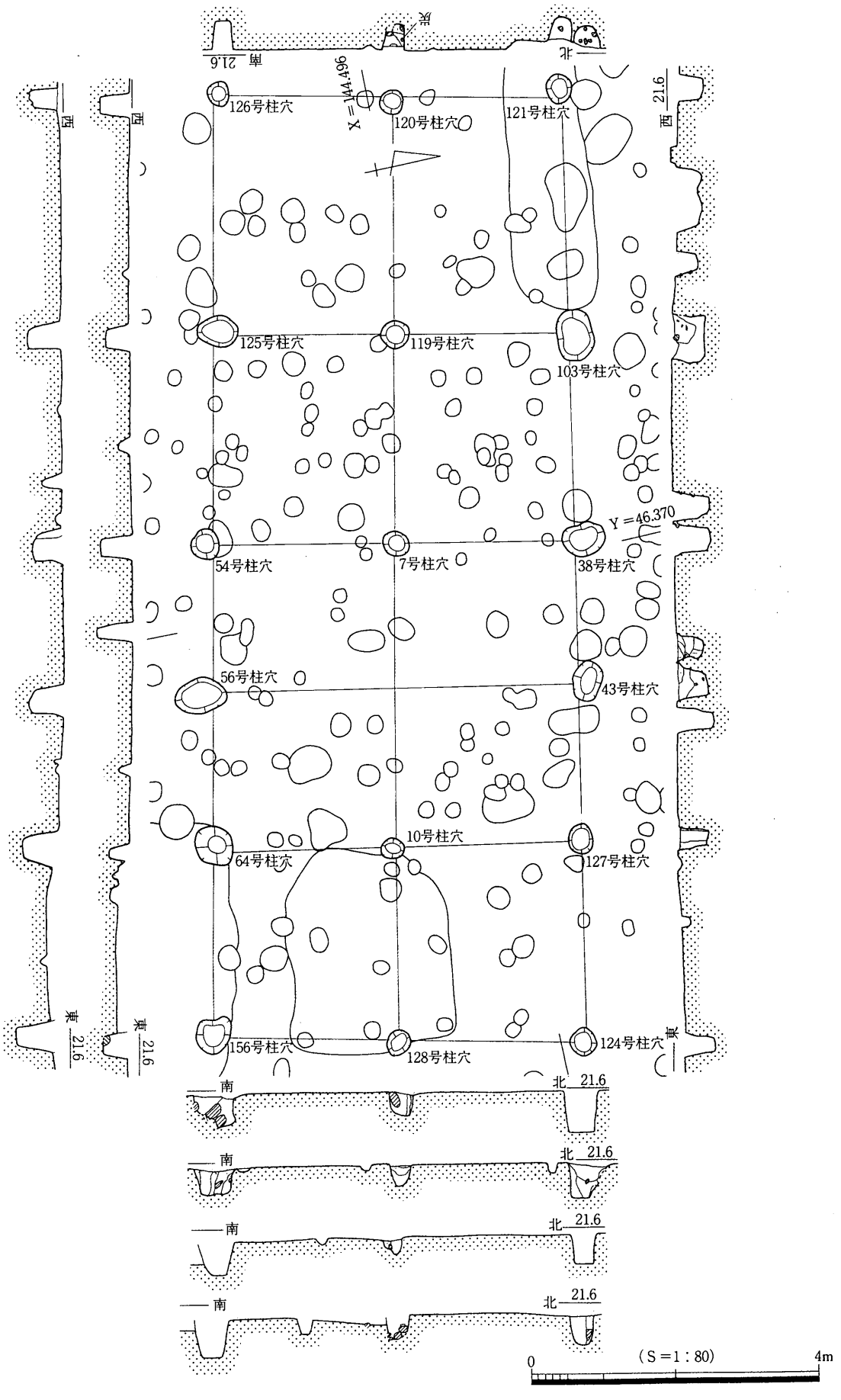


図23　Eトレンチ1号掘立柱建物平・断面

1号掘立柱建物（図23・24，図版10）

トレンチ中央部に存在する東西棟の大形掘立柱建物である。現地調査の段階で把握しているが、整理作業の進捗に伴い、建物に含める柱穴の若干の変更を行っている。

主軸は座標北から101°東偏するもので、遺跡周辺の条里型地割に合致する。建物規模は、梁間2間(西側4.8m，東側5.2m)、梁間5間(13.0m)、床面積は65m²を測り、平面形は桁行の長い長方形を呈する。柱間は、梁間西側柱列で2.4m、東側柱列で2.6mを測る。桁行では、南北両側の柱列で西から2.6m、2.4m、2.0m、2.0m、2.4mとなり、建物中央の柱間が短い。

棟持柱と考えられる梁間中央の120・128号柱穴を結んだ直線上には、桁行柱穴の位置に対応して西から19・7・10号柱穴が見られ、束柱に相当するものと考えられる。

また、桁行の43・56号柱穴間に束柱を認められないことから、土間等の建物内における空間利用の差異が反映されているかもしれない。

柱穴の平面形は円形を基本とするが、その規模は0.2mから0.6m程のバラツキがある。大形のものには、柱痕が見られないことから、抜き取りに起因する可能性がある。柱痕が確認できる柱穴を見ると、直径0.15～0.2mを測り、黒褐色粘土に置換された状態であった。

床面積と床張りの建物構造から、当該期の屋敷地における中心的な建物であった可能性が高い。また、後述する2号掘立柱建物とほぼ重複する位置で検出されていることから、柱穴の切り合い関係は存在していないが、2号掘立柱建物を拡張する形で立て替えが行われた可能性も考えられる。

50～59は各柱穴からの出土遺物である。土師質土器杯50は103号柱穴の埋め土から出土した。土師質土器51は束柱である10号柱穴からの出土。52の土師質土器杯小片は、南側桁行の54号柱穴埋め土から見られた。土師質土器杯32は、北側桁行の38号柱穴から出土している。54の土師質土器杯は、50とともに103号柱穴の埋め土から見出された。

土師質土器茶釜口縁55は、32とともに北側桁行の38号柱穴からの出土。土師質土器把手付鍋56は北側桁行127号柱穴。土師質土器擂鉢底部片57は、南側桁行の56号柱穴から出土した。備前焼甕58は、52とともに南側桁行の54号柱穴埋め土内から出土している。備前焼擂鉢底部片59は、南東隅柱156号柱穴から出土した。

すべての遺物について柱穴内の出土位置が記録できた訳ではないので、出土遺物全体の帰属時期から建物の存続期間を推定する。土師質土器杯53・54は、口径・器高から見て14c頃の年代が想定できるが、55の土師質土器茶釜や56の土師質土器把手付鍋は16cの所産と考えられる。古相を示す遺物は、先行する建物からの混入と判断し、本建物は16cを中心とした時期に機能・廃絶したものと考えたい。

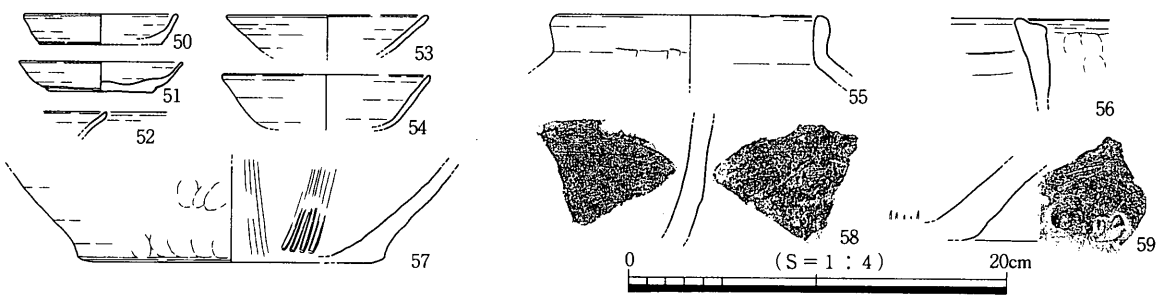


図24　Eトレンチ1号掘立柱建物出土遺物

2号掘立柱建物（図25，図版10）

トレンチ中央部で1号掘立柱建物と重複して確認された東西棟の掘立柱建物である。現地調査で把握しているが、検討の結果、建物を構成する柱穴を若干変更するに至っている。

主軸は、座標北から98°東偏し、遺跡周辺の条里型地割とほぼ合致する。建物規模は、桁行3間(7.0m)、梁間東側2間(3.68m)、西側1間(3.8m)、床面積は25.2㎡を測り、平面形は整った長方形を呈する。梁間西側は、棟持柱を欠損し1間となっており、建物に付随する庇とも考えられるが、他の桁行柱穴間の長さとさほど違いが見られないことから、建物西側は当初より開放されていた可能性も考えられる。

柱間は、桁行で西から4.2m、4.4m、4.4mとなる。梁間では、東側の柱穴列で南から1.88m、1.8m、西側で1.9mを測る。建物内東側には、桁行の柱穴に対応して50・172号柱穴が確認できることから、床面積が小規模ながら束柱に該当するものと考えられる。

柱穴の平面形は直径0.3～0.4m程のやや歪な楕円形を呈しており、北西隅柱のみ直径0.2m程の小形のものとなるが、柱痕の部分しか調査し得なかった可能性が高い。

60～64は出土遺物である。土師質土器杯60は束柱と考えられ

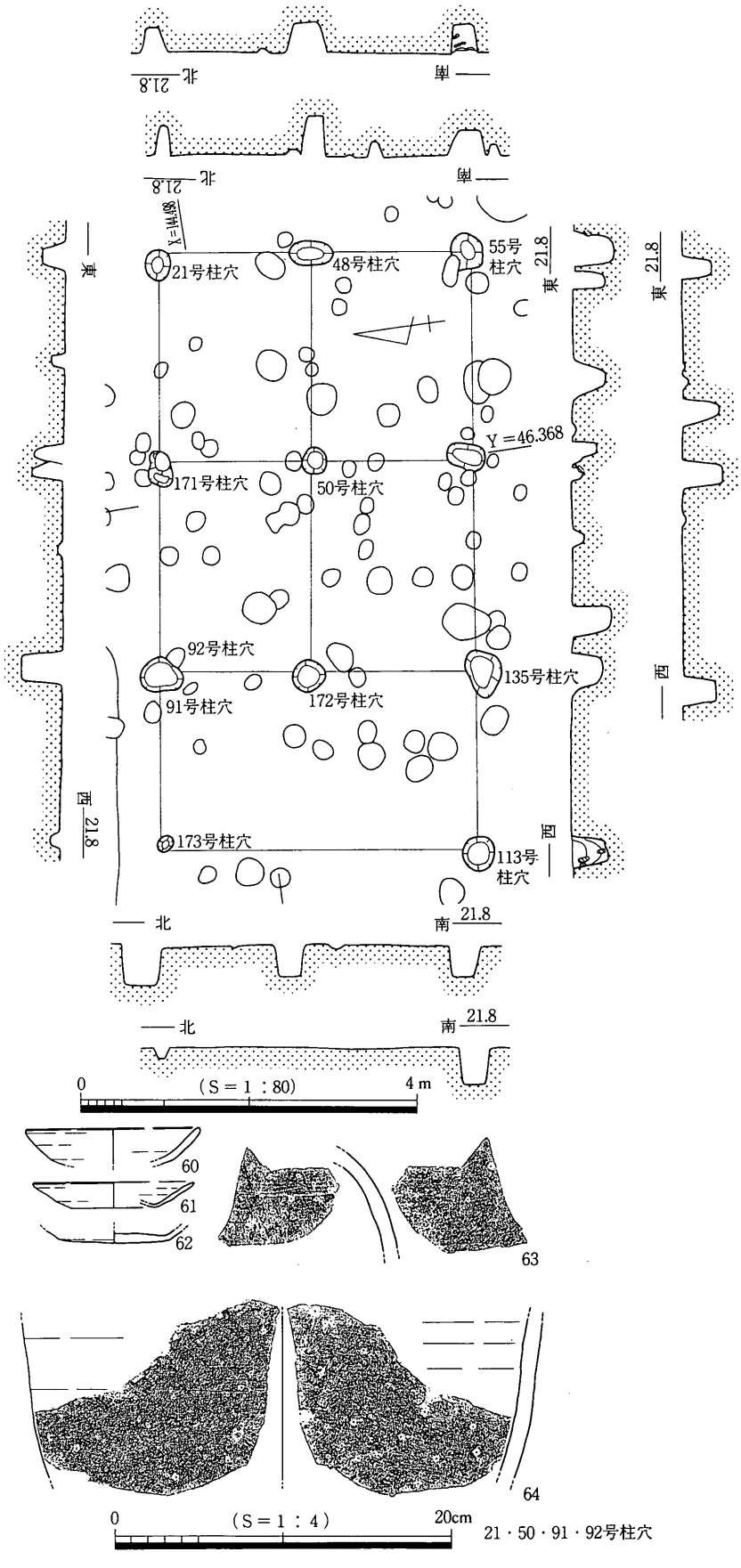


図25　Eトレンチ2号掘立柱建物平・断面及び出土遺物

る50号柱穴から出土している。土師質土器杯61・62は、北西隅柱である21号柱穴からの出土遺物である。備前焼甕63・64は91号柱穴から出土しており、同一個体と考えられる。

柱穴内における出土位置・層位の確認が出来ていないが、土師質土器杯60～61の形態から、本建物は15ｃ前半に廃絶したものと考えておく。

３号掘立柱建物（図26，図版10）

トレンチ東部の11号溝西側において検出した南北棟の掘立柱建物である。主軸は、座標北より10°東偏し、遺跡周辺の条里型地割に合致する。規模は、桁行４間（8.8m）、梁間１間（4.0m）、床面積35.2㎡を測り、平面形は整った長方形を呈する。

柱通りは概ね良好であり、柱間は、桁行の柱列の北から2.0m、2.0m、2.6m、2.0mとなっており、建物中央の柱間が長い。柱穴の平面形は円形から楕円形を基本とし、規模的にバラツキがある。現地調査の段階で把握しているが、断面の記録が作成できていないことから、平面規模の差異が抜き取り等に起因するかどうかは不明である。

床面積が35.2㎡を測ることから、集落内における中心的な建物である可能性が高いが、１号掘立柱建物と重複することから、前後関係をもつものと考えられる。また、建物北・東側に隣接する10・11号溝は、雨落ち溝的な性格をもつものと考えられる。

65～70は出土遺物である。古瀬戸瓶子あるいは花瓶と考えられる65は、口縁・頸部・体部などの４点の破片が見られ、49号柱穴をはじめ建物に隣接した９・10・11号溝からも出土している。接合関係は確認できないが、当時は奢侈品であったことを考慮すれば、同一個体と考えられる。

66・67は60号柱穴から出土した土師質土器皿。土師質土器杯68、備前焼甕69は65号柱穴からの出土。70の備前焼甕体部片は、47号柱穴と11号溝より出土した破片が接合した。

土師質土器皿66・67の形態から、15ｃ前半に廃絶した建物と考えられる。

４号掘立柱建物（図26，図版10・11）

トレンチ北西部で検出した南北棟の掘立柱建物であり、約北半分が調査地外となる。主軸は、座標北から12°東偏し、遺跡周辺の条里型地割に合致する。現状での規模は、梁間南側１間（3.6m）、桁行２間（4.2m）、床面面積15.12㎡を測る。

現地調査の段階では、建物周囲の柱穴を、目隠し塀などの柵列として記録が作成さているが、整理作業の進捗に伴い、位置関係や規模から判断して、本建物に伴わないものとして除外した。

柱間は、桁行の東西柱列ともに南から1.1m、1.0mを測り、柱通りも良好である。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、桁行東側の102号柱穴には詰石が確認できる。柱痕等の確認は行えていない。

71は、102号柱穴より出土した土師質土器杯小片である。法量・形態から15ｃを中心とした時期が想定され、本建物の廃絶時期を該期に推定しておく。

５号掘立柱建物（図26）

トレンチ北西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。整理作業の段階で復元している。建物主軸は、座標北から100°東偏するもので、遺跡周辺の条里型地割に合致する。規模は、梁間１間（2.8m）、桁行２間（4.7m）、床面積13.16㎡を測る。柱間は、桁行の東西両側の柱穴列で西から2.4m、2.2mとなり、

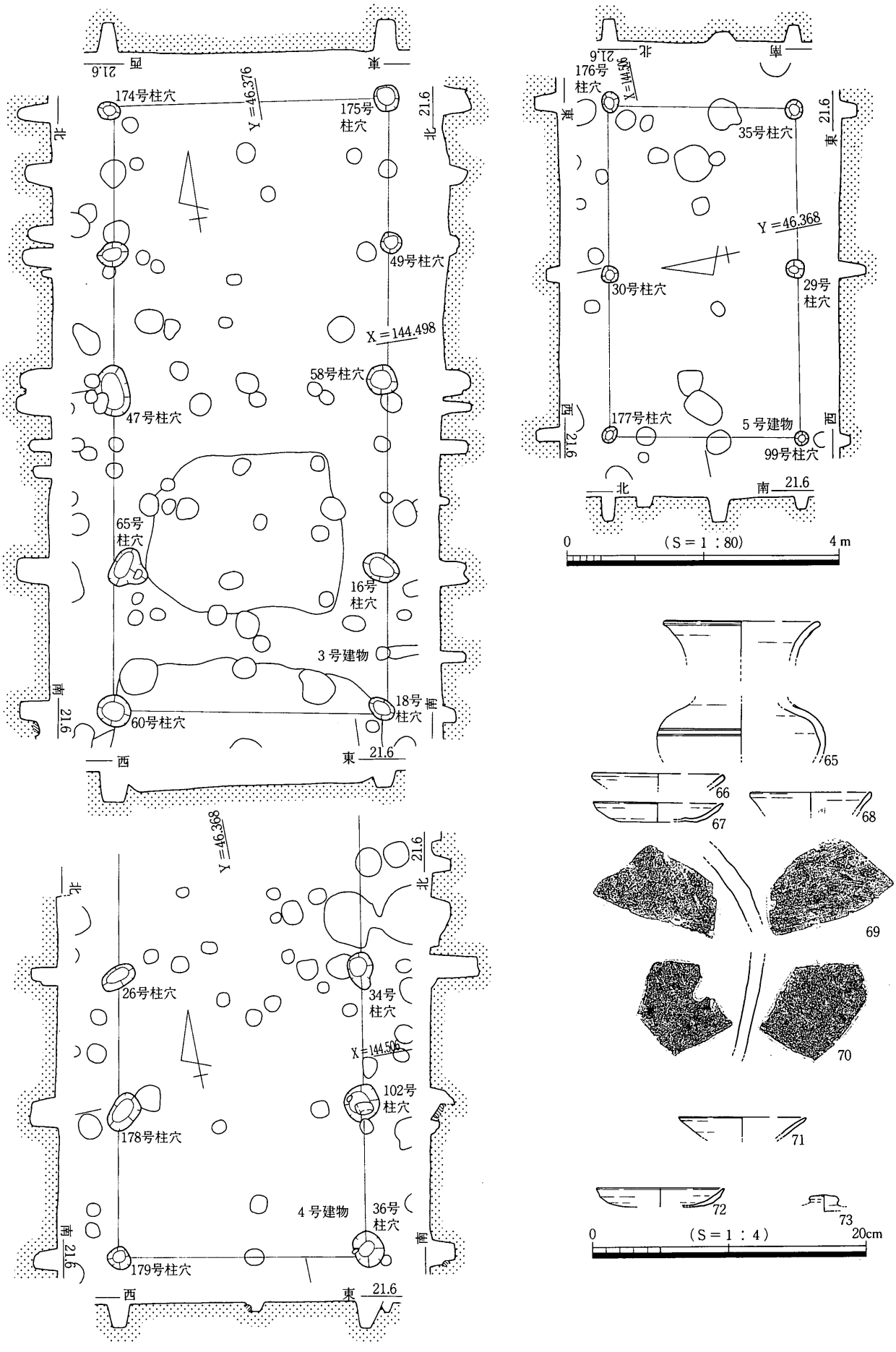


図26　Eトレンチ3～5号建物平・断面及び出土遺物

柱通りも良好である。

床面積に比例して、柱穴も小規模なもので占められる。トレンチ内の同時期の建物の中では、最も小形であり、母屋と考えられる１号掘立柱建物などに付随する小屋的な建物と考えられる。

72は土師質土器皿であり、99号柱穴から出土した。73は古代と考えられる須恵器蓋の摘み部の小片であり、混入品と見られる。土師質土器皿72の形態から、本建物は15ｃに廃絶したものと考えられる。

９号溝（図27・28，図版11）

トレンチ中央部の掘立柱建物群東側に存在する南北溝の一つである。３号掘立柱建物北側から北東方向へ延び11号溝と合流する。

平面及び断面で11号溝に切られる形で図示しているが、巨視的には同一の埋没土とすることができる。出土遺物にも両遺構間で接合する個体も多く見られたことから、11・12・13号溝と同時並存する可能性が高い。

74～78は出土遺物である。74は須恵器平瓶の口縁部であり、他のものと明らかに時期を違えることから、混入品と考えられる。75・76は土師質土器皿。77は備前焼甕の胴部片である。78は刀子の可能性もあるが、不明鉄器とすべきものである。

土師質土器皿の法量・形態から、15ｃを中心とした時期が与えられる。他のトレンチ東部の溝状遺構と接合関係をもつものについては、後述する。

写真５　Ｅトレンチ９～13号溝全景　北から

10号溝（図27・28，図版11）

３号掘立柱建物北側の雨落ち溝と考えられる遺構である。方向は、３号掘立柱建物の梁間北側に沿って東西方向に見られ、９・11号溝に接続する。

79～83は出土遺物である。79～80は土師質土器皿、80の口縁部内外面には煤の付着が確認できる。81は、広く面取りされる口縁部をもつ土師質土器杯。82は須恵器壺底部片である。83は土師質土器足釜口縁。

須恵器壺底部82がやや古相を示すが、土師質土器杯・皿の形態・法量から15ｃを中心とした時期が想定される。

11号溝（図27・28，図版11）

トレンチ東部を南北に延びる溝である。方向は、トレンチ内の建物と同様に遺跡周辺の条里型地割に合致している。北部では９号溝と重複し、南部では12号溝を介して13号溝と接続しているが、埋没土に切り合い関係は見られない。本溝を含めて、12・13号溝より東側には、建物が存在する気配を見せないことから、中世後半段階の集落の東限を示す溝である可能性が高い。

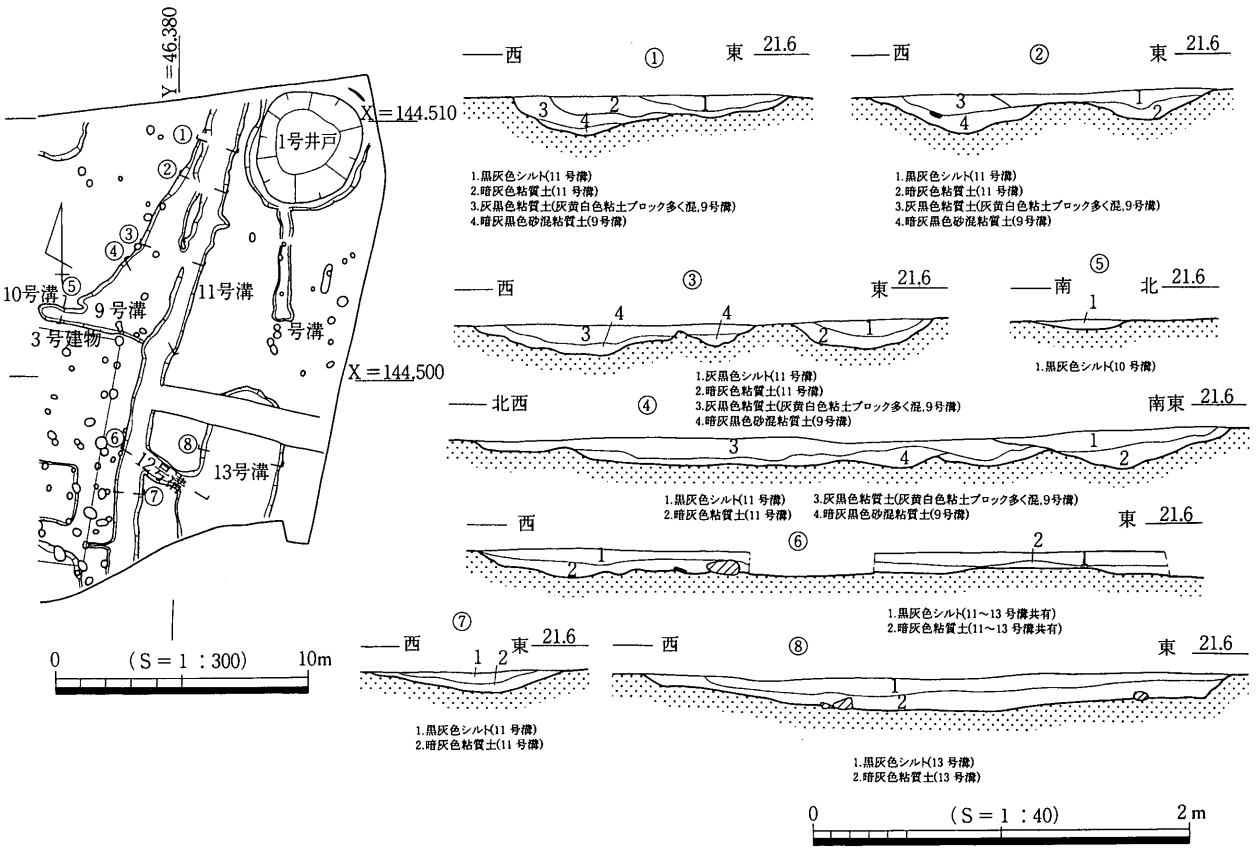


図27　Eトレンチ9～13号溝平・断面

84～99は、出土遺物である。これら以外の他の溝と接合関係をもつものについては、後述する。84～87は土師質土器杯。86・87は、口径・器高がやや大振りであるが、口縁部を広く面取りを行う点で他のものと共通する。88は須恵器壺胴部片。89・90は土師質土器把手付鍋である。91は、口縁部が内側に折れ曲がる土師質土器擂鉢であり、産地不明である。92の擂鉢は、やや硬質に焼き上げられている。93も土師質土器擂鉢口縁部と考えられるが、91に比べ口縁部内面の折れ曲がりが顕著ではない。

94・95は土師質土器火鉢の底部・脚部片である。96～98は亀山焼甕の口縁・胴部片である。99に鉄製釘であり、錆化が著しい。

12号溝（図27・28，図版11）

11号溝と13号溝を連結させる形で検出した小溝である。前述したとおり、両者に切り合い関係は見られない。100～102は出土遺物。100は土師質土器擂鉢であり、口縁部が内側に折れ曲がる。106は土師質土器把手付鍋。102は底部に回転糸切り痕が見られる須恵器瓶子であり、古代期の篠窯産の可能性があることから、混入と考えられる。

13号溝（図27・29，図版11）

トレンチ北東部で検出した円形の落ち込みである。溝としての平面形をもたないが、12号溝を介して11号溝へ繋がることから、溝として報告する。規模は、現状で南北6m、東西3.2mの楕円形を呈し、深さ0.2mを測る。

溝底は概ねフラットであり、12号溝と接する部分がやや高くなっている。堆積土は黒灰色シルトによって埋没しており、11号溝など周囲の溝状遺構と共通している。建物等の分布状況から、11号溝と同様

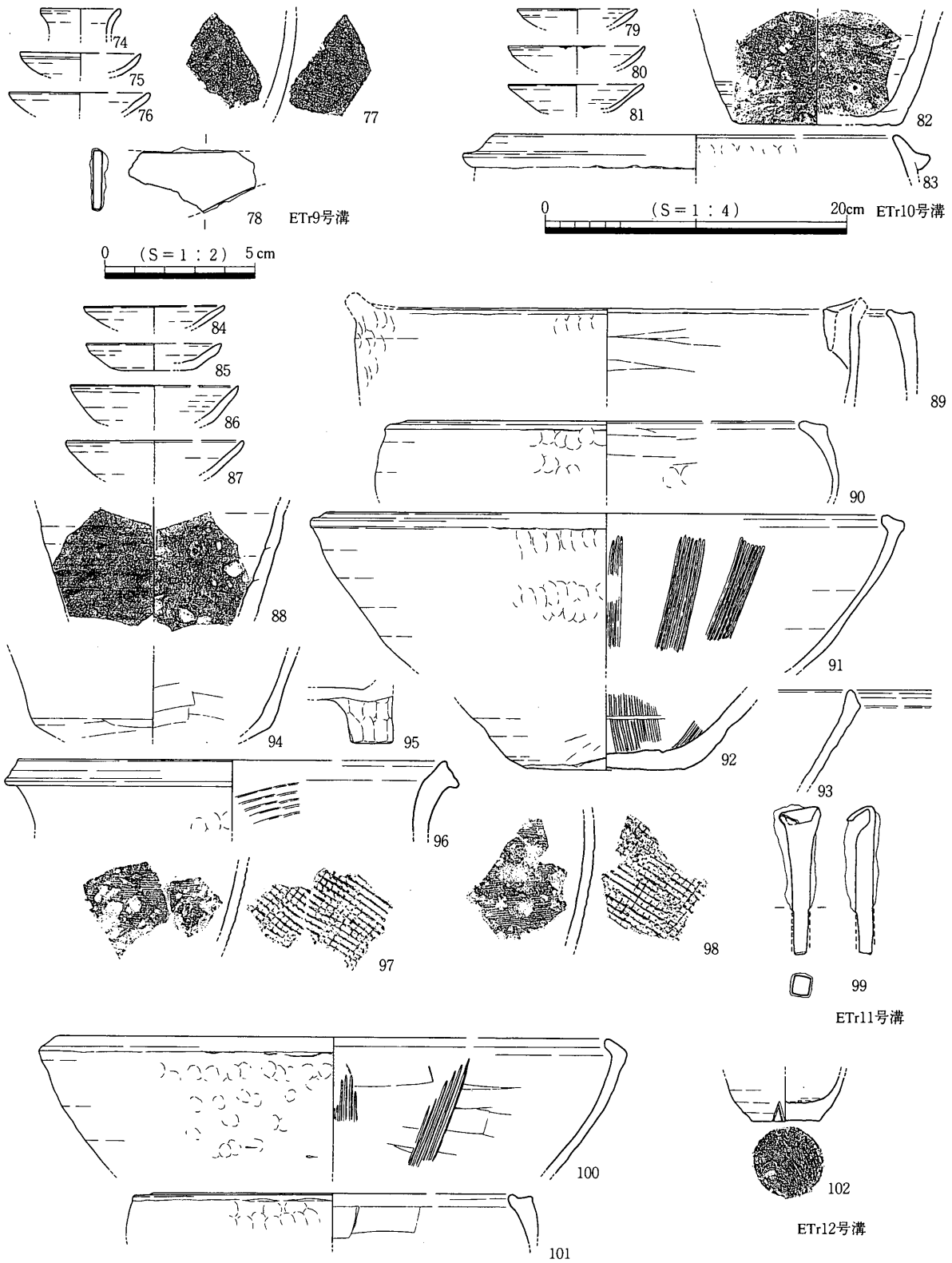


図28　Eトレンチ9～12号溝出土遺物

に、本トレンチ中央部の中世集落の東限を示す溝と考えられる。

103・104は土師質土器皿。104の外面には、回転ヘラ切りの始点と考えられる沈線状の溝が確認できる。105は土師質土器杯。106は、須恵器壺底部片である。107～115は土師質土器擂鉢。116～120は土師質土器把手付鍋と考えられる。121・122は土師質土器茶釜。123～126は土師質土器鍋口縁部。

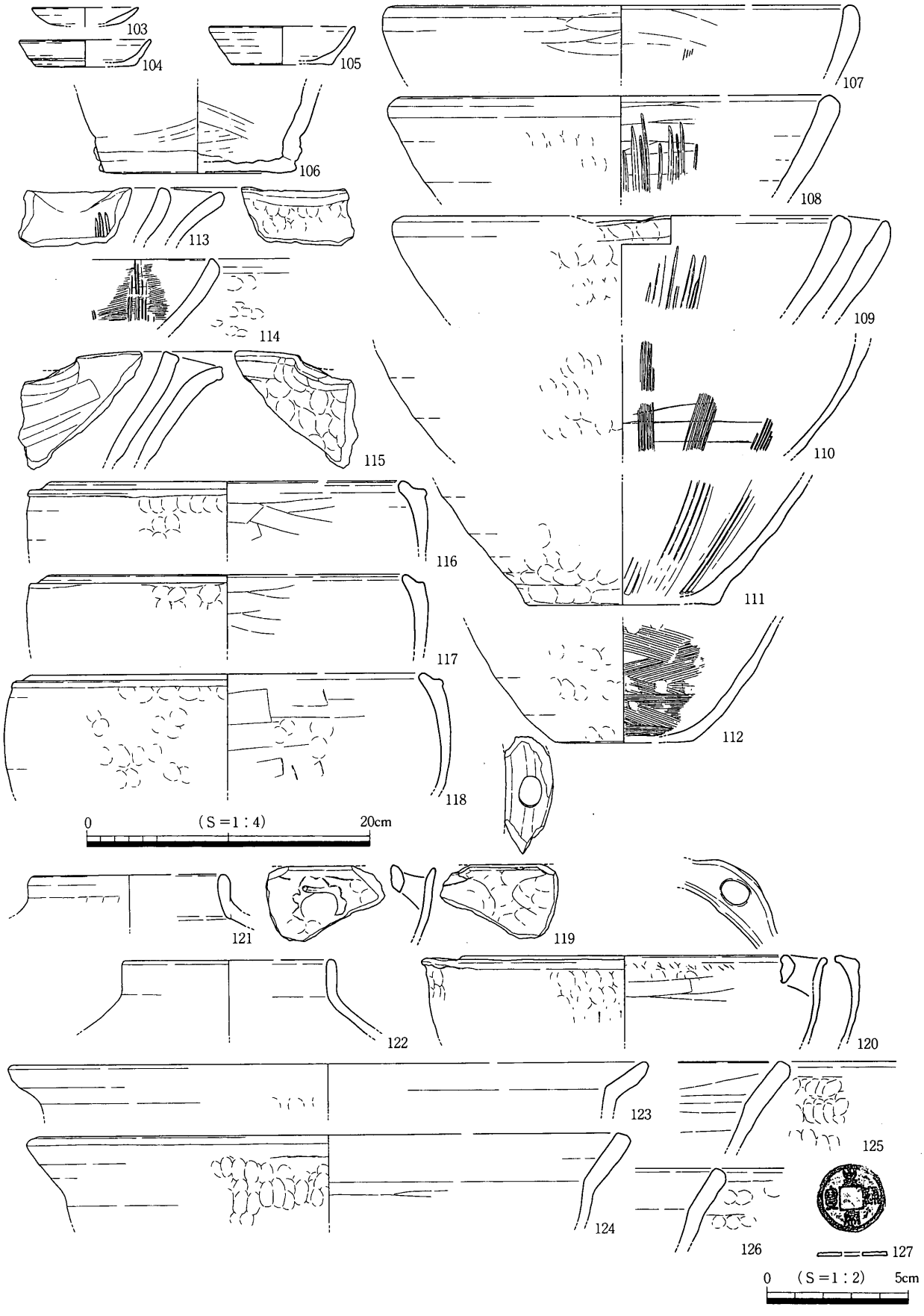


図29　Eトレンチ13号溝出土遺物

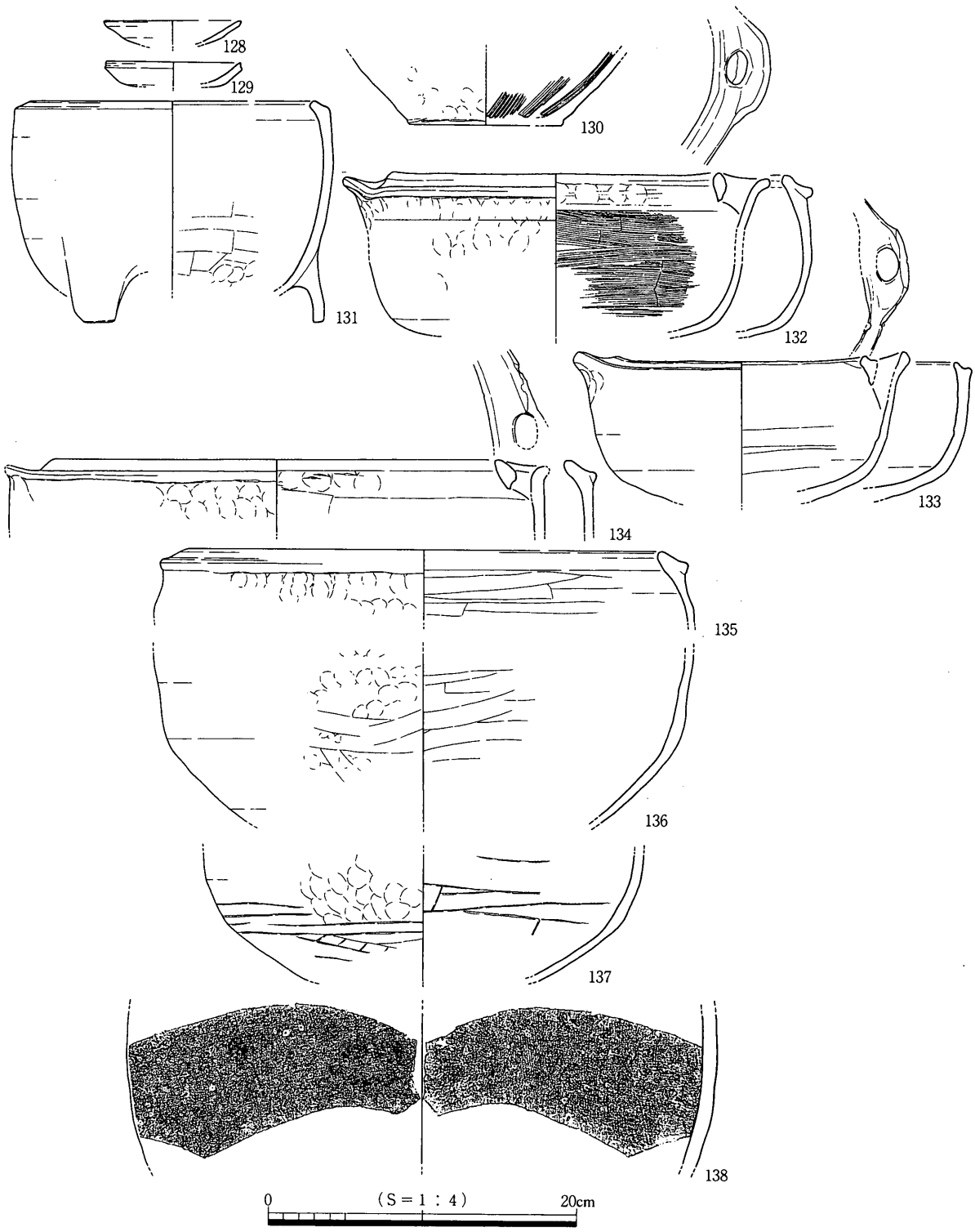


図30　Eトレンチ9～13号溝遺構間接合出土遺物

遺構間接合の遺物（図30，図版11）

128～138は、9～13号溝を中心として複数の遺構間で接合した遺物である。土師質土器128・129は、9号溝と11号溝出土の破片が接合した。土師質土器擂鉢130は、11号溝と12号溝との間で接合関係が確認された。土師質土器火鉢131は、11号溝、12号溝、13号溝それぞれから出土した破片が接合したものである。

土師質土器把手付鍋132・133は、11号溝と12号溝との間で接合関係が見られた。土師質土器把手付鍋

134は12号溝と13号溝で接合したものである。土師質土器把手付鍋135は、11号溝と12号溝間で接合した。土師質土器把手付鍋136と備前焼甕138は、11号溝、12号溝、13号溝の破片が接合したものである。

これらの接合関係から、9～13号溝は、同時並存していた可能性が高いと考えられる。

1号井戸（図31～33，図版12）

トレンチ北東隅で検出された井戸である。長軸5.7m、短軸4.7m程の楕円形を呈し、南部に8号溝とした小溝が取り付く。断面形は、ほぼフラットな底面から立ち上がりが漏斗状に広がるもので、上位にはテラス状の矮小な平坦面が見られる。

埋没土は、最上位である1層とこれより下位の埋め土に大別できる。下位は、基盤層のブロックを多く含むものであり、井戸枠として据えられていたと考えられる人頭大の石材を多く含む。廃絶時に井戸枠の抜き取り等の攪乱が及んだ後の埋め土と考えられる。

井戸枠と考えられる木材や、井戸枠設置時の裏込めと考えられる層位は確認できない。

最上位の①層は、埋め戻し後の窪地に堆積したものと見られる。

139～166は下層から出土した遺物である。139～142は土師質土器杯。143は須恵器杯口縁部であり、他のものと明らかに時期を違えることから、混入品と考えられる。144は青磁碗である。

146は鍔部の形態から見て土師質土器足釜、146は土師質土器把手付鍋と考えられる。

146は口縁部が内側に湾曲する国分寺楠井窯産の土師質土器鍋。148・149は土師質土器把手付鍋である。150・154は瓦質焼成の擂鉢であり、口縁部形態から国分寺楠井窯の製品と見られる。

155は、先細りの口縁部と外面に残る接合痕から、国分寺楠井窯産の擂鉢と考えられる。156～158は土師質土器足釜脚部片。

159～162・164・165は備前焼甕の胴部・底部片である。163は内面に真土と考えられる精良な粘土が付着することと、内面から外面へ向かって熱変と考えられる色調の変化が認められることから、土製鋳型と考え

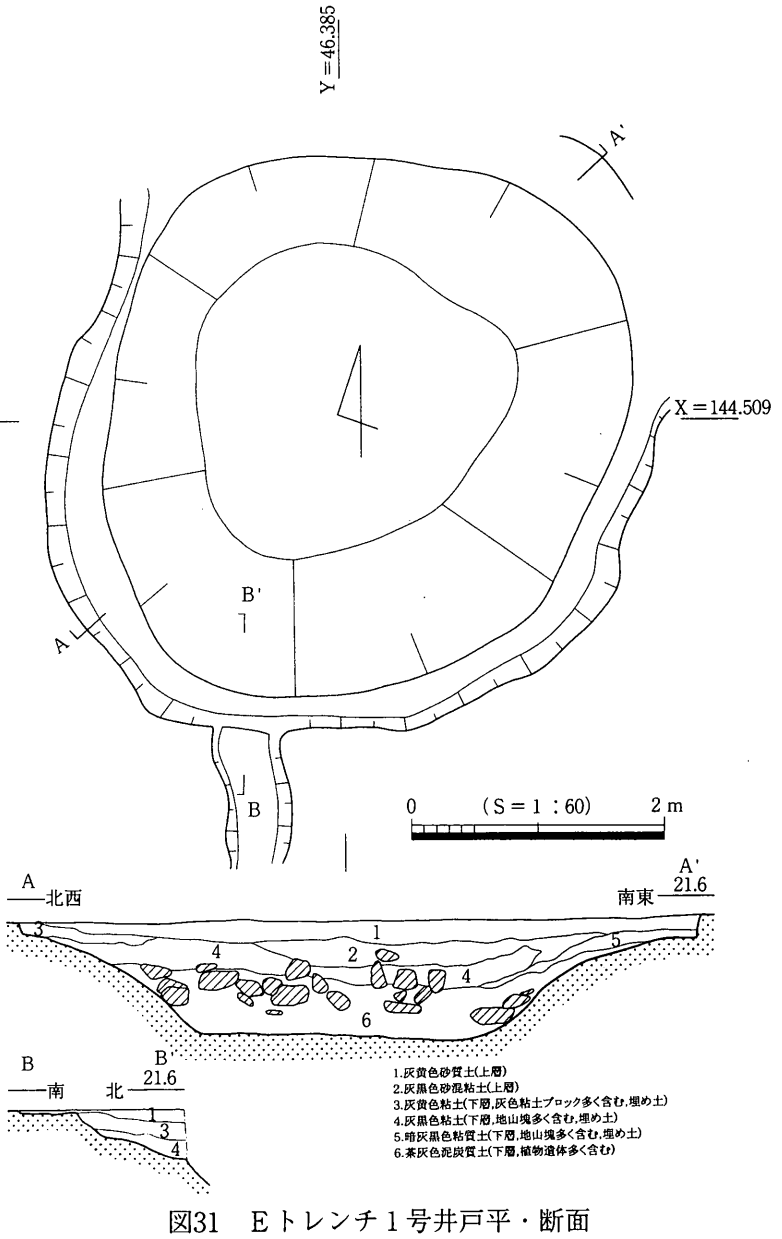


図31　Eトレンチ1号井戸平・断面

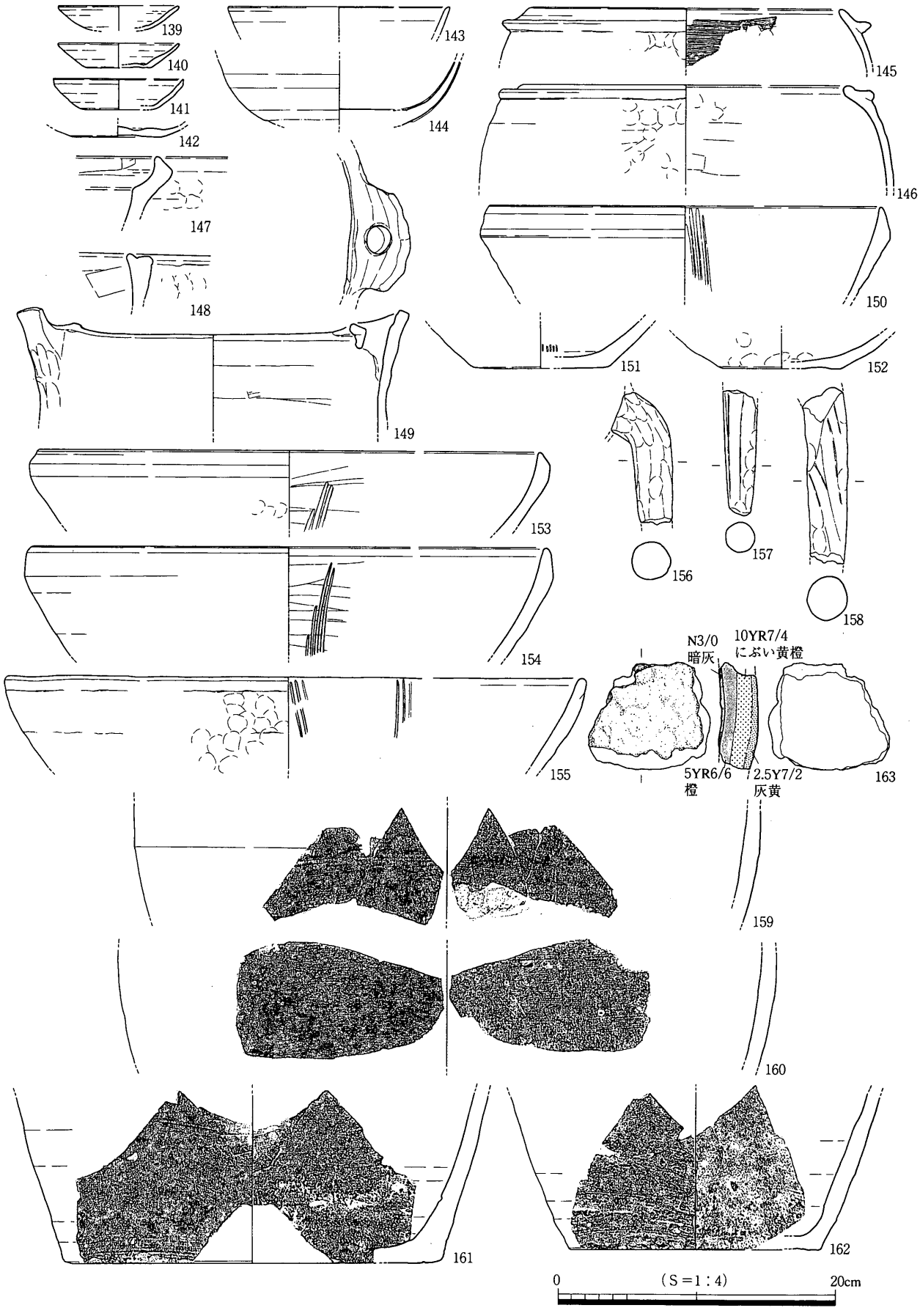


図32　Eトレンチ1号井戸下層出土遺物

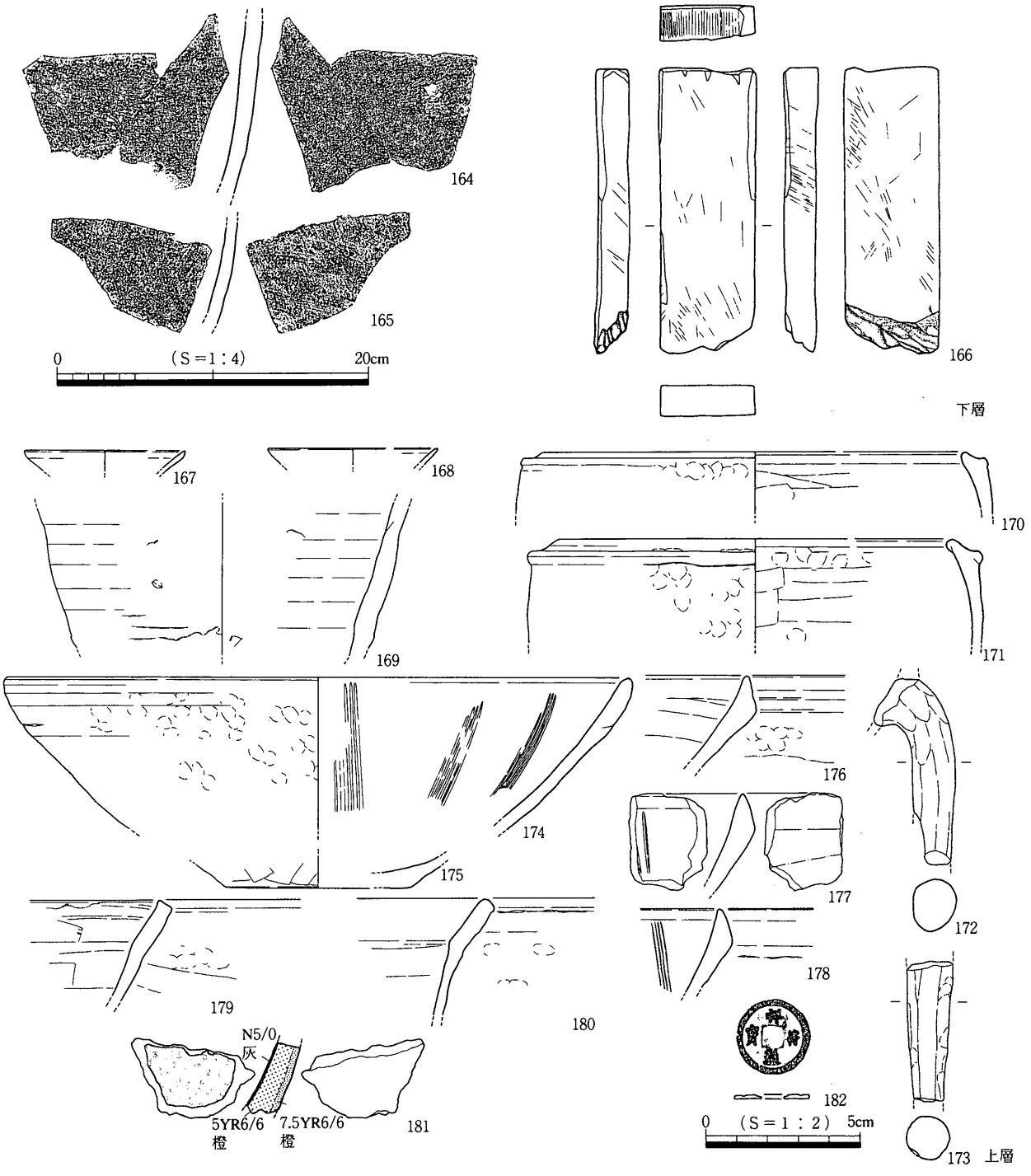


図33　Eトレンチ1号井戸下層・上層出土遺物

られる。上層出土の溶解炉片181と合わせて、当該期の集落内における鋳造関連遺物とすることができる。

166は、流紋岩製と考えられる砥石であり、上面には分割時のものと考えられる線状痕が見られる。

167～182は上層からの出土遺物。167・168は土師質土器杯である。169は須恵器壺の胴部片である。170・171は土師質土器把手付鍋。

172・173は土師質土器足釜脚部片である。174～178は擂鉢であり、175は須恵質、176・177は瓦質、174・178は土師質である。174・176～178は国分寺楠井窯産、須恵質の175は備前焼の可能性がある。179・180は土師質土器鍋口縁。

181は、内面から外面にかけて、熱変と考えられる色調の変化が観察できるが、内面に溶融と考えられる気泡が見られることから、溶解炉等の鋳造関連遺物である可能性が高い。182の銭貨は、「祥符通寶」である。

出土遺物の中で、在地での編年網が確立している国分寺楠井窯産擂鉢を見ると、楠井Ⅱ－３期からⅢ期にかけてのものと判断できる。この年代観を援用して、本遺構は16ｃ前葉に埋没したものと考える。

写真６　Ｅトレンチ１号井戸全景　北西から

６号不明遺構（図34，図版12）

トレンチ南東部で検出した土坑状の遺構である。埋没土中には、拳大の砂岩礫と地山塊と考えられる粘土ブロックが多く含まれていた。出土遺物には、土師質土器皿183、土師質土器杯184が見られることから、14ｃ後半頃に埋め戻されたものと考えられる。

７号不明遺構（図34）

トレンチ南東部で検出した大形土坑である。南東部隅が一部調査区外となるが、長軸4.3m、短軸2.7m程の隅丸方形を呈するものと考えられる。

出土遺物には、土師質土器杯185、備前焼擂鉢体部片186、須恵器甕体部片187、土師質土器足釜脚部188が見られる。土師質土器杯185の形態から、15ｃ頃に属する遺構とと考えられる。

８号不明遺構（図34，図版12）

トレンチ中央北寄りの部分で検出した土坑であり、北半部が調査区外となる。底面の東側には、人頭大の砂岩礫を円形に配した部分が見られ、井戸枠のようにも見ることができる。しかし、下部施設が確認できないことから、これらの砂岩礫の機能は不明である。

埋没土中には、地山塊が多く見られることから、人為的な埋め土と考えられる。

出土遺物には、土師質土器杯189～191、土師質土器擂鉢192、備前焼甕193が見られる。土師質土器杯189～191の形態や国分寺楠井窯産と考えられる土師質土器擂鉢193の年代観から、本遺構は16ｃ前葉に埋め戻されたものと考えられる。

10号不明遺構（図35）

トレンチ中央部の南壁に沿って確認された長楕円形を呈する溝状の落ち込みである。出土遺物は確認できない。南側の立ち上がりなど大半が調査区外となることから不明な点が多いものの、１号掘立柱建物などトレンチ内の建物の南側に方向を揃えて見られることから、建物群南辺を区画する溝状遺構の可能性も考えられる。

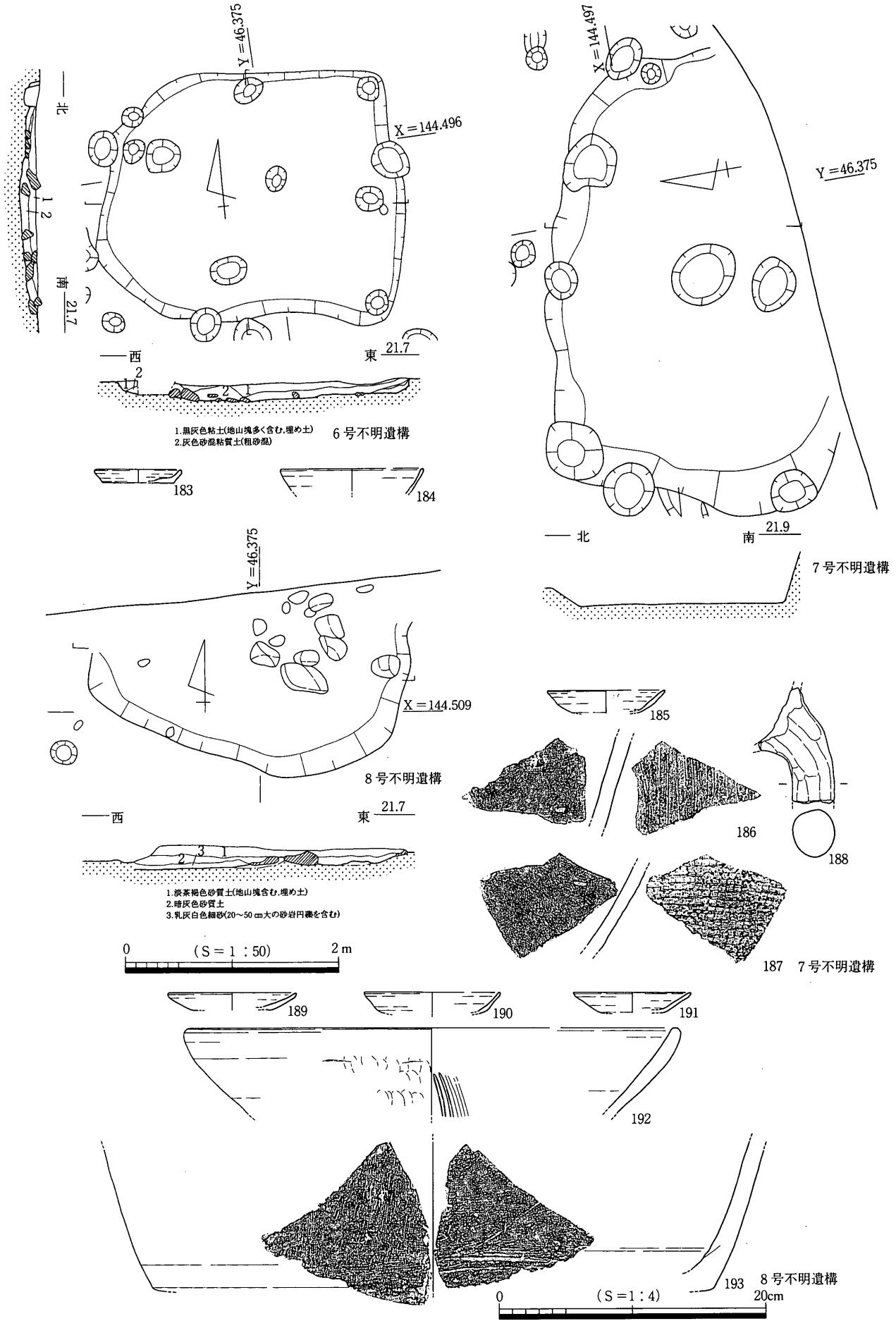


図34　Eトレンチ6～8号不明遺構平・断面及び出土遺物

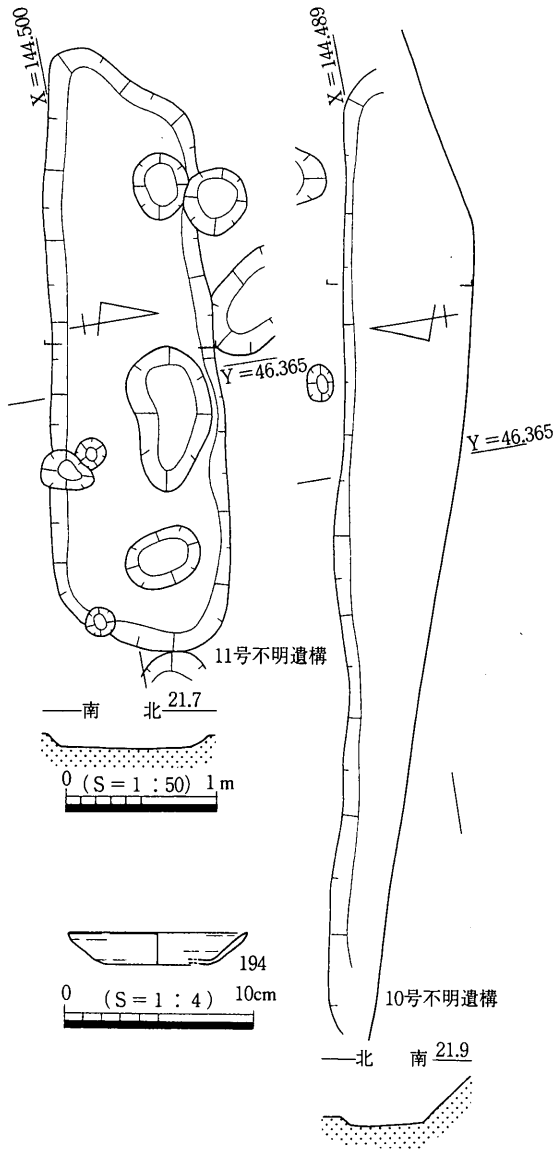


図35　Eトレンチ10・11号不明遺構平・断面及び出土遺物

11号不明遺構（図35）

トレンチ中央部で検出した楕円形の土坑である。出土遺物には、土師質土器杯194が見られることから、15c頃の所産と考えられる。

柱穴出土遺物（図36・37）

Eトレンチでは、数多くの柱穴を確認したものの、建物復元に至らなかったものも多い。

ここでは、柱穴出土遺物をまとめて掲載している。詳細については、表3を参照していただきたい。

195～206は9号柱穴、206～212は42号柱穴から一括して出土したものである。

平面図等の記録が作成できていないが、これらの柱穴は掘立柱建物が集中するトレンチ中央部に位置していることから、地鎮に関係した柱穴であった可能性も考えられる。

遺構外出土遺物（図37）

266～277は遺構外出土遺物である。278は身部を欠損しているものの、袋部が確認できることから鉄鑿と考えられる。279は形態から、鍛冶炉床に形成される椀形鍛冶滓と考えられる。

番号	遺構名	器種名	番号	遺構名	器種名	番号	遺構名	器種名	番号	遺構名	器種名
195	9号柱穴	土師質土器 皿	213	61号柱穴	土師質土器 小皿	231	88号柱穴	土師質土器 杯	249	96.97号柱穴	土師質土器 擂鉢
196	9号柱穴	土師質土器 皿	214	71号柱穴	土師質土器 小皿	232	94号柱穴	土師質土器 皿	250	22号柱穴	備前焼 甕
197	9号柱穴	土師質土器 皿	215	58号柱穴	土師質土器 皿	233	96.97号柱穴	土師質土器 杯	251	100号柱穴	土師質土器 擂鉢
198	9号柱穴	土師質土器 皿	216	94号柱穴	土師質土器 皿	234	63号柱穴	土師質土器 杯	252	130号柱穴	土師質土器 鍋
199	9号柱穴	土師質土器 皿	217	104号柱穴	土師質土器 皿	235	78号柱穴	土師質土器 杯	253	85号柱穴	土師質土器 鍋
200	9号柱穴	土師質土器 皿	218	96.97号柱穴	土師質土器 皿	236	94号柱穴	土師質土器 杯	254	14号溝	土師質土器 土鍋
201	9号柱穴	土師質土器 皿	219	115号柱穴	土師質土器 皿	237	39号柱穴	土師質土器 杯	255	33号柱穴	土師質土器 足釜
202	9号柱穴	土師質土器 皿	220	105号柱穴	土師質土器 皿	238	78号柱穴	土師質土器 杯	256	74号柱穴	土師質土器 把手付鍋
203	9号柱穴	土師質土器 皿	221	51号柱穴	土師質土器 皿	239	45号柱穴	土師質土器 杯	257	63号柱穴	土師質土器 足釜
204	9号柱穴	土師質土器 杯	222	130号柱穴	土師質土器 杯	240	81号柱穴	土師質土器 杯	258	96号柱穴	土師質土器 足釜
205	9号柱穴	土師質土器 杯	223	71号柱穴	土師質土器 皿	241	33号柱穴	土師質土器 杯	259	151号柱穴	備前焼 甕
206	42号柱穴	土師質土器 皿	224	62号柱穴	土師質土器 皿	242	105号柱穴	土師質土器 杯	260	58号柱穴	土師質土器 甕
207	42号柱穴	土師質土器 皿	225	110号柱穴	土師質土器 皿	243	90号柱穴	土師質土器 杯	261	63号柱穴	備前焼 甕
208	42号柱穴	土師質土器 杯	226	134号柱穴	土師質土器 皿	244	63号柱穴	青磁 碗	262	142号柱穴	備前焼 甕
209	42号柱穴	土師質土器 皿	227	96号柱穴	土師質土器 杯	245	61号柱穴	青磁 碗	263	8.44号柱穴	備前焼 甕
210	42号柱穴	土師質土器 皿	228	167号柱穴	土師質土器 皿	246	142号柱穴	土師質土器 鍋	264	8.44号柱穴	亀山焼 甕
211	42号柱穴	土師質土器 皿	229	94号柱穴	土師質土器 杯	247	139号柱穴	土師質土器 鍋			
212	42号柱穴	土師質土器 杯	230	88号柱穴	土師質土器 杯	248	111号柱穴	土師質土器 擂鉢			

表3　Eトレンチ柱穴出土遺物一覧

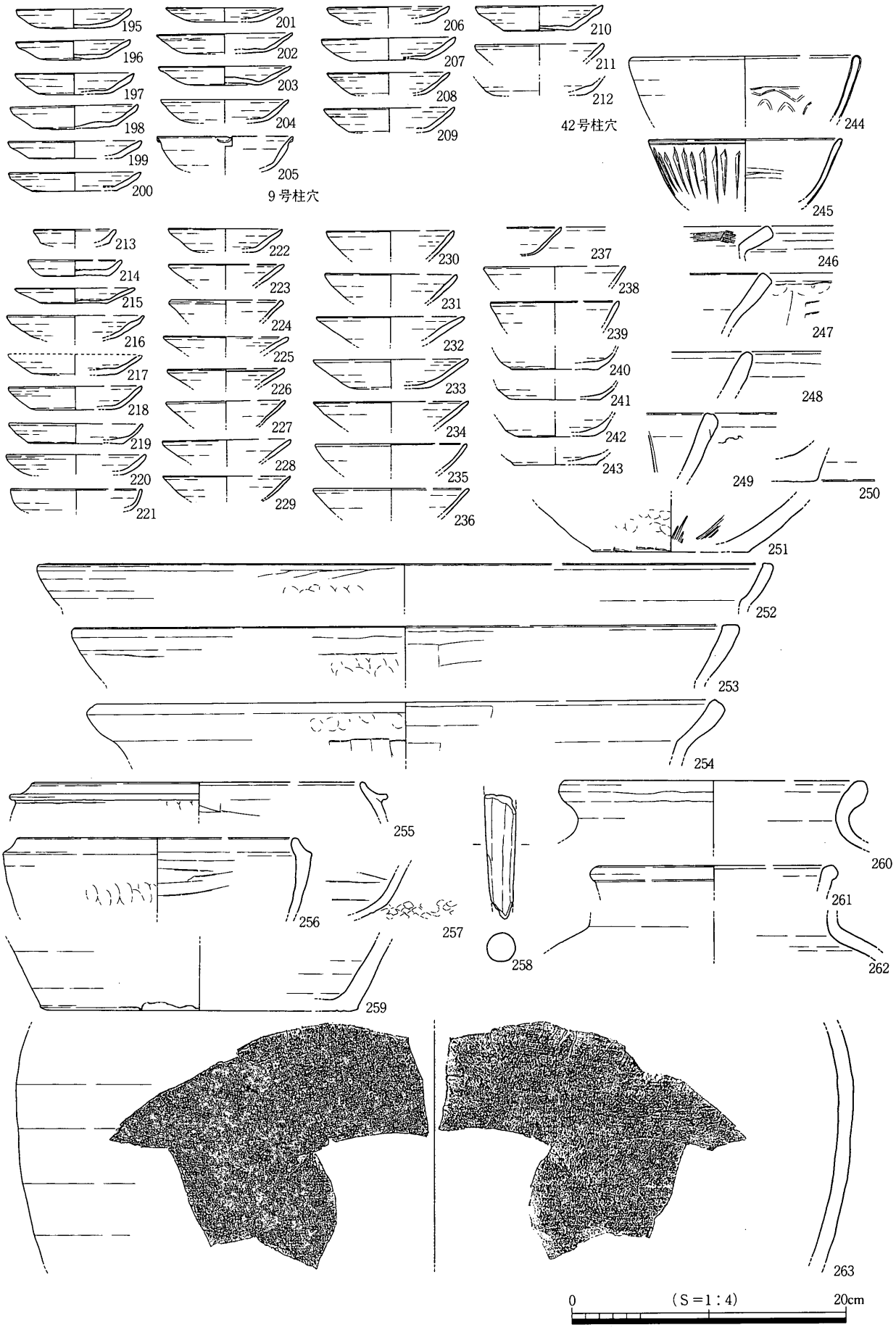


図36　Eトレンチ柱穴出土遺物その1

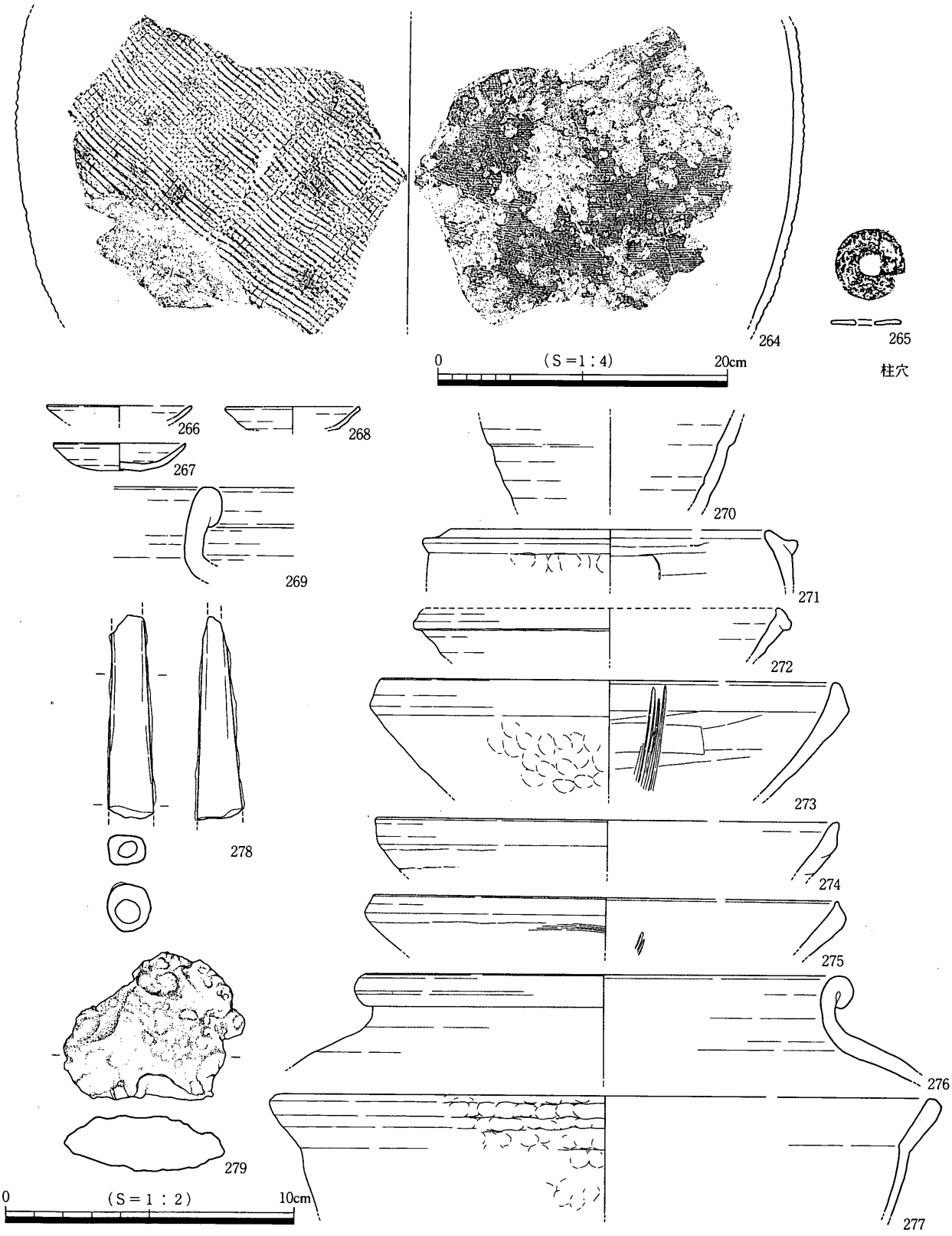


図37　Ｅトレンチ柱穴出土遺物その２，遺構外出土遺物

第９項　Ｇトレンチの遺構・遺物（図38～44，図版13）

本トレンチは、対象地内の北西部に位置する。

事業地との関係から、トレンチは東西に細長い小規模なものとなるが、中世後半期の集落に関わる遺構をほぼ全面に確認した。

基本層序は、宅地造成に伴う0.3ｍ程の盛土及び耕作土下位に、中世期の遺物を含んだ旧耕作土層が0.2ｍ程見られ、これらを除去した段階で、柱穴・溝等の集落遺構を検出している。

トレンチ西半部では、検出面下層に黒色泥炭層で埋まる旧河道が存在することから、遺構検出に難航を極めた。

Ｇ２トレンチは、条里型地割坪界に相当する位置に設定したものである。

水路や隣接する宅地への侵入路として利用されていたことから、本体工事に合わせた工事立会の方式を採用して調査を実施し、現水路に並行する形で先行する時期の条里坪界溝と考えられる溝を１条検出した。

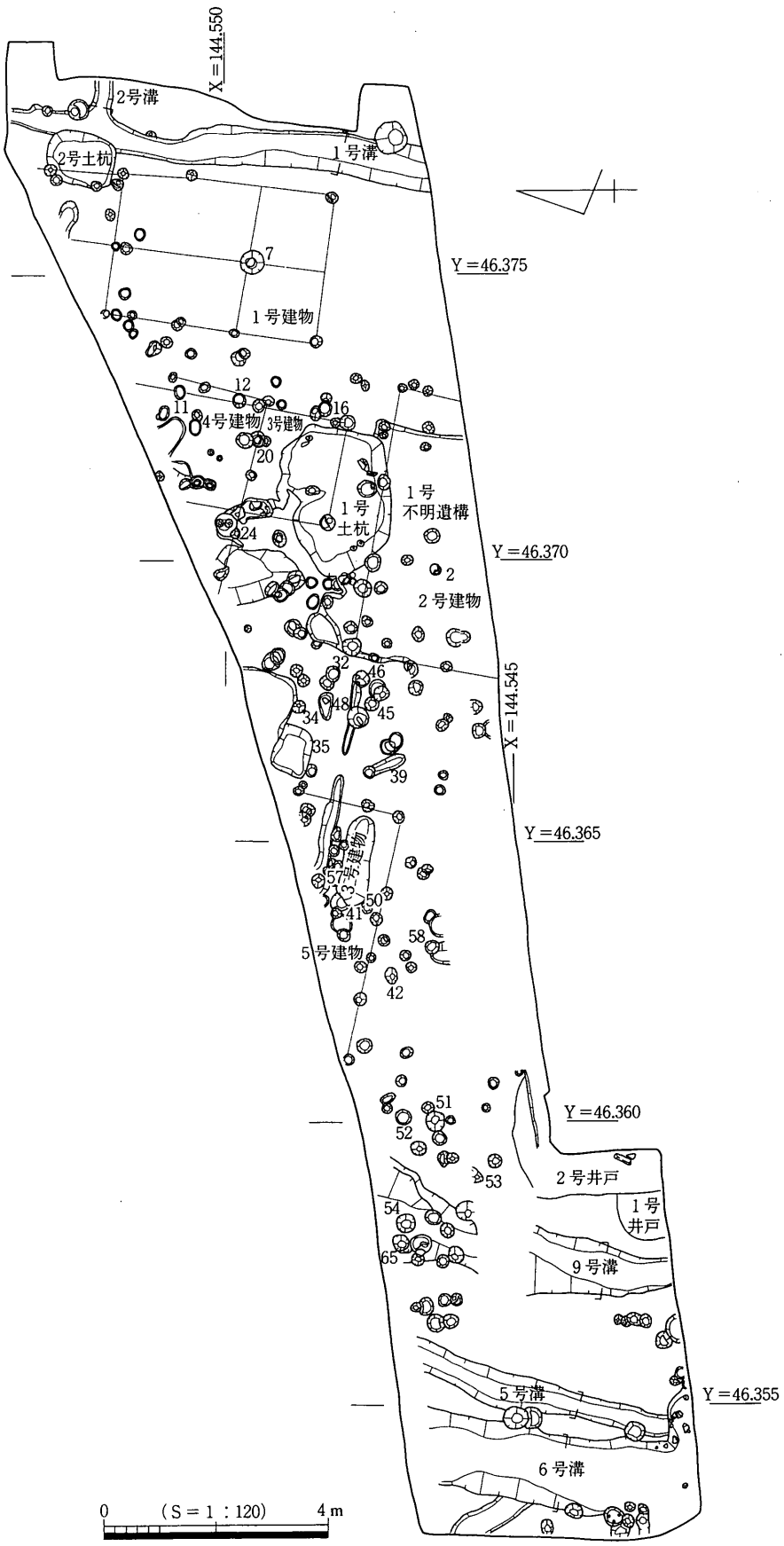


図38　Ｇ１トレンチ平面

1号掘立柱建物（図39，図版13）

トレンチ東部で検出した南北棟の掘立柱建物である。桁行東側の柱列に柱穴が一部欠損することや、平面形にやや歪みを見せているなど、建物復元に否定的な材料が多いが、埋没土の特徴や全体的な柱穴分布を優先させ建物として復元するに至った。主軸は座標北から173°東偏し、遺跡周辺の条里型地割に合致する。北側が調査範囲外となるが、現状で桁行4間（5m）、梁間南側で1間（2.6m）、床面積は13m²を測り、西側の桁行柱列がやや蛇行することから歪な長方形を呈する。

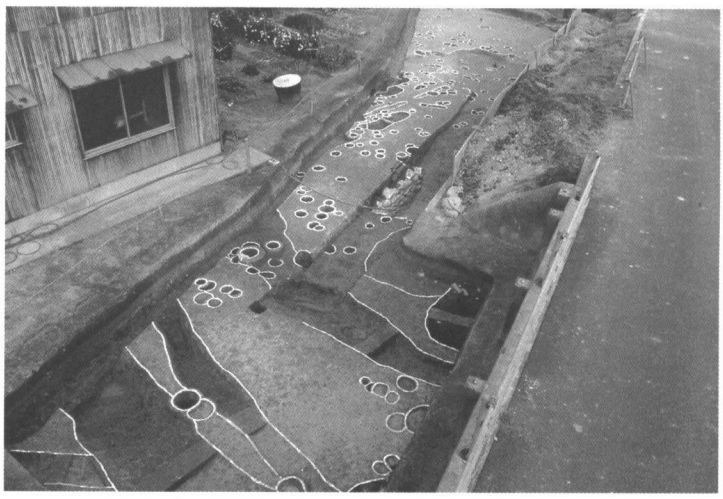


写真7　Gトレンチ全景　西から

柱間は、桁行西側で1.0～1.2mを測る。建物内部には、束柱と考えられる7号柱穴などが見られる。7号柱穴底面には、礎石状の平滑な石材が埋置されていた。また、現状で梁間南側は1間となっているが、検出面が削平を受けていることを考慮すれば、梁間2間であった可能性も考えられる。

280は7号柱穴から出土した土師質土器杯口縁である。法量・形態から、14c末葉から15c前葉の所産と考えられる。

2号掘立柱建物（図39，図版13）

トレンチ東部で検出した南北棟と考えられる掘立柱建物である。建物主軸は、座標北から102°東偏し遺跡周辺の条里型地割に合致する。南半部が調査区外となるが、現状での規模は、桁行2間（4.72m）、梁間1間（1.76m）、床面積8.3m²を測り、梁間は更に南側へ延びることが予想される。桁行の柱間は、西から1.5m、1.5m、1.6mとなり、柱通りも良い。

時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、建物主軸や埋没土の特徴から見て14～15cの所産と考えられる。

3号掘立柱建物（図39，図版13）

トレンチ東部で4号掘立柱建物と重複して検出された南北棟の掘立柱建物である。主軸は座標北から170°東偏し、遺跡周辺の条里型地割に合致している。北半部が調査区外となるが、現状での規模は、桁行2間（3m）、梁間1間（1.8m）、床面積は5.4m²を測る。柱間は、東側桁行で1.4mである。検出範囲の様相から見て、桁行方向で更に北側に延びることが予想されるが、梁間は調査範囲内で収まると見られることから、小規模な建物であることは確定的である。

出土遺物には、11号柱穴から出土した土師質土器足釜口縁281が見られる。鍔部は矮小であるが、断面が方形のものであり、14cを大きく逸脱しない時期の所産と考えられる。

4号掘立柱建物（図39，図版13）

トレンチ東部の3号掘立柱建物と重複する位置において検出された東西棟の建物である。主軸は座標北から105°東偏し遺跡周辺の条里型地割に合致している。建物北半部が調査地外となるが、現状で桁行

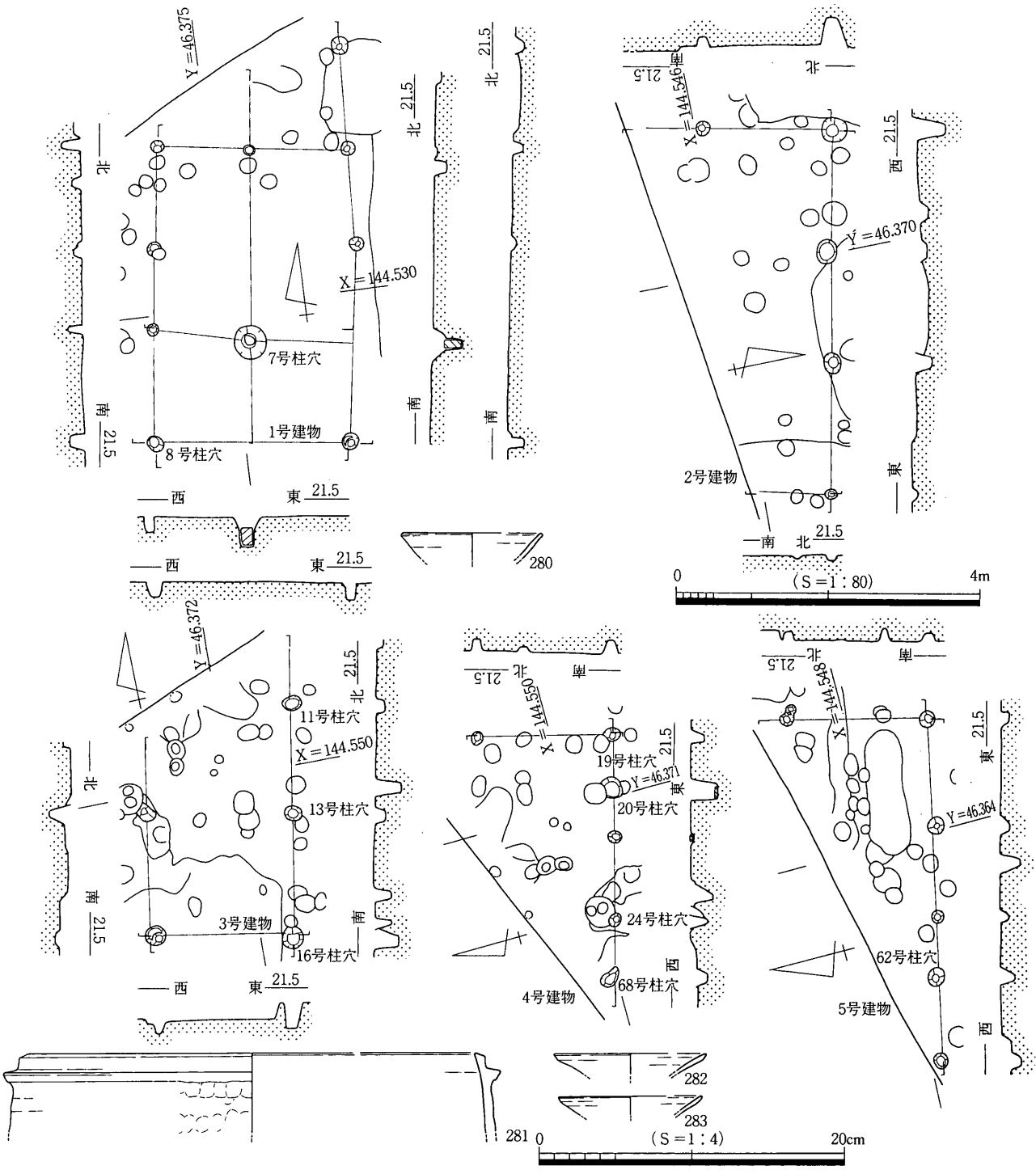


図39　G１トレンチ１～５号建物平・断面及び出土遺物

４間(3.6m)、梁間１間(1.8m)、床面積は6.48m²を測る。20・68号柱穴は、柱筋に合致することや埋没土の特徴から建物に含めて捉えているが、20号柱穴は、隅柱である19号柱穴との距離が近すぎることや、含めて考えると柱間が一定しないこととなり、本来的には別の建物に伴うものである可能性もある。

出土遺物には、24号柱穴から出土した土師質土器杯282、20号柱穴から出土した土師質土器杯283が見られる。法量や低平化した器高から、15ｃ前葉の所産と考えられる。

５号掘立柱建物（図39，図版13）

トレンチ中央部北寄りの部分で検出した東西棟の建物である。主軸は座標北から101°東偏し遺跡周辺

の条里型地割に合致している。北側の約半分が調査地外となるが、現状で梁間１間(1.8m)、桁行２間(3.4m)、床面積6.12m²を測る。検出状況から見て、桁行・梁間ともに更に伸びる可能性が高い。埋没土はすべて褐灰色シルトから構成されており、柱穴が小規模であった為、柱痕等の確認が出来ていない。

出土遺物は、62号柱穴より土師質土器杯細片が見られたが、小片であることから図化するに至っていない。埋没土の特徴から見て、トレンチ内の他の建物と同様に14～15ｃ代に機能していた建物と推察される。

１号溝（図40，図版13）

トレンチ東部を条里型地割の方向で南北に伸びる溝である。本トレンチ内の掘立柱建物との位置関係や、西側の予備調査29トレンチで集落に関わる遺構を一切確認していないことから、当該期の集落の東限を示す溝である可能性が高い。

出土遺物には、土師質土器杯284、土師質土器足釜脚285・286、土師質土器擂鉢287～299、土師質土器鍋290が見られる。287～290は口縁部形態などから14ｃ末葉から15ｃの国分寺楠井窯産の製品と考えられる。これら出土遺物が示す時期は、トレンチ内の建物の帰属時期と概ね符合するものである。

２号溝（図40，図版13）

トレンチ東部の１号溝から、東へ派生する小溝である。出土遺物には土師質土器杯291、土師質土器足釜292が見られる。

５号溝（図40，図版13）

トレンチ西部において検出した溝である。方向はやや東へ振れるが、概ね遺跡周辺の条里型地割に合致するものである。また、本溝の東西には、同様の流下方向をもつ６・９号溝が存在すると同時に、集落の建物を構成する柱穴の分布が粗になる傾向を見せることから、集落の西限を示す溝である可能性が高い。

出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴や流下方向・検出位置から14～15ｃの所産と考えられる。

６号溝（図40，図版13）

トレンチ西側で検出した南北方向の溝である。位置関係や柱穴の分布状況から、集落の西限を示す溝である可能性が高い。流下方向は、遺跡周辺の条里型地割にほぼ合致するものである。トレンチ北部では、上面幅1.2m深さ0.15mを測るが、南部では東側に張り出すとともに５号溝を切り込む。埋没土中には、土器片に加えて安山岩の亜角礫が見られた。

295～303は出土遺物である。293・294は土師質土器小皿。295～297は扁平な器高をもつ土師質土器杯である。298は東播系須恵器捏鉢口縁部であり、最末期の形態を呈する。299は瓦質焼成の鉢底部片である。300・301・302は土師質土器足釜。303は土師質土器鍋口縁部であり、口縁部形態から国分寺楠井窯の製品と見られる。

土師質土器小皿・杯の形態や法量、国分寺楠井窯産の土師質土器口縁部や東播系須恵器捏鉢の口縁部形態などから、14ｃ中葉から15ｃ世紀前葉の土器群と考えられる。これらの土器群の年代間から、本溝は15ｃ前葉に埋没したものと推定する。

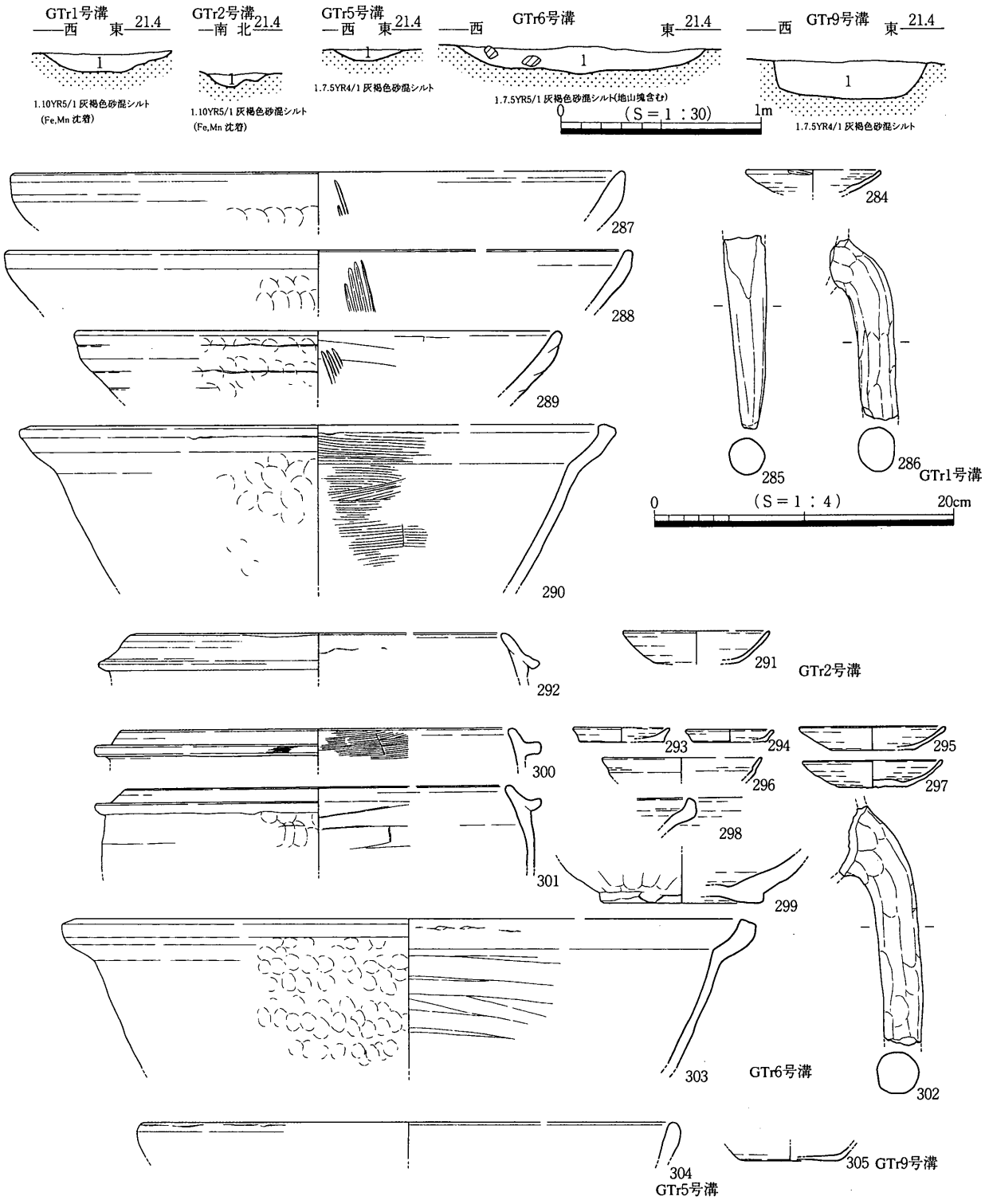


図40　Ｇ１トレンチ１・２・５・６・９号溝断面及び出土遺物

９号溝（図40，図版13）

トレンチ西部で検出された溝である。１・２号井戸西側を条里型地割の方向で南北に伸びる。位置関係から、５・６号溝とともに、本トレンチの集落の西限を示す溝である可能性が高い。

出土遺物には、土師質土器杯底部片305、国分寺楠井窯産と見られる土師質土器擂鉢小片304がある。土師質土器擂鉢の口縁部形態から、15ｃ代に埋没した溝と考えることができる。

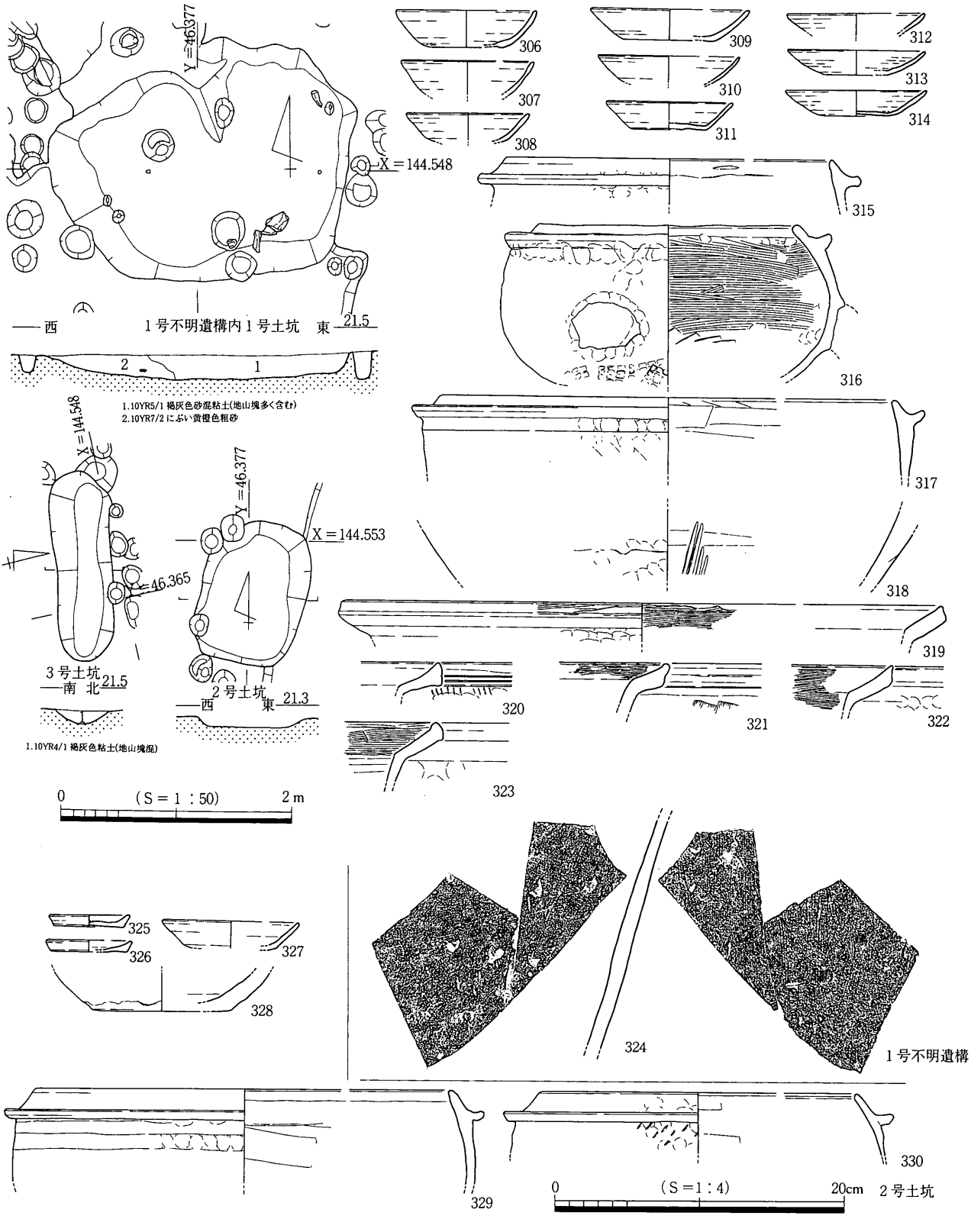


図41　G１トレンチ１～３号土坑平・断面及び出土遺物

１号土坑（図41）

トレンチ東部で検出した土坑である。長軸2.6m、短軸2.0m程の楕円形を呈し、残存深度0.2mを測る。埋没土中には、地山塊が多く含まれることから、掘削後の早い段階での埋め戻しが想定できる。306～324の出土遺物は、埋め戻しの際に一括して廃棄されたものと考えることができる。

305～314は土師質土器杯。315・316は土師質土器足釜である。318は土師質土器擂鉢の胴部片。319～323は土師質土器鍋口縁部であり、319・320の口縁端部外面はハケ状工具によって確実に面取りされている。324は土師質よりも硬質に焼き上げられた産地不明の甕胴部片と見られ、外面にはケズリ調整が顕著である。

土師質土器杯の法量・形態や土師質土器鍋の口縁形態から、14ｃ中葉から後葉にかけての一括資料とすることができる。

２号土坑（図41）

トレンチ東部で検出した土坑である。長軸1.2m、短軸0.9m程の隅丸長方形を呈し、残存深度は0.1mを測る。出土遺物には、土師質土器小皿325・326、土師質土器杯327、東播系須恵器捏鉢底部328、土師質土器足釜329・330が見られる。土師質土器小皿・杯の法量及び形態から、14ｃ中葉から後葉の所産と推定することができる。

３号土坑（図41）

トレンチ中央部で検出された長さ1.6m、幅0.5m、深さ0.1mを測る舟形土坑である。出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から14～15ｃ代の所産と考えることができる。

１号井戸（図42）

トレンチ西部で検出した井戸である。南部が調査区外、東部を２号井戸に切り込まれていることから、全体の形状は不明ながら、方形に近い断面形や埋没土が裏込めとも考えられる埋め土で構成されることから、井戸と判断した。井戸枠の部分より広い掘り方を設ける２号井戸を参考にすると、南側の調査区外の部分に井戸枠の存在を推定することができる。

331～333の土師質土器杯は埋め土と考えられる層位から出土している。法量や形態から、14ｃ前葉から中葉にかけてのものと見られ、本井戸の構築時期を推定する手掛かりとしておく。

２号井戸（図42，図版14）

トレンチ西部で確認された井戸である。約半分が調査区外となるが、現状での掘り方は、長軸2.5m、短軸2.0m程を測る隅丸長方形を呈し、人頭大の砂岩礫を中心とした石材を円形に配し井戸枠を構築する。

掘り方は、上位が漏斗状に開くものであり、井戸枠の部分に比べて広く掘削されていることがうかがえ、作業用のスペースを確保したもの見られる。井戸枠は、下位に厚さ0.8m直径0.6m程の曲げ物を最低１段埋置し、上位には砂岩礫を直径1.0m程の円形に配したものを、高さ1.2m程にわたって積み上げて構築されている。

トレンチ際で検出していることや安全勾配の確保から、最下層までの調査が行えず、曲げ物の回収も不可能であった。調査範囲での検出面から下層の井戸枠の曲げ物まで深さは、1.4mを測る。

334～341は石積みの井戸枠上位から、342・343は曲げ物の井戸枠内下位より、344～346は井戸枠裏込めと考えられる層位からの出土遺物である。

334は土師質土器小皿。335～338は土師質土器杯である。339～341は土師質土器足釜であり、340の鍔部はハケ状工具によって面取りされている。342は完形品の土師質土器小皿である。343は土師質土器足

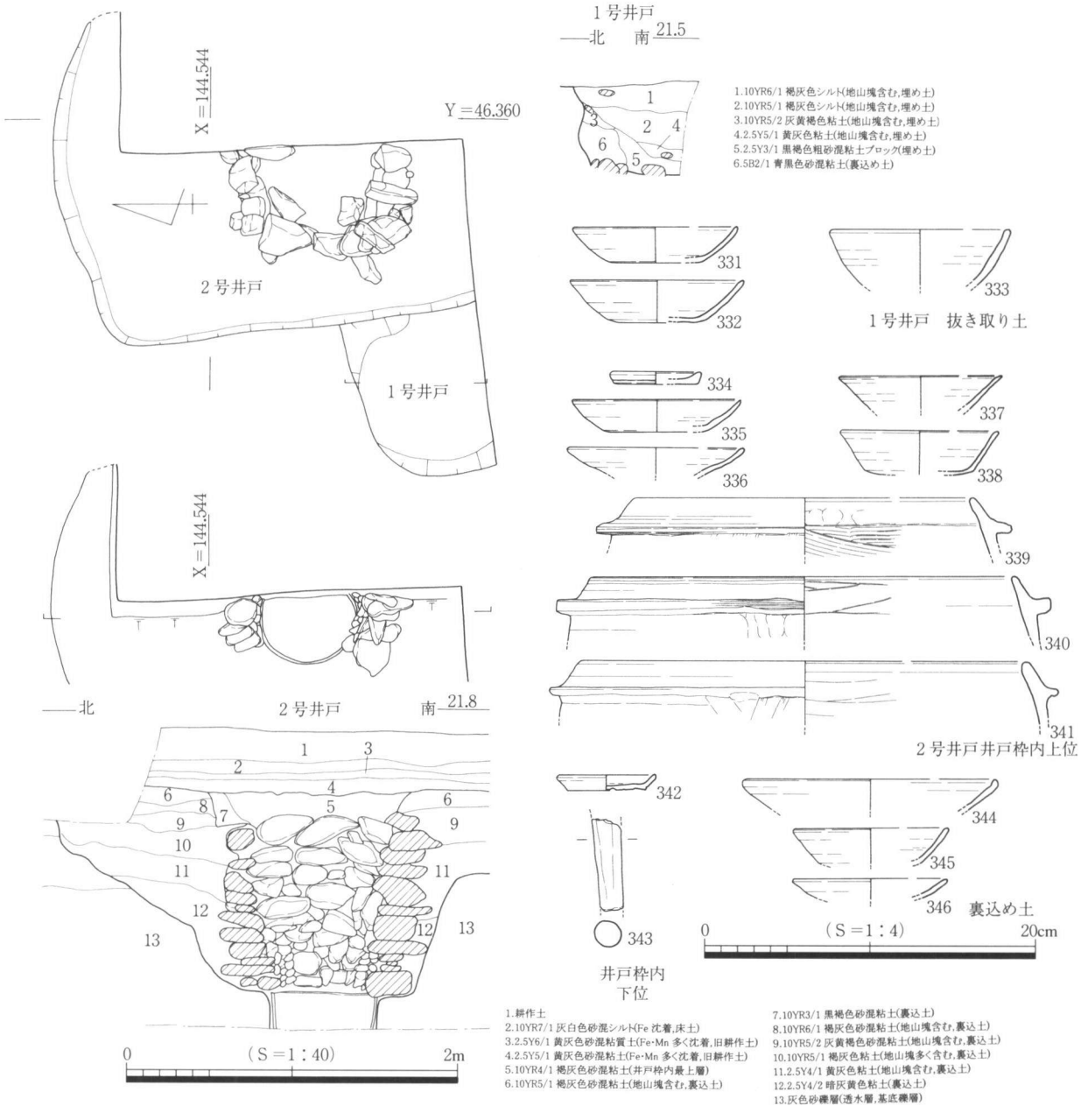


図42　Ｇ１トレンチ１・２号井戸平・断面及び出土遺物

写真８　Ｅトレンチ２号井戸全景

写真９　Ｅトレンチ２号井戸断面　西から

釜脚部片。344は外面に炭素分の吸着が見られる土師質土器皿。345・346は土師質土器杯である。

古相を示すと考えられ、鍔部をハケ状工具で面取りする土師質土器足釜340も見られるが、土師質土器小皿・杯の形態や法量からは、14ｃ中葉から末葉にかけての土器群と考えられることから、本井戸を14ｃ末葉に廃絶したものと推定しておきたい。

柱穴出土遺物（図43）

307～372は、調査区が小規模なものにとどまることから、建物復元に至らなかった遺物である。詳細な出土遺構については、表４を参照していただきたい。

番号	遺構名	器種名	番号	遺構名	器種名
347	12号柱穴	土師質土器小皿	360	52号柱穴	土師質土器杯
348	32号柱穴	土師質土器小皿	361	41号柱穴	土師質土器杯
349	2号柱穴	土師質土器小皿	362	16号柱穴	土師質土器杯
350	39号柱穴	土師質土器小皿	363	12号柱穴	土師質土器杯
351	28号柱穴	土師質土器皿	364	54号柱穴	土師質土器杯
352	45号柱穴	土師質土器皿	365	46号柱穴	土師質土器杯
353	35号柱穴	土師質土器皿	366	54号柱穴	土師質土器鍋
354	34号柱穴	土師質土器皿	367	35号柱穴	土師質土器鍋
355	25号柱穴	土師質土器皿	368	53号柱穴	土師質土器鍋
356	58号柱穴	土師質土器杯	369	51号柱穴	土師質土器土鍋
357	48号柱穴	土師質土器杯	370	57号柱穴	土師質土器擂鉢
358	51号柱穴	土師質土器杯	371	65号柱穴	土師質土器土鍋
359	50号柱穴	土師質土器杯	372	42号柱穴	元豊通寶

表４　Ｇ１トレンチ柱穴出土遺物一覧

遺構外出土遺物（図43）

373～379は、検出面上位に見られる②層中からの出土遺物である。373は中国産白磁皿。374～377は土師質土器杯である。378は土師質土器鍋。379の銭貨は、鋳上がりが悪く判読ができない。

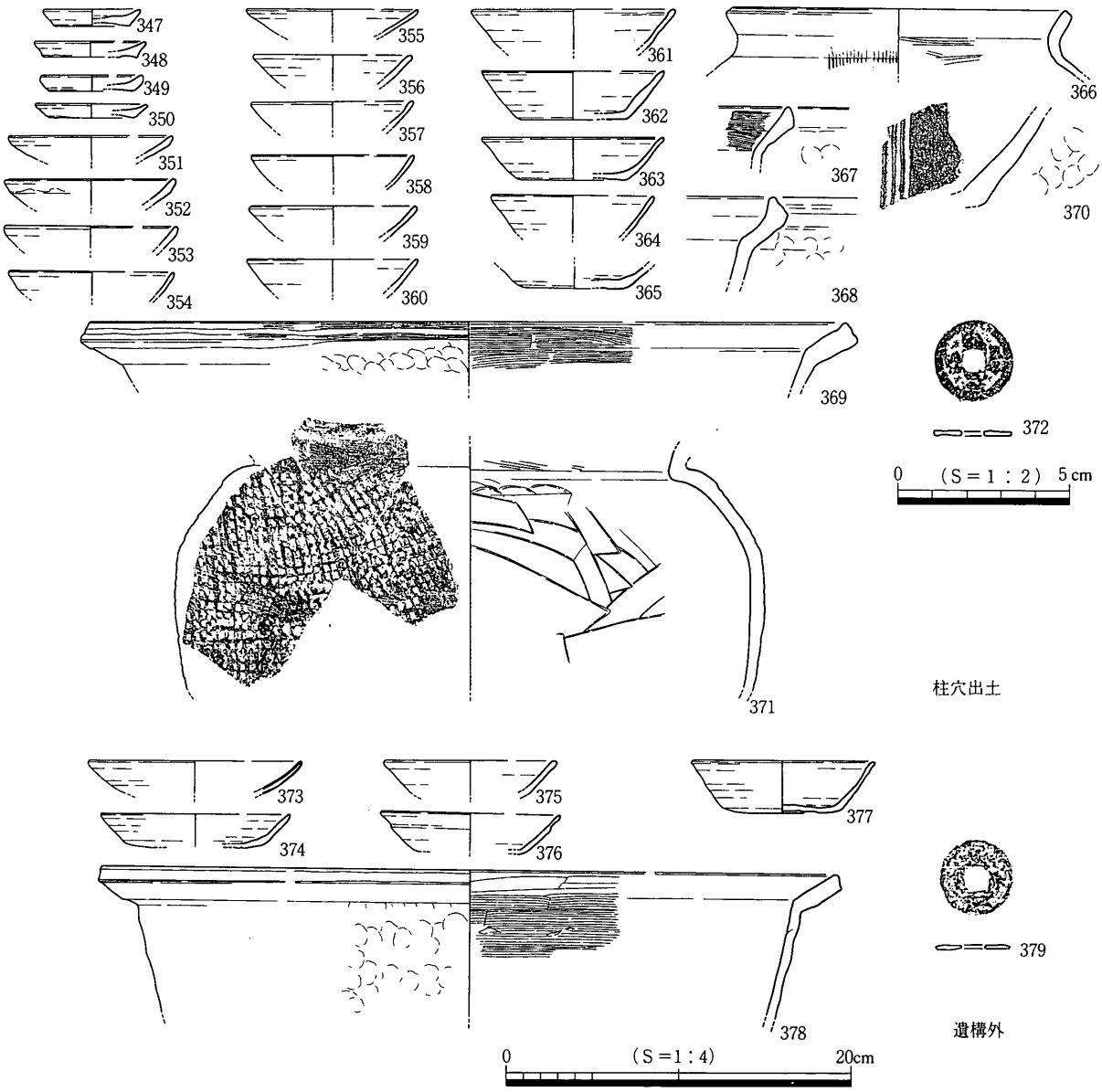


図43　Ｇ１トレンチ柱穴・遺構外出土遺物

Ｇ２トレンチ１号溝（図44）

本トレンチは、条里型地割坪界溝の確認を行うことを目的として設定したトレンチである。トレンチは南北２箇所に設定し、西側の現在の水路に重複する形で１号溝を検出している。東側の立ち上がりは、水路設置に伴う攪乱によって失われているが、現状で上面幅1.8m残存深度0.6mを測る。北側のトレンチでは、やや東へ振れるものの、条里型地割の方向に合致し、先行する坪界溝と判断できる。

堆積物は、下層である⑩層と、これらより上位に見られるものに大きく二分して捉えることができる。上層は黄灰色シルトを基本とした堆積物で構成され、下層はラミナが顕著に認められる細砂層である。東側の立ち上がりのラインが乱れることや、層境が明瞭なことから、上層は掘り直された後の堆積物である可能性が高い。南側のトレンチの立ち上がりに見られる安山岩の亜角礫は、下層に帰属するものである。

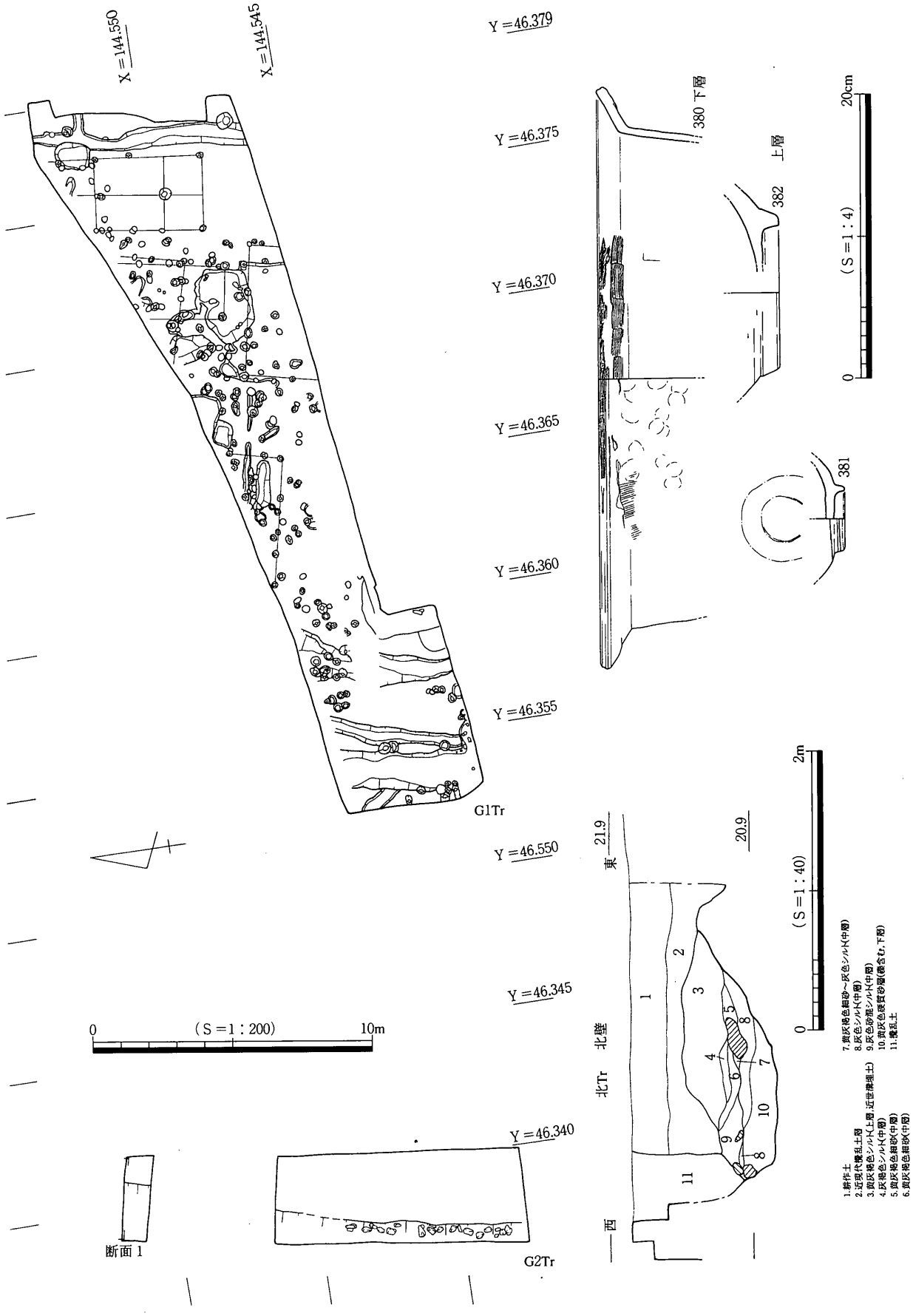


図44　Ｇ１・２トレンチ平面，Ｇ２トレンチ断面及び出土遺物

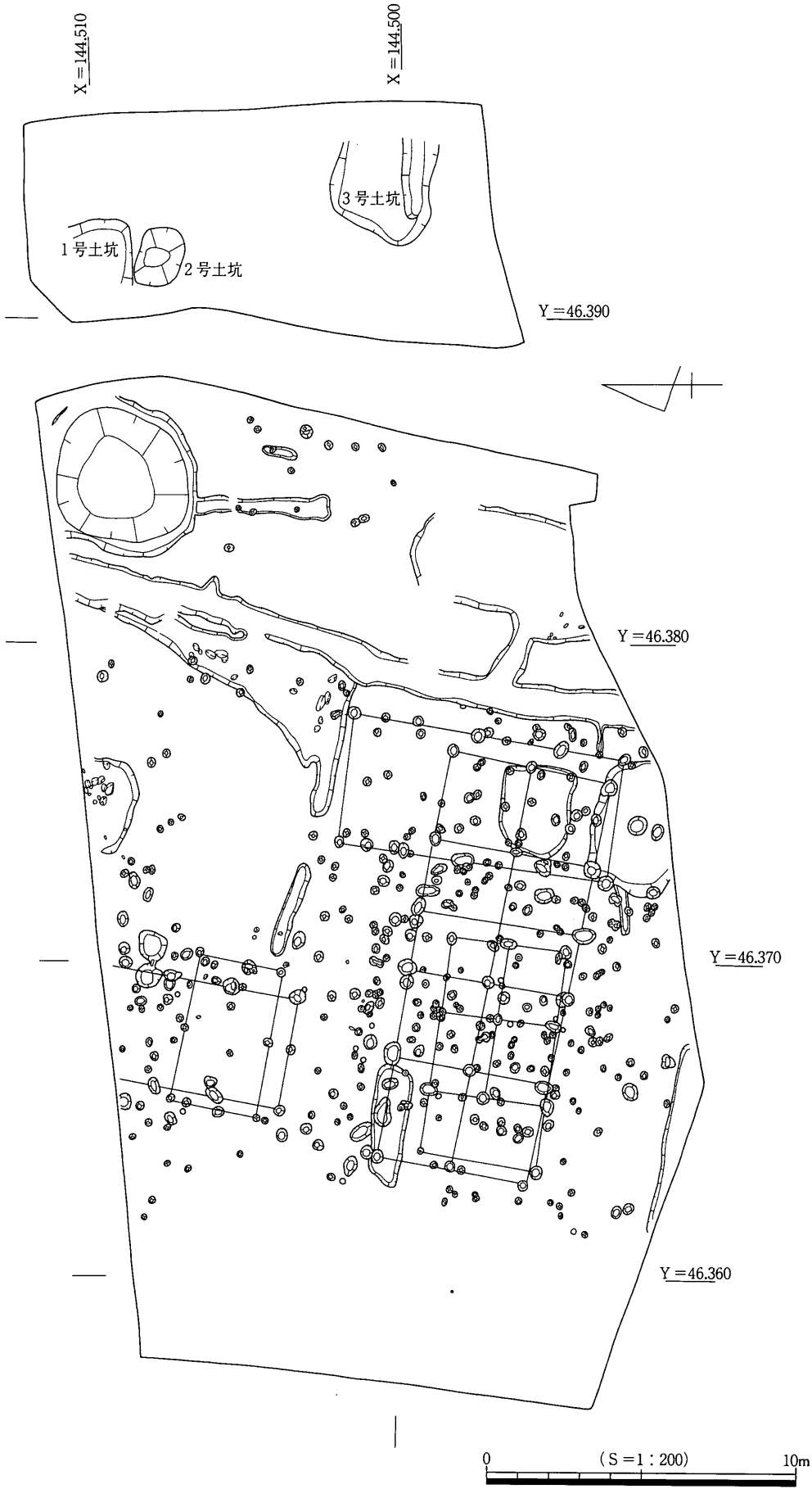


図45　E・Iトレンチ平面

出土遺物は、下層から土師質土器鍋380、上層から肥前系磁器碗381、肥前系陶器鉢382が出土している。下層出土の土師質土器鍋380は、形態や口縁端部外面をハケ状工具によって面取りされることから見て、14ｃ前半に遡る可能性が高く、本溝の掘開時期を示す遺物と考えたい。

第10項　Ｉトレンチ（図45・46）

本トレンチはＥトレンチの東側に隣接した部分に設定したものである。調査前は宅地への侵入路として利用されており、これに伴う1.2m程の盛土とその下位の0.2m程の旧耕作土を除去した段階で遺構検出面である黄灰色シルトに至る。Ｅトレンチで確認された14・15ｃ代の集落は確認されず、近世段階の土坑を３基検出するに留まった。Ｅトレンチの中世集落は、Ｅトレンチ東側の11・13号溝のラインで納まるものと見られる。

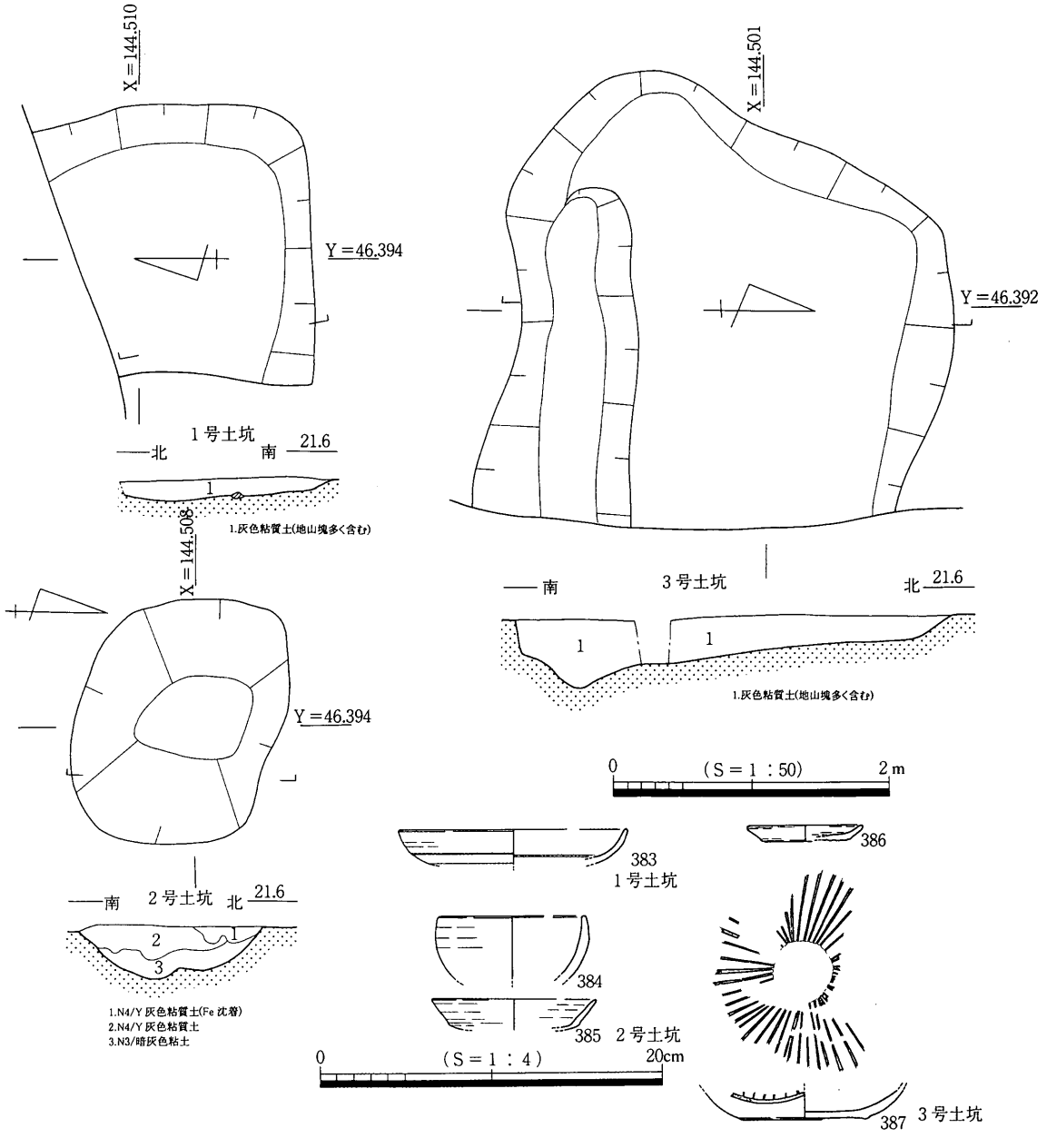


図46　Ｉトレンチ１～３号土坑平・断面及び出土遺物

1号土坑（図46）

トレンチ北西部で検出した土坑である。南部を2号土坑によって切られることや、西側が調査区外になることから全体形は不明である。

埋没土には、地山塊が多く含まれ、掘削後の早い段階での埋め戻しが想定できる。出土遺物には、肥前系磁器皿383が見られる。

2号土坑（図46）

トレンチ北西部で1号土坑を切り込む形で検出した土坑である。長軸1.7m、短軸1.5m程の歪な隅丸長方形を呈し、残存深度0.4mを測る。

出土遺物には、京焼風陶器碗384、土師質土器杯385が見られる。近世段階の1号土坑を切ることから見て、中世段階の土師質土器杯384は混入品と考えられる。

3号土坑（図46）

トレンチ南東部で検出した大形の土坑である。東側が調査区外となるが、現状で長軸3.3m短軸3.1m程の歪な楕円形を呈し、0.5m程の残存深度を測る。埋没土には、地山塊が多く含まれ、1号土坑の状況に類似したものであった。

出土遺物には、土師質土器小皿380、漆器椀387が見られる。380は14c末葉の所産と思われるが、埋没土の状況が1号土坑と類似することから、本遺構は近世段階の遺構と考えたい。

第11項　Fトレンチの遺構・遺物（図47～49, 図版15）

本トレンチは、調査対象地北東部に位置する。調査前は店舗として利用されていた。基本層序は、1.2m程の盛土層下位に、国道建設以前の耕作土が0.3m程見られる。更にこの下位には、0.2m程の旧耕作土である灰色シルトが0.2m程見られ、検出面である黄灰色シルト層に至る。旧耕作土は、他のトレンチの様相から判断して、中世から近世にかけてのものと見られるが、遺物を殆ど含んでいない。

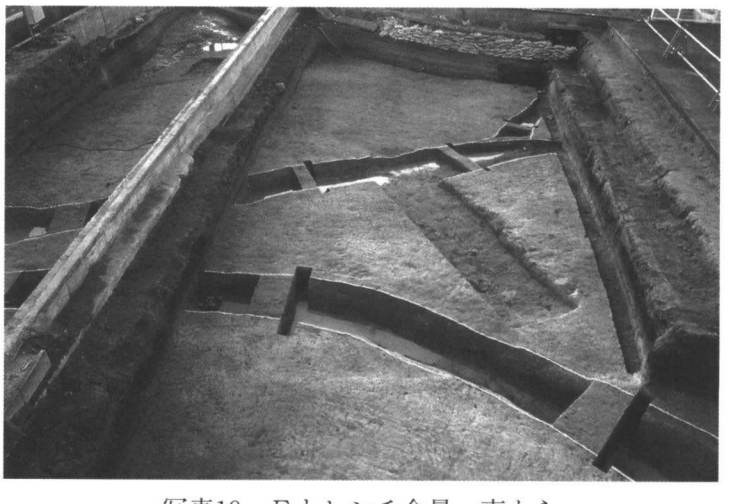


写真10　Fトレンチ全景　東から

検出面は、東から西へ傾斜していく状況が見られる。この傾斜は、本トレンチ西側の予備調査17トレンチにおいても確認された谷地形へ続くものと考えられる。

主要遺構は、古墳時代後期の溝を中心に検出しており、トレンチ南西部では、弥生時代以降の自然流路を確認している。また、本トレンチの部分は、昭和37年撮影の空中写真からの推定から、所在不明となっている中森1号墳に隣接する位置にあると考えられたが、関連する遺構は確認できなかった。中森2号墳の詳細な内容は不明ながら、須恵器短頸壺と土師器杯が以前に表採されていることから、古墳であった可能性も考えられる。調査対象地内に、その痕跡が見られないことから、国道建設によって破壊された可能性が高い。

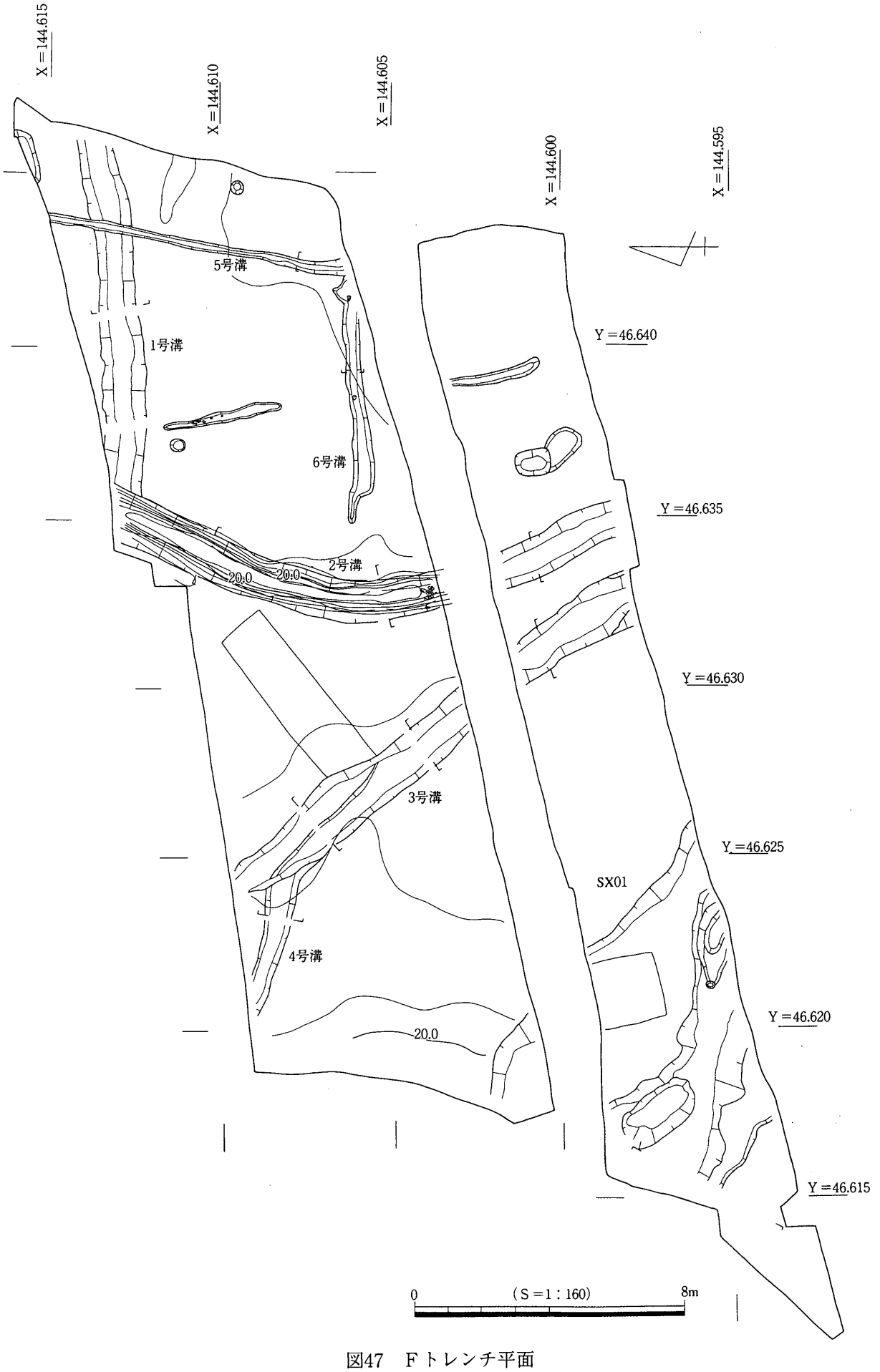

X＝144.615
X＝144.610
X＝144.605
X＝144.600
X＝144.595
Y＝46.640
Y＝46.635
Y＝46.630
Y＝46.625
Y＝46.620
Y＝46.615
5号溝
1号溝
6号溝
2号溝
20.0
20.0
3号溝
4号溝
20.0
SX01
0
(S＝1：160)
8m

図47　Fトレンチ平面

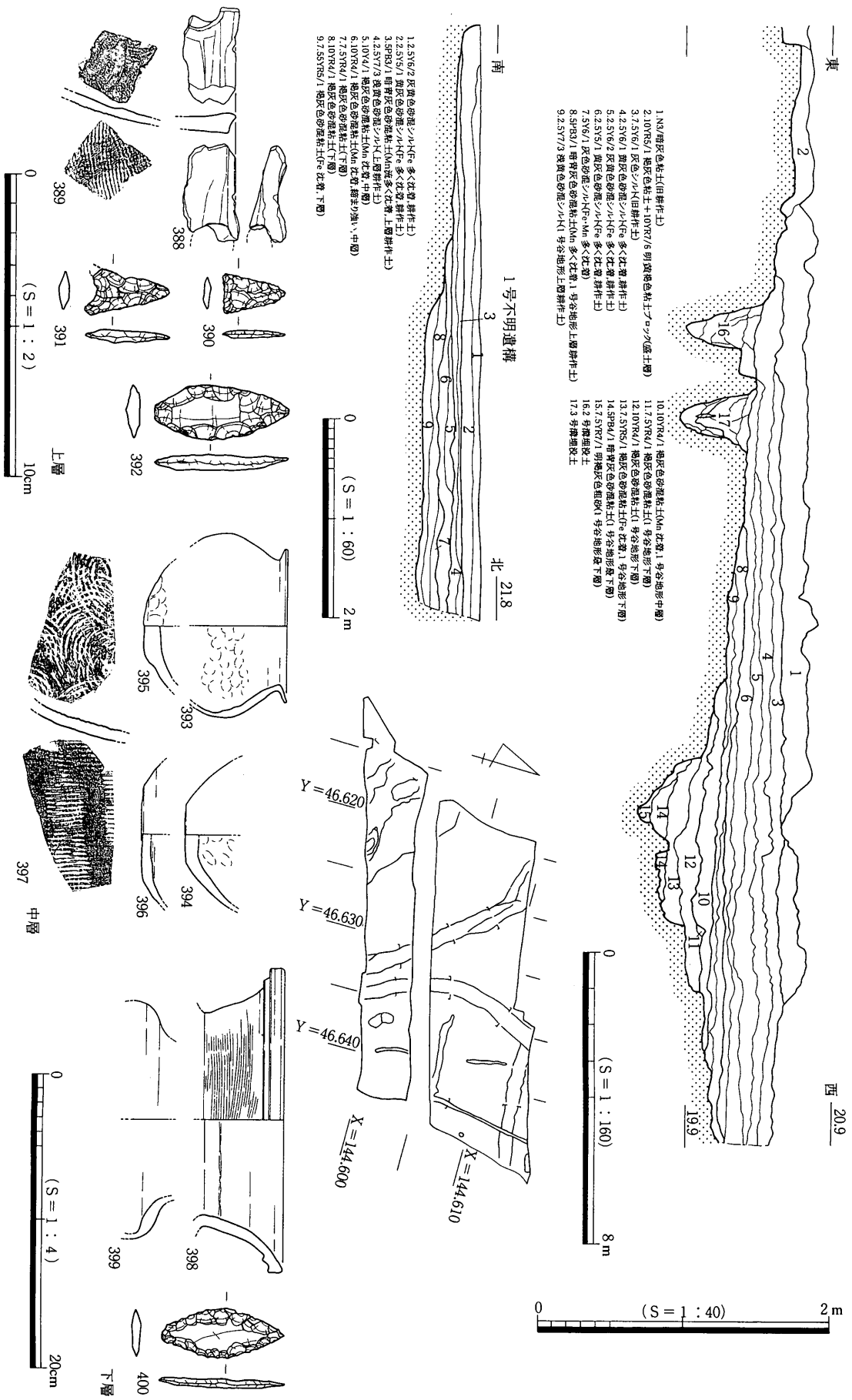


図48　Ｆトレンチ１号谷地形断面及び出土遺物

谷地形（図48，図版16）

トレンチ南西部で検出した自然流路である。地形面の傾斜に添う形で南西から北東方向へ向かって流下しており、トレンチ内の最大幅は５ｍ前後を測る。底面には凹凸が激しい。堆積層は大きく３つに区分することができる。下層から中層の堆積物は、細砂を含んだ粘土層であり、恒常的な流水ではなく淀んだ状態での堆積環境が想定できる。上位は、灰色系シルトを基本とし、当初の流下位置を越えて水平堆積することと、層内にラミナを認めないことから、埋没後の凹地を利用した水田耕作土である可能性が高い。

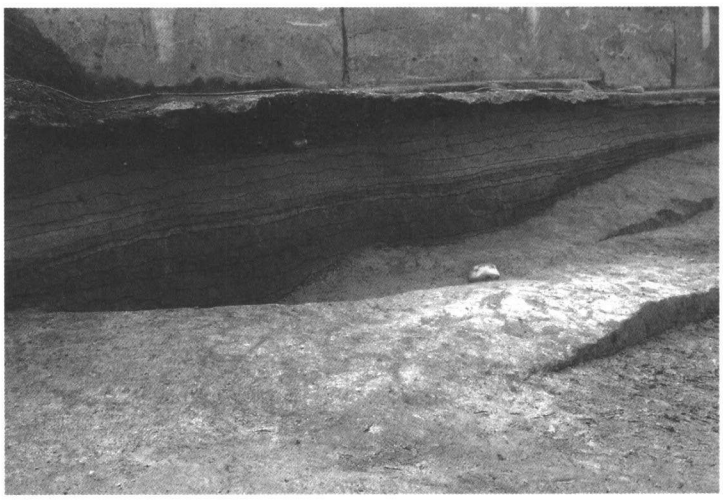


写真11　Ｆトレンチ谷地形全景　北東から

388～392は上層の水田耕土からの出土遺物。388は土師質土器把手付鍋であり、16ｃ頃の年代が想定される。389は須恵器甕胴部片である。390は平基無茎三角式石鏃、391は凹基無茎三角式石鏃、392は有茎柳葉式石鏃である。いずれもサヌカイト製で混入品と見られる。

393～397は中層出土遺物。393・394は胎土中に角閃石を認める弥生終末期の小型甕。395は弥生終末期の鉢底部片である。396は須恵器杯身であり、７世紀後半から８世紀前半の所産と考えられる。397は須恵器甕胴部片である。

398～400は下層出土遺物。398は須恵器甕口縁部であり、面取りされた口縁端部下に断面三角形の突帯を付与する。形態から、ＴＫ23型式と見られる。399は須恵器壺胴部片。400は有茎柳葉式石鏃である。

これらの出土遺物の年代から、本遺構は弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて埋積が進み、中世後半期には水田として利用されていた可能性が高い。

１号溝（図49，図版15・16）

トレンチ北東部をほぼ東西方向に延びる溝である。上面幅1.0m、深さ0.45mを測り断面形はＵ字形を呈する。埋没土は、複数の単位に分かれる褐灰色系のシルトを主体としており、中位には細かな地山塊を含み崩落土と考えられる土層を介在させて埋没している。ラミナの顕著な発達が見られないことから、激しい流水状況は想定できない。

出土遺物は見られなかったが、古墳時代後期の２号溝に切られることから、それ以前の所産と考えることができる。

２号溝（図49，図版15・16）

トレンチ東部を南から北東方向へ延びた形で検出した溝で、断面形は図示したような逆台形を呈する。埋没土は、灰色系のシルトを中心とし流水堆積と細かな崩落土の互層からなる下層と、ほぼ埋没が進行した後の窪地に堆積したと考えられる上層の黒褐色系粘土に大きく二分される。流下方向がコンターラインにほぼ平行していることや、立ち上がりが急な断面形から見て、灌漑用の水路である可能性が高い。

401～408は下層出土遺物である。401～403は須恵器蓋杯である。404～408は須恵器杯身であり、408の底部外面には、ヘラ記号が認められる。

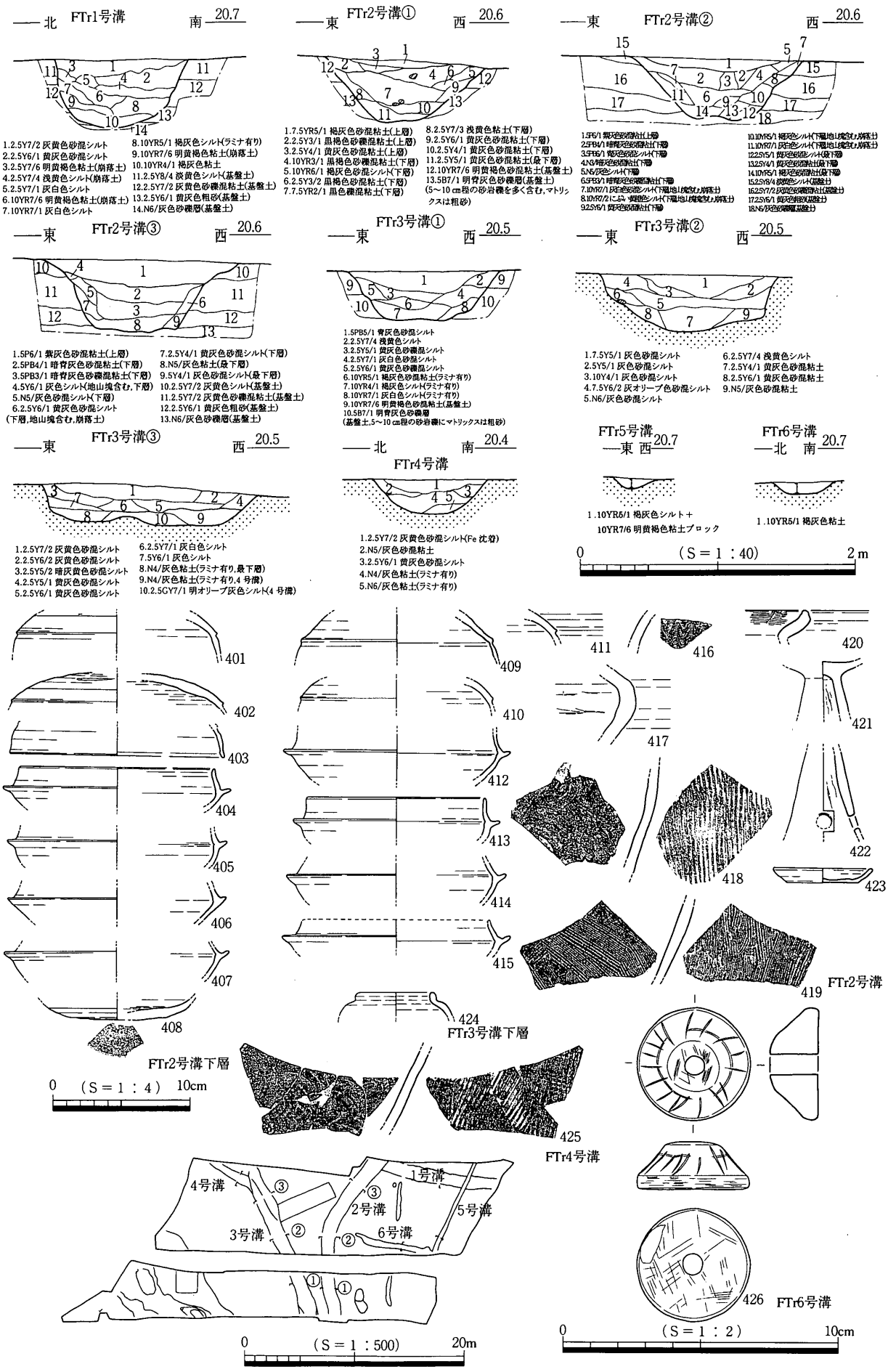


図49　Ｆトレンチ１～６号溝断面及び出土遺物

409～423は上層出土遺物。409～411は須恵器蓋杯。412～415は須恵器杯身である。416は外面に波状文が見られ、器壁の厚みから見て広口壺頸部片と考えられる。417は須恵器壺胴部片。418・419は須恵器甕胴部片であり、419は内外面にカキ目が見られる。420は土師器甕の口縁部、422は土師器高杯脚部片と見られる。

423は中世14ｃ代の土師質土器皿であり、他のものと明らかに時期を違えることから混入品と考えられる。

これらの蓋杯を中心とした須恵器の特徴を見ると、ＴＫ10型式からＴＫ43型式に相当すると考えられることから、６世紀後半を中心とした時期が想定され、本溝も該期に位置づけられる。

３号溝（図49）

トレンチ中央部を南から北西方向へ流下する溝である。断面形は逆台形であり、細砂がラミナ状に嵌入する灰色粘土～シルトを主体する堆積物で埋没している。後述する４号溝を切り込む形で検出しているが、トレンチ中央では、本溝の平面プランと重複する形で溝底に４号溝の残欠が見られることから、４号溝の流下位置をほぼ踏襲する形で本溝が掘開されたものと考えられる。

出土遺物には陶器瓶424が見られるが、流下方向が地形の制約を受けていると考えられることから、出土遺物の時期を援用して近世段階のものと考えるには無理がある。４号溝とほぼ同一の流下方向を示すことから、424を混入品と理解し、古墳時代後期の所産と推定する。

４号溝（図49，図版16）

トレンチ北西部で検出した溝である。先述のとおり、南端を３号溝に切り込まれるが北西方向へ延びている状況が見られる。出土遺物には須恵器甕425がある。詳細な時期比定に耐えられるものではないが、概ね古墳時代後期と捉えることができることから、本溝も該期と考えておく。

５号溝（図49）

トレンチ東部で検出した南北方向の溝である。上面幅0.3m深さ0.1m程を留めるに過ぎないが、トレンチ東側はかなりの削平を受けていることを考慮する必要がある。

出土遺物は見られなかったが、方向が遺跡周辺の条里型地割に合致することと、埋没土の特徴から中世以降の所産と考えられる。

６号溝（図49）

トレンチ東部で検出した東西方向の溝である。上面幅0.4m残存深度0.1mを測る。方向は、５号溝に直交する形で東西方向に延びる。出土遺物には、滑石製紡錘車426が見られる。しかし、本溝の方向が遺跡周辺の条里型地割に合致することから見て混入品と考えられる。他のトレンチの調査成果から見て、本溝は５号溝と同じく中世以降に掘開されたものと推定したい。

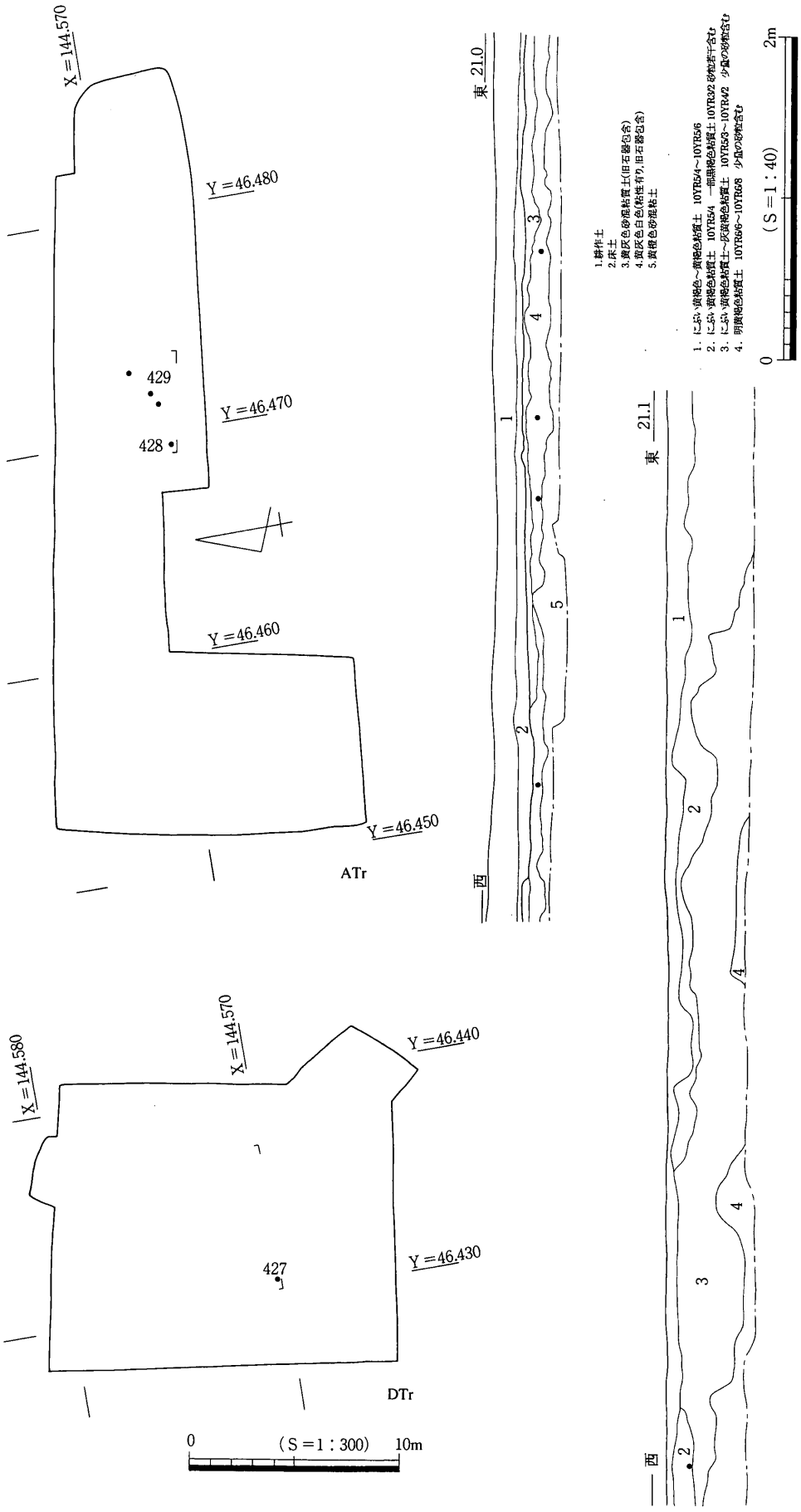


図50　A・Jトレンチ旧石器出土位置及び断面

第12項　旧石器の調査
（図50～61，図版３～６）

Ａ・Ｂ・Ｈ・Ｊトレンチでは、中世期の遺構検出面の下位から、旧石器類の出土を確認している。ここでは、その分布状況から、Ａ・Ｊトレンチ、Ｂ・Ｈトレンチの二つの調査区にまとめて記述を進めることとしたい。

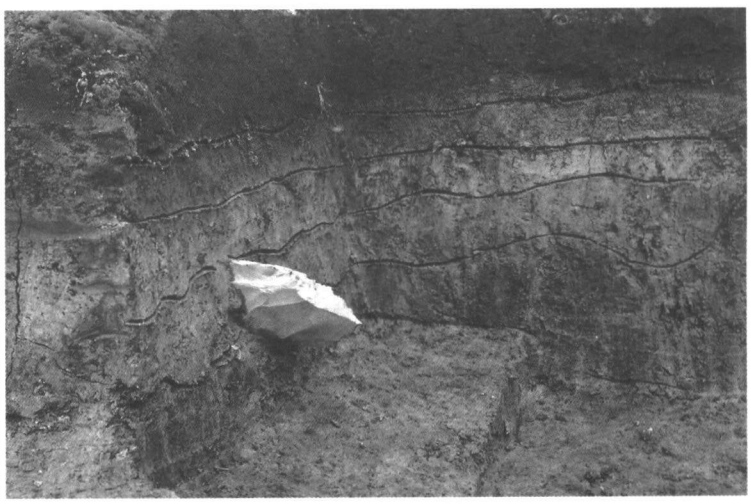


写真12　Ａトレンチ石核429出土状況　北から

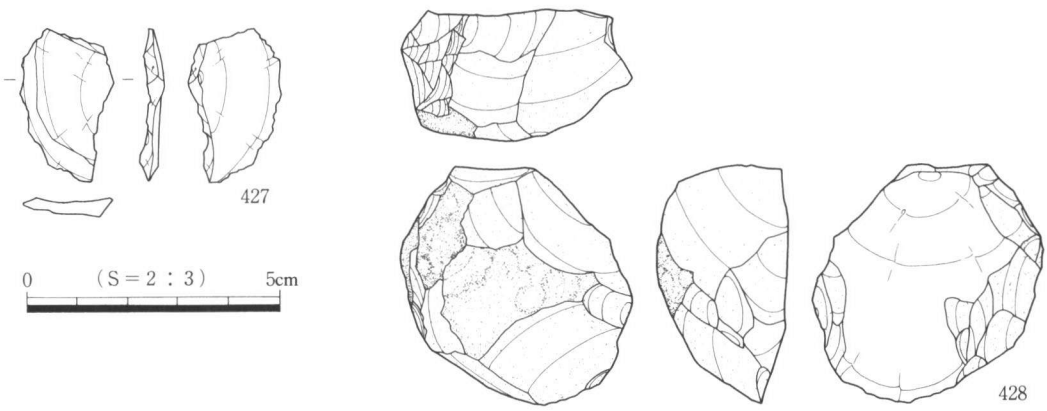


図51　Ａ・Ｊトレンチ出土旧石器その１

Ａ・Ｊトレンチ出土の旧石器（図50～52，図版３）

検出面下位において、２箇所に分かれて旧石器の出土を確認している。Ａトレンチでは、東部の４ｍ程の範囲に合計４点の旧石器の出土を確認した。内訳は、石核１点(サヌカイト)、剥片・砕片２点(サヌカイト)、ハリ質安山岩原石１点である。

これらは、４層とした黄灰色粘土中に含まれた状態で見られた。出土したレベルを確認すると、標高20.7ｍ程の高さで一定しており、余り上下動を受けた痕跡は見られない。

石器が包含される４層は、乾痕の状況から見てかなり早い段階で離水したことが伺える。掘削した範囲で基底礫層は見られないが、調査対象地全体の層相から、本トレンチの部分は自然堤防の縁辺部であった可能性が高い。少数に留まるものの、原位置に近い状態を保った小規模な石器ブロックとすることができる。

Ｊトレンチでは、Ａトレンチの状況を踏まえて全面に下層確認調査を実施したものの、サヌカイト製の横長剥片を１点採取するにとどまった。横長剥片は、２層とした黄褐色粘土中に見られ、巨視的にはＡトレンチの４層と類似した堆積層である。石器出土レベルより0.4ｍ程下位には、基底礫層が見られ、調査対象地全体の層相からは、トレンチ全体が自然堤防もしくはその縁辺部に相当する可能性が高い。

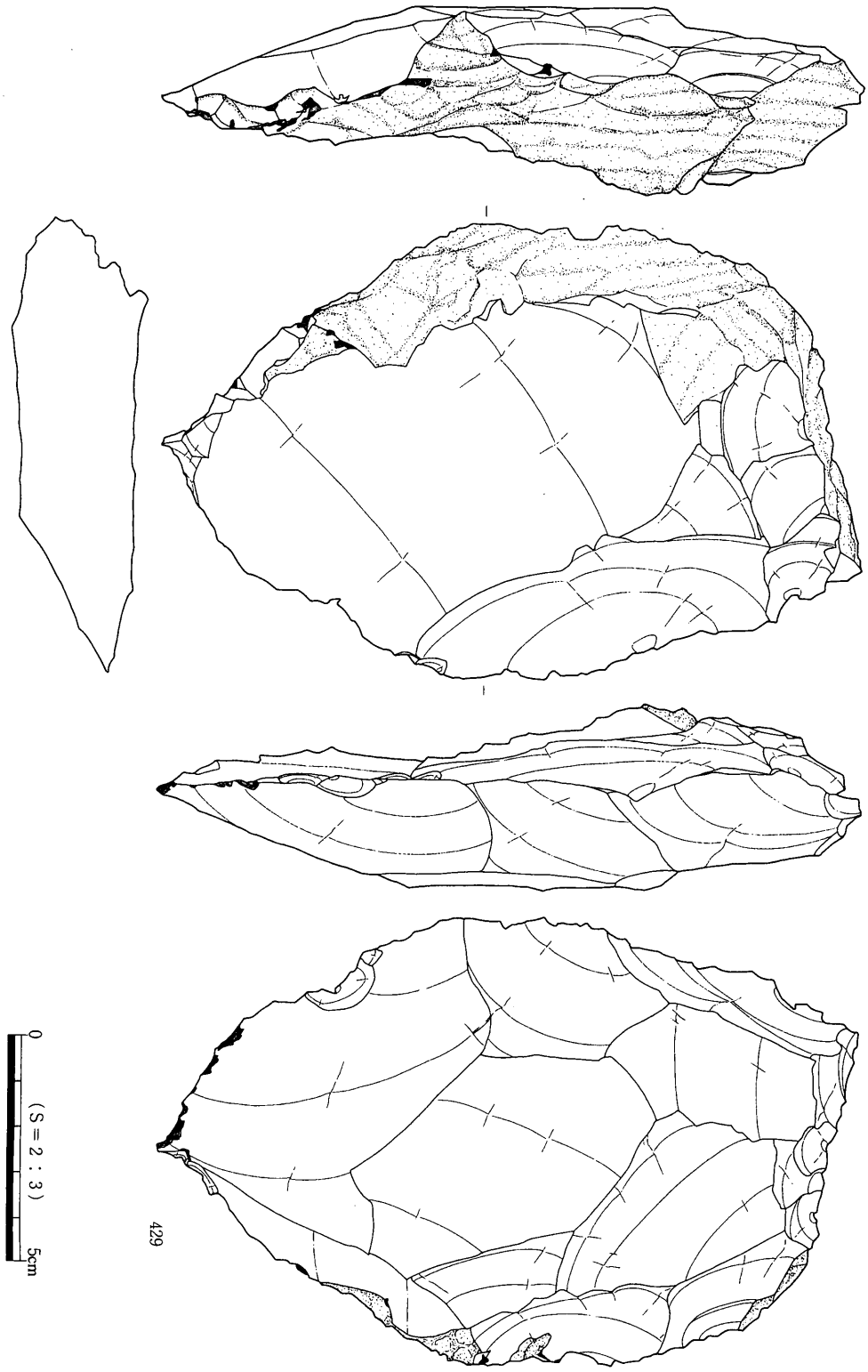


図52　A・Jトレンチ出土旧石器その2

427は背面にやや大きなネガ面をもつ横長剥片である。打面部の厚みから見て目的剥片とは考えにくい。
428はハリ質安山岩の原石であり、主だった加工は加えられていない。
429はサヌカイト製の石核である。上面及び一側縁に自然面をとどめた厚さ2.6cmほどの板状素材に、一側縁を中心にして交互剥離を用い横長剥片を剥取している。あまり消耗されていない段階で破棄された

ト考えられ、最終の作業面はｃ面右側の幅7.9㎝程の剥離面である。

Ｂ・Ｈトレンチ出土の旧石器（図53～61，図版４～６）

Ｂトレンチ東部では、大きく３箇所に分かれた状態で旧石器の出土を確認している。トレンチ中央部を中心として、検出面上に基底礫層が露出する箇所が多く見られることから、トレンチ全体が旧中州（微高地）に相当するものと考えられる。基底礫層は東へ向かって若干傾斜するが、東側のＨトレンチにおいても、検出面から0.1m程下位の浅い位置で確認できることから、Ｂ・Ｈトレンチ全体が微高地と考えられる。

写真13　Ｂトレンチ全景　東から

Ｂトレンチでは、基底礫層上面に堆積した細粒堆積物である１～４層中に旧石器の包含が確認される。トレンチ東壁で行った火山灰抽出分析では、これらすべての層位から姶良丹沢火山灰と鬼界アカホヤ火山灰が混在して確認されている。堆積層が薄いこともあり、アカホヤは上層からの混入した可能性が高い。

写真14　Ｂトレンチブロック１・２全景　西から

Ｈトレンチ中央部では、基底礫層上面が凹地状に窪む箇所が見られた。凹地の堆積物を対象として実施した火山灰抽出分析では、Ｂトレンチと同じく最上層からＡＴとアカホヤが混在した状態で確認された。旧石器の段階には、基底礫層上面に一定程度の堆積物の供給があり、上面が平坦化していたものと考えられる。

以下、ブロック毎に出土石器を紹介する。

写真15　Ｂトレンチ東壁断面　南西から

ブロック１（図56～59，図版４）

ブロック１は、トレンチ北東部の直径10m程の円形の範囲に集中が認められる一群である。石器群の内訳は以下のとおりとなる。

ナイフ形石器１点(サヌカイト)、加

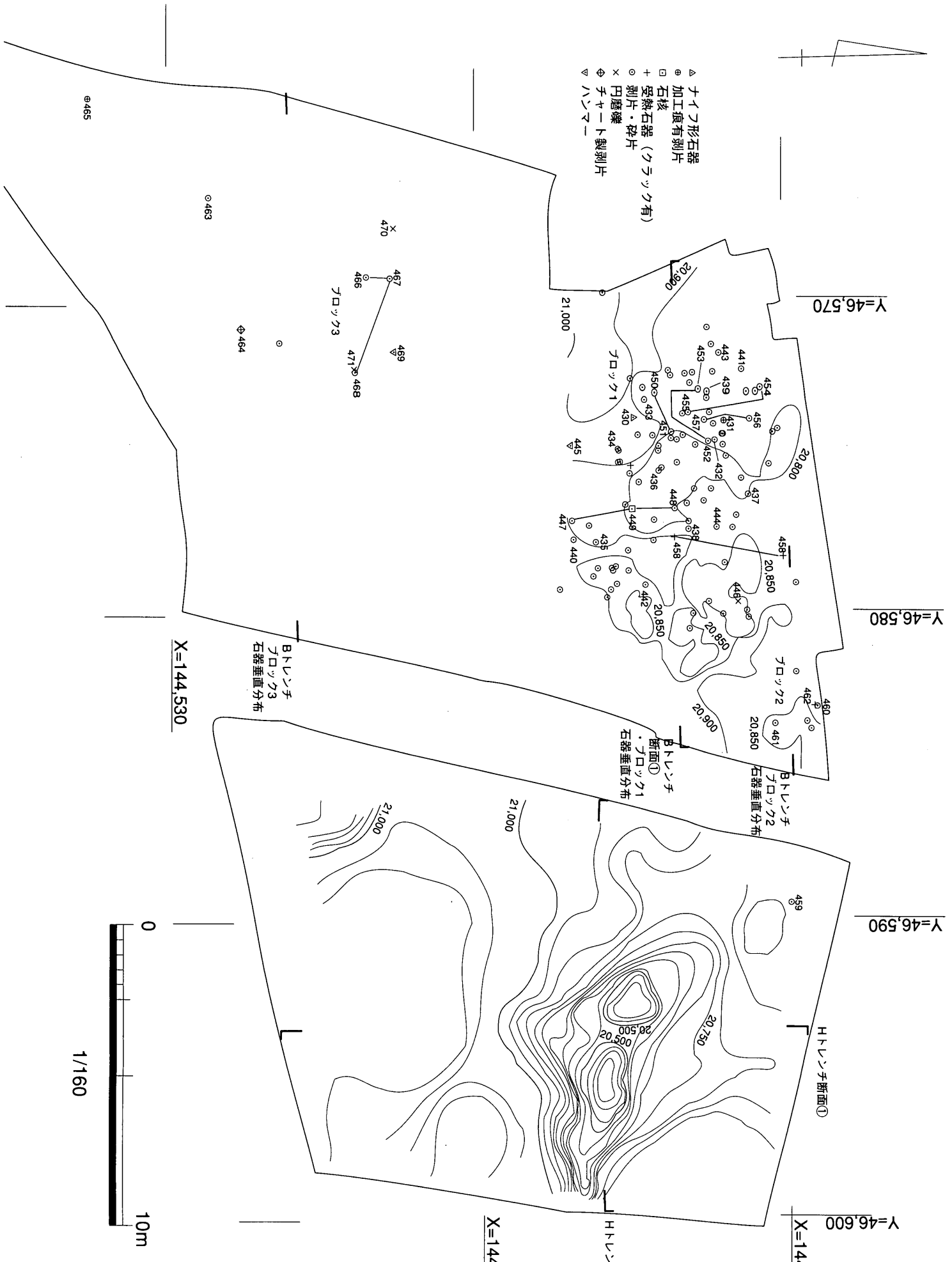


図53　B・Hトレンチ旧石器出土位置

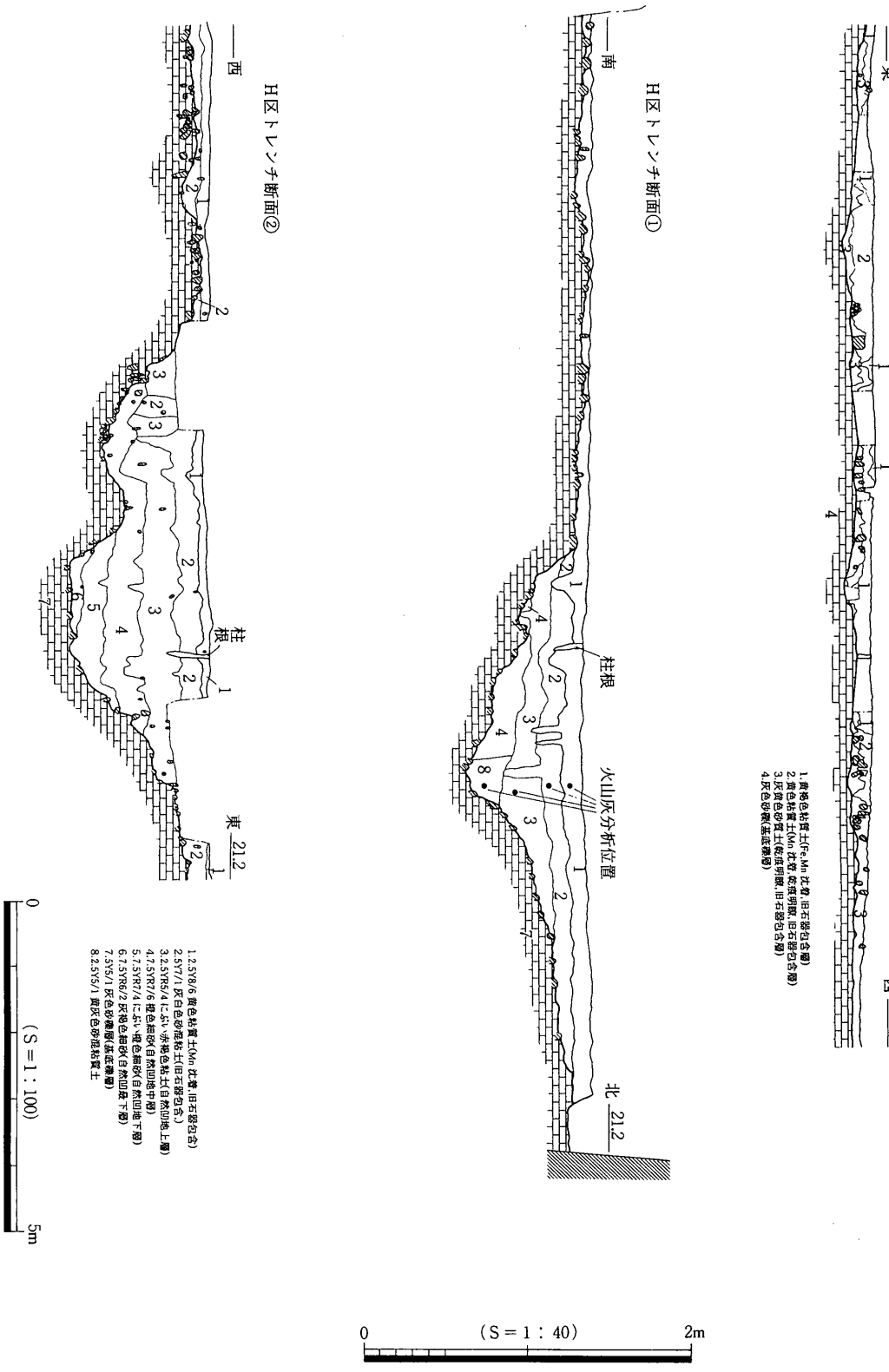


図54　B・Hトレンチ下層断面

工痕有剥片１点(サヌカイト)、剥片・砕片93点(サヌカイト91，安山岩２点)、受熱石器３点（サヌカイト)、石核１点（サヌカイト)、敲き石１点（安山岩)、円磨礫１点（花崗岩)

430は長さ5.5cm幅2.4cm厚さ0.7cmを測る一側縁加工のナイフ形石器であり、底面をもたない横長剥片を素材としており先端部を欠損している。ブランティングは、背面から裏面へ向けて行われ、通常のナイフ形石器に見られるものと異なる。ブランティングは中央から基部にかけて行われており、先端部付近には打面が残されている。石材は普通サヌカイト。

431は加工痕有剥片であり、一側縁に両側から細かな加工が行われている。連続的に加工が施されていることから見て、スクレイパーの可能性も考えられる。石材は普通サヌカイト。

432～444は、剥片または砕片である。全体的に完形品が少なく、中ほどで折損しているものが多い。443・444は背面に自然面をとどめた剥片であり、比較的初期の段階に石核から剥がされたものと見られる。445は安山岩製の敲き石であり、下部を中心に潰れが多く見られる。446は、花崗岩の円磨礫であり、現状で使用痕は確認できない。

447～449は接合資料。449は幅8.9cm厚さ2.9cmを測る石核であり、石理の発達した普通サヌカイトを素材とする。上面のｃ面左側には、先行する作業面が最低３面確認され、そのほぼ中央部を打撃し交互剥離によって横長剥片447が剥取されている。横長剥片447から復元される剥離角は140°である。剥片剥離に伴う打面調整は確認できない。448はその形状から見て、石核の成形に伴う剥片と考えられる。

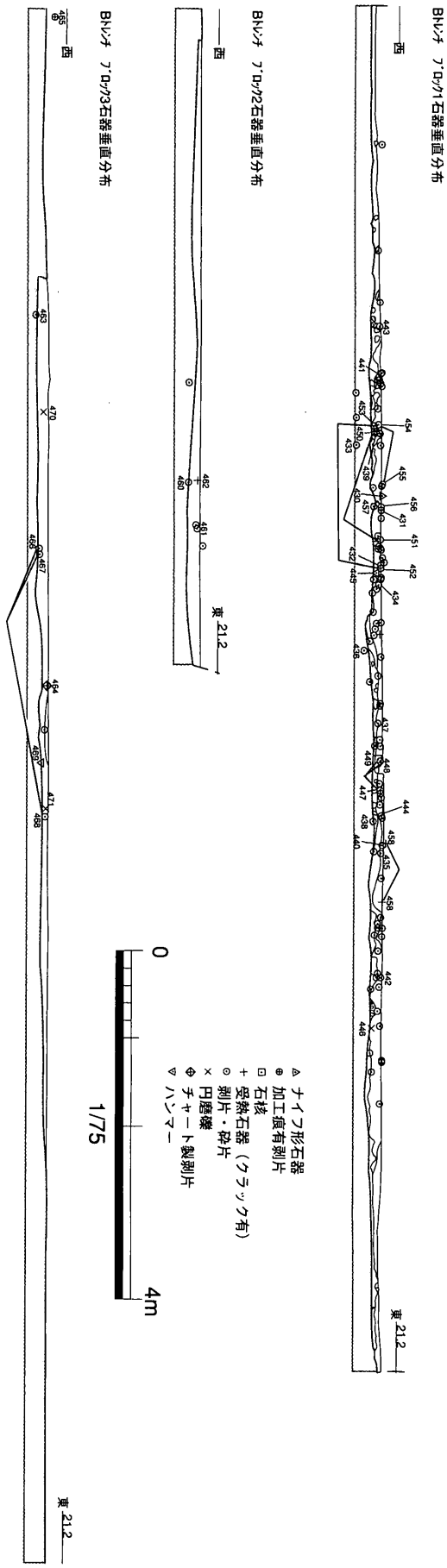


図55　Ｂトレンチブロック１～３旧石器垂直分布

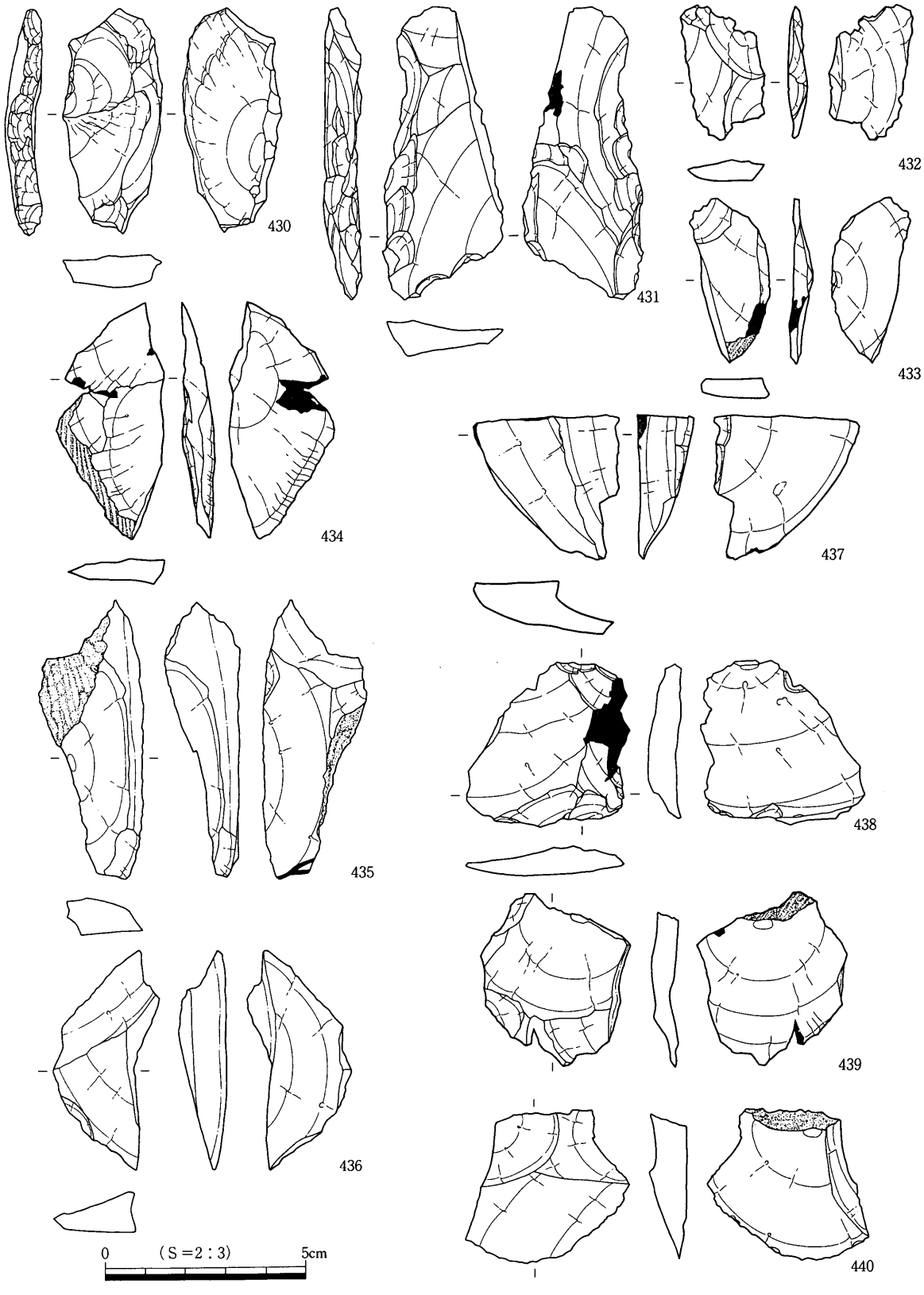


図56　Bトレンチブロック１出土旧石器その１

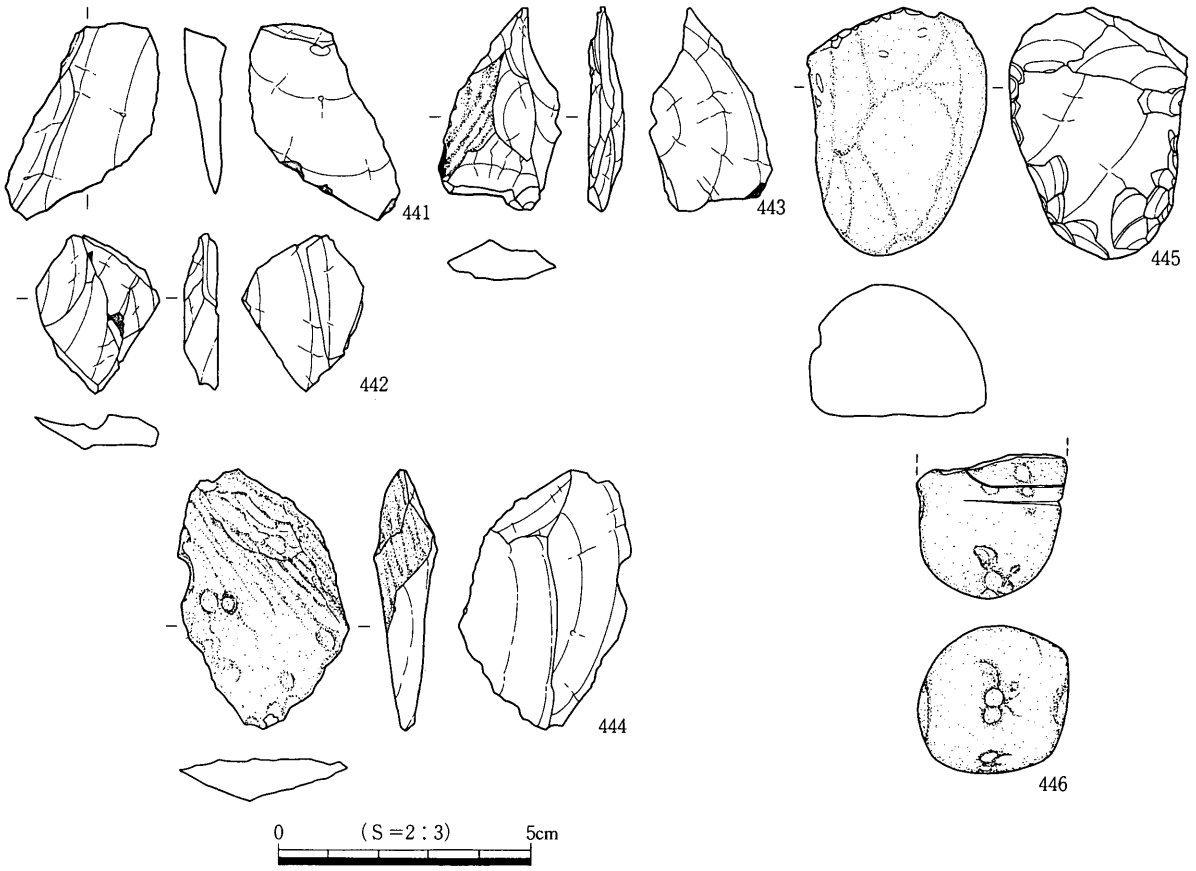


図57　Bトレンチブロック1出土石器その2

450・451は横長剥片の接合資料。いずれも背面に自然面をとどめ、平坦な打面をもつものである。石材は普通サヌカイト。452・453は折れ面での接合が確認できる剥片である。中ほどで折損しており、個体内にバルブは遺存していない。石材は普通サヌカイト。

454・455は背面に自然面を多く留める剥片が、折れ面で接合したものである。456・457は打点を横方向にずらしながら剥離された小型の剥片2点が接合した。無打面に近いことや、小型であることから見て、調整剥片と考えられる。石材は普通サヌカイト。

458は、受熱痕が著しい3点の砕片が接合したものである。石材は白色風化サヌカイト。

ブロック2（図60，図版4）

ブロック1に東側に隣接する小規模な石器集中部である。現状で剥片6点(サヌカイト)、受熱石器1点(サヌカイト)から構成され、接合資料は確認できない。

459は自然面を打撃して得られた剥片であり、打点部を中心に半折している。石材は普通サヌカイト。460は、表面に自然面を留める剥片であり、個体中ほど折損しバルブは残存していない。石材は普通サヌカイト。461の横長剥片は、背面に自然面をとどめ、剥片剥離と同時に打面が弾け飛んでいる。石材は普通サヌカイト。462は全体に受熱が見られる砕片である。石材は普通サヌカイトを用いる。

ブロック3（図60・61，図版5）

トレンチ南部で確認された石器集中部である。剥片6点(サヌカイト製5点，チャート製1点)、加工

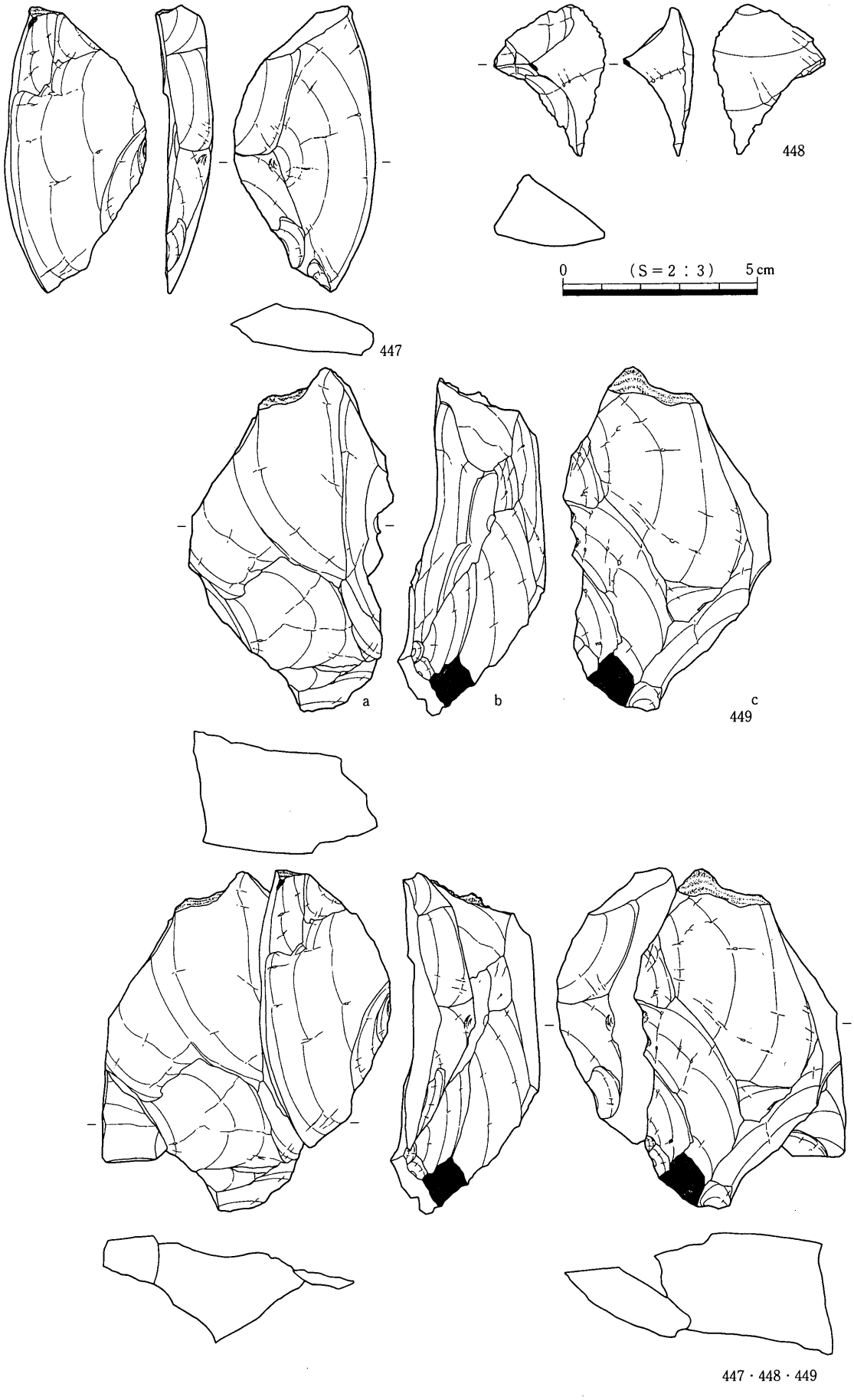


図58　Bトレンチブロック1出土石器（接合資料その1）

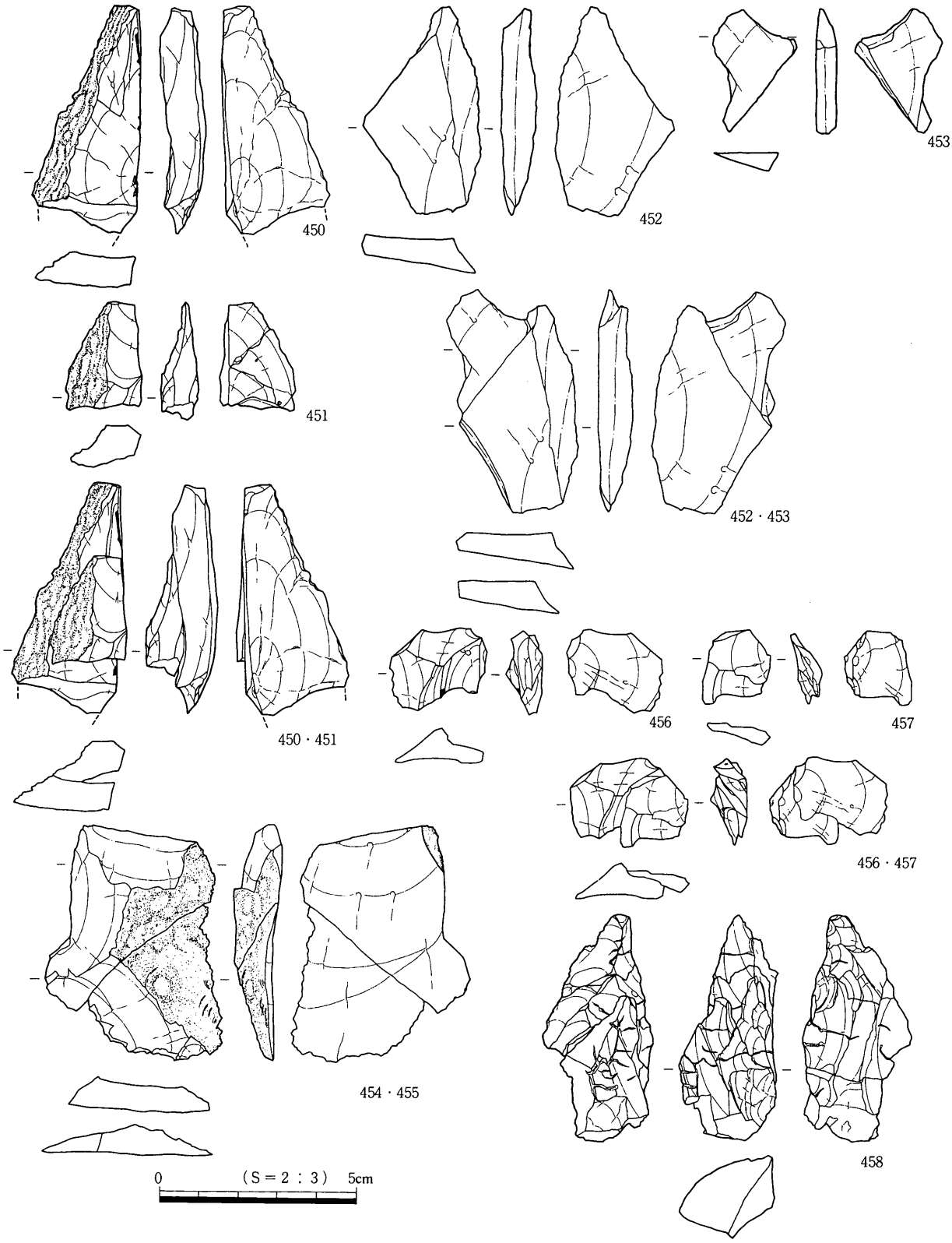


図59　Bトレンチブロック1出土旧石器（接合資料その2）

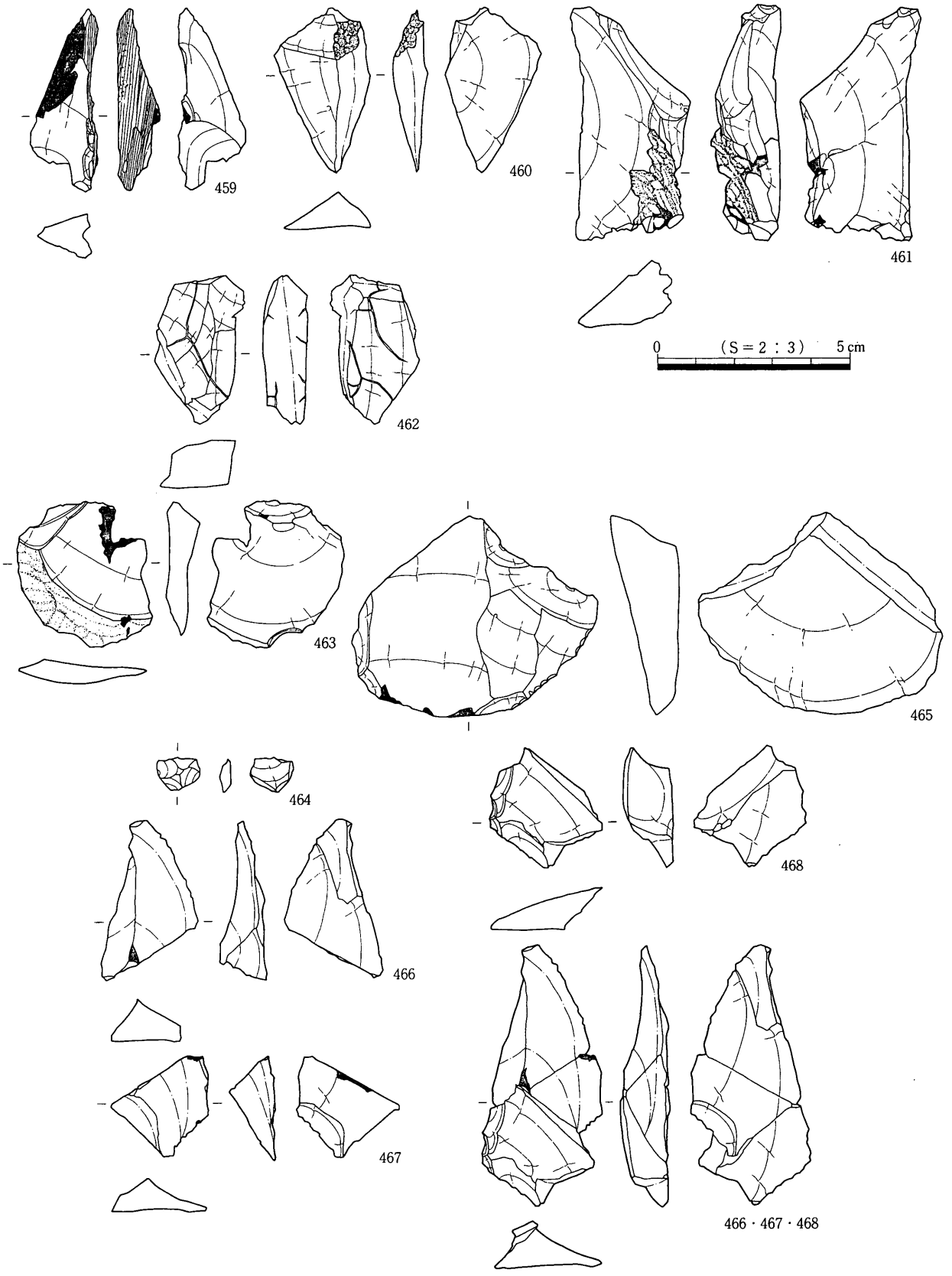


図60　B・Hトレンチブロック２・３出土旧石器（接合資料を含む）

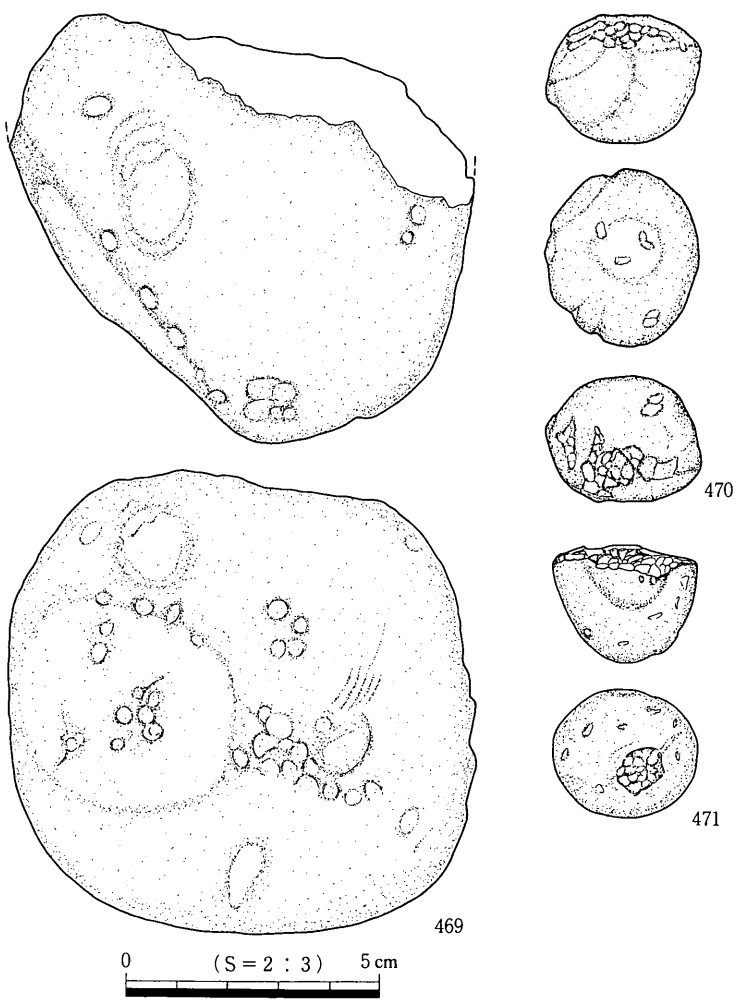


図61　Bトレンチブロック3出土旧石器

痕有剥片1点(サヌカイト)、敲き石1点(花崗岩製)、円磨礫2点（花崗岩）から構成されている。

463は背面に自然面を留める剥片である。464はチャート製の剥片。465は、背面上方に加工痕が2面確認できるが、下縁部に使用痕と考えられる微細剥離が見られる剥片である。466～468は接合資料。3点の砕片が折れ面で接合したものである。石材は普通サヌカイト。

469は敲き石である。円摩した花崗岩が用いられ、下面を中心に敲打痕が認められる。470・471は花崗岩の自然礫と考えられるものである。一部に敲打痕に似た窪みが見られるが、使用痕とは考えられない。

第13項　遺構の変遷

検出遺構の時期は、旧石器・古墳時代・中世後半の大きく二つに分けて捉えることができる。ここでは時期別に主要遺構の変遷を概観することでまとめとしておきたい。

旧石器時代

A・Jトレンチと B・Hトレンチの2箇所に分かれて集中部を確認している。A・Jトレンチは、微高地の縁辺部に相当する位置で検出しているが、その分布状況から二次的な移動を受けている可能性は低く、限りなく原位置を保っているものと考えられる。内訳は、石核1点(サヌカイト)、剥片・砕片2点(サヌカイト)、ハリ質安山岩原石1点となっており、定形器種が認められないことから、詳細な時期比定は難しい。ハリ質安山岩の原石の存在や、板状素材の周辺部に交互剥離技法が多用される石核の存在から、後期旧石器段階の中でも瀬戸内技法の存在が薄れた末期の所産である可能性が高い。

B・Hトレンチの石器集中部は、細かな分布状況から、更に3つの集中部に細分され、多くはサヌカイトの砕片で占められる。ブロック1から出土した一側縁加工のナイフ形石器430は、背面側からブランティングが施されており、瀬戸内技法を用いた通有のナイフ形石器と異なっている。また、横長剥片石核449には、明確な打面調整が見られず、交互剥離が用いられていることから、瀬戸内技法が衰退した段階の所産と考えられよう。本地域におけるナイフ形石器を基準とした編年では、森下英治が提示している3類型に該当し、後期旧石器の末期段階の所産と推定される。

古墳時代後期

Ｆトレンチにおいて溝を中心とした遺構を確認している。１～４号溝は、ＴＫ10～ＴＫ43型式の須恵器が含まれることから、６世紀代を中心に機能していた灌漑水路と見られる。以前、須恵器・土師器が採集されている中森１号墳は、対象地内に確認することは出来なかった。昭和37年撮影の空中写真から想像すると、対象地中央部に存在する国道11号の中に存在していたものと考えられ、国道建設に伴って破壊された可能性が高い。

中世後半

ＥトレンチとＧトレンチで集落に関わる遺構を検出している。国道11号を挟んで離れた位置で検出しているが、ともに井戸等の付帯施設を備えていることから、それぞれ別の集落単位と把握できる。建物廃絶時期を見ると、Ｇトレンチは15ｃ代、Ｅトレンチは16ｃ代という形で若干異なっている様相を呈すが、概ね15ｃを中心にして同時並存した集落と考えられる。集落は、基本的に条里型地割に規制された形で営まれており、坪界溝も集落と同時に出現している。同じ坪内の位置関係では、全面調査及び予備調査トレンチの成果から、主に西半部の部分に集落が設けられていたと考えられる。

Ｅトレンチの１号掘立柱建物は、想定床面積65㎡を測る集落内の中心的な建物と考えられるが、高松平野の既往調査で確認されたものの中でも大型の部類に属する。また、Ｅトレンチからは、鋳型・溶解炉片などの鋳造関連遺物も見られることから、生産を含めた拠点的な集落の可能性が高い。経営主体を特定する材料は乏しい。当該期には、条里景観に規制された形で、集落の範囲を方形の大溝で区画する集落形態が一般的であり、居館と報告される事例も多い。しかし、本遺跡には、このような囲郭施設が存在しないにもかかわらず、大型建物が存在するという矛盾が存在することから、どの要素を重要視して集落の拠点性を把握するのかについて、今後整理する必要があろう。

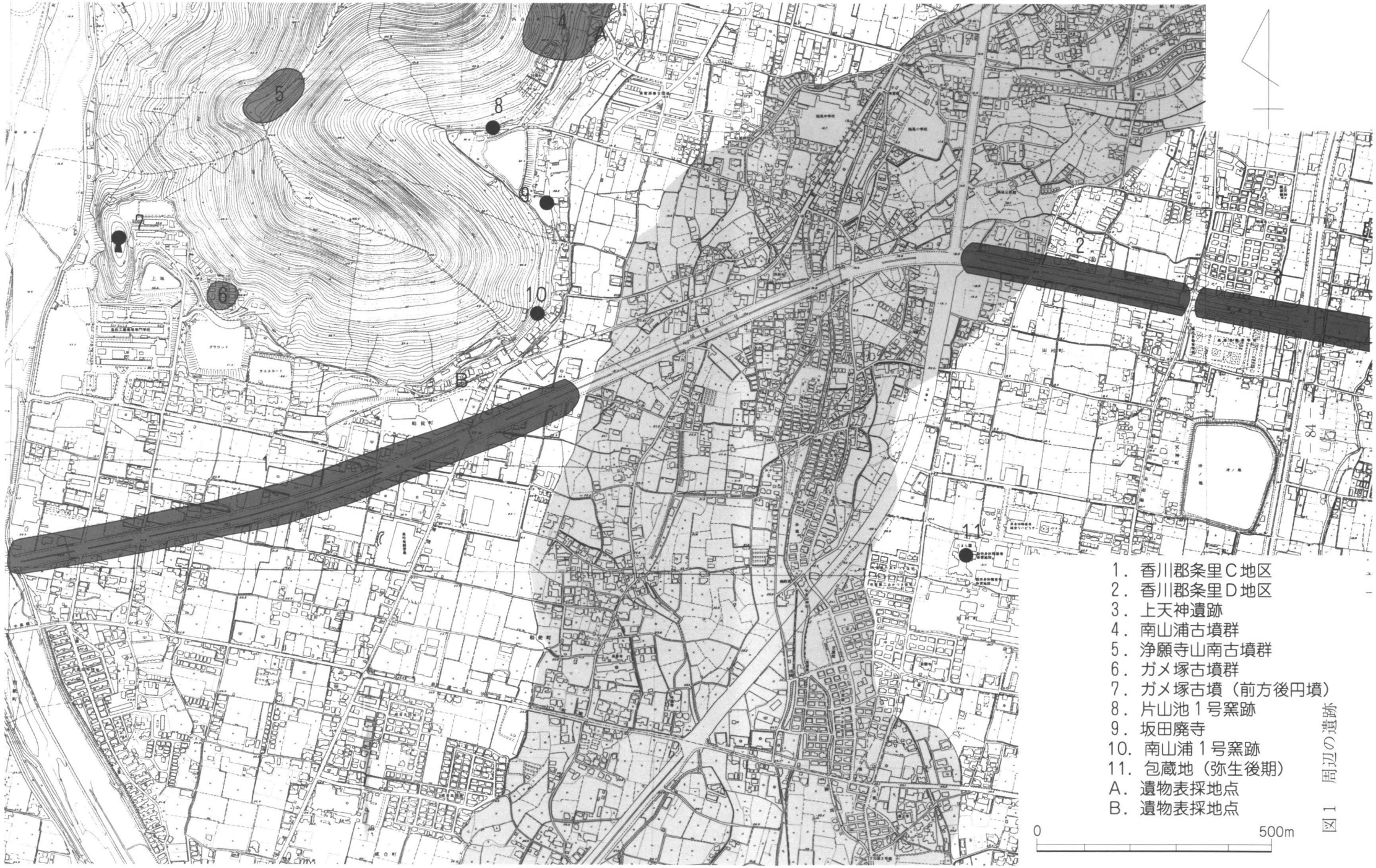

1．香川郡条里Ｃ地区
2．香川郡条里Ｄ地区
3．上天神遺跡
4．南山浦古墳群
5．浄願寺山南古墳群
6．ガメ塚古墳群
7．ガメ塚古墳（前方後円墳）
8．片山池１号窯跡
9．坂田廃寺
10．南山浦１号窯跡
11．包蔵地（弥生後期）
A．遺物表採地点
B．遺物表採地点
0
500m

図１　周辺の遺跡

第14項　香川郡条里Ｃ地区の調査

調査の経過と方法

調査対象地は、四国横断自動車道(高松市内区間)の建設によって、国道11号が両側おのおの約４ｍ拡幅される部分である。対象地は、国道に面してかなりの部分が店舗、工場、駐車場などに造成され、元の地表面より１～２ｍ程度嵩上げされている。遺跡の内容を確認するためのトレンチ掘削は、掘削土を置くスペースや安全勾配が十分に確保出来ないほか、用地取得の遅れや立ち退き等のために調査後も使用されるため、埋め戻しの際の締め固めの問題など様々な技術的問題があった。このため、まず元々の地表面が残る水田、畑地においてトレンチ調査を行い、遺跡の拡がりを確認したうえで、嵩上げ部分の対応を検討するとともに、トレンチ調査で遺構が確認された場合、可能な限り調査地を拡張して調査を行うこととした。

平成９年度４・５月に、１トレンチ～５トレンチが所在する対象地西半部を、同年度３月に６～８トレンチが所在する東半部の調査を実施した。また、西半部に関しては、平成９年度に用地取得の関係から未調査となる箇所が生じたことから、平成10年度10月に工事立会の方式を採用し調査を実施した。

立地と環境（図１・２）

香川郡条里Ｃ地区は、高松市勅使町に所在する。遺跡の北側には、石清尾山古墳群の所在する紫雲山山地の南端にあたる浄願寺山(標高239ｍ)があり、東方と西方には御坊川と香東川が流下している。香東川は、17世紀前半以前においては、現在の御坊川の流路を流れていたが、下流の高松城下の洪水の危険を回避するために高松藩家老西嶋八兵衛によって、恐らく元々分流していた現在の香東川に流路を固定したことが知られている。御坊川沿いは幅700ｍの流路跡が明瞭に認められ、出水(湧水)が多く見られることから、伏流水が豊富であると推定される。

周辺の遺跡として、浄願寺山から派生する尾根に内容不明のまま後円部が破壊された前方後円墳「がめ塚古墳」のほか、がめ塚２～４号墳、片山池１～３号墳などが所在するほか、７世紀末頃の坂田廃寺とこの寺の瓦を生産した片山池窯跡群などが所在している。また、調査地周辺は条里型地割(一町方格の地割)が良く遺存している。

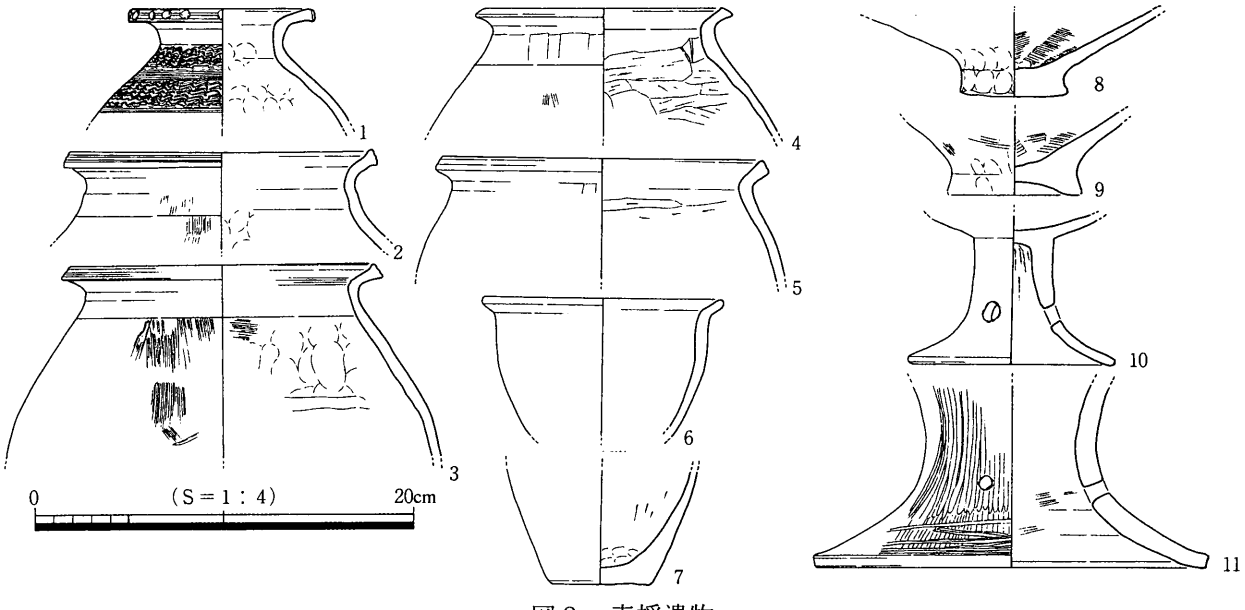


図２　表採遺物

さらに、遺跡として周知されているものではないが、この地割に合致する幅10mの堀もしくは運河のような帯状の凹地が現地表に認められ注意される。

図２は、調査対象地周辺において採集された弥生土器群である。採集地点は、南山浦古墳群が所在するＡ地点と、南山浦１号窯跡周辺の山地と段丘の変換点に位置する部分である。両地点を区別して提示することはできないが、未周知の弥生時代の集落の存在を暗示しているものと思われる。調査対象地の歴史的環境を考える上で重要と考えられることから、提示しておきたい。

１～11すべてに角閃石粒の存在が認められ、所謂「下川津Ｂ類土器」の胎土と考えられる（大久保1990)。(外面に櫛描施文が認められる広口壺１の詳細な時期については不明であるが、２～５の甕の口縁部外面には退化した凹線が認められ、口縁形態から後期前半期の所産と考えられる。11の器台もほぼ同時期の所産と考えられよう。

また、最終地点を改めて見てみると、下川津Ｂ類土器の胎土採取地点とされる石清尾山山塊の南端部に含まれることが分かる（森下1995)。調査対象地周辺の弥生集落の実態は不明ながら、提示した資料中すべてに角閃石を多く認めることから、今後土器製作に関与した当該期の集落が確認される可能性が考えられる。

大久保徹也　1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」藤好史郎編『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ下川津遺跡』香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

森下友子　1995「胎土１類土器について」北山健一郎編『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊太田下・須川遺跡』香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

各トレンチの概要（図３～５）

良好な形で地下遺構の存在が認められたのは、西半部の１～５・10トレンチである。東半部については、良好な形で遺構を検出することはできなかった。ここでは、条里坪界溝を中心とした遺構が検出された、１・３～５・10トレンチについて説明することとする。

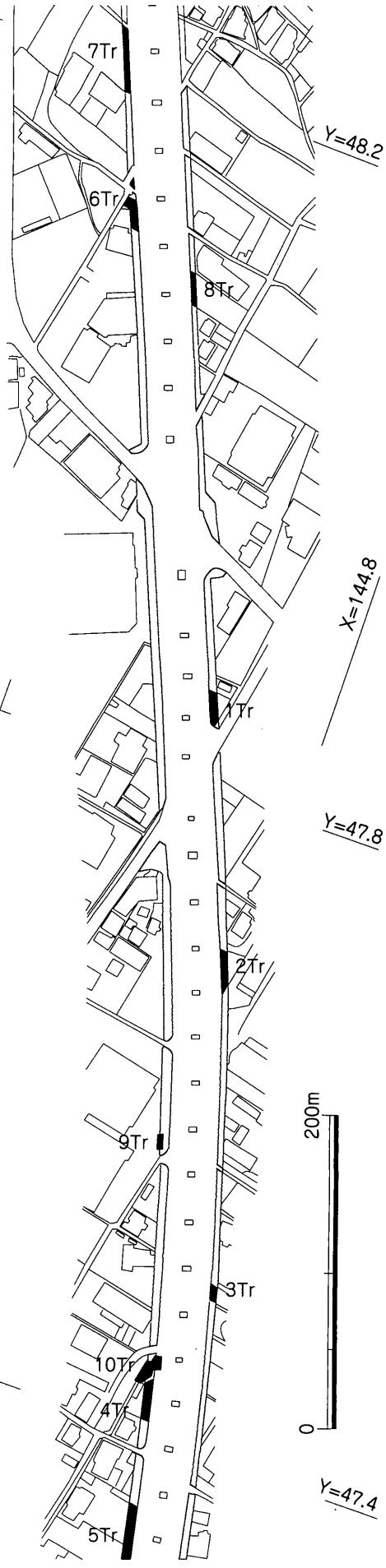


図３　トレンチ配置

1トレンチ（図4・5）

この地点は、約70㎝嵩上げされ、その下に①水田耕作土、②灰色粘質土、③オリーブ色粘質土の順に堆積する。②③層はグライ化しており、③層は、この付近で地山とされる黄白色粘質土層に相当する。弥生時代中期の甕底部12と終末期の鉢底部片13を２点採集したが、遺構は検出されなかった。

写真16　２トレンチ全景　北東から

3トレンチ（図4・5）

耕作土下に、②灰色シルト質土層・③灰色粘質土層が堆積し、地山となる。②③層は土層の状況から溝状遺構の埋土と考えられ、トレンチ全体が溝状遺構に含まれると判断される。調査範囲が狭いため、溝状遺構の規模・流向は確認出来なかった。②層中から内面黒色の黒色土器椀14が出土している。

4トレンチ（図4・5）

深さ90㎝・幅２m以上の溝状遺構を検出した。溝下層での湧水のためトレンチ壁面が崩落し十分な調査が出来なかった。

埋土は３層に細分可能な黒褐色粘土の上層、淘汰の良い灰色砂の下層よりなる。流向は明確には出来なかったが、条里型地割の坪界線の方向に一致すると考えられる。遺物は採集されなかった。

5トレンチ（図4・5）

トレンチ西端で溝状遺構を検出し、範囲を拡張して調査を行った。溝状遺構は、幅1.5m・深さ0.45mの溝（２号溝）が埋没して後、新たに幅0.6m・深さ0.3mの溝（１号溝）が掘削されている。

ＳＤ２は、黒褐色粘質土の上層、褐灰色砂の下層よりなり、下層から弥生時代後期の甕17が出土した。胎土に角閃石を多く含む下川津Ｂ類土器である。

写真17　５トレンチ全景　南東から

ＳＤ１は黄灰色シルト質土の上層、黄灰色粘質土の下層よりなる。遺物は採集されなかった。ＳＤ１、２ともに条里型地割の坪界線に近接し流向も合致するものである。調査範囲が狭小なため１点の出土遺物が遺構の年代を示すのか、条里型地割施工以後の年代を想定すべきなのか、確定できない。

これ以外には遺構は検出されなかったが、遺構検出作業中に概ね奈良時代と考えられる須恵器蓋15土師器甕16など若干量の遺物細片が出土している。

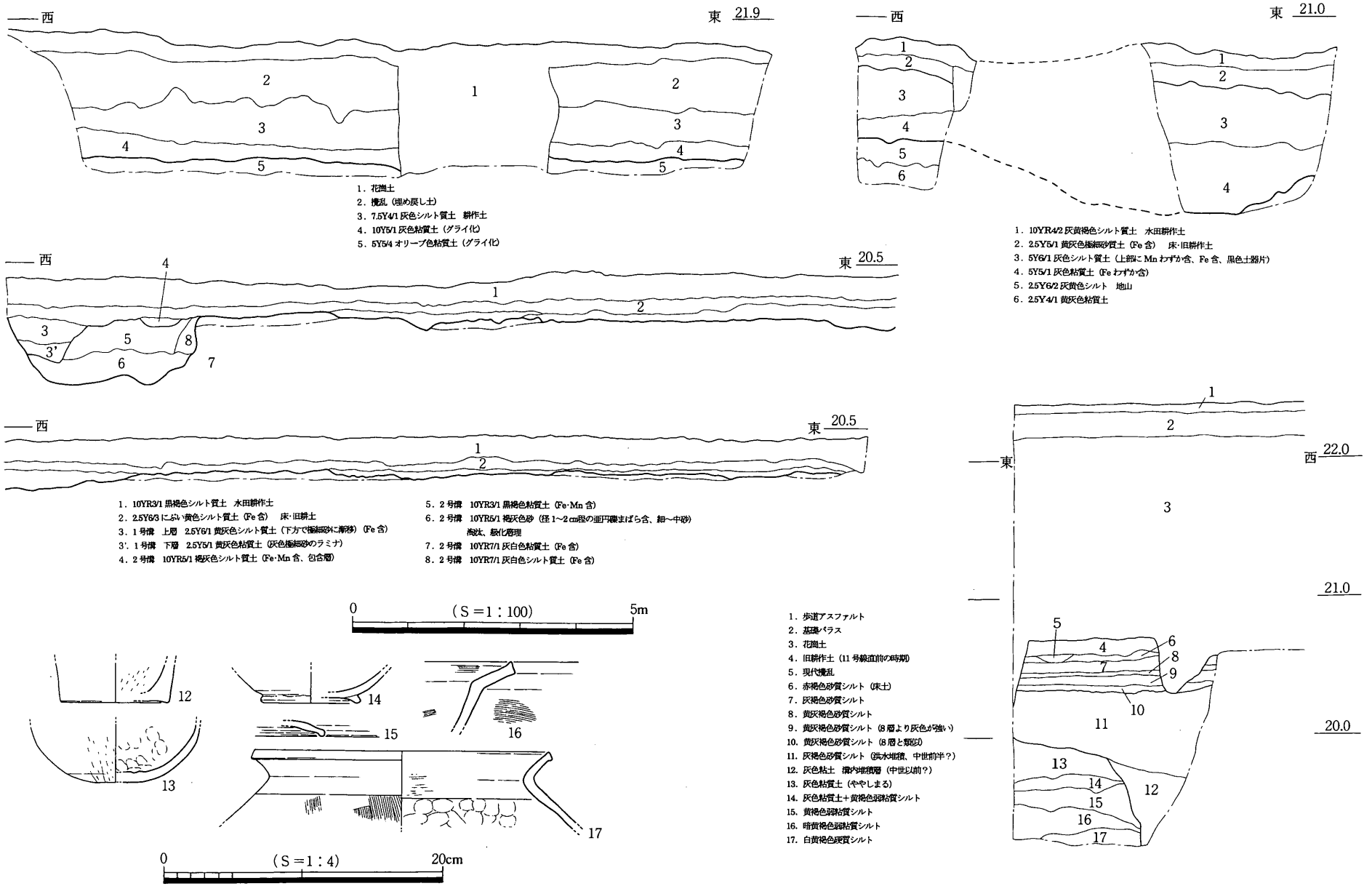


図4　1・3・5・10トレンチ断面及び出土遺物

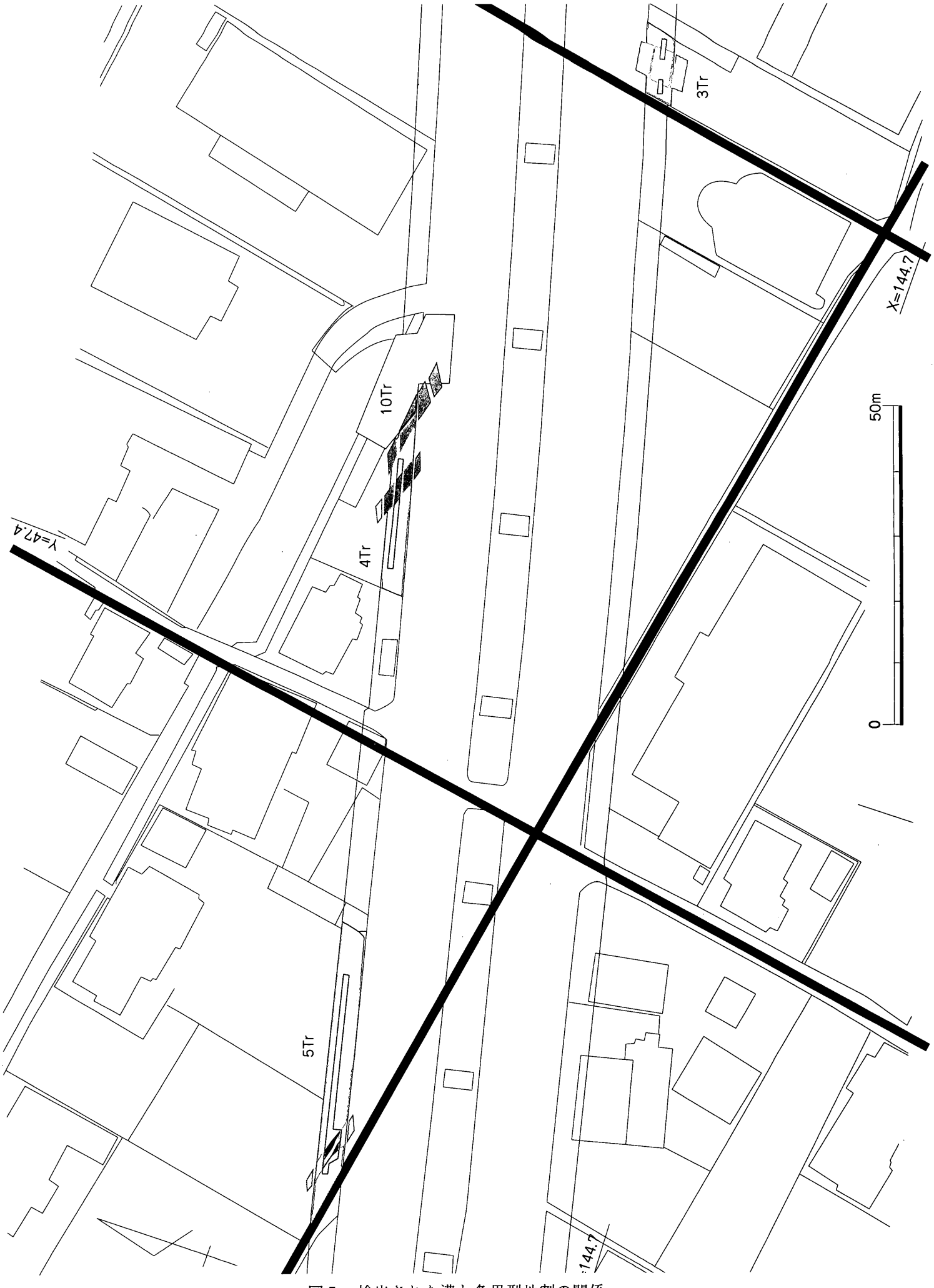


図５　検出された溝と条里型地割の関係

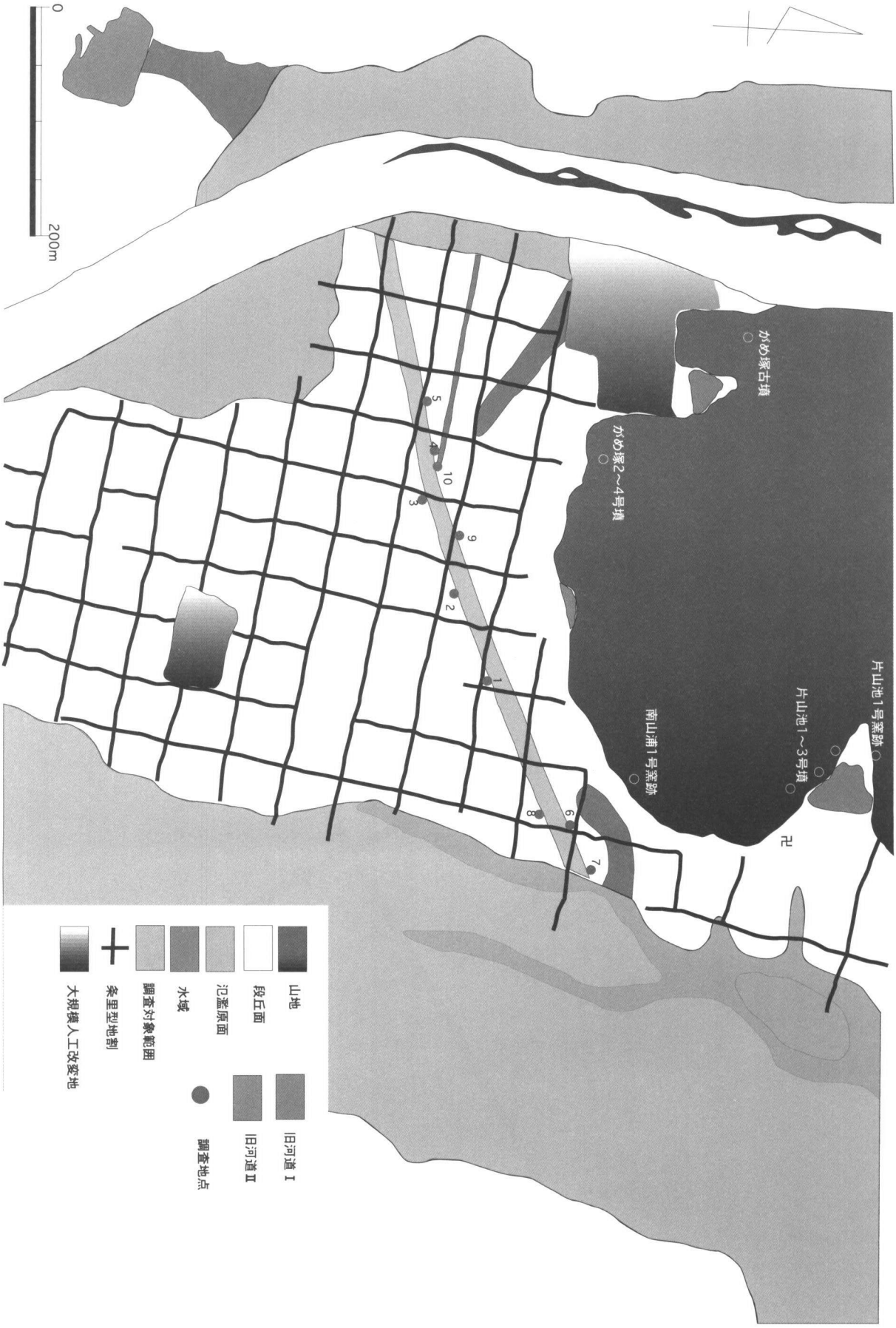


図6　調査地点と周辺の地形

10トレンチ（図４・５）

４トレンチの西側に隣接する地点に設定したトレンチである。空中写真及び現地表面には、条里型地割の方向に合致し、香東川から延びる帯状の凹地が認められ、本トレンチ部分を通過することが予想されたことから、調査を実施した。

現道下位となることから、２ｍ程の国道建設に伴う盛土層下位に、旧耕作土層が現れる。これらの下位には、層厚0.3～0.4ｍの厚い氾濫堆積物の中砂が見られる。この下位で⑫層とした溝状の落ち込みを確認した。必ずしも記録した断面と、溝状の落ち込みが直交している訳ではないが、現状で上面幅2.5ｍ以上の大型の溝と考えられる。

出土遺物を採取することはできなかった。平面的な記録が作成できていないものの、巨視的には現地形に認められる帯状の凹地に相当する溝と判断される。この凹地は、現状で条里型地割の方向で東西３町程見られる（図６）。方向から見て条里型地割施工後の可能性が高いが、出土遺物が見られなかったことから、詳細な時期については不明である。

まとめ（図６）

３・４・５・10トレンチでは、溝状遺構が検出された。方向から見て、これらの溝は条里型地割との関連が想定できる。弥生時代の遺物片は採集されてはいるが、溝以外の遺構は検出されないことから、条里型地割の施工された生産域として機能していた遺跡と考えられる。条里型地割の施工年代については、出土遺物が認められるものの、小規模なトレンチ調査にとどまっていることから、出土遺物の時期をそのまま評価できない。埋没土の特徴からは、中世以前の可能性も考えられるが、今後の調査の進展を待って検討する必要があろう。

10トレンチの大溝は、現地形に認められる帯状の凹地に合致するものと考えられる。規模的な点からは、５トレンチで見られた条里坪界溝の規模を大きく上回る大溝の可能性がある。現状では、その性格について不明とせざるをえないものの、延長距離から見て運河状の施設である可能性も考えられることから、今後とも注意する必要があろう。

第15項　上天神遺跡・香川郡条里Ｄ地区の調査

調査の方法と経過

調査対象地は、四国横断自動車道が国道11号の上部に建設されることから、東西方向800m程の両側４m程の拡幅部分となる。上天神遺跡は、国道193号を挟み一般国道11号高松東道路建設に伴って調査されたＩ区西側に隣接した部分が調査対象地となる。香川郡条里Ｄ地区は、上天神遺跡から国道32号との交差点部分までの田村町に所在する部分である。ともに国道建設に伴う厚い盛土の設置や、隣接して店舗・住宅が存在するなど、調査を実施するにあたっての技術的制約が多いことから、トレンチ設定可能な部分を選び予備調査を実施すると同時に工事立会を併用することで保護措置を実施することとなった。

上天神遺跡については平成９年度に予備調査と工事立会を行い、190m²の調査を実施している。香川郡条里Ｄ地区については、平成12年度に工事立会による2,500m²の調査を行った。

上天神遺跡の調査（図１～４）

上天神遺跡は、昭和62年度から平成４年度の調査によって、弥生後期初頭を中心とした集落跡であることが判明している。住居群は、調査地内の複数の微高地上に、３つの単位に分かれて分布しており、今回の調査対象地に隣接するＩ区においても、３・４棟程度の竪穴住居群と、後期初頭から後半期かけて継続する灌漑水路群が確認されている。調査を実施するにあたり、Ｉ区の住居群を中心とした集落単位がどの程度広がりを見せるのかと言う点と、地形的な連続性の把握に主眼をおいた。

写真18　３トレンチ全景　東から

写真19　３トレンチ溝　断面　南から

調査区は、合計５つのトレンチを設定している。１トレンチから３トレンチは、比較的に盛土が薄いことから予備調査を実施することとし、舗装面が見られる４・５トレンチに関しては工事立会方式を採用した。

１・３トレンチでは、１m程の盛土層下位に0.2m程の旧耕作土が見られ、その下位に遺構検出面となる黄色の粘土層が現れる。１トレンチでは遺構・遺物は確認されなかったが、３トレンチでは黄色粘土層上面において、１条の溝状遺構を確認した。

２トレンチは、攪乱が著しく１・３トレンチで見られた旧耕作土・黄色粘土は既に失われ、地表面下1.5m程のレベルで中砂～粗砂層が露出する。３トレンチの溝状遺構は、検出範囲で深さ0.25m程を測り、黒褐色粘土を主体とした堆積物で埋没していた。小規模な範囲ながら、弥生後期初頭の土器群１～18がコンテナ１箱ほど出土している。機能については不明ながらも、遺物の出土状態から見て、近接した位置に住居群等の存在が示唆されるものである。

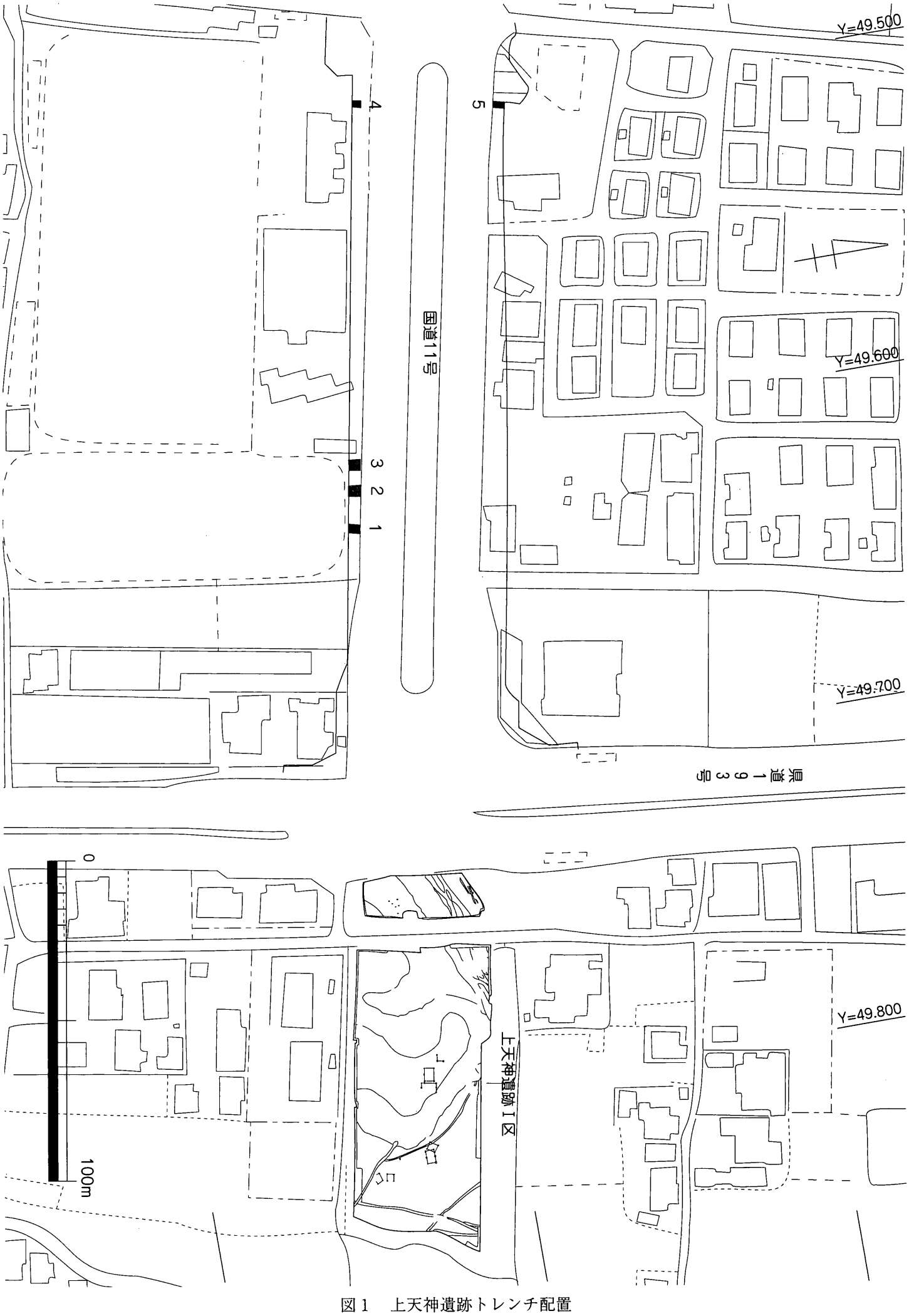


図1　上天神遺跡トレンチ配置

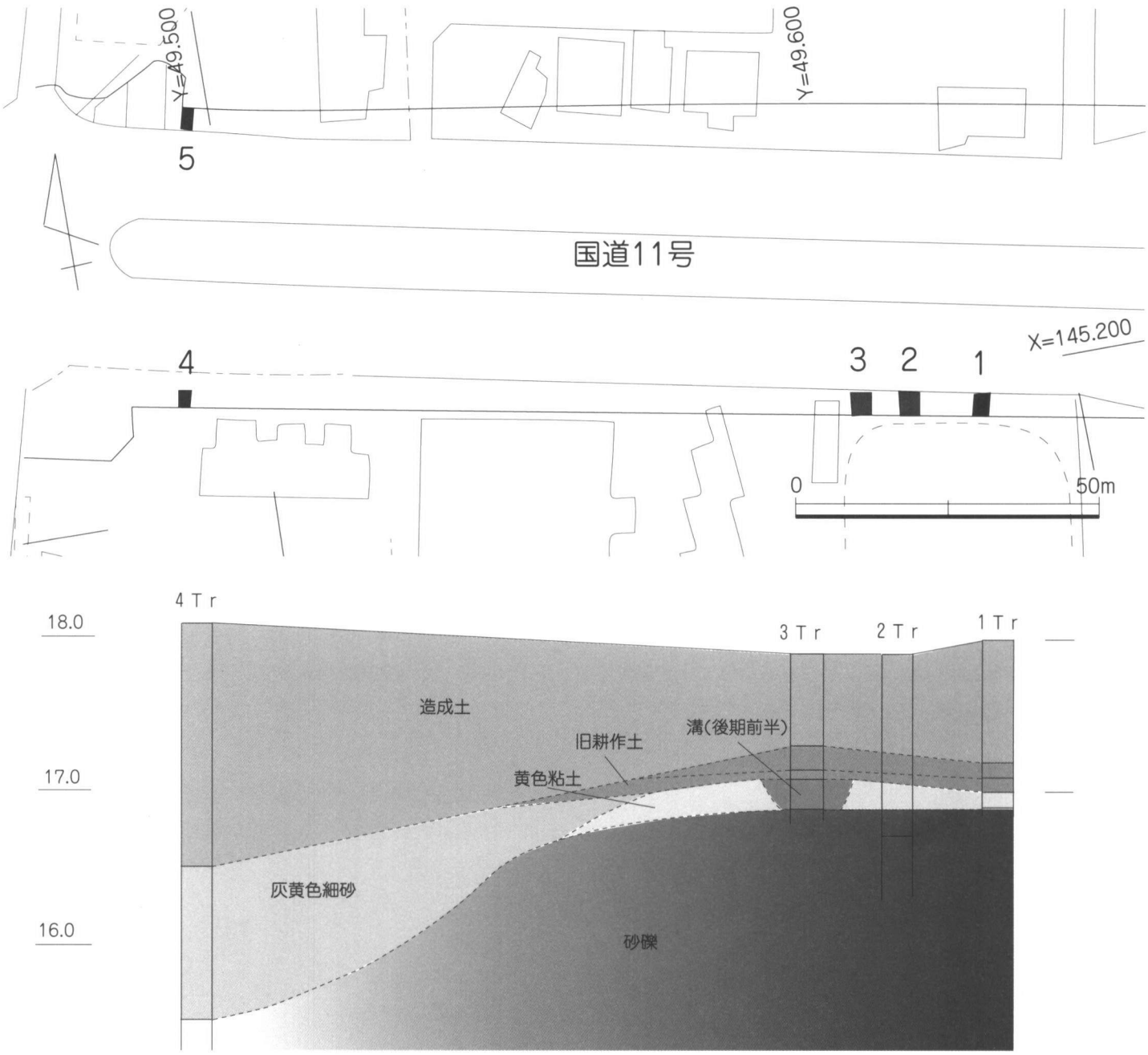


図2　土層模式

3トレンチから西へ120m程離れた4トレンチでは、1.5m程の盛土下位に氾濫堆積物と考えられる細砂層が1m程見られる。その下位には、1・3トレンチで見られた砂礫層が確認された。出土遺物は採取されなかった。

各トレンチの観察から見た、堆積状況は図2のように整理できる。1・3・4トレンチで見られた砂礫層は、旧中州と考えられる。また、その検出面のレベル差から、1～3トレンチは微高地部分、4トレンチ部分は氾濫堆積物によって埋積された旧河道部分に相当する。旧河道が埋没した年代は、出土遺物が見られないことから明らかにはできないが、1から3トレンチにかけての部分は、弥生後期の段階には微高地として存在していたものと考えられる。3トレンチの溝は、微高地縁辺部に掘開されたと考えられ、遺物の出土状況から、隣接する微高地頂部に住居等の施設の存在が推定できる。後述する香川

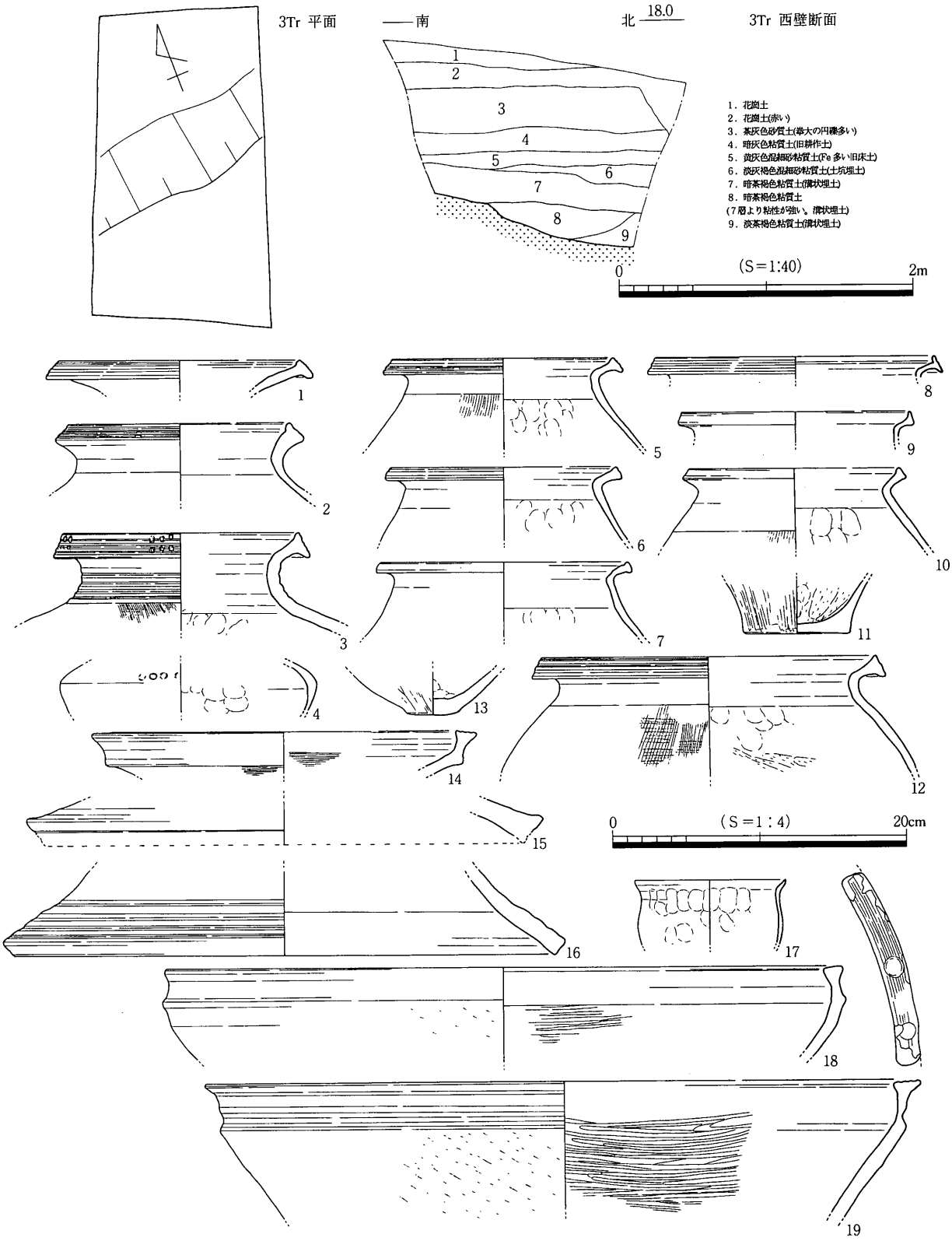


図3　3トレンチ平・断面及び出土遺物

郡条里D地区の調査成果から見て、4トレンチ以西は不安定な堆積環境にあると考えられることから、既往調査におけるⅠ区の後期初頭の集落の西限は、3トレンチの部分と考えてよいだろう。また、Ⅰ区西端部の大型水路によって集落が分割されて、今回の調査地周辺にⅠ区とは別の住居群が展開していた

可能性も考えられる。

図３の１～18は、３トレンチの溝から出土した弥生土器群である。壺・甕共に口縁部に凹線文をとどめるものでほぼ占められるが、９・10のように単口縁に近いものも見られる。４は、後期初頭に特徴的な胴部に竹管文をもつ吉備系の細頸壺である。これらの土器群には、すべてに角閃石が多く含まれることから、既往の調査で確認された土器群と共通した特徴をもつものである。

香川郡条里Ｄ地区（図４）

香川郡条里Ｄ地区は、国道建設に伴う盛土や調査に伴うヤードの確保が難しいことから、工事立会方式を採用し、地下遺構の状況把握に努めた。国道11号の南北部分に、合計13本のトレンチを設定している。トレンチが小規模なものであることから、土層柱状図を基本に説明したい。

予想されたとおり、国道の北側の各トレンチでは、国道建設に伴う客土層が厚く、下位の堆積層の確認が十分に行えたわけではない。しかし、掘削した範囲では、上天神遺跡で見られ弥生時代以降の基盤層と考えられる黄色粘土は見られない。調査地東半部の３・４・９トレンチでは、上天神遺跡４トレンチの細砂層の延長と考えられるシルト～細砂の堆積物を確認しており、旧河道に相当する可能性が高い。調査地西半部では、旧耕作土下の比較的浅い位置から砂礫層を確認しているが、礫の粒径などの情報がないことや、下位まで十分に掘削できたわけではないことから、成因および堆積時期を推定できない。

出土遺物には11トレンチの国道建設前の旧耕作土下位の細砂層より出土した土師器甕口縁部１が見られるのみである。形態から概ね古代の所産と考えられる。

まとめ

上天神遺跡では後期初頭段階の集落の西限と考えられる溝を確認するなど、小規模なトレンチ調査であったが、貴重な調査成果が得られたと考えられる。

香川郡条里Ｄ地区に関しては、相対的に不安定な土地条件下にあったことが推測される。また、旧河道上層の埋没土と考えられる層位より古代の土師器甕が出土しているが、１点資料であることから埋没年代を示すかどうか断定できない。調査地周辺に見られる条里型地割の年代と合わせて、地形環境の変遷については今後の調査に委ねられる部分が大きい。

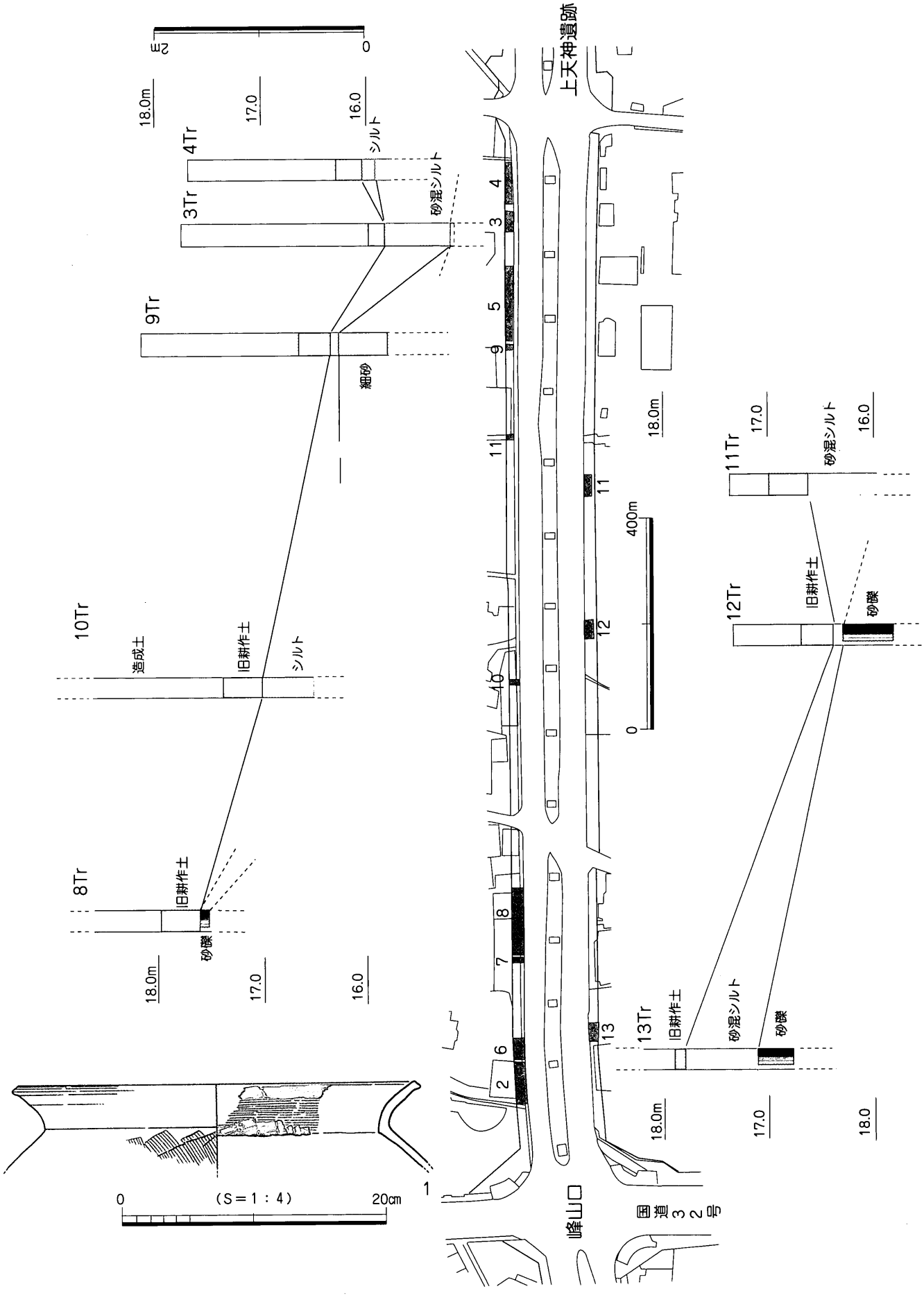


図４　香川郡条理Ｄ地区トレンチ配置及び土層柱状図

第２節　林・坊城遺跡

第１項　歴史的環境（図１）

林・坊城遺跡は、扇状地性の高松平野のほぼ中央部に位置し、調査地周辺の標高は10m前後を測る。遺構の中心となる時期は、縄文晩期から弥生前期、弥生後期である。

縄文時代晩期は、居石遺跡で旧河道より突帯文出現以前の晩期中葉の土器群が、林・坊城遺跡において刻目突帯文期の旧河道中から手鋤・狭鍬などの木製農工具が出土しているのが挙げられる。

林・坊城の木製農工具は、県下のみならず瀬戸内地域でも水田稲作の初現期に伴うものとして注目される資料である。水田面の検出が行われていないものの、農工具の存在から原初的水田稲作が行われていた可能性は高い。

農工具に伴って出土した土器群には、北部九州地域の器形に類似した壺形土器が見られ、農工具や水田稲作に伴って土器製作の情報も伝播している状況もうかがえる。

住居等の調査例は乏しく、集落の様相は不明確な状態が続いている。本書で報告する林・坊城遺跡の刻目突帯文期の柱穴群は、唯一居住痕跡が確認できた調査例として、重要な資料となるだろう。

弥生前期には、比較的多くの遺跡で遺構・遺物が確認されている。集落の調査例として、天満・宮西遺跡、汲仏遺跡において確認された環濠集落が挙げられる。これらは、弥生前期中葉のほぼ同時期に出現しており、遠賀川式土器出現後に新たに本地域に伝播した集落形態である。

水田跡では、弘福寺領山田郡田図北地区や谷・長池遺跡において検出例がある。前期末葉と考えられる谷・長池遺跡の水田跡は、埋没旧河道上面のほかに微高地縁辺部に営まれており、用・排水路を伴うものである。高松平野における水路を伴う水田としては、初現期の調査例として重要であろう。

弥生後期には、空港跡地遺跡・日暮松林遺跡・凹原遺跡を初めとして集落の調査例が多く見られる。しかし、住居等の遺構の凝集度は高く無く、隣接する微高地上に４・５棟程度の竪穴住居が分布している状況である。調査報告書の刊行が進んできており、出土遺物の検討を進めて集落相互の結びつきを明らかにする段階へ来ている。

後期初頭以降、土器胎土中に角閃石を多く含み、中期段階の製作技法を踏襲した下川津Ｂ類土器が多く見られるのも、高松平野の特徴である。また、県内をはじめ、阿波・播磨・近畿地方などにも搬入されていることが知られている。土器焼成に関連した遺構・遺物の検討は進んでいないけれども、出土量から見たその製作圏は、平野北東部の旧香東川下流域と推定されており、林・坊城遺跡周辺も一部含まれる可能性が高い。平野内では、下川津Ｂ類土器と異なった胎土・技法を使用して生産・流通したと考えられる土器も見られることから、これらを含めた流通圏の実態を検討していく必要がある。

墓制関係では、周溝墓が多く確認されている。周溝墓は、弥生前期に見られた後、後期段階に復活する墓制である。既往の調査で確認されていた林・坊城遺跡の円形周溝墓は、今回の調査で微高地縁辺部において新たに２基検出している。

空港跡地遺跡では、集落に付随する形で終末期から古墳前期の前方後円・前方後方形の墓制が確認されており、集落から離れた丘陵上に営まれる鶴尾神社４号墳との関係を明らかにしていく必要がある。

古墳前期には、石清尾山山塊に猫塚・稲荷山・石船塚古墳などの積石塚古墳が継続的に築かれ、県内では最も有力な首長墓系譜と考えられている。有力首長が出現する過程を弥生後期の段階の高松平野の考古資料で復元することが、今後の課題と言える。

1.林・坊城　2.六条・上所　3.浴・松ノ木　4.浴・長池Ⅰ　5.浴・長池Ⅱ　6.井出東Ⅰ　7.井出東Ⅱ　8.居石
9.蛙又　10.林浴　11.宗高・坊城　12.公務員宿舎　13.空港跡地　14.上林　15.一角　16.宮西一角　17.弘福寺山田郡田図関連遺跡　18.多肥宮尻　19.多肥松林(県道) 20.日暮松林(済生会)　21.多肥松林(高松土木)　22.多肥松林(新設高校)
23.松林　24.日暮松林(都市計画道路)　25.凹原　26.汲仏　27.松縄下所　28.境目下西原遺跡　29.上西原
30.天満宮西　31.木太本村Ⅱ　32.白山神社古墳

図1　周辺の遺跡

第２項　調査の方法と予備調査の成果（図２～６）

調査は、対象地全体に対して地下遺構の具体的な状況を把握する予備調査から始められた。用地取得の完了した部分から、平成８年度９・10月にトレンチ19本を設定し、521.9㎡の予備調査を実施した。対象地は、昭和63年度に一般国道11号高松東道路建設に伴って実施されたＤ・Ｅ地区の南北に隣接した部分である。

なお、工事による地下遺構への影響が些少と見られる事業地中央の緑地帯部分6,745㎡については、平成７年度に県文化行政課と公団によって行われた事前協議によって、現状保存を適用することが既に決定している。しかし、本調査計画及び範囲策定のためには、対象地全域の地下遺構の状況を把握する必要があることから、予備調査は現状保存の決定している緑地帯部分も含めて実施した。北側の対象地については、昭和63年度の調査成果から、縄文晩期の遺物を包含する流路Ａが明らかに続くことが予測されたため、予備調査は実施していない。

予備調査トレンチ配置及び既往の調査区との関係は、図２に示す通りである。

南側の設定した各トレンチでは、第１次調査の流路Ａ・Ｂに接続すると考えられる旧河道と、微高地を確認している。流路Ａに関しては、３・４・６・10ａ・13・14・17トレンチにおいて見られ、堆積層中に含まれる遺物は僅かなものであり、南へ行くにつれて浅くなり消滅するものと考えられる。

また、８トレンチでは流路底面付近から穿たれた堅果類貯蔵穴を３基確認した。各トレンチにおける流路Ａの堆積状況の観察では、植物遺体を含んだ後背湿地状の環境下で堆積した黒色系の粘土層の上位に、人的擾乱の痕跡を留め耕作土と考えられる土層が多く確認されている。これについては、後項で説明することとしたい。

流路Ｂについては、９ａ・ｂトレンチにおいて確認されたが、現状地割の乱れの観察から10ｂ・11トレンチの旧河道の落ち込みに繋がるものと判断された。

写真２　３トレンチ流路Ａ断面　北から

写真１　４トレンチ全景　西から

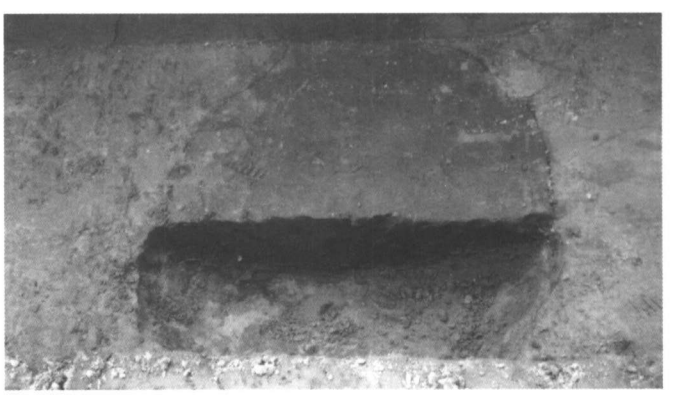


写真３　８トレンチ堅果類貯蔵穴　南から

図2　予備調査トレンチ配置

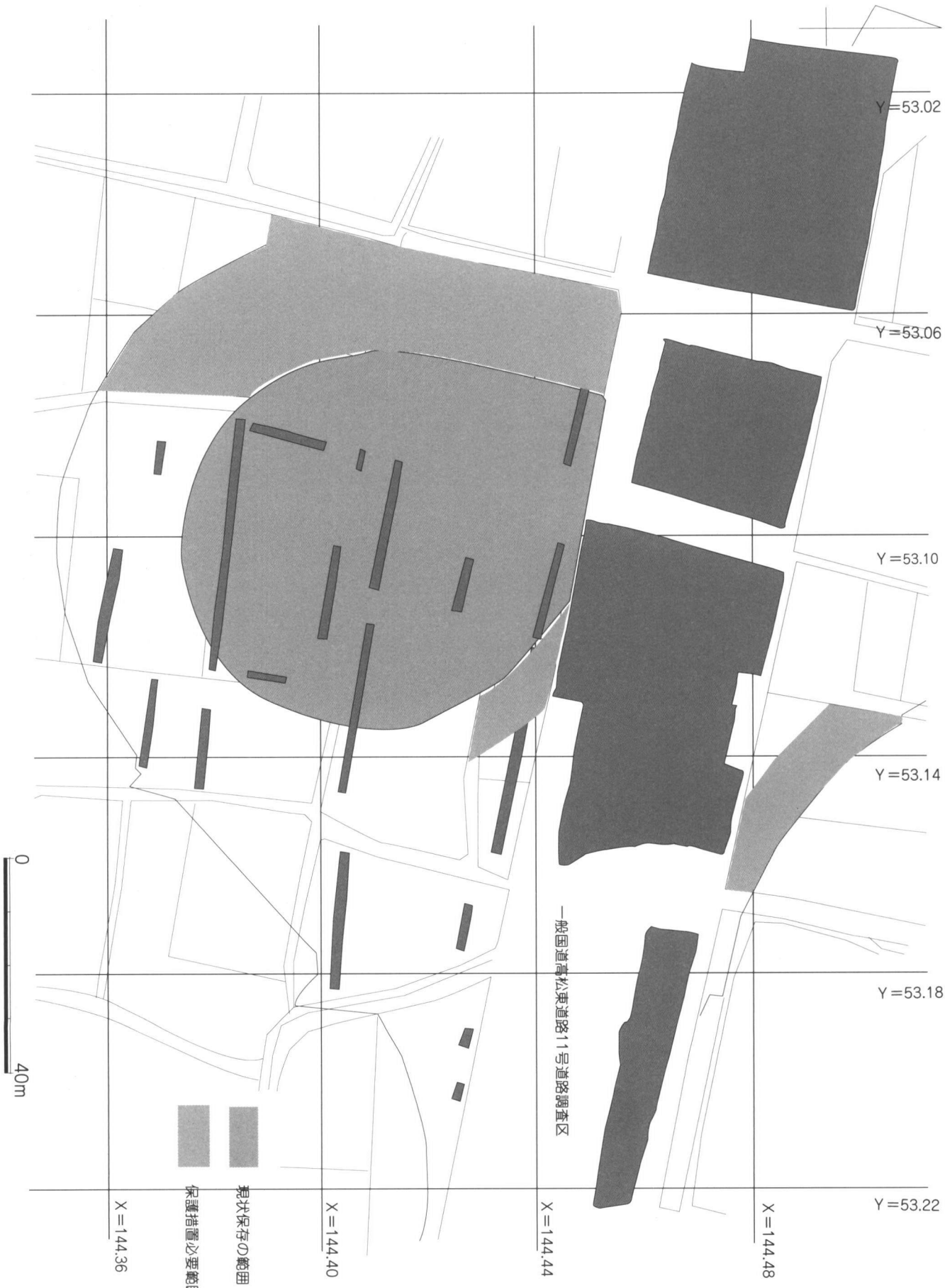

Y=53.02
Y=53.06
Y=53.10
Y=53.14
Y=53.18
Y=53.22
X=144.36
X=144.40
X=144.44
X=144.48
一般国道高松東道路11号道路調査区
0
40m
現状保存の範囲
保護措置必要範囲

図3　保護措置必要範囲

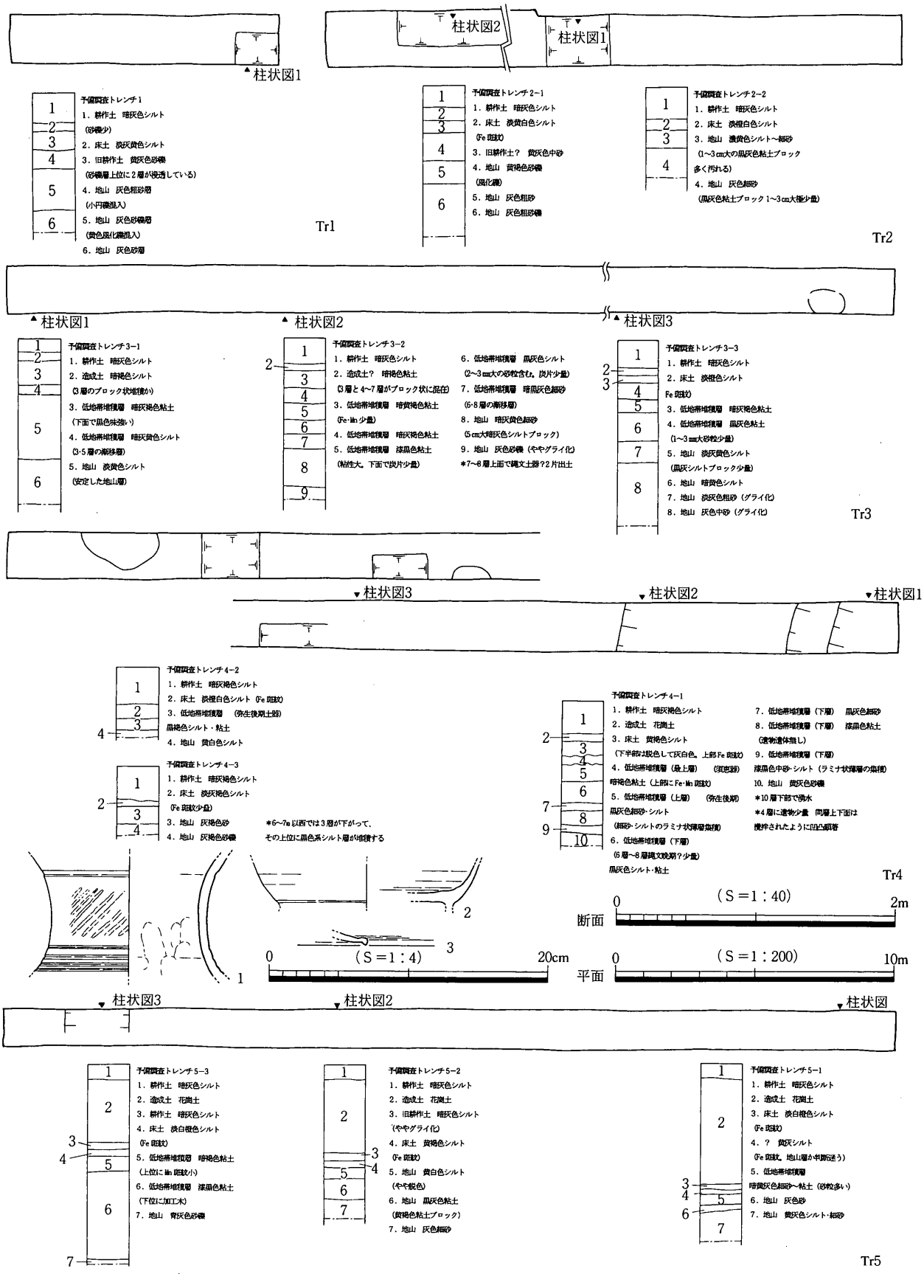


図4　予備調査1～5トレンチ平・断面図及び出土遺物

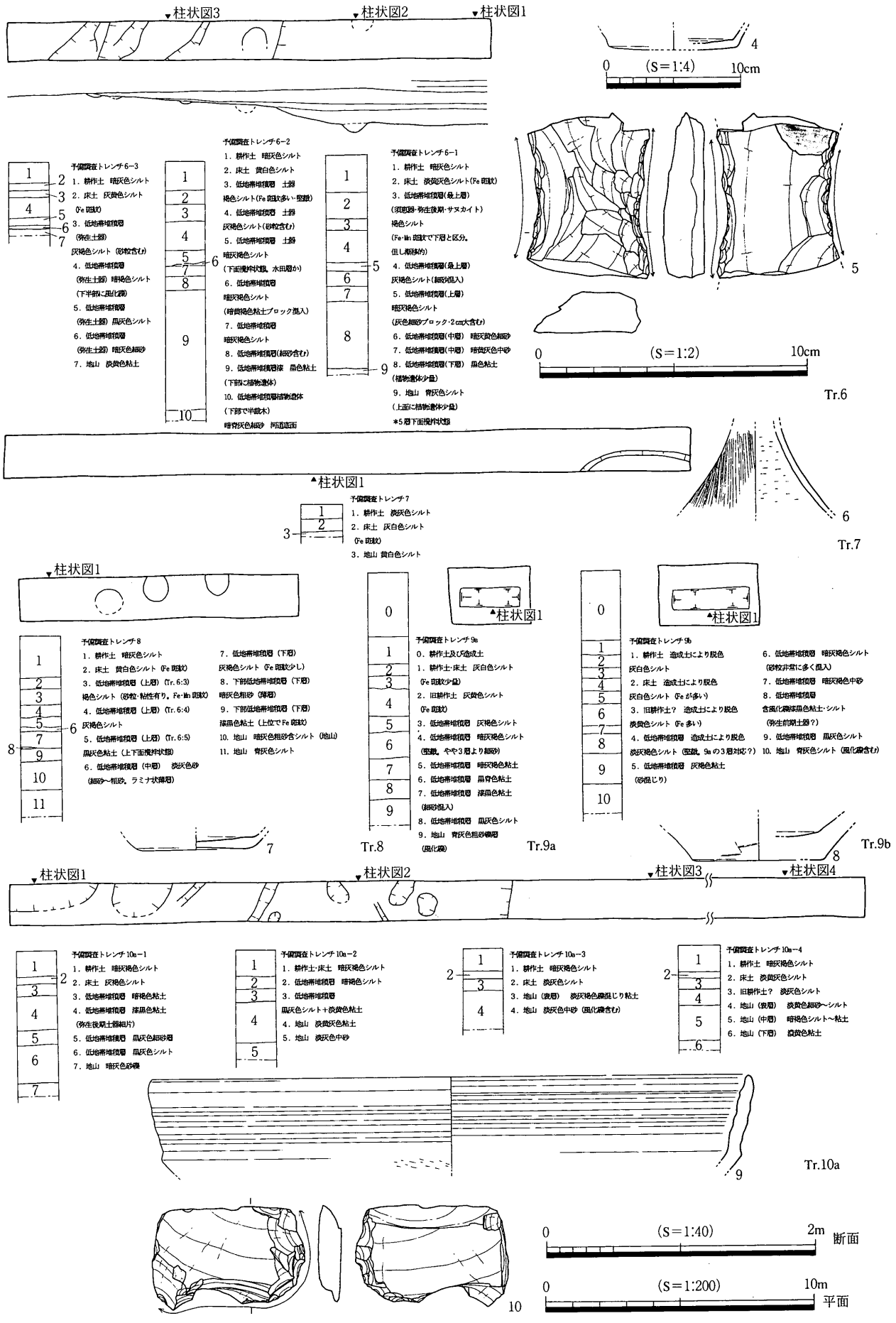


図5　予備調査6〜10aトレンチ平・断面図及び出土遺物

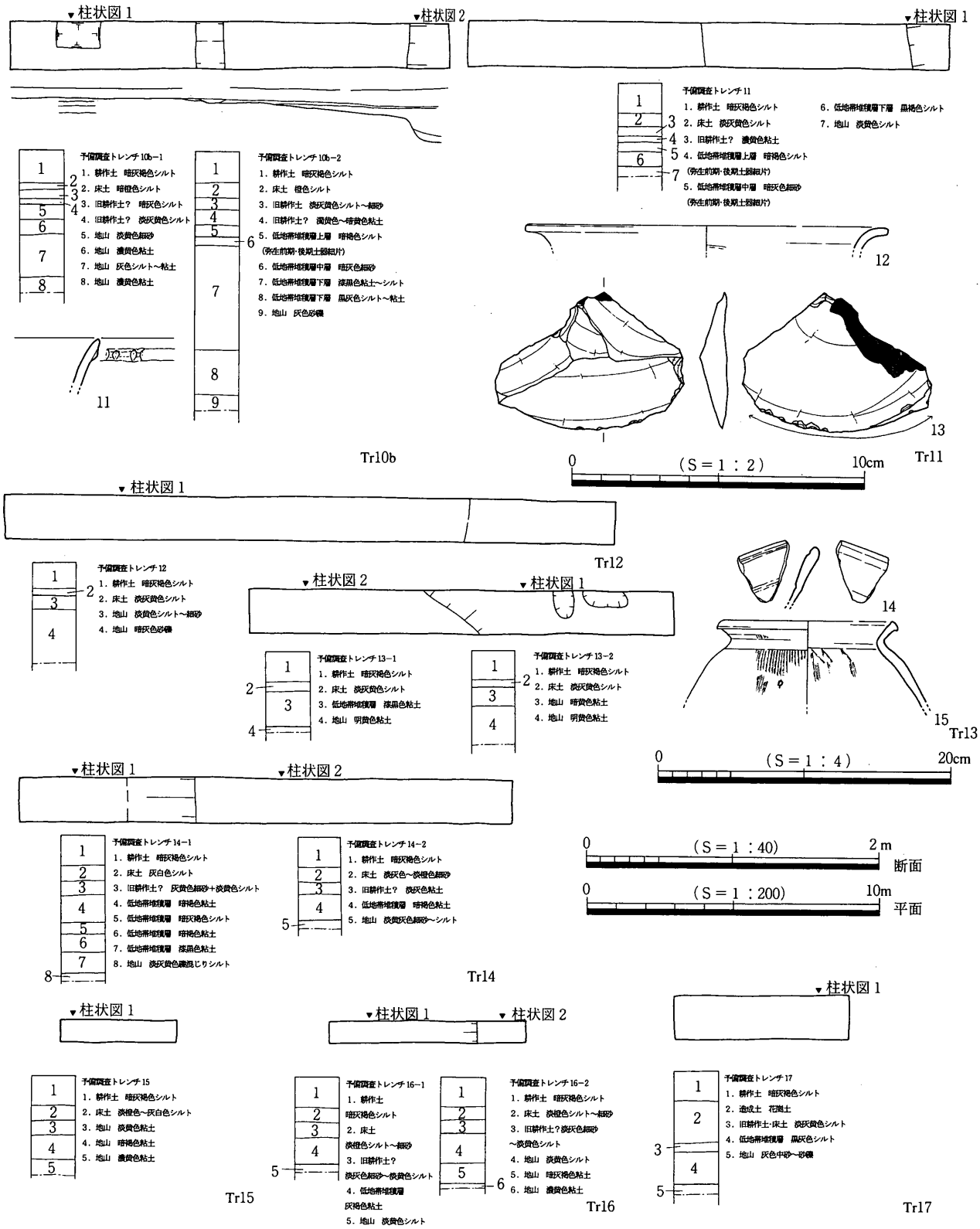


図６　予備調査10ｂ～17トレンチ平・断面図及び出土遺物

居住遺構の検出が期待された微高地は、流路Ａ西側や流路Ａ・Ｂ間において確認された。流路Ａ西側の７トレンチでは竪穴住居状の落ち込みが検出されている。１・２トレンチでは、基底礫層が露出していることから、旧中州に相当する明瞭な微高地と考えられるが、削平がきつく遺構は確認できない。

流路Ａ・Ｂ間の南側に位置する12トレンチでも、砂礫層が露出する状況が見られ、旧中州（微高地）と考えられる。この微高地では、小溝や不定形な土坑を数基見るものの、遺構の存在は希薄であった。

遺構の面的な展開が予測されたのは、流路Ａ西側の微高地部分である。

流路Ａに関しては、調査対象地南側で浅く小規模となっており、遺物もあまり確認できないことから、流路Ｂとともに予備調査で終了することとなった。

以上の要素を踏まえ、国道北側の流路Ａの延長部分と、南側の流路Ａ西側の微高地部分2,490㎡について全面調査が必要であると判断された。その範囲については、図３に示すとおりである。

全面調査は、用地取得の関係から、平成９年度にＤ４トレンチとＤ５トレンチの一部の490㎡を、平成10年度にＤ５トレンチの一部とＤ６・Ｄ７トレンチの2,000㎡について実施した。

調査区は、昭和63年度調査によって定められたトレンチ名を踏襲する形で、北側からＤ４・Ｄ５・Ｄ６・Ｄ７トレンチという形で設定している。

調査成果としては、Ｄ７区において流路Ａの水田域に繋がると考えられる突帯文段階の水路群や、居住遺構と考えられる柱穴群を、Ｄ６・Ｄ４トレンチでは昭和63年調査でも見られ陸橋部を備えた円形周溝墓を２基確認しており、大変基調な調査成果を得ることができた。

予備調査の出土遺物（図４～６）

１は予備調査４トレンチ柱状図１における４層からの出土した弥生後期初頭の直口壺の頸部片であり、摩滅が著しい。２・３は、４トレンチの床土直下から出土した須恵器高台杯の体部片、須恵器蓋口縁である。４は、６トレンチの連続する水田耕土と考えられる３～６層より出土した須恵器杯底部片である。

５は６トレンチの柱状図１における８層から出土した打製石斧の基部から身部にかけて破片である。６は７トレンチ東端の円形を呈する落ち込みから出土した弥生後期高杯の杯部片であり、胎土中に角閃石を多く含む。円形落ち込みは、立ち上がりが急な点を考慮すれば竪穴住居の可能性も考えられるが、本トレンチが現状保存範囲に含まれることから、全面調査を行っておらず詳細は不明である。

７は８トレンチの水田耕土と考えられる５層中より見られた須恵器杯底部片。８は流路Ｂ内に相当する９ｂトレンチの８層より出土した弥生前期の壺底部片である。９は10ａトレンチの流路Ａ最上層から出土した弥生後期の大型鉢口縁部。10の楔形石器は、10ａトレンチより出土しているが帰属する層位は不明である。11は10ｂトレンチの流路Ｂ堆積層から出土した刻目突帯文土器深鉢口縁部である。12は弥生後期甕の口縁部であり、11トレンチの流路Ｂの堆積層から出土している。13は11トレンチから出土した剥片である。エッジには、使用痕と考えられる微細剥離が認められる。

14は刻目突帯文期の波状口縁浅鉢の小片であり、13トレンチの流路Ａ上面に穿たれた土坑状の遺構から出土したものである下位の流路Ａ堆積層からの混入と考えられる。15は13トレンチ出土の弥生後期甕小片である。

第３項　地形環境と層序（図７～９）

林・坊城遺跡は、香東川によって形成された標高10m前後の緩傾斜扇状地上に位置している。高松平野は既に高橋学氏による精緻な地形分類が行われており、平野域は大きく沖積面と更新世の４面の段丘面に分け捉えられている（高橋1992)。沖積面は、三角州帯と扇状地帯に分類されているが、林・坊城遺跡は、扇状地帯の扇端部付近に位置していることとなる。扇状地帯では、微高地部分と考えられる旧中州や自然堤防と、凹地である旧河道が入り乱れて存在している。

図７は、第１次調査のＡからＧ区までの南壁土層図を使用した東西方向の断面である。断面には現れていないが、Ｄ２・Ｄ４・Ｄ７トレンチの部分には、遺構検出面に礫層が露出する箇所が多く見られることから、旧中州(微高地)に相当する部分であった可能性が高い。Ｄ３・Ｅ１トレンチのＳＲ01流路Ａ・Ｂと呼称される旧河道は、現地表面においても凹地として確認することができ、先の旧中州間に見られる旧河道に相当する。出土遺物から、両者とも縄文晩期には流水を停止し弥生前期までにはほぼ埋没が完了していたと考えられることから、扇状地帯から自然堤防帯への変化する時期に関して、これまでの高松平野における調査成果と矛盾しない。

地形面の違いに呼応するように、Ｄ２トレンチ部分の旧中州の微高地上には、弥生時代の集落や周溝墓が立地し、旧河道部分は縄文晩期の埋没後、連綿と水田として利用されているなど、土地利用に違いが見られる。調査成果から、旧河道上面に営まれた水田の開始時期は縄文晩期まで遡る可能性が高い。この立地は、扇状地性の平野が発達する県内に多く見ることができる初期水田の立地である(外山1993)。

第１次調査で行われた流路Ａの植物珪酸体分析では、縄文晩期と縄文晩期から弥生前期前半までの時期が想定できる層位からイネ属の機動細胞珪酸帯が確認されている。特に後者は、出現頻度から見て、水田面の可能性が指摘されている（宮崎編1993)。考古学的には、前者から狭鍬を中心とした木製農具が見られるなどの調査成果があり、今後の調査の進展によって旧河道上面に縄文晩期の水田面が確認される可能性が高い。

断面図は調査区毎に作成しているが、ここではＤ６・７トレンチのものを使用して説明する。

Ｄ６トレンチ東壁断面①・②（図８）

現代の耕作土下位には、数層に分割される旧耕作土が0.2m程見られた後、古代以前の遺構検出面に至る。この検出面上面はほぼ水平であり、遺物包含層を介在させないことと合わせて考えると、かなりの削平を被っていることが想定される。断面①南側の中世段階の３号溝埋土10・11層も、旧耕作土によって削平されている状況が見られることから、この面的な削平は遅くとも中世以後の水田形成に伴うものと考えられる。断面①は、弥生後期中葉の２号周溝墓の部分に相当する。12・13層は南側周溝の埋没土であり、これより北側が墳丘内に相当するが、盛土は完全に消失している。14層は１号住居埋没土であり、その北側の15・16は風倒木痕である。

基盤層は、基本的に明黄色シルトで構成されているが、断面図北端部では、縄文晩期以前の年代が想定される流路１に伴う粗砂を中心とした堆積物存在し、層相に変化が見られる。

Ｄ６トレンチ西壁断面③④（図８）

基本的な堆積状況は、東壁と同様である。検出面は、上位の２・３層とした耕作土によって削平を受

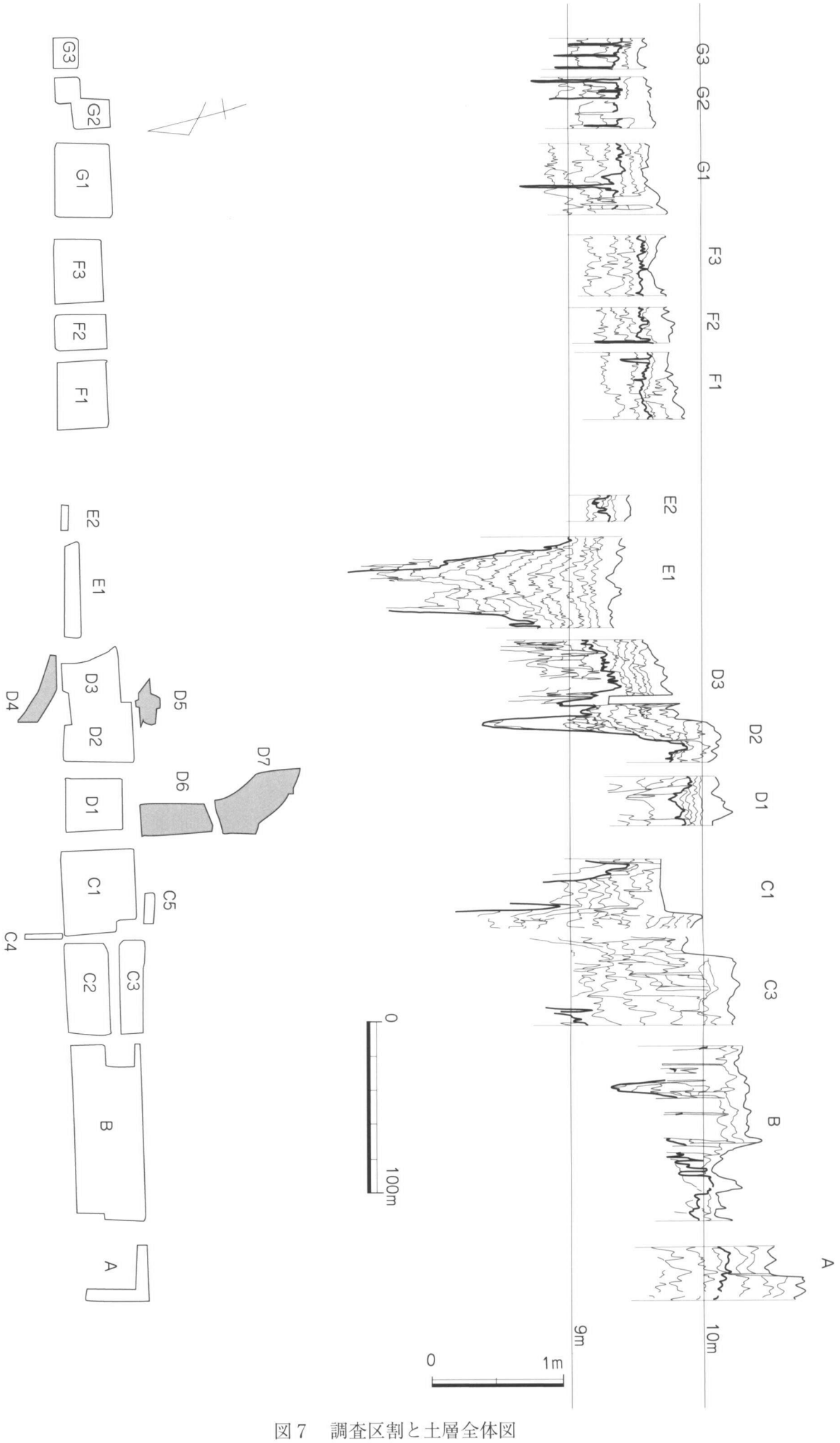


図７　調査区割と土層全体図

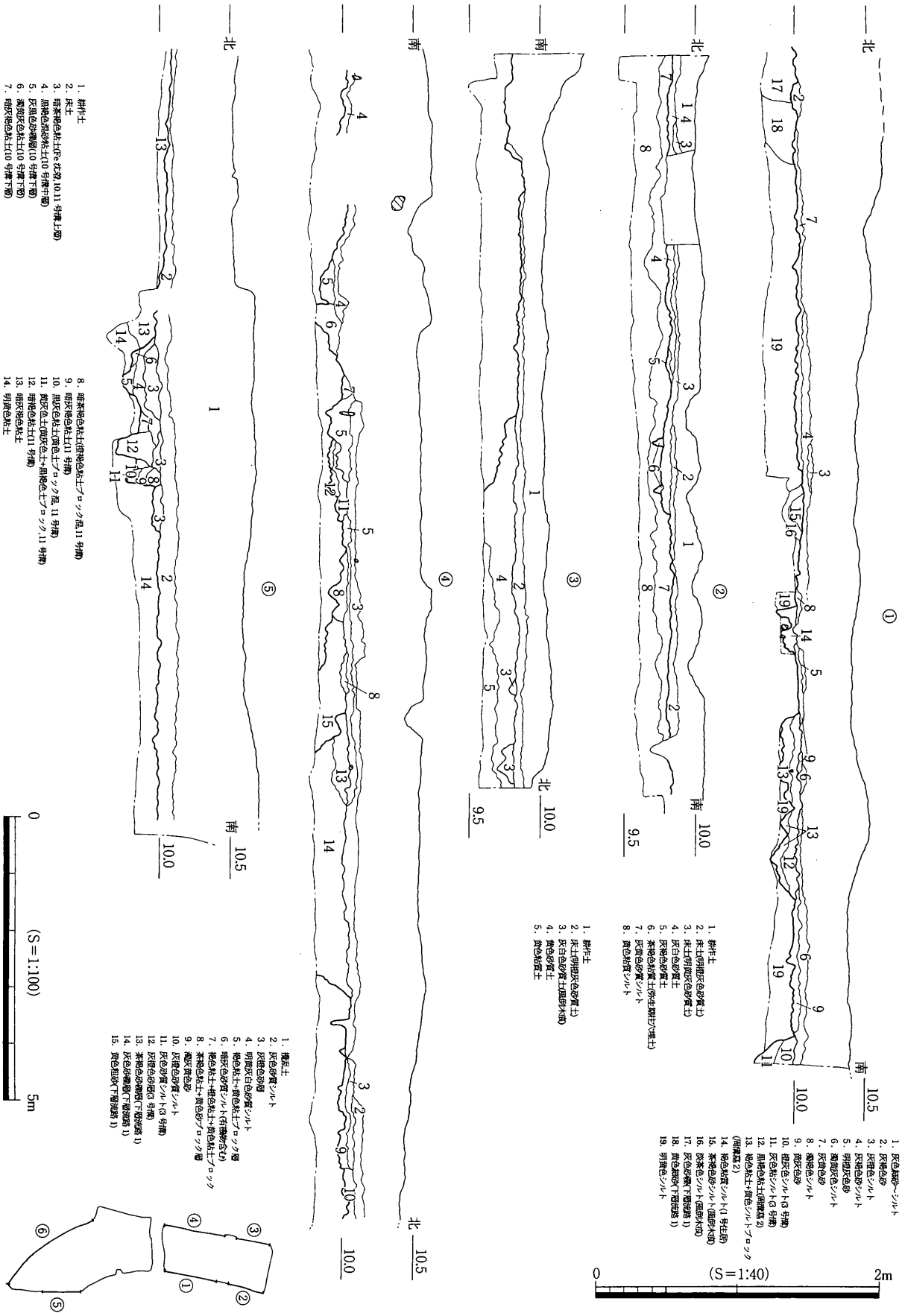


図８　Ｄ６トレンチ東壁・西壁，Ｄ７トレンチ東壁断面

けている。基盤層は、黄色シルトから粘土を基本とし、断面④における15・14層は、縄文晩期以前と考えられる流路１に伴う粗砂を中心とした堆積物である。

Ｄ７トレンチ東壁断面⑤（図８）

攪乱土とした現在の耕作土１層下位には、これに伴う床土層２層が見られ、間層を挟まずに刻目突帯文期の検出面に至る。３～12層は、刻目突帯文期の10・11号溝の埋没土である。これらの溝の遺存状態から見て、検出面はかなりの削平を受けていることを考慮する必要がある。

基盤層は明黄色粘土のほぼ単一層であり、調査範囲では無遺物である。Ｄ７トレンチ南壁を中心として確認された下層遺構流路２の存在は確認できない。後世に削平されたか、流路２がトレンチ南部を中心としたものである可能性が考えられる。

Ｄ７トレンチ南壁断面⑥（図９）

現在の耕作土１層下位の床土２・３層が見られ、遺構検出面に至る状況は他のトレンチと同様であるが、遺構検出面は、西から東へ移るに従い階段状にかなりの削平を受けている。西側の検出面とトレンチ東端の検出面は、最大で0.3ｍほどの比高差があり、刻目突帯文段階の水路群10～16号溝は、こうした地下げによって溝底を中心とした遺存状態を呈するに至ったものと考えられる。

刻目突帯文期水路群は、22～31層を基盤層とするが、これらはトレンチ西側の旧中州と考えられる30層の砂礫層を起点として、東へ傾斜して見られる。22～29層は、下層流路２とした落ち込み状の地形に堆積した遺物包含層であり、サヌカイト製の楔形石器・剥片・砕片を中心とした遺物を包含している。これらは巨視的には同一層であり、上面の離水が進んだ結果、色調等に変化が生じたものと考えられよう。土器片

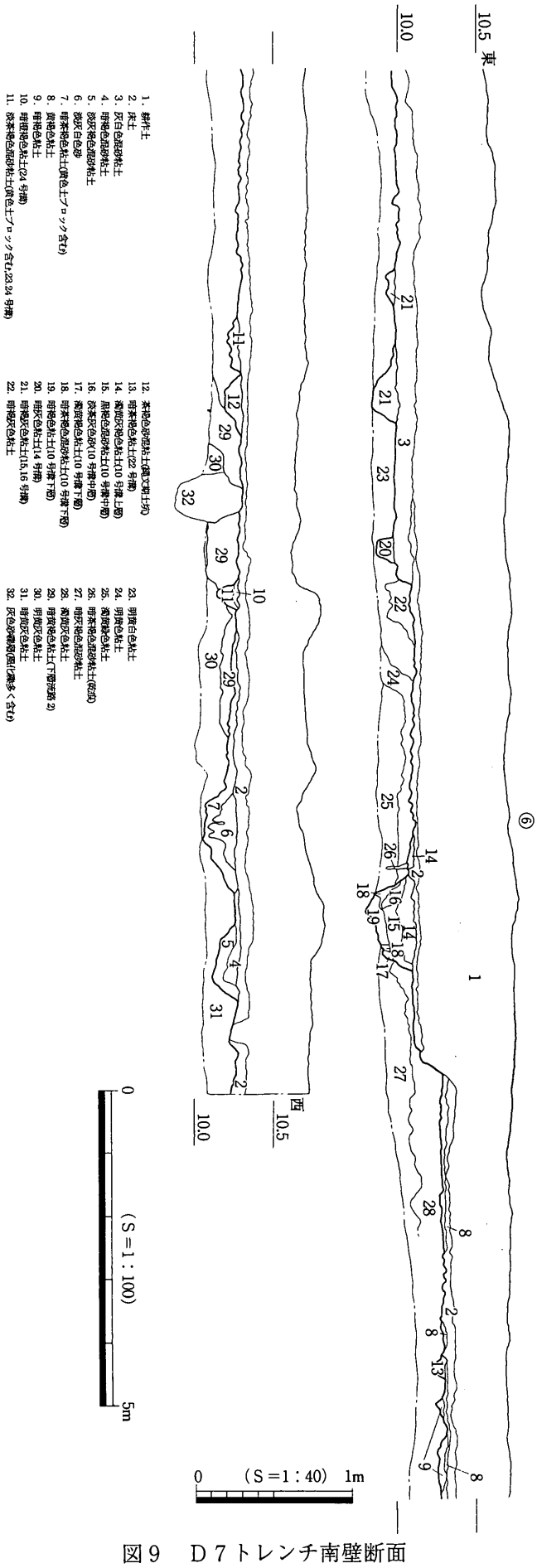


図９　Ｄ７トレンチ南壁断面

は見られなかったが、遺跡全体の検出遺構の時期から見て、縄文晩期前葉から中葉を中心とした時期の堆積層の可能性が高い。また、トレンチ全体ではなく局所的に見られることから、旧中州を中心とした微高地が埋没していく過程において堆積したものと考えられ、それ以前の微高地上面は、起伏に富んでいたことが想定される。刻目突帯文期には、こうした凹地が埋積され10号溝を中心とした水路群が掘開されたものと考えられる。

高橋　学1993「高松平野の地形環境－弘福寺山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に－」『讃岐国弘福寺領の調査弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会
外山秀一1993「丸亀平野における遺跡の立地とその環境－その１植物化石による環境の復元－」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十二冊郡家一里屋遺跡』香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター他
宮崎哲治1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊林・坊城遺跡』香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター他

第４項　縄文時代から弥生前期の遺構・遺物（図10～34）

当該期の主な遺構には、Ｄ４・Ｄ５トレンチにおいて、第１次調査でＳＲ01流路Ａとされた旧河道をはじめとして、Ｄ７トレンチの微高地上及び縁辺部の住居と考えられる柱穴群や10号溝等の水路群がある。

Ｄ４トレンチの流路Ａの検出状態は、Ｄ３トレンチに比べて深度が浅く、第１次調査で下層と報告されている刻目突帯文期単純の層位は見られなかった。Ｄ５トレンチでは、流路Ａ東肩部分を確認するに留まっており、遺物の出土も希薄である。検出面は、すべて連続した水田耕土で満たされていた。

Ｄ７トレンチの10号から26号溝を中心とした水路群は、位置関係から見て、流路Ａの水田面に給水するものと考えられる。10号溝は、11号溝等の小溝と連接する形で検出しており、その分岐点となる部分では、簡易な堰と考えられる自然礫の集積が認められた。堆積状況の再検討や、予備調査トレンチでの所見から、流路Ａの凹地上には縄文晩期末葉から弥生前期にかけて水田が拓かれていた可能性を想定することができる。

Ｄ７トレンチ内の南北の２箇所において、住居を構成すると考えられる柱穴群を確認している。縄文期の住居形態を復元する上で貴重な調査例になるものと考えられる。

Ｄ４トレンチ流路Ａ（図12～15，図版６）

本トレンチ東部において、第１次調査のＤ３トレンチから連続する流路Ａを確認している。調査範囲の都合上、流路西肩部を検出するにとどまっており、底面は東へ向かって緩やかに落ちる。現代の水田耕土と床土を除去した段階で検出しており、最深部まで0.9mを測る。堆積土は、特徴から見て上・中・下層の３つに区分することができ、底面が溝状に落ち

写真４　Ｄ４トレンチ流路Ａ全景　東から

Y=53.02
Y=53.06
Y=53.10
Y=53.14
Y=53.18
Y=53.22
X=144.48
X=144.44
X=144.40
X=144.36
C-1
D-1
D-2
D-3
D-4Tr
D-5Tr
D-6Tr
D-7Tr
E-1
3号周溝墓
1号周溝墓(旧SX03)
2号住居
2号周溝墓
1号住居
1号土坑
堅果類貯蔵穴
北柱穴群
25号溝
南柱穴群
10号溝
流路A
流路B
微高地(旧中州)
0
40m

図10　遺構全体図

図11　遺構配置（縄文晩期～弥生前期）

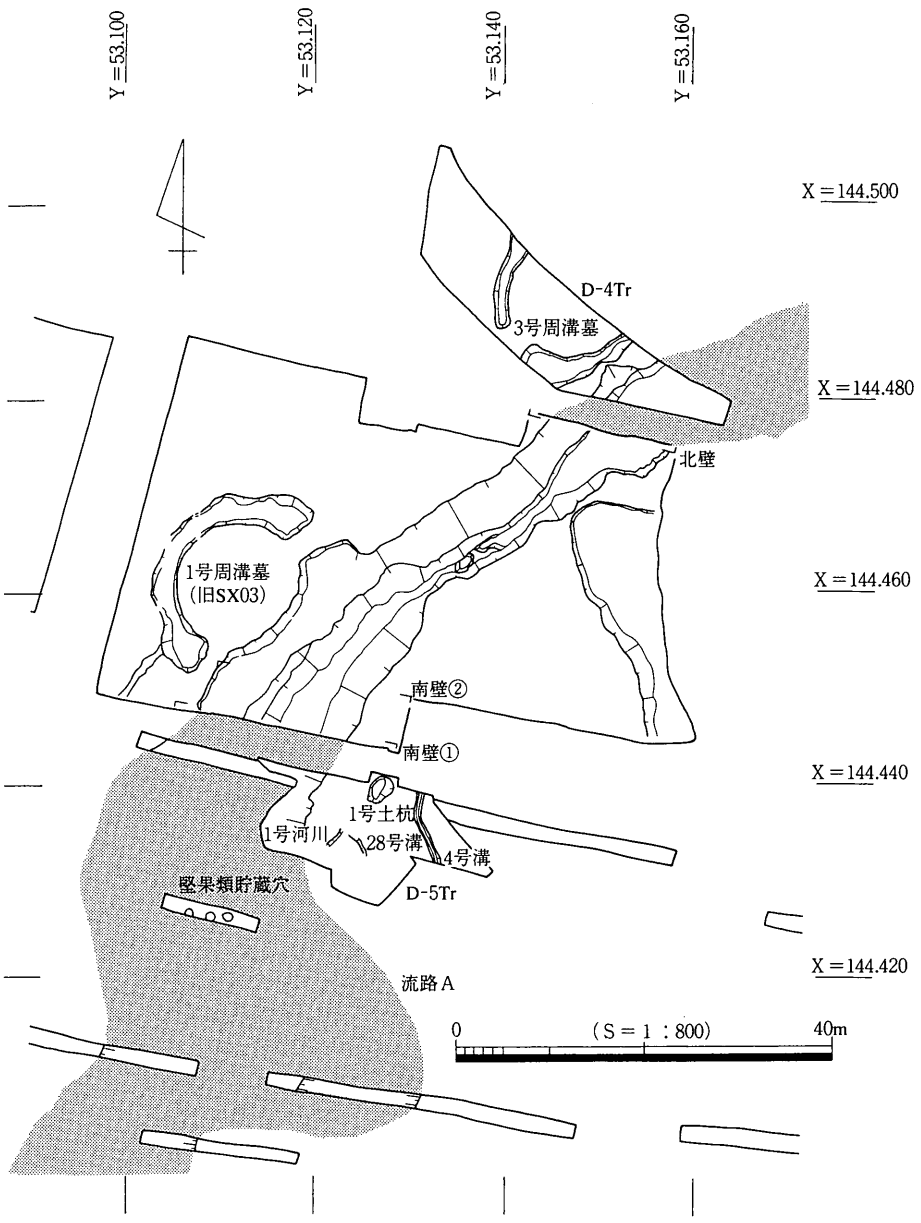


図12　流路A全体図

込む部分を最下層として調査を実施した。

上・中層は、層内にラミナを一切交えないことから、水田耕作土と考えられ、上・中層水田と呼称する。下層底面は凹凸が激しく、粘土ブロックを多く交える。底面の凹凸が激しい部分では、溝状を呈する箇所も見られた。層相から判断して、人的な擾乱を受けている可能性は否定できない。流路底面のレベルは、南側のＤ３トレンチ部分より高くなっており、木製農具が含まれる湿地性堆積物(黒色粘土)は、本トレンチでは見られない。層序対比については、後述することとしたい。

出土遺物から見た各層位の年代は、上・中層水田が古代～中世、下層は縄文晩期～弥生後期と考えられる。最下層からは、縄文晩期土器に混じって遠賀川式土器甕底部片55が出土しているが、層相が安定したものでない点を踏まえると、共伴関係を示すものかどうかは断定できない。

16～19は、上層水田からの出土であり、縄文土器浅鉢16、弥生土器壷底部17、弥生土器甕底部18、楔形石器19が見られる。

20～24は中層水田から出土遺物であり、須恵器長頸壷口縁20、刻目突帯文土器深鉢28、弥生土器甕22、同高杯23・24が確認できる。

刻目突帯文土器深鉢口縁25～30、同底部32、縄文土器浅鉢体部31、同底部33、弥生前期壺34、弥生土器無頸壺35、同甕口縁36、同底部37～40、同器台41、楔形石器42～45がある。25～30刻目突帯文土器深鉢は、突帯の位置や形状、刻目の大きさから見て、晩期終末の所産と考えられる。34・36～39は弥生前期前半期、35は前期末の所産と見られる。40・41は後期前半期の所産と捉えられよう。

46～50は下層の中でも下位より出土した一群である。46は丹塗磨研が認められる壺形土器肩部片であ

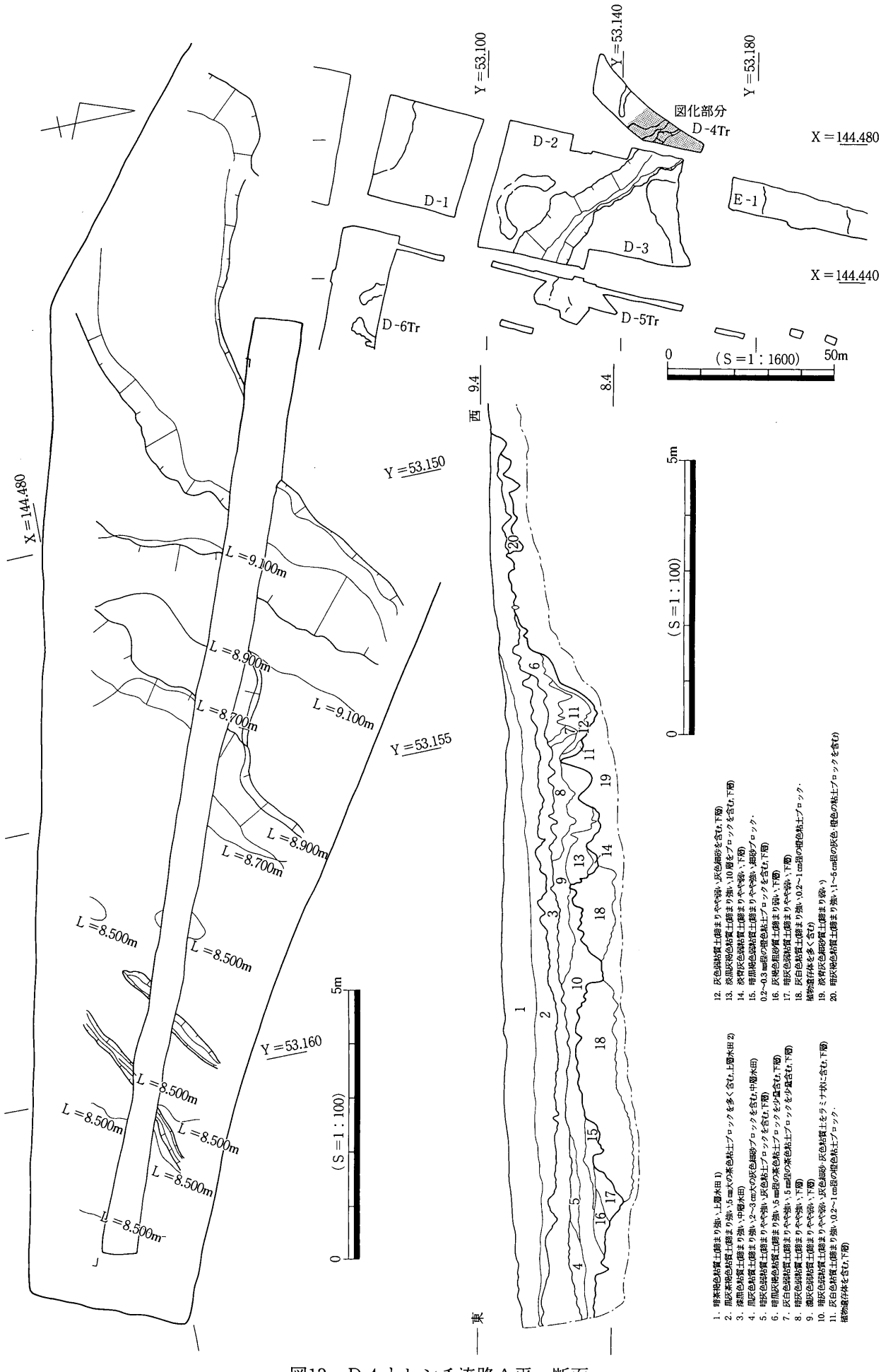


図13　Ｄ４トレンチ流路Ａ平・断面

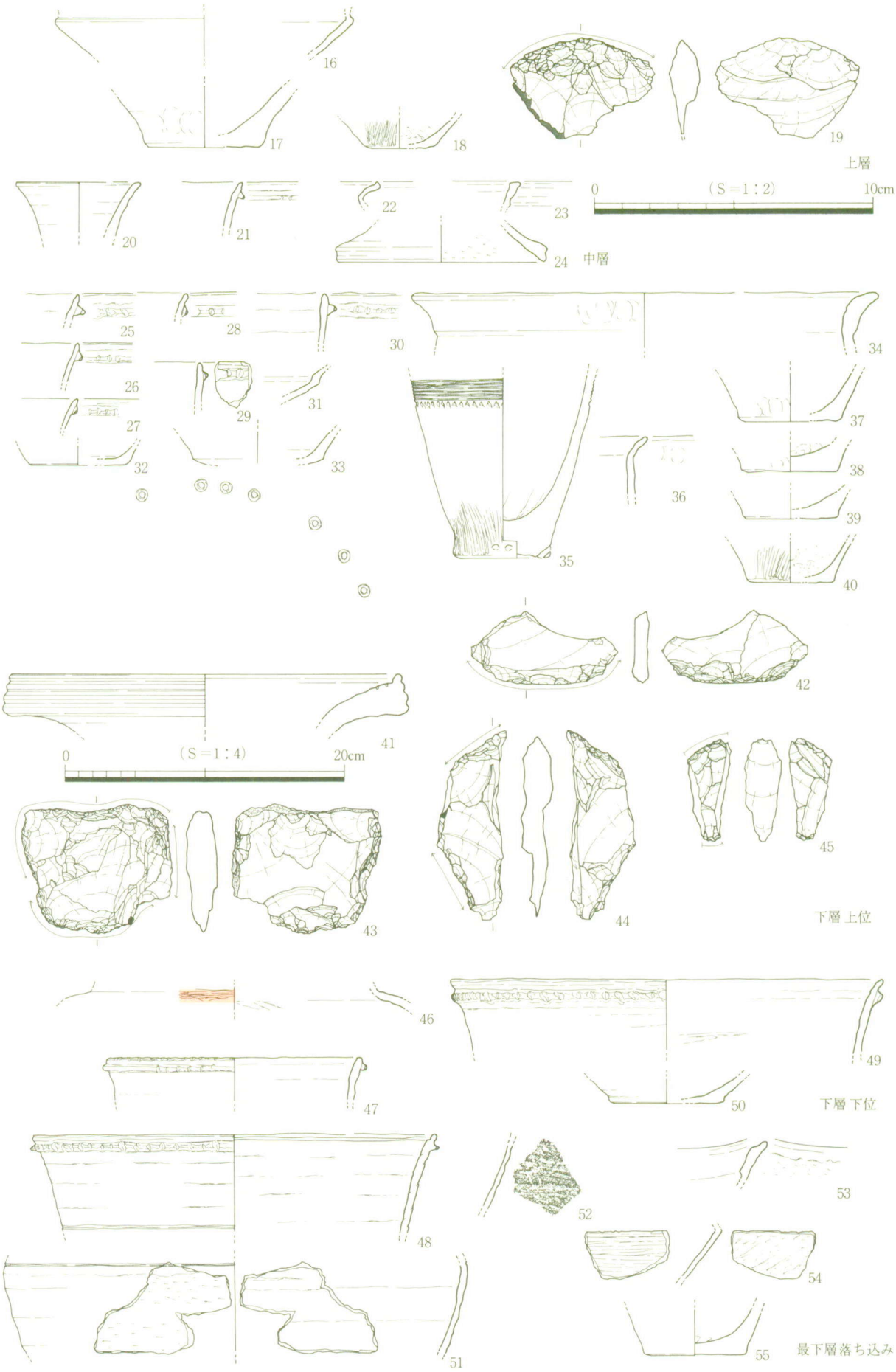


図14　Ｄ４トレンチ流路Ａ出土遺物その１

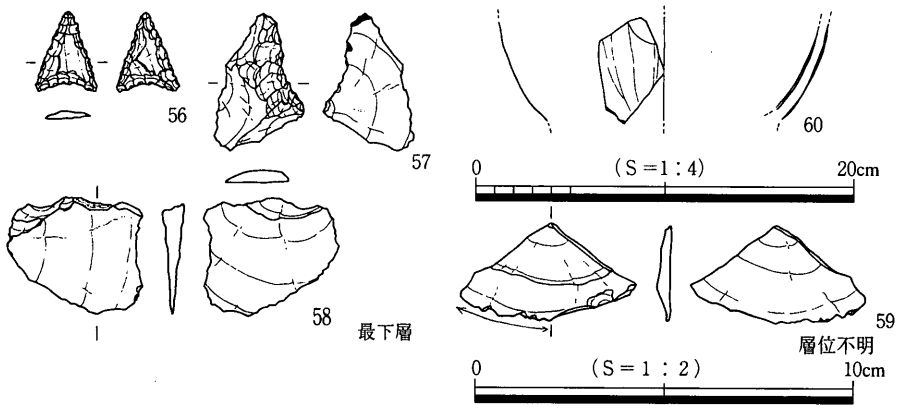


図15　D４トレンチ流路Ａ出土遺物その２

る。全体形は不明ながら、張りのある胴部から内傾する頸部をもつ夜臼式系の壺と見られ、北部九州からの搬入品の可能性もある。47・48は刻目突帯文期深鉢口縁部、49は浅鉢か壺の底部片と考えられる。

50～55は最下層の落ち込みから出土している。50～52は突帯文深鉢の口縁・胴部片、53は波状口縁をもつ浅鉢、54は頸胴部境の沈線が見られる浅鉢胴部片である。55は弥生前期の甕と考えられる底部片である。

56～59は、トレンチ出土の層位不明の資料である。

Ｄ５トレンチ流路Ａ（図16・17，図版６・21・22）

本トレンチは、第１次調査のＤ３トレンチに南接した位置にあり、トレンチ西端で流路Ａ東肩部を検出している。堆積層は、上層の水田耕作土と下層の湿地性堆積物の大きく二つに分けて捉えることができる。

水田耕作土は、上・中・下層の大きく３面に分けて捉えることができる。また、間層に氾濫堆積物を交えないことから、面的な検出には至っていない。

上層水田は、黒褐色～灰褐色の粘土中にブロックを多く含み、層相から更に３枚の水田面に分割できる。いずれも、自然堆積層を間層に交えない。また、流路Ａの部分を越えて東へ広がりを見せることから、流路死滅後の微窪地を利用した水田化が、流路域を越えて広がっていたものと考えられる。出土遺物からは、古代８ｃ～12ｃ頃に形成された水田層と考えられる。

中層水田は、黒灰色系粘土層を耕土としており、粘土ブロックを多く含む。弥生後期から古墳時代中期頃の遺物が含まれるが、後述する既往調査との層序対比から、古代に形成されたものである可能性が高い。

流路肩部では、小溝と耕作痕と考えられる小規模で歪な窪みを検出している。間層を交えないことから、上層水田に伴うものと考えられる。

下層水田は、上下２面に分けて捉えられる。上位の水田は、鉄分の沈着が見られる褐色粘土を耕土とする。出土遺物が見られないことから、詳細な時期については不明である。下位の水田層は、鉄分の沈着が著しい灰色粘土を耕作土とし、粘土ブロックを多く含む。下層の湿地性堆積物である黒色粘土との層界は明瞭である。出土遺物は見られないが、既往調査におけるＤ３トレンチとの層所対比から、縄文晩期末から弥生前期前半の所産である可能性が高い。

下層は、植物遺体を多く含み湿地状の環境下で堆積したと考えられる黒色粘土である。出土遺物は見られなかったが、縄文晩期の年代が想定され、流路Ａの部分では第１次調査で下層とした層準とほぼ対応するものと考えられる。

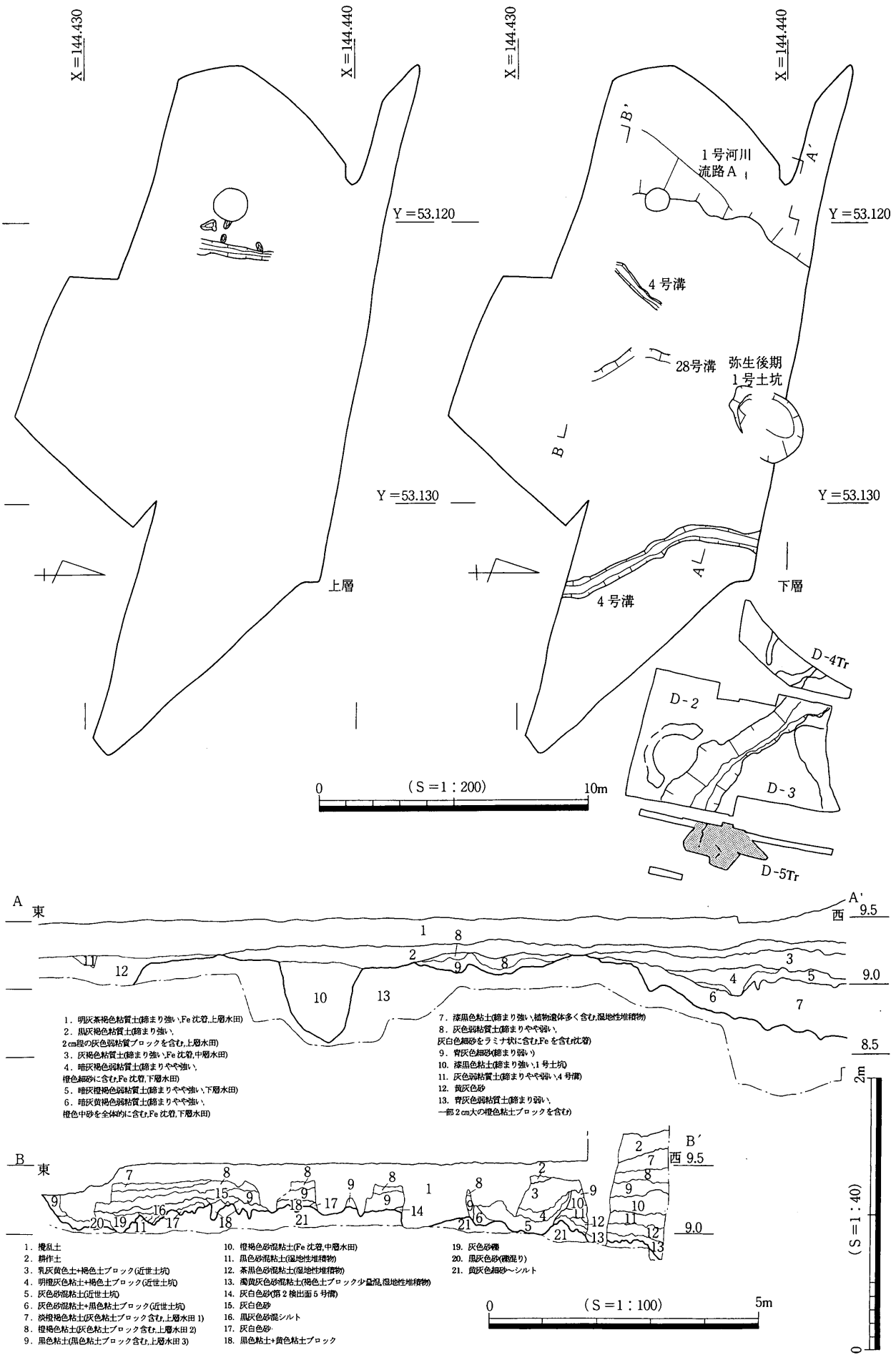


図16　Ｄ５トレンチ流路Ａ平・断面

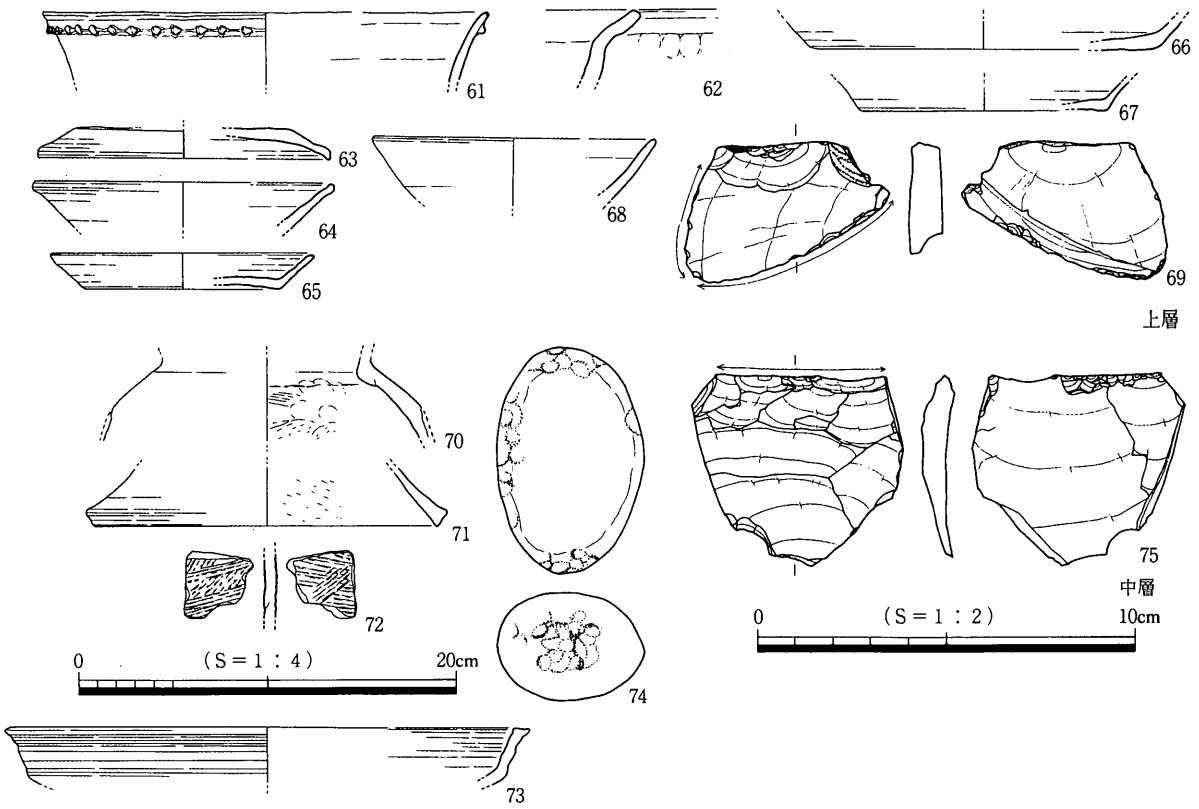


図17　Ｄ５トレンチ流路Ａ出土遺物

61～69は、上層水田からの出土遺物。61のような刻目刻目突帯文土器も見られるが、主体となるのは、８世紀後半の須恵器蓋63、ほぼ同時期か一部９ｃ期まで下る可能性もある須恵器皿64～67に加えて、中世前半期と考えられる焼成不良の須恵器椀68などがある。69は使用痕のある剥片である。

これらの遺物から、上層とした水田層は８ｃ後半以降、12世紀頃までに機能していたものと推定できる。

70～75は、中層水田からの出土遺物。70は古墳時代前期の布留系甕の胴部から頸部片、71は弥生後期高杯脚部片、72は弥生後期タタキ甕の胴部片である。74は砂岩製敲石、75は楔形石器である。

73は、流路肩部に見られた不定形の落ち込みから出土した弥生後期前半期の高杯であり、胎土中に角閃石粒を多く交える。

第１次調査成果との層位的な対応関係（図12・18・19，図版６～８）

今回の調査成果と、第１調査のＤ３トレンチにおける流路Ａの層位的な対応関係を整理する。まず、第１次調査の報告（宮崎1993）における層位区分は、次のようになる。

最下層（黒色混砂粘質土，縄文晩期）下層（黒色粘土，縄文晩期）中層（黄褐色細砂・砂質土，弥生前期）上層（茶褐色粘土，弥生終末期～古墳時代）。

報告では詳細な断面図の提示が行われておらず、今回の報告にも深く関係していると思われることから、ここに再掲し堆積環境を確認しておきたい。

最下層・下層の堆積物は、黒色粘土を基調とし植物遺存体を多く含む。最下層と下層の層境は漸移的であり、巨視的には同一層として捉えられる。堆積物の様相から、流水停止後の湿地状の堆積環境が想定できる。縄文晩期中葉から刻目突帯文期の土器群を含み、狭鍬・手鋤等の木製農具が出土したのも本層準である。図16に再掲した南壁①の断面では14層、南壁②では９層に相当する。北壁部分には、最下

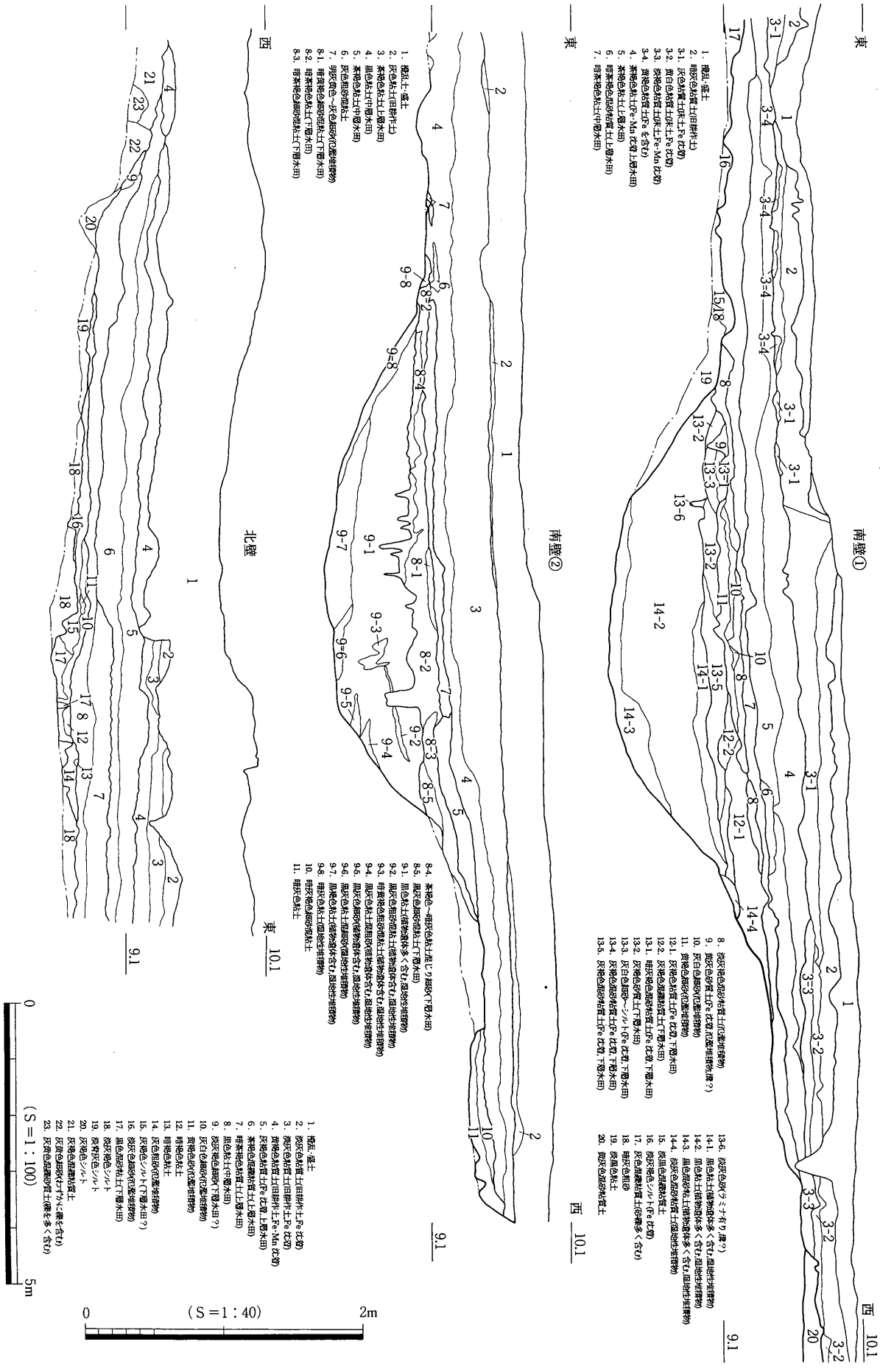


図18　Ｄ３トレンチ流路Ａ断面（第１次調査）

層・下層に対応する層準は明確には見られず、流路底面のレベルもやや高くなる傾向がある。

中層は砂混じりの粘土～シルトを基調とした下位の層準と、上位の東側を中心として広がりを見せ鉄分が多く沈着した粗砂層から構成される。下位の南壁①の12・13層、南壁②の８層の層準が対応する。下層の黒色粘土と違って、ラミナを一切認めないことと、下部に凹凸が激しく見られることから、水田耕作土と捉えることができ、下層水田と呼称する。

調査時には数層に分層しているが、調査写真を見る限りはほぼ同一層か、上下２層に連続する耕作土を細分している可能性が高い。上位の粗砂層は、下層水田を覆う氾濫堆積物であり、本層が見られる部分には、元来の耕作土の上面が遺存していた可能性が高い。この氾濫堆積物は、現状より層厚をもって流路全域に広がっていたものが、更に上位の水田耕作に伴って消失しているものと考えられる。

北壁の断面には、本層準下位の水田耕作土に対応する明確なものは見られず、下層水田上位の氾濫堆積物が流路底面に見られるのみである。断面図15・17層は、ラミナを認めず層内に細かなブロックが見られることから、水田耕土の可能性も考えられるが、現時点では確定できない。

下層水田の耕作土からは、微化石分析でも栽培種のイネ科イネ属の植物珪酸体が多く出現する傾向が指摘されており（宮崎編1993）、水田層の可能性も指摘されている。

出土土器には、刻目突帯文土器から弥生前期前半期の土器群が含まれ、報告では弥生前期の年代が想定されている。しかし、耕作土は連続して営まれた可能性があることと、氾濫堆積物である上位の粗砂との取り上げ区分が行われていないことから、縄文晩期から弥生前期前半の時間幅で捉えておくのが妥当であると考えられる。水田が拓かれた時期は、縄文晩期に遡る可能性は極めて高い。

上層は茶褐色粘土として一括されているが、層相から大きく上下二つの水田層にわけて捉えることができる。下位の水田層壁①の７層、南壁②の４層は黒褐色粘土のブロックを多く含み、水平堆積する状

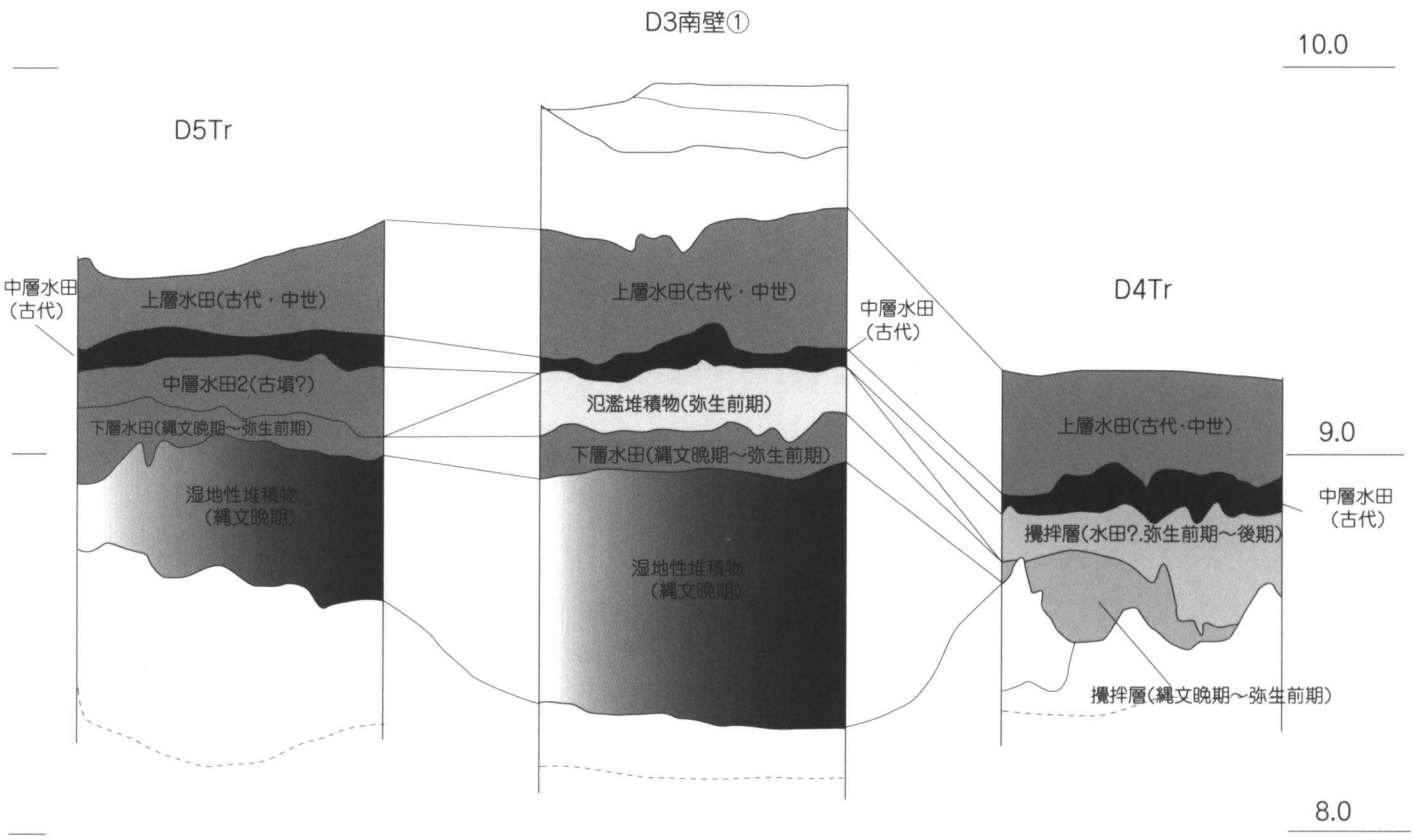


図19　流路Ａ層序対比

況が見られ、中層水田と呼称する。また、南壁②の４層は、流路西側の弥生後期中葉に比定される１号周溝墓を削り込む状況が見られることから、水田耕作に伴って１号周溝墓を破壊している可能性が高い。

出土遺物から、弥生時代後期～古墳時代の年代が想定されているが、これらの遺物は周溝墓１の東側周溝を削平した際に混入した可能性も考えられる。

写真５　Ｄ３レンチ流路Ａ断面（第１次調査）

Ｄ４トレンチの中層水田に対比される層準から、７～８ｃ代の須恵器片が見られることから、古代を中心とした時期が想定できる。

中層水田上位には、茶褐色粘土が水平堆積して状況が見られる。層内にラミナが確認できないことから、水田層の可能性が高く、上層水田と呼称する。南壁①の４～６層、南壁②の３層、北壁の５～７層が相当し、中層水田との間には、氾濫堆積物を交えない。南壁①の４層に見られるように、中層水田の広がりを越えて水田が営まれることが想定できることから、これに伴う攪拌が周溝墓１東側墳丘に及んだと考えられる。微化石分析においても、栽培植物のイネ属が多く確認されている。

Ｄ５トレンチの上層水田に対比される層準から、８ｃ～12ｃの須恵器片が出土していることから、かなりの長期間にわたって水田が営まれたと考えられる。

第１次調査	本書	時期	堆積物他
流路Ａ上層・包含層	上層水田	古代～中世	茶褐色粘土
流路Ａ上層	中層水田	古代	暗茶褐色粘土
流路Ａ中層	下層水田を覆う洪水砂	弥生前期	灰褐色粗砂
	下層水田	縄文晩期末～弥生前期	灰褐色粘土
流路Ａ下層		縄文晩期	黒色粘土
流路Ａ最下層		縄文晩期	黒色粗砂混粘土

表５　第１次調査との層序対比表

以上、堆積層の特徴を手掛かりにしてＤ３・Ｄ４・Ｄ５トレンチの層序対比を行うと、図17・表５に示したように整理できる。既往の報告でも触れられているように、Ｄ３トレンチの部分で厚く見られた下層の湿地性の堆積物は、北のＤ４トレンチでは見られず、流路底面が急激に浅くなっている状況が看取される。Ｄ３トレンチの下層水田の上位に存在する氾濫堆積物は、他のトレンチでは上位の水田耕作土に取り込まれており、局所的にしか残存していない。しかし、Ｄ３トレンチは唯一耕作土の上面が残存している箇所と考えられ、今後の調査によって畦等の検出が可能といえる。

Ｄ４トレンチ下層の攪拌については、不明とせざるをえない。ブロックが多く含まれることから、人的な擾乱を受けている可能性が高いが、現地調査の段階で土層の見極めが不十分なことから、攪拌とした曖昧な表現に留まる。Ｄ５トレンチの中層水田とした下位の水田面は、対応できる層準が見当たらず、レベル的にＤ３トレンチの氾濫性堆積物との上下関係は不明である。

水田層が形成される時期を整理すると、流路の埋積が進んだ晩期末～弥生前期前半の段階で水田化が行われ、その後氾濫堆積物の若干の供給を受けながら12ｃ頃まで水田が営まれていたと考えられよう。

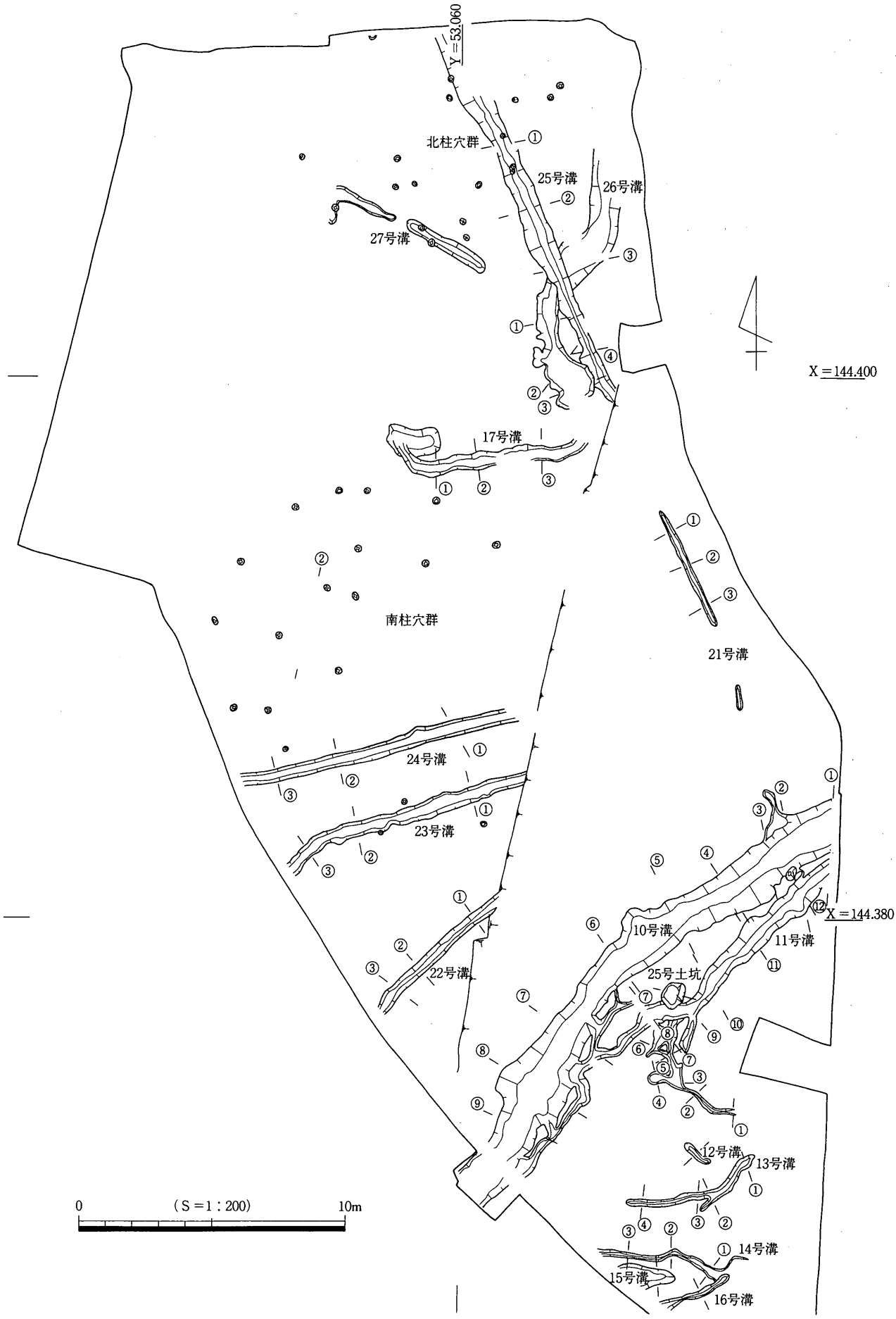


図20　Ｄ７トレンチ突帯文期遺構配置

Ｄ７トレンチ柱穴群（図20～22，図版15）

Ｄ７トレンチの南北２箇所において、後世の所産と考えられる柱穴と明らかに埋没土を違える柱穴群を検出している。これらは、黒色粘土の埋没土をもつことで共通しており、出土遺物が希少であったが25号溝に切られるものも存在することから、刻目突帯文期かそれ以前の遺構である可能性が高い。

遺跡全体の検出遺構の時期を考慮すれば、刻目突帯文期の所産と考えるのが妥当であろう。明確な平面プランを復元できないものの、

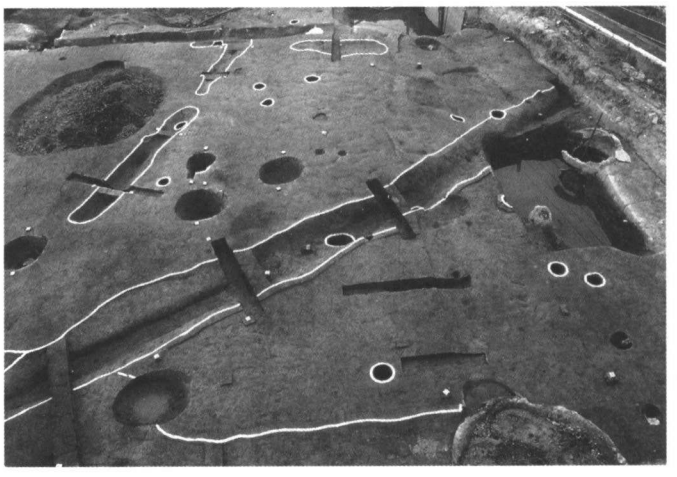


写真６　Ｄ７トレンチ北柱穴群　東から

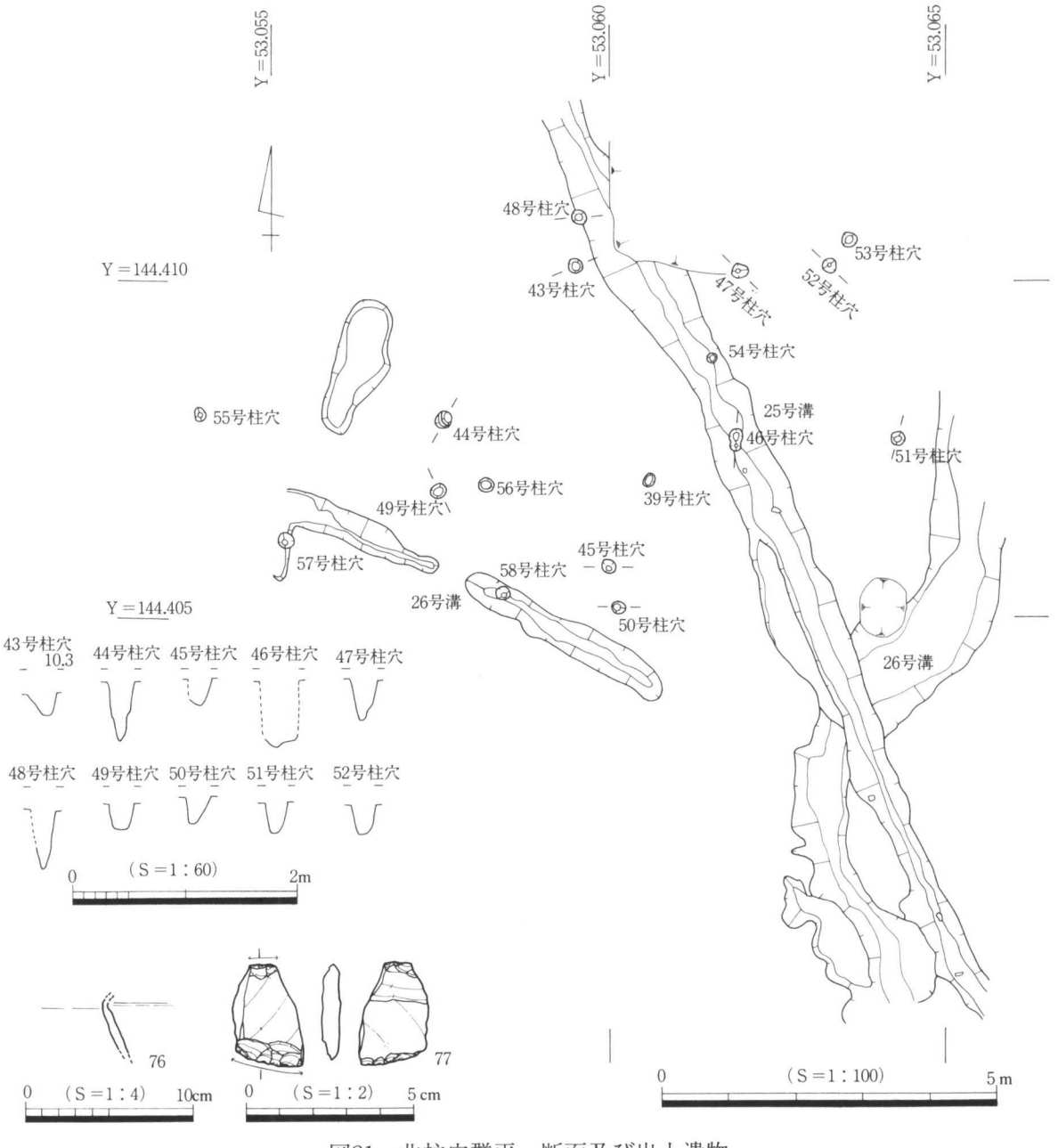


図21　北柱穴群平・断面及び出土遺物

集中して見られる配置状況から住居等を構成する柱穴である可能性が高い。南北の大きく２群に分けて提示しておく。

北柱穴群（図20・21，図版15）

Ｄ７トレンチ北半部の微高地上で検出した39～45号柱穴が該当する。48号柱穴は25号溝と切り合い関係があり、本柱穴が後出する。46・54号柱穴は、25号溝の堆積土を除去した段階で検出された。平面配置から、43～47号、48～52号柱穴が大きく２群分かれて多角形状に巡る状況が復元でき、２棟以上の住居存在が想定できる。

各柱穴は、残存深度が0.5m程を測り黒色粘土を埋没土にもち、39号柱穴より刻目突帯文期と考えられる浅鉢頸部片76、42号柱穴からサヌカイト製の楔形石器片77が出土している。

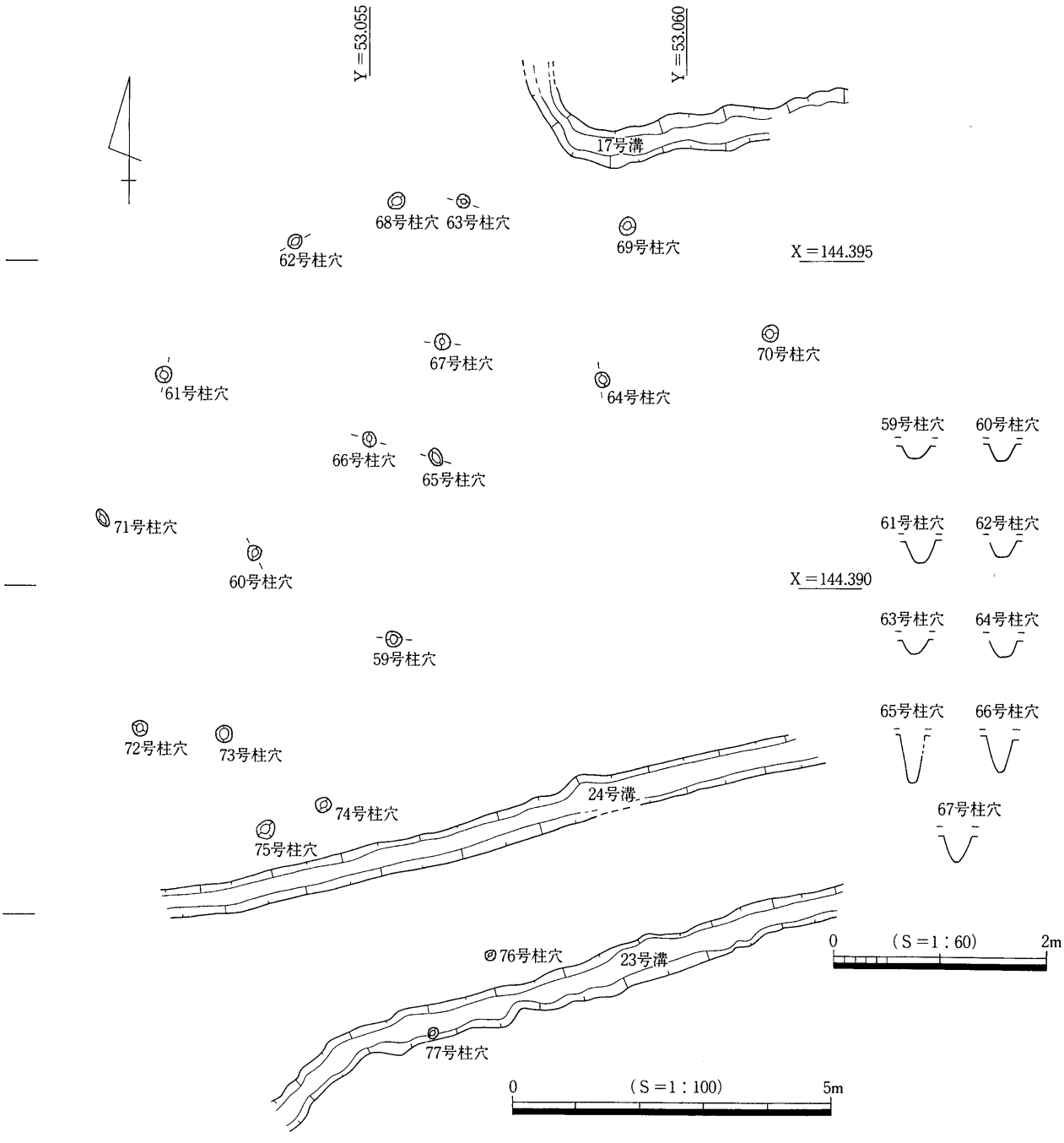


図22　南柱穴群平・断面

南柱穴群（図20・22，図版15）

Ｄ７トレンチ南部の微高地縁辺部で検出している柱穴群である。北柱穴群と比較して、全体的に不規則な分布状況を示しているが、北側の59～65号柱穴が多角形状に巡り、その中央部に65・66号柱穴が見られる点は注意される。更に南側にも複数の柱穴が広がることから、２・３棟程度の住居の存在が想定できるかもしれない。

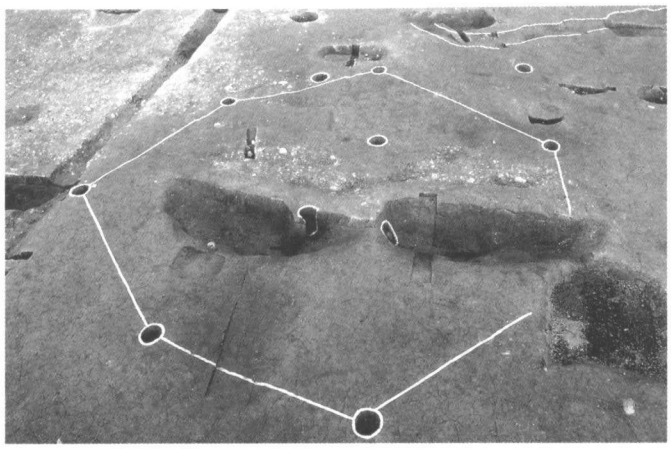


写真７　Ｄ７トレンチ南柱穴群　南から

出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴や23号溝の下位から76号柱穴を検出していることなどから、刻目突帯文期かそれを若干遡る時期の所産である可能性が高い。

Ｄ７トレンチ南部の刻目突帯文期水路群（図20・23～28）

10号溝（図23～27，図版５・10・11）

Ｄ７トレンチ南東部では、10・11号溝を初めとして12～16号溝などの小溝を多く確認しているが、近年の所産と考えられる面的な地下げが行われており、その多くは痕跡的に残るものと考えられる。

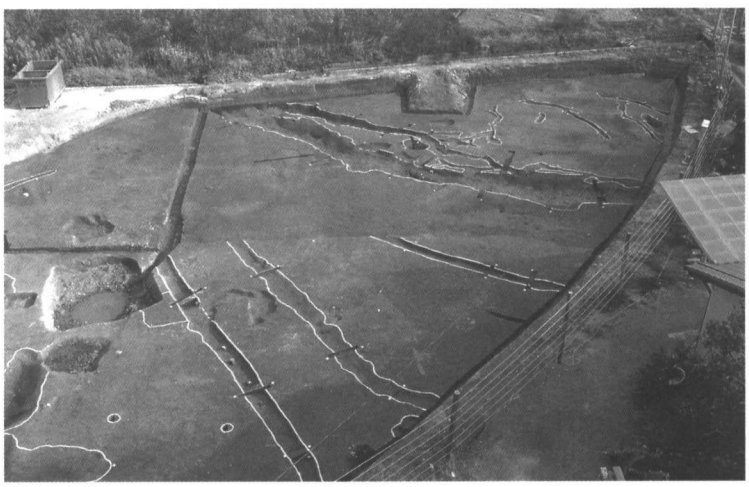


写真８　Ｄ７トレンチ刻目突帯文期水路群　西から

10号溝は、上面幅1.4～2.4ｍ残存深度0.3ｍ程を測り、断面は緩やかな逆台形を呈する。調査範囲内では、底面の比高差が0.1ｍ程しか確認できないが、微高地縁辺部を南西から北東方向へ流下し、ＳＲ01流路Ａに繋がるものと考えられる。南側と中央部において、11号溝と接点をもちながら併走するが、断面観察から切り合い関係は見られない。両溝との関係が良好に観察できるトレンチ北東部壁面では、両者が埋没土を共有しながら埋積されていき、その過程において11号溝が再掘削されている状況がうかがえる。

写真９　Ｄ７トレンチ10号溝南礫集積　南西から

中央部分の11号溝との接点となる部分とトレンチ北端では、溝底にほぼ接した状態で砂岩礫の集積が認められており、北礫集積・南礫集積遺構と呼称する。北礫集積は、21・25号溝の痕跡と考えられる北西方向への張り出しが見られる部分に

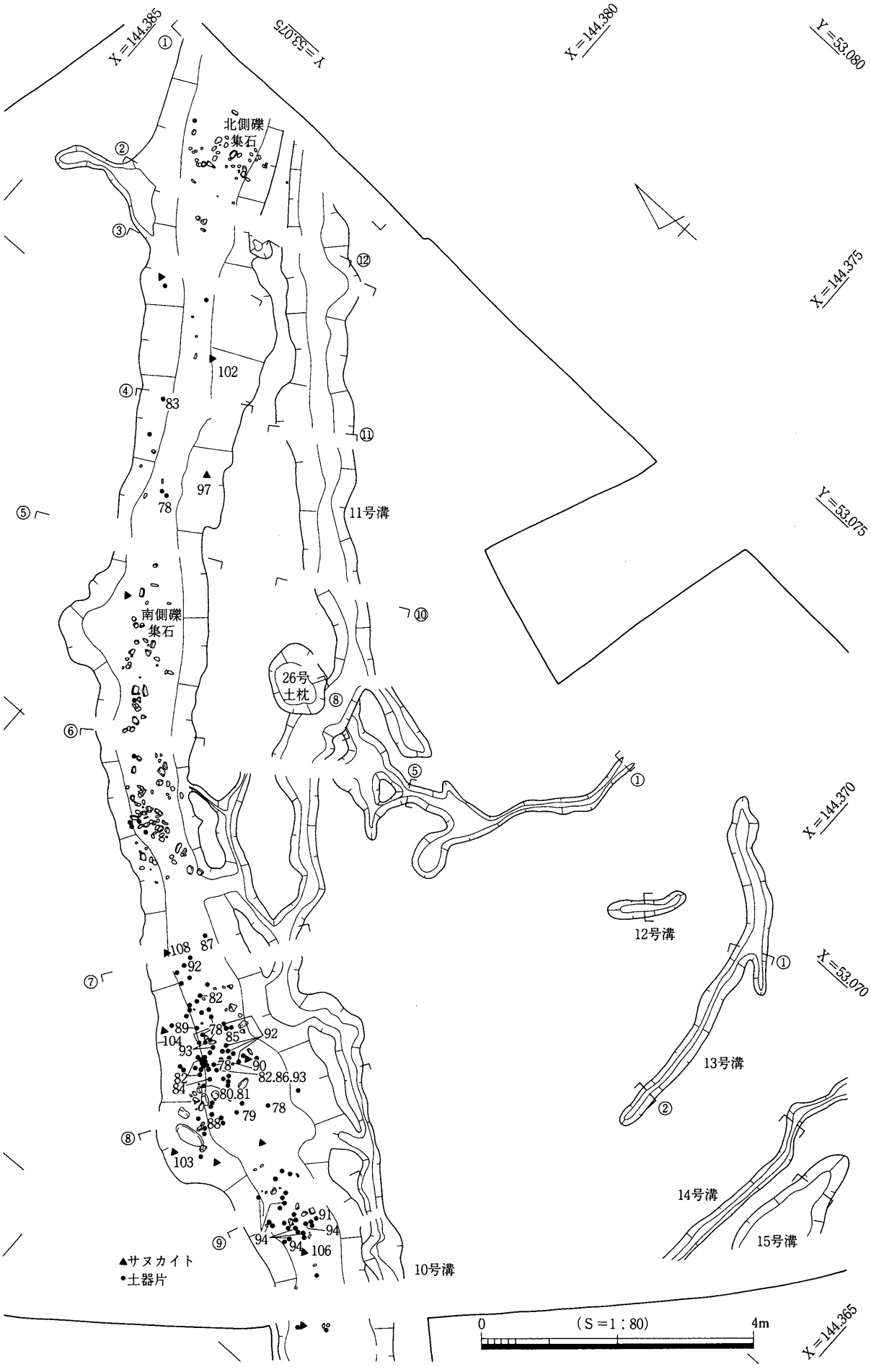


図23　10・11号溝礫・遺物出土状況

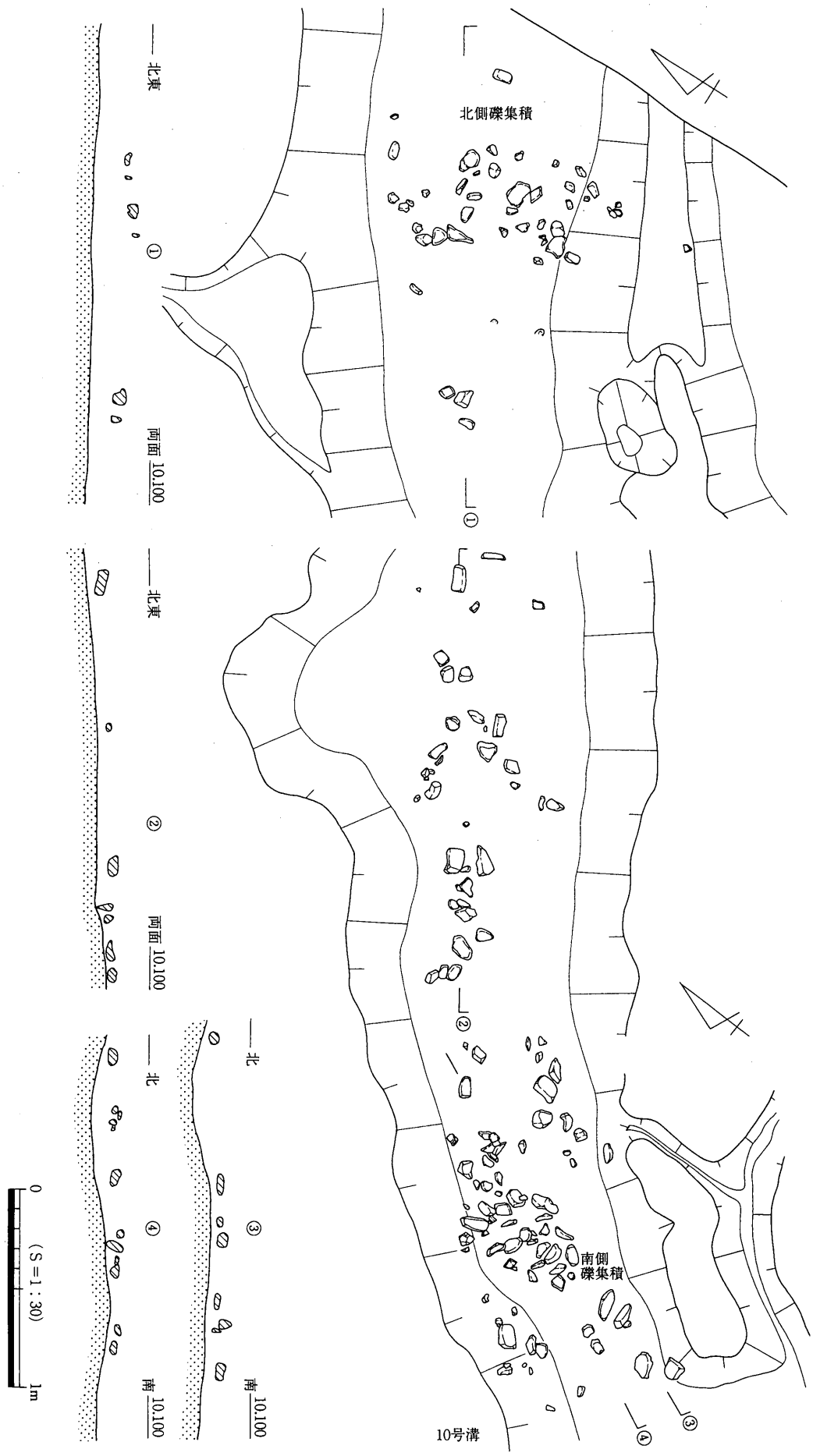


図24　10号溝礫集積部平・断面

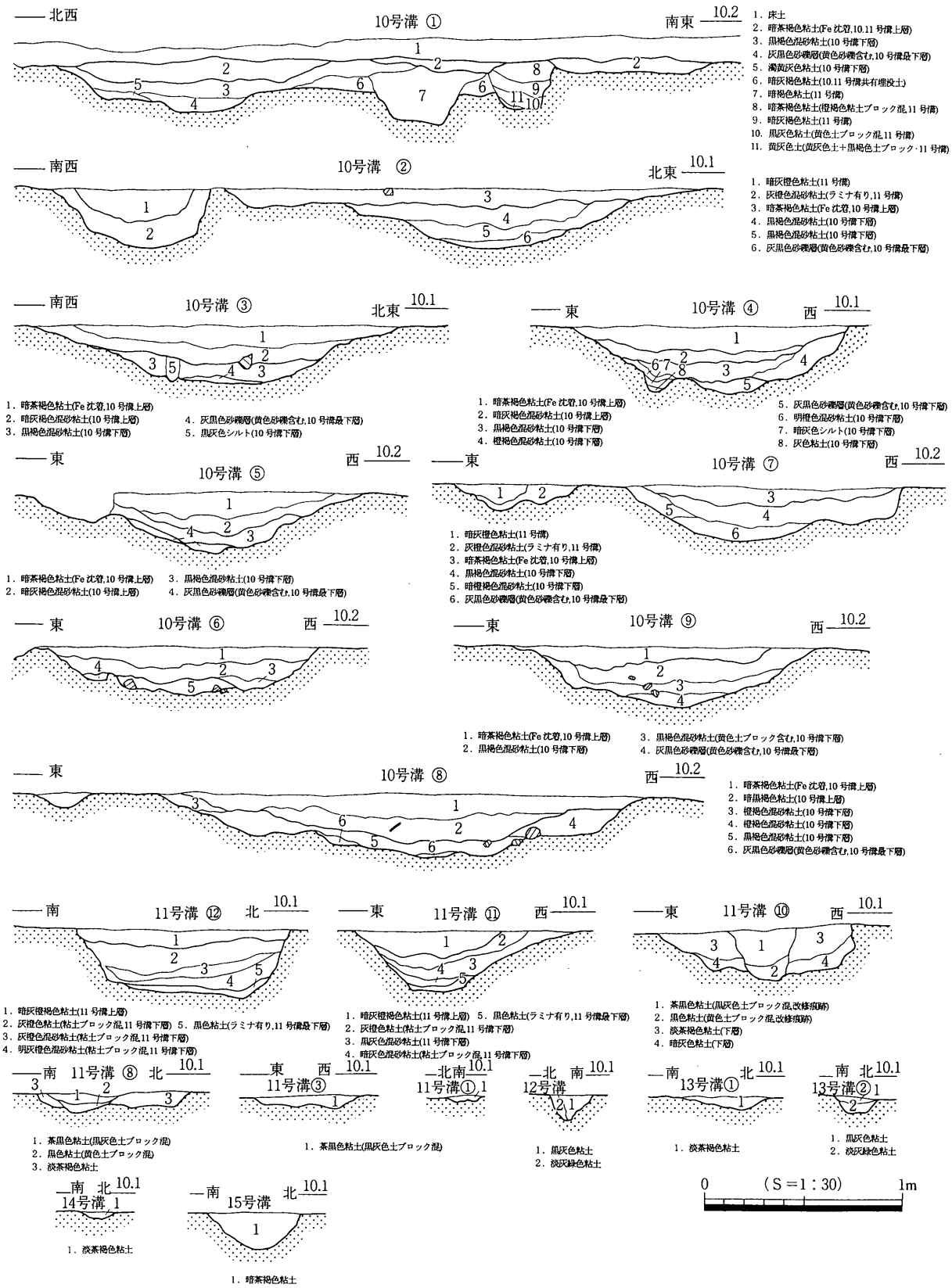


図25　10～15号溝断面

位置している。南礫集積は、当初の状態からやや乱れて検出されている可能性があるが、11号溝との分岐点に対応して検出されている。これらの検出位置と11・21・25号溝との関係を考慮すれば、簡易な堰としての機能が推定できる。規模から判断して、10号溝が主水路、11・21号溝が分水路として機能していた可能性が考えられる。

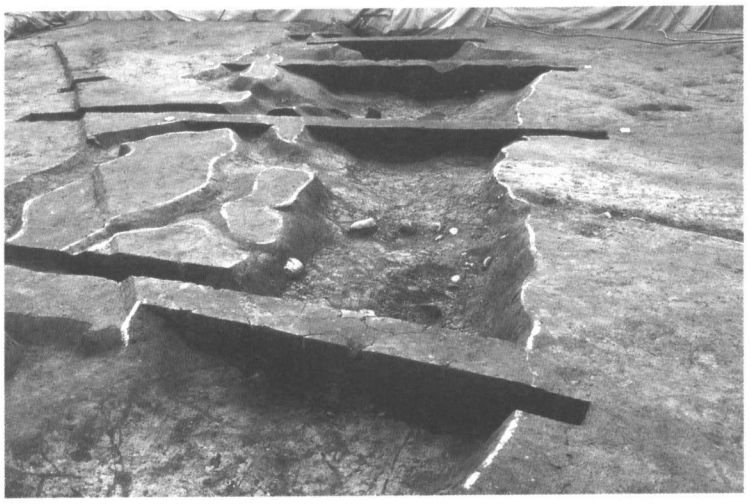


写真10　Ｄ７トレンチ10号溝全景　北から

溝内の堆積土は、上下２層に大別することができ、溝底には流水を示す堆積物である粗砂層が見られる。簡易な堰と考えられる礫集積遺構と多くの土器片は、いずれも溝底の粗砂上面に見られる黒褐色～暗灰色を呈する粘土層に含まれている。平面的に刻目突帯文土器を中心とした土器群は、南半部に多く認められた。上層の粘土層中には、細かなブロックが観察されることから、埋め土としての性格が強い。出土遺物は少量に留まっているが、弥生前期前半と考えられる突帯文系の甕が出土していることから、最終埋没した時期が想定できる。

78～108は中層出土遺物である。78～91は、頸部から口縁部が外反する形態をもつ刻目突帯文土器深鉢である。調整手法は、体部外面は斜め方向のケズリ、頸部外面はナデ調整で仕上げるものが殆どである。

78は、全体形が比較的判明する資料であり、口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の突帯を施し、他のものと比較してＤ字形の明瞭な刻目を施す。80は矮小な突帯のように見えるが、摩滅が進んでおり、元来は三角形のしっかりとしたものが施されていた可能性が高い。胎土や焼成状況から、81の頸・胴部片と同一個体と考えられる。82・83の頸胴部境には、明瞭な沈線が認められる。82の内面には、磨きにも似た丁寧なナデ調整が確認できる。

84～88は刻目突帯文土器深鉢口縁片であり、口縁端部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、やや小さなＤ字状の刻目を施す。90は内外面にミガキ状の調整を見ることから、浅鉢の胴部片の可能性も考えられる。91は刻目突帯文土器深鉢の頸部片であるが、外面には数条のヘラ描きによる山形の沈線文が確認できる。92は波状口縁浅鉢の口縁部であり、内面に２条の沈線を認める。小片であることから、径・傾きに検討の余地を残している。

93はボール状の浅鉢の胴部片であり、内外面を丁寧にミガキ締める。94は内傾する頸部に口縁端部が短く外反する浅鉢であり、口縁部内面に１条沈線と内外面に横位のミガキが認められる。95は94と同一個体の可能性も考えられるが、厚みや口縁端部の外反度がやや異なることから、別個体として提示した。

95～99は凹基無茎式石鏃、100は石錐である。101は両面から細かな刃部加工が施されているスクレイパーであり、刃部を中心に弱い摩滅痕が見られる。102～104は表面側が極度に摩滅していることから、打製石斧片と考えられる。打製石斧を楔形石器等に転用した際に生じるものと考えられる。105は必ずしも整った形態を持っていないが、研磨痕と考えられる線状痕と刃部を作り出した部分が見られることから、安山岩製の石鑿とした。106は上下縁に潰れが認められることから、楔形石器と考えられる。107・108は周縁に折れ面が見られることから、分割素材と思われる。

109～115は、上層からの出土遺物。109は、口縁端部に接して施される突帯の大きさや形状からみて、

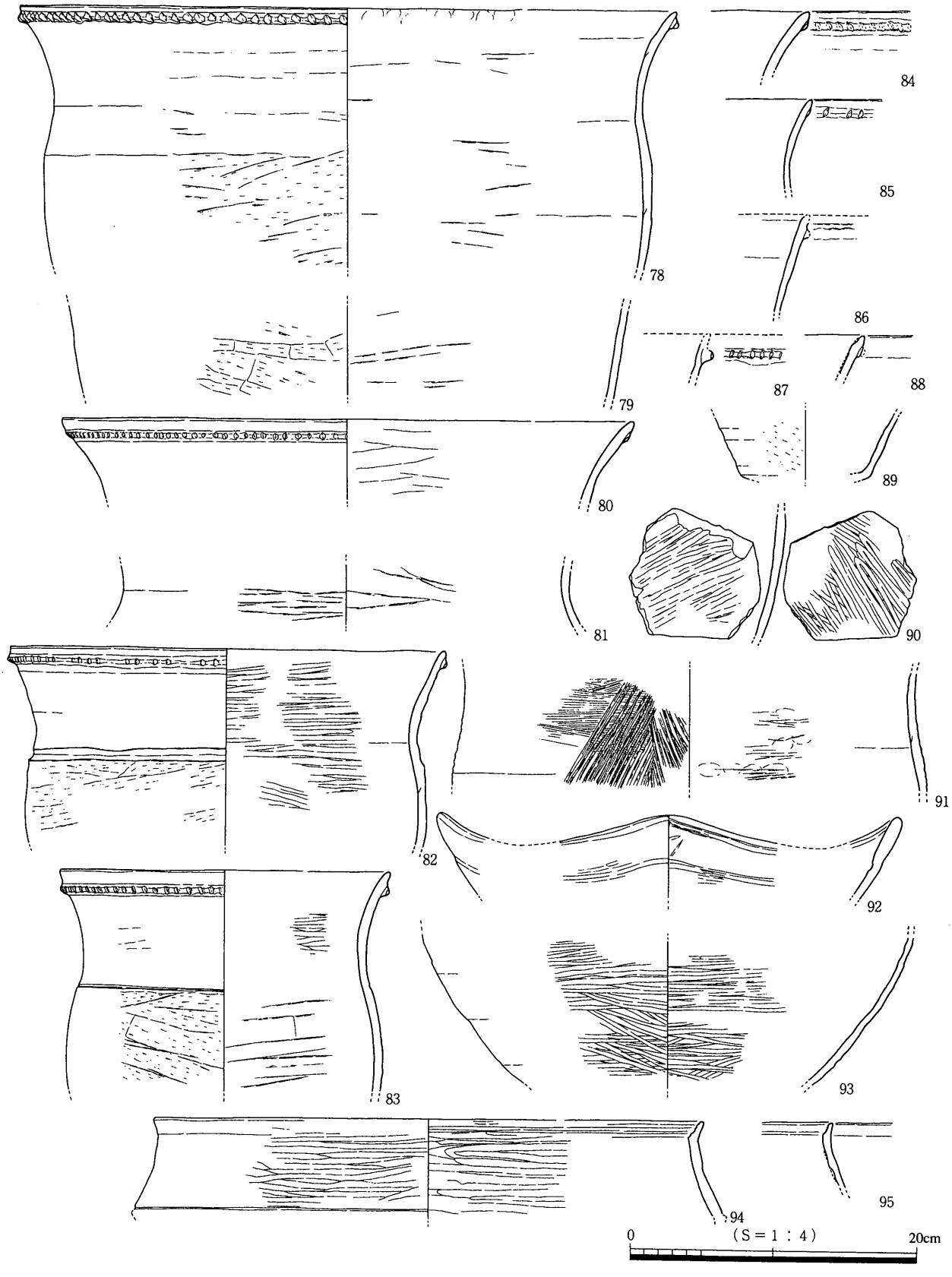


図26　10号溝出土遺物その1

弥生前期前半期の突帯文系甕と考えられ、焼成状況も良好である。110は刻目突帯文土器深鉢の口縁部。突帯は既に小さく低平なものとなっているが、焼成状況は悪い。刻目突帯文期終末から弥生前期初頭の所産と考えられる。

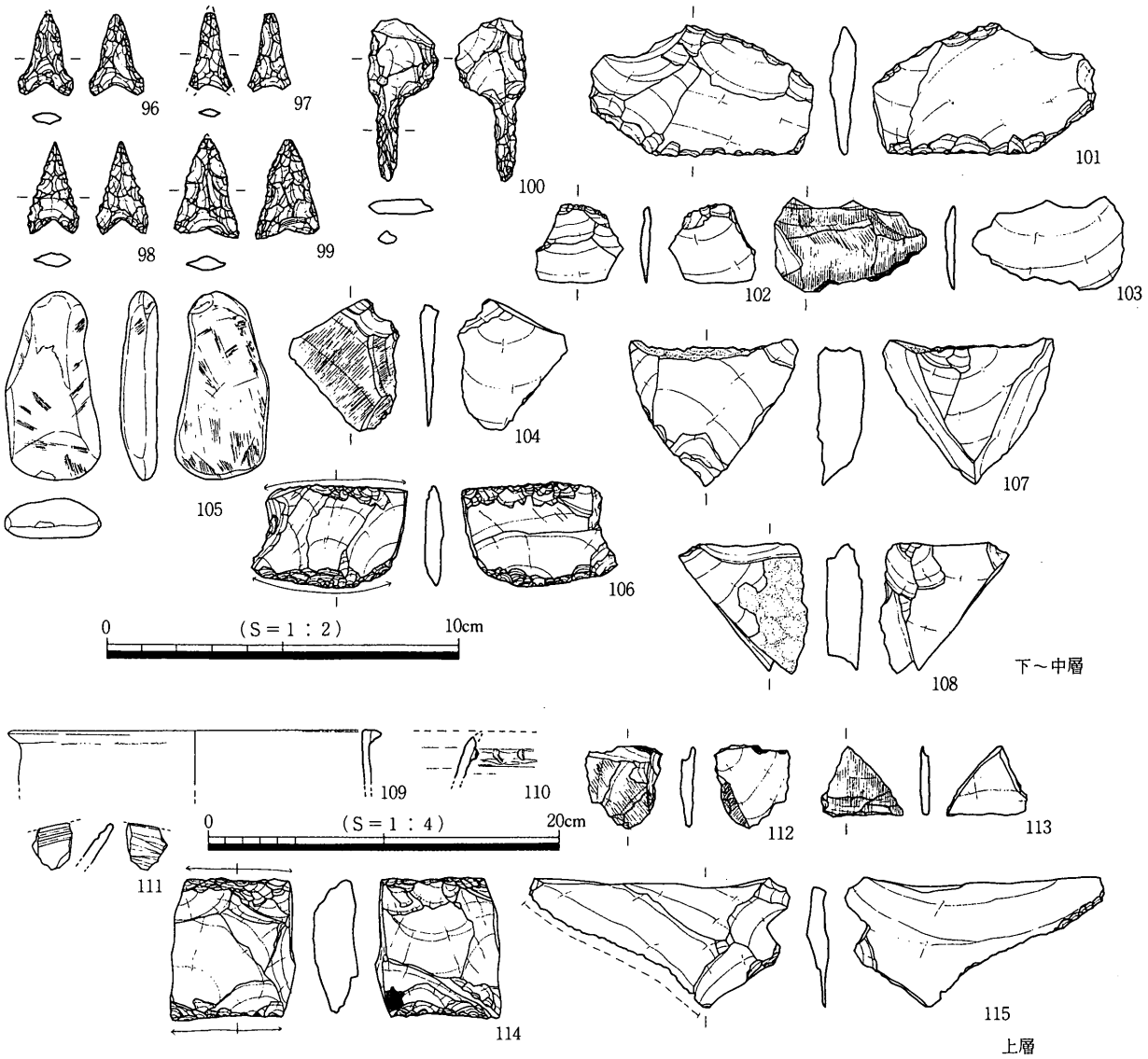


図27　10号溝出土遺物その２

111は内面に２条沈線を施す波状口縁浅鉢の口縁部片。波状口縁の全体形状は分からないものの、内面のしっかりとした沈線から、刻目突帯文期の所産と思われる。

112・113は、背面側に顕著な摩滅痕を留めることから、打製石斧片と考えられよう。113は楔形石器、114は使用痕と考えられる微細剥離が確認できる剥片である。

11号溝（図20・23・25，図版10～12）

11号溝は、上面幅0.5～1.1m残存深度0.2～0.4m程を測り、遺存状況が良好な部分では、緩やかな逆台形に近い断面形をもつ。基本的な堆積状況は10号溝と同様であるが、北東壁面と断面⑩の部分では掘り直しと考えられる改修の痕跡が認められる。また、溝底に10号溝で見られた粗砂層が見られず、崩落土と考えられる細かなブロックが含まれ、10号溝と比較して穏やかな流水状態が想定できることから、分水路としての性格を反映しているものと考えられる。

中央部の10号溝との分岐点西側には、小溝状に東側へ延びる部分が見られる。後述する13～16号溝と合流し、水田域が想定される流路Ａの低地部分へ繋がる可能性も残る。

出土遺物には、図化可能なものは見られなかったが、深鉢体部片が数点出土している。10号溝と同時並存することから見て、刻目突帯文期に機能していたと考えられる。

12～16号溝（20・25，図版12）

トレンチ南東隅の部分で検出した小溝群である。残存深度は0.1～0.15m程と極めて残存状況が悪い。先に述べたように面的な地下げがなされていることから、溝底に近い部分を辛うじて検出しているものと考えられる。現状での流下方向は、10号溝とほぼ同様の南西から北東方向を示し、流路Ａに想定される水田域へ続く水路群と考えられよう。埋没土は黒色系の粘土層を基調としており、巨視的には突帯文段階の10号溝と類似している。

時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、10号溝と同様に突帯文段階の所産と考えられる。

22～24号溝（図20・28，図版13）

Ｄ７トレンチ南部において３条が併走した状態で検出している。22号溝は、上面幅0.3～0.4m残存深度0.1～0.15mを測る。10号溝の西側を南西から北東方向へ流下するが、トレンチ中央部において地下げによって消失している。埋没土は２層に分かれる粘土層で埋没しており、ラミナの顕著な発達は見られない。

23号溝は、22号溝と24号溝の中間に位置し、ほぼ同一方向で南西から北東へ流下する。残存状況が極めて悪く、上面幅0.4m残存深度0.1m以下を測るに過ぎない。埋没土は、22・24号溝と共通する。

24号溝は、上面幅0.5m残存深度0.15m程を測り、22・23号溝と共通する粘土層で埋没している。また、層内にはラミナの発達は見られない。

出土遺物には、24号溝の溝底から深鉢の胴部片が出土しているが、詳細な時期を決定できるものではない。比較的に遺物が多く出土している10号溝と流下方向や埋没土の特徴が類似していることから、突帯文段階の所産と考えられる。調査区中央で消失することから、周囲の突帯文段階の溝との連絡関係は不明であるが、流下方向から見て、水田域が想定できる流路Ａに接続する水路群である可能性が高い。

17号溝（図20・28）

Ｄ７トレンチ中央部で検出した溝である。上面幅0.7m残存深度0.15mを測り、断面形はＵ字状を呈する。西端は削平により消失しており、東端は26号溝に接続する可能性があるが、攪乱が及んでいることから断定はできない。他の刻目突帯文期の溝の方向と比べて、東西を示す。その理由として、南西方向に見られ旧中州と考えられる礫層が露出する箇所を避けて掘開された可能性と、北側にほぼ同時期の柱穴群が見られることから、水路ではなく居住施設に関係した溝である二つの可能性がある。

出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から刻目突帯文期の所産と考えられる。

21・25号溝（図20・28，図版13～15）

Ｄ７トレンチ東部を南東から北西方向へ流下する溝である。別番号を与えているが、25号溝が途切れる部分から東側では、面的な地下げが行われていることから、21号溝は削平され残った25号溝の残欠と考えられる。位置関係から見て、10号溝北側の北西方向へ張り出している部分は、21・25号溝の残骸と考えられることから、21・25号溝は10号溝から派生する水路と考えられる。また、10号溝からの分岐点

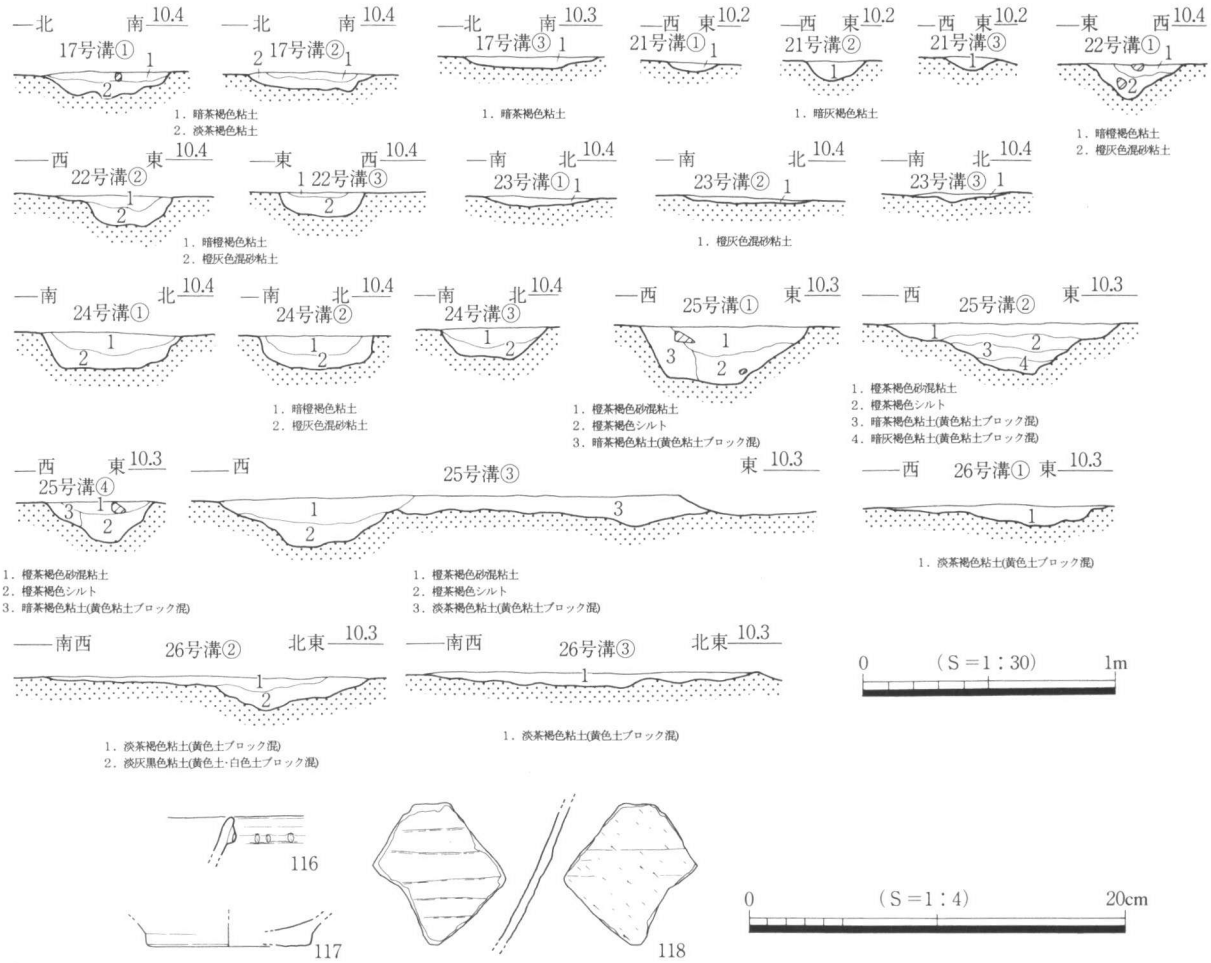


図28　17・21～26号溝断面及び出土遺物

に簡易な堰と考えられる自然礫の集積が存在することも、これを傍証するものと思われる。

流下方向は、南東から北西方向を示すが、トレンチ南部の10～16・22～24号溝と方向を違えている。これらの水路群は、水田域が想定される流路Ａへ繋がるものと考えられるが、本溝は、方向性から見てＤ１トレンチの旧河道へ接続する可能性も考えられる。

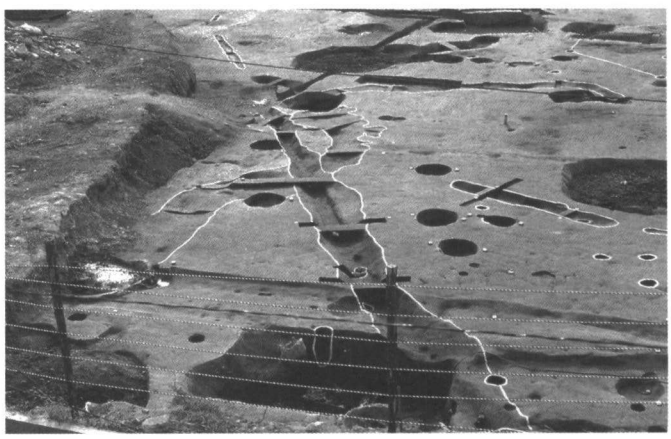


写真11　Ｄ７トレンチ25号溝全景　北から

残存状況が良好な25号溝を中心に見ることとする。25号溝は、上面幅0.6～1.2m残存深度0.2～0.25mを測り、断面形はＶ字形からＵ字形を呈する。埋没土は、ラミナの発達しないシルト～粘土で埋没しており、激しい流水状態は想定できない。出土遺物は、溝底から若干浮いたレベルから出土しているが、少量にとどまっている。

また、埋没土を除去した段階で溝肩部と溝底において北柱穴群の一部の柱穴を検出している。

116～118は下層からの出土遺物。116は刻目突帯文土器深鉢口縁部で、比較的しっかりとした断面三角形の突帯上に刻目を施す。117は細かな石英粒を多く含む底部片である。118は深鉢の胴部片であり、胴部外面にケズリ調整が顕著である。

これらの出土遺物と10号溝との関係から、本溝は刻目突帯文期に機能していた水路と考えられよう。

26号溝（図20・28，図版14）

Ｄ７トレンチ北東部で検出した溝である。25号溝との切り合い関係をもち、本溝が先行する。上面幅0.7m残存深度0.1mを測り、南から北西方向へやや蛇行しながら流下していたものと考えられ、南端で17号溝と接続する可能性が高いが、この部分は攪乱によって失われている。流下方向から見て、水田域が想定される流路Ａへ連絡していた水路と考えられる。

地山塊を少量含む粘土によって埋没しており、堆積物の様相からあまり激しい流水状態は想定できない。出土遺物は見られなかったが、刻目突帯文期の25号溝に切られることから、刻目突帯文期が若干先行する時期の所産と考えられる。

27号溝（図20・28，図版14・15）

Ｄ７トレンチ北半部で検出した溝である。上面幅0.5m残存深度0.1mを測り、南東から北西方向の２箇所に分かれて検出しているが、上面の削平がきついことを考慮すれば、両者は一連の溝であった可能性が高い。出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から、周囲に存在する溝と同様に刻目突帯文期に属する可能性が高い。位置関係から、25号溝から分岐する水路であったことも考えられるが、遺存状況が悪く断定はできない。

25号土坑（図20・29，図版12）

Ｄ７トレンチ南東部において東半部を刻目突帯文期の11号溝に切り込まれた状態で検出した土坑である。長軸1.0m短軸0.8mを測る楕円形を呈し、底面にピット状の落ち込みをもつことから、断面が２段に落ちるものとなる。下位の底面に見られるピット状の部分には粗砂が充填されており、上位は黒色粘土で埋没している。

出土遺物は見られなかったが、11号溝との切り合い関係から、刻目突帯文期が若干先行する時期の所産と考えられる。

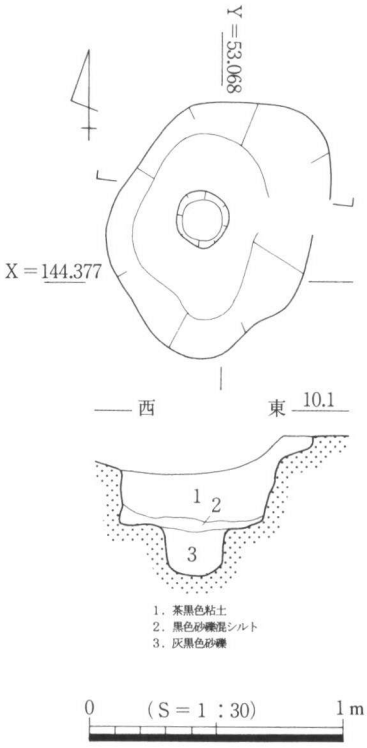


図29　25号土坑平・断面

写真12　Ｄ７トレンチ10～16号溝　全景　北から

刻目突帯文期の水路群のまとめ（図30・31）

Ｄ７トレンチでは、刻目突帯文期の水路群を検出した。流下方向から見て、旧中州（微高地）縁辺部に掘開され、Ｄ７トレンチ東側の流路Ａの低地部へ繋がる給水路群と考えられよう。

刻目突帯文期の水路群は、規模や流下方向から見て次に様に整理できる。主要な幹線水路と考えられるのは10号溝である。10号溝は、削平を受けているにも関わらず、上面幅２ｍ前後を測る比較的しっかりとしたものであり、簡易な堰と考えられる自然礫の集積を伴い、11号溝や21・25号溝へ分水している。10号溝東部の13～15溝は、規模や流下方向から見て、トレンチ南方の未調査部分において10号溝から分岐していた可能性が高い。おそらくこれらの派生した小水路を使って流路Ａ内の水田に水を配り分けていたと考えられることから、一連の給水路網と捉えることができる。

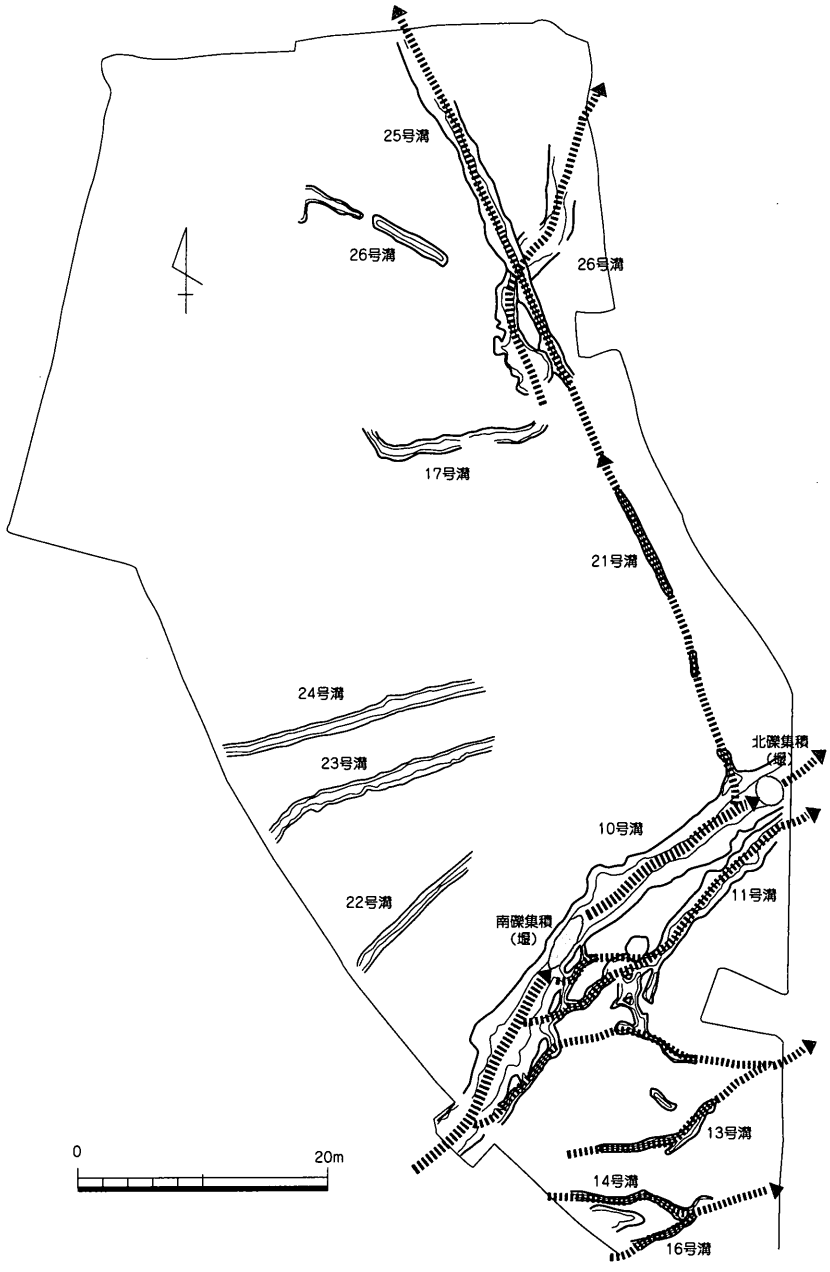


図30　Ｄ７トレンチ突帯文期水路網概念図その１

21・25号溝は、直線的に北西方向へ延びることから、調査範囲から灌漑を意図していた部分を推定することは難しい。流下方向からは、10号溝などが接続すると考えられる流路Ａ南半部より更に北側の水田へ給水していた可能性と、Ｄ１トレンチの旧河道へ繋がる２つの考え方ができる。後者では、微高地上を横切るように掘開されたものと考えられることから、かなり大掛かりな給水路という評価が与えられよう。

22～23号溝に関しては、トレンチ中央で削平によって消失することから、他の溝との関係を推定することが困難である。溝を延伸させると、21・25号溝と重複することから、10号溝を中心とした水路網とは時期差をもつものかもしれない。

流路Ａの堆積状況からは、下層水田とした刻目突帯文期から弥生前期前半期に水田が営まれていた可能性が高いことは既に見たとおりである。下層水田の時期を厳密に絞りきれていないが、刻目刻目突帯文期と単純と考えられる10号溝を中心とした水路網の存在から、流路Ａ部分の凹地には同時期の水田が

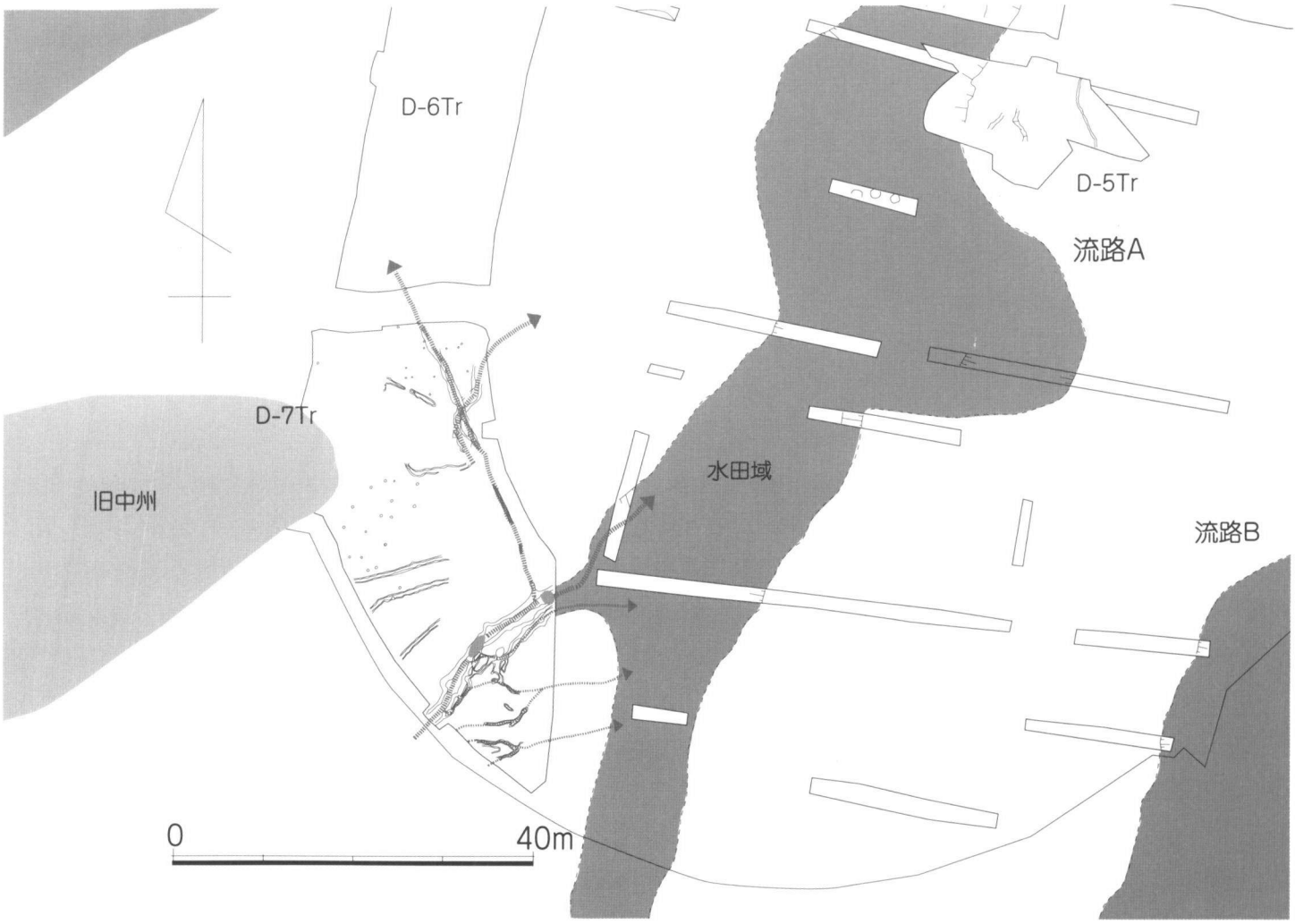


図31　Ｄ７トレンチ突帯文期水路網概念図その２

拓かれていた可能性は高いと言える。

いずれにしても、刻目刻目突帯文土器期の水路を含めた水田の景観が復元できる点は大きい。

Ｄ６・７トレンチ下層遺構（図32～34，図版16）

Ｄ６・７トレンチの下層で、旧河道・自然流路と考えられる遺構を確認している。流路１は、Ｄ６トレンチ中央部を南西から北東方向へ抜ける流路である。上面幅５～７ｍ検出面からの深度は1.5m以上を測り、ラミナの発達した礫混じりの粗砂によって埋積されている。

出土遺物は見られなかったが、縄文晩期以降の年代が与えられる流路Ａ・Ｂ内には、このような堆積物が見られないことから、更に遡る時期の所産と考えられる。Ｄ２・４トレンチとＤ７トレンチに見られる旧中州（微高地）間を埋積する旧河道の中の一つと考えられよう。

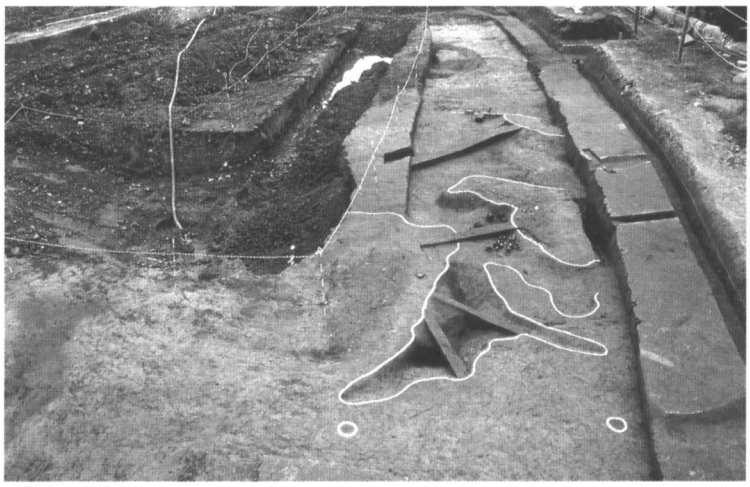


写真13　Ｄ７トレンチ下層流路２全景　西から

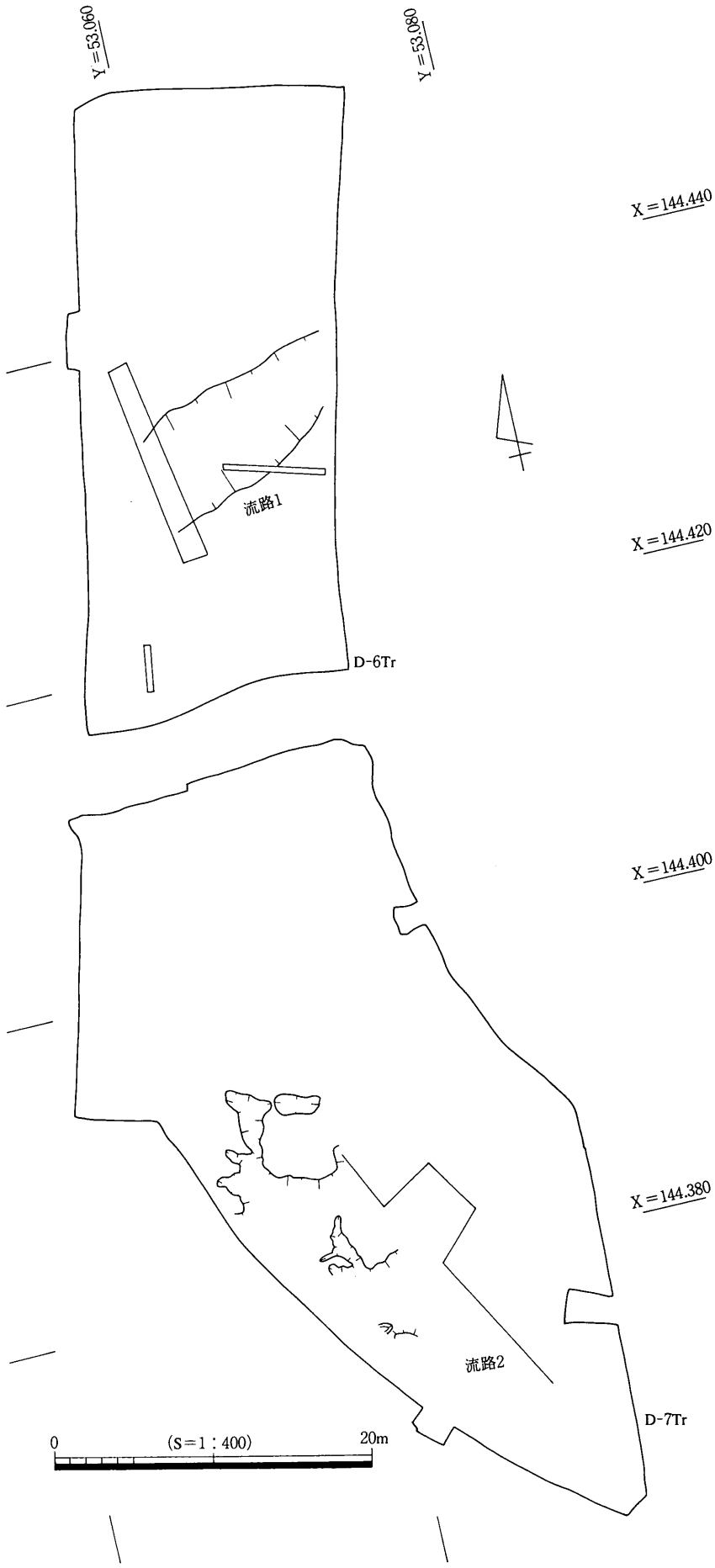


図32　Ｄ６・７トレンチ下層遺構平面

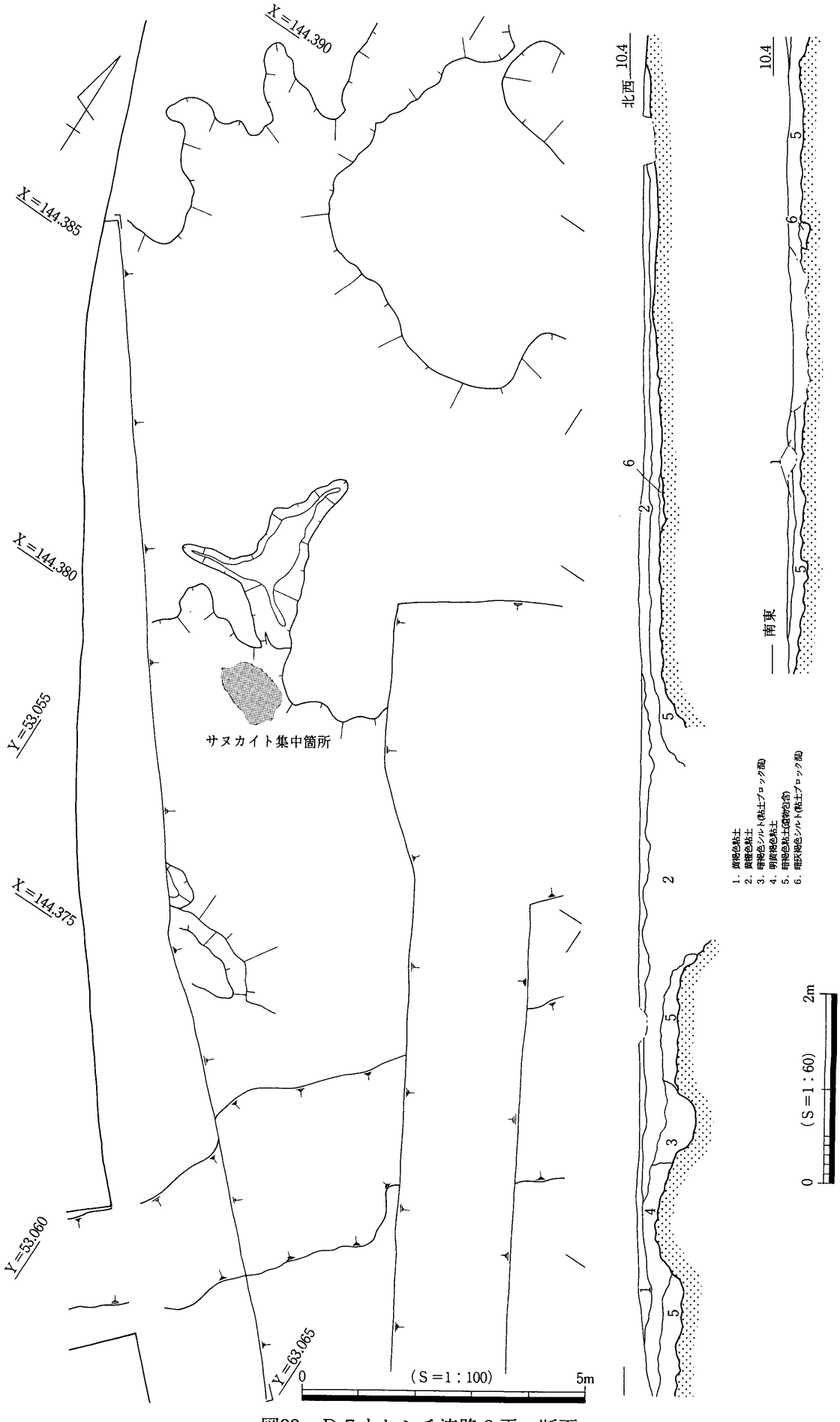


図33　Ｄ７トレンチ流路２平・断面

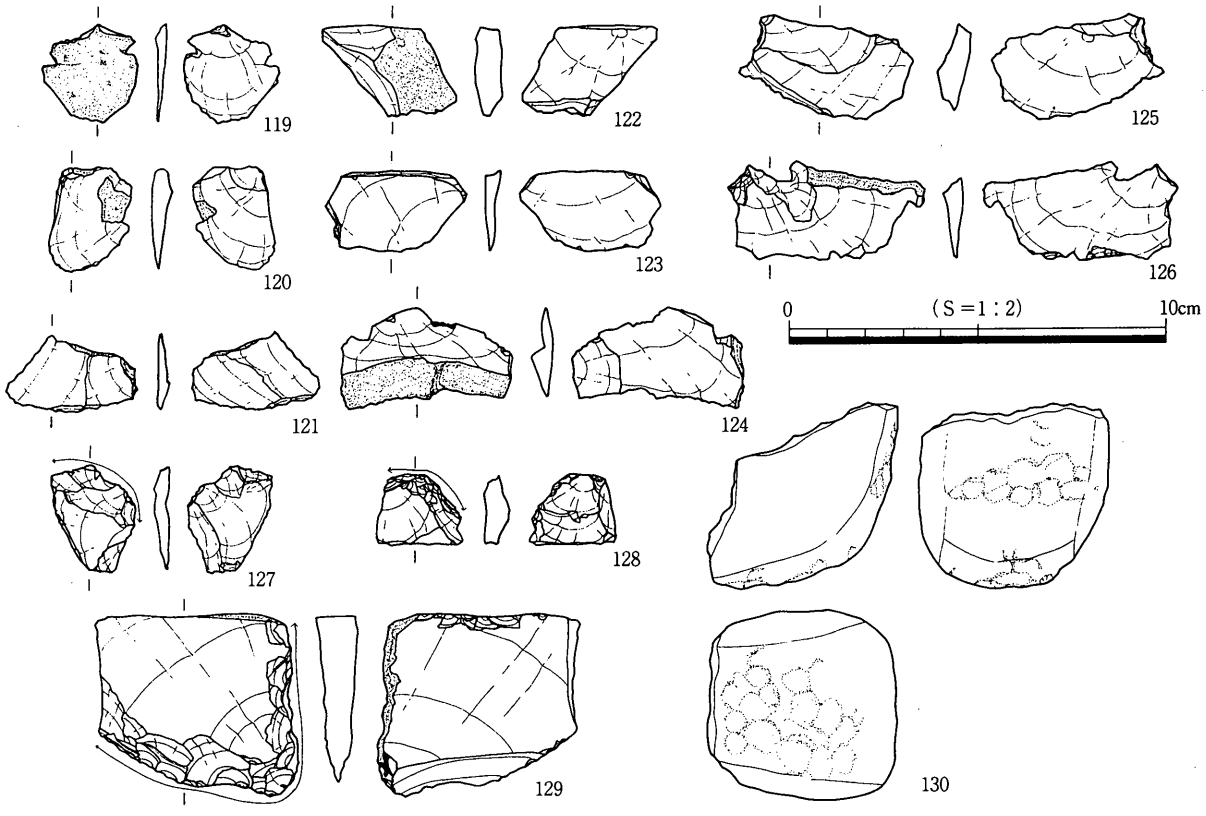


図34　Ｄ７トレンチ流路２出土遺物

流路２はＤ７トレンチ南部で検出された。部分的な検出に留まっているが、西側の旧中州(微高地)の東側斜面部に不整形の微凹地が連続して見られる。表層を黄褐色系の粘土に覆われているが、下位には遺物を包含している暗褐色系の粘土層が見られる。暗褐色の粘土層は、中央部分へ向かって傾斜し、流路状を呈している。分層しているものの、上層の黄褐色粘土は離水が進んだ結果と考えられることから、巨視的には同一層と捉えられる。旧中州(微高地)の上面から斜面部が、埋積・平坦化していく過程において見られる堆積層の一部と考えられる。

また、刻目突帯文段階の10号溝を中心とした水路群は、本遺構が平坦化したのちに掘られていることになることから、地形環境が一定程度安定化した段階で水田が拓かれたと考えられる。

遺物は、トレンチ中央部の約１ｍの範囲から集中して出土している。

119～130は本遺構からの出土遺物である。119～127は剥片又は砕片であり、その殆どのものが無打面に近く、途中で折損しているものが多い。128・129は楔形石器又はその削片である。130は砂岩製の敲石と思われ、下面を中心に敲打痕を多く残している。図化した以外にも、微細な砕片が多く見られることと、楔形石器や敲石の存在から、両極打撃によって生じた一連の遺物と考えられる。

第５項　弥生時代中期から後期の遺構・遺物（図35～51）

弥生前期から中期後葉かけて期間は、明確な遺構が見られず空白期となっている。弥生中期後葉の遺構は、Ｄ６トレンチを中心して確認できる。１号住居は、共伴遺物が少ないものの本段階に帰属する小型の円形住居である。１号住居周辺には、２号住居とした柱穴が四角形に組み合う箇所や、トレンチ南部に７号柱穴を中心とした、数基の柱穴群が見られる。これらは、何らかの建物を構成する可能性が高いが、明確にはできなかった。

弥生中期後葉以降、後期初頭の空白期を挟んで後期中葉に再び遺構が見られるようになる。本段階の遺構には、３基の円形周溝墓以外に明確な居住遺構は存在しない。Ｄ２トレンチの１号周溝墓は、第１次調査によって確認されていたものであり、今回の調査で２基追加した形となった。

３基の円形周溝墓は、埋没の進んだ流路Ａ西岸に、25～30mの間隔を空けてほぼ直線上に並んで見られる。出土土器の特徴から、３基の周溝墓はほぼ同時期に構築された可能性が高い。また、すべてに陸橋部をもち、復元される墳丘規模も類似していることから、短期間に一定の原則を保ちつつ造墓されたものと考えられる。

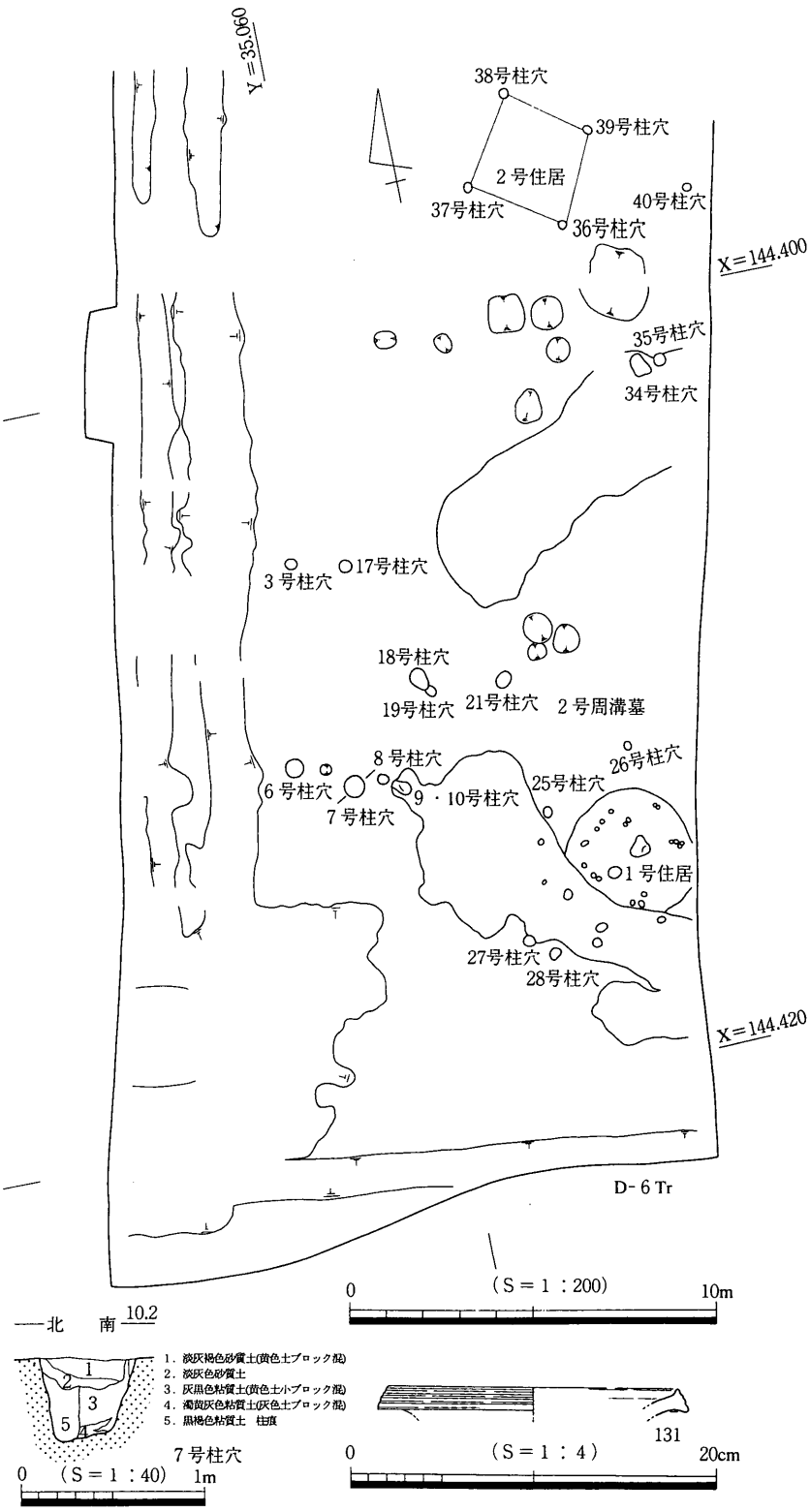


図35　Ｄ６トレンチ　弥生中・後期遺構平面及び７号柱穴平断面出土遺物

図34下段には、７号柱穴の断面と出土土器を掲載している。断面には５層とした径0.15m程の柱痕が見られる。竪穴住居の主柱穴か、掘立柱建物を構成するものと考えられるが、復元できなかった。131は口縁端部外面に３条の凹線文が確認できる。中期後葉の凹線文期の所産と考えられる。

図36　遺構配置（弥生中期～後期）